

生産数月産 約 三〇〇機  
右の外、第一線機以外に約同数の第二線機を保有してゐるが、爾後特に開戦後、機数及生産力は飛躍的向上を示してゐるものと認められる。

濠洲	約 二〇〇機
加奈陀	約 一七〇機
南阿	約 一〇〇機
新西蘭	約 三〇機
愛蘭	約 二五機
印度	約 二〇〇機
計	約 七二五機

三、艦隊空軍の海軍轉屬  
一九一八年空軍の獨立に依つて總ての航空機は空軍省の所管となつたが、其の後海軍方面から屢々異論があり遂に一九三七年七月三十日艦隊空軍は空軍省から分離して、軍令、軍政の兩方面に互り完全に海軍省の所管に移るととなり目下之を終つた。

第四節 航空

一、要旨

英國は世界大戰の末期即ち一九一七年来陸海軍の航空軍の建設を決すると共に、翌一九一八年春空軍省を設置し名實共に完全なる空軍を編成して戰場に活躍したのであるが、平和克服と共に強大なる航空兵力の維持困難となつた爲之を整理し、他の交戦國と同様に民間航空の發達を奨励し有事の日に備ふるの方針を執つた。

然るに近時各國に於ける空軍擴張の推移、特に獨逸の再軍備と國際不安、伊「エ」紛争に於ける失敗等各種の原因に依り大なる刺激を受け、尨大なる擴張を計畫するに至つた。一九三九年度に入つて再軍備計畫は更に補強せられ特に獨逸空軍の異常な發展により、空軍及防空に關して銳意之が促進を圖せるに至つた。飛行隊の増設は概ね豫定通り進捗したが、器材の整備及人員の補充は意の如くならず、爲に計畫の遂

行に圓滑を缺き、軍需資材補給の統制に當らせる爲軍需委員會設置せられ、又軍需品急速整備を圖る爲米國及加奈陀に使節を派し、飛行機購入の契約を爲さしめた。而して現在は地方軍五箇師の防空部隊を有して居り、更に七箇師團に増加中である。

二、民間航空

空軍擴張を必要とする一方經費の點より平時に於ける民間航空事業を奨励發達せしめ、以て戦時總豫備たらしむ可く企圖し、之が補助には多大の注意を拂つて補助金を交付して居る次第であるが、一九三七年度の民間航空補助費は二、三一五、〇〇〇磅で前年に比し一、五五五、〇〇〇磅の増額である。一九二九年四月より帝國航空會社（イムペリアル、エア・ウエス）を創設し小會社を之に合體して政府の監督下に空輸業務を遂行し逐年成果を向上してゐる。政府は一九二九年から一九三九年まで年々補助金を交付してゐるが一九三七年に補助金交付協定を更新して一

九三八年より向ふ十五年間多額の補助金を交付することになつた。

而して一九三五年來商業機數五八九機、個人所有機及輕飛行機俱樂部所有機一、五三五機、有し、民間操縦者數は一萬に近い多數と謂はれてゐる。

又延長航空路は帝國航空會社用のものは三萬五千軒、計畫完成の上は六萬七軒となるべく（勿論之には加奈陀新西蘭濠洲は含んで居らぬ）尙本土内航空路は別に八千軒の定期航空を實施して居る。

其他一九三六年二月民間操縦者を以て結成せられたる操縦者聯盟が創立せられたのであるが、之は多數の青年加入しありて將來政府の補助後援を得るに至る可く、非常の際には軍事上大なる役割を果し得るものと見られて居る。

1. 英濠及極東定期航空路

此の定期航空は最初英印間に航空路を開設したに始まる。當時空軍大臣は、政府は之に貸付金及補

助金を與へて平時將校下士官の研究に資し、戦時は全部政府に使用すると言明してゐるが今や右航空路は倫敦濠洲間に延長せられ、更に彼南より香港に支線を設定するに至つた。

尙香港線は一九三五年十月米國の太平洋航空路と香港に於て連絡し、且中國航空公司香港乗入を許可し倫敦上海を連絡するに至つた。

政府の補助會社は民間機の製作並運轉事業援助の爲、一九三五年より十五箇年間に百五十萬磅を支出すに決し、且帝國航空會社に對しては二百萬磅を補助して居る模様である。

2. 海外定期航空の擴張

英國は一九三七年度に方りては、空軍の大擴張と共に民間航空の大々的助成を企圖し、豫算總計二百四十九萬磅を計上した、これは前年度豫算九十萬八千磅に比し實に

百五十九萬一千磅の増額である。而して海外定期航空に關しては、五月末大要左の如き擴張計畫を發表し著々として之が實現に努力してゐる。

イ、一五三七年末迄に南阿、印度馬來方面への航空郵便料金の値下げを斷行し、且飛行回數を増加して一箇年間の輸送量を一、二五〇噸（約一億通）以上とする。

ロ、左の通り飛行回數の増加を圖る。

埃及間	週九回（從來一回）
印度間	週五回（二回）
東阿間	週三回（一回）
馬來間	週三回（二回）
南阿間	週二回（一回）
濠洲間	週二回（一回）

ハ、從來の陸上機に依る「リレー」式輸送を廢し水陸兩用機を使用する、之か爲一部の空路を變更する。



ニ、夜間飛行設備を行つて日程を短縮する。

3. 新航空路の開拓  
帝國航空路會社は北大西洋、南大西洋及「タスマン」海横斷「ニュージールランド」航空路等を新設せんとして既に試験飛行をやつてゐる。

三、防空觀念の徹底と航空施設の完備  
開戦と同時に敵の空襲を豫期せねばならぬ英國に於ては、歐洲大戦當時蒙つた倫敦空襲の苦い經驗と最近に於ける空襲威力の強烈なことを十分認識して居る。英國民一般の防空觀念の徹底振は到底我が國民の状態とは比較にならないものがある。従つて防空に關する諸般の設備は眞剣で、著々具體的施設として實現しつゝあるのである。

其の一、二の例を挙げれば左の通りである。

1. 空襲警報施設  
有事の日國內の防空は地方軍の任務である、内務省内に内務次官の

下に空襲警備局を設け、地方官憲を指導して空襲に際し地方勤務隊を編成し市民の防護に當らしむることとし、尙各所に公設の防護團を設けてゐる。

更、防火機關の整備、船渠の防備燃料の貯藏、發電所の防護等に關し詳細に研究せられ著々と實行してゐる。

2. 國民用防毒面の整備  
内務省空襲警備局に於て豫て計畫中の防毒面製造工場は、一九三六年一月より愈々作業を開始し、其の生産能力一週五十萬、年産三千萬である。

政府の計畫では全國民に應ずる防毒面を整備し、之を各地に分割貯藏して、空襲といへば直ぐに之を配給することになつてゐる。

3. 婦人義務防空團の創設  
第五節 化學戰準備施設

一、要旨

英國は戦後に於ける軍備革新の根本方針を科學應用に置き、之に對する研究は眞に緊張を極め技術研究費の如きも逐年増加して、戦前の六倍以上に達して居るが、就中化學兵器は特に之を重要視し、技術研究費の三分の一即ち毎年約數百萬圓を之に充當して居る。

二、施設  
化學戰準備機關は陸、海、空軍の共同事業とし陸軍之を主宰し、左の機關を設く。

1. 調査部  
陸、海、空軍の爲、化學戰に關する諸調査を行ふ。

2. 化學研究所  
本部を倫敦に置き、「ポルトン」及「サットンウオーク」に實驗所を有する。

本部は、陸、海、空軍代表者並科學者を以て組織する化學戰委員會を設け、化學戰に關する顧問機關たらしむ。

兩實驗所は、共に化學兵器應用の

國 (地名)	年 度	金 額	摘 要
濠洲聯邦	一九三四—三五年	約 一九、〇〇〇千磅	
加奈陀	一九三五—三六年度	大約 二、二〇〇	
印 度	一九三五—三六年度	大約 三七、四〇〇	
新西蘭	一九三五—三六年度	約 一、三〇〇	
南阿聯邦	一九三五—三六年度	約 一、三〇〇	
愛蘭自由國	一九三五—三六年度	約 一、五〇〇	

一、二五二、〇〇〇弗を換算せり 磅=4.9弗  
四九九、〇七七、〇〇〇の磅  
=12,271,217.1として換算

諸研究並試驗を行ふ。

3. 化學戰學校

「ポルトン」に在り、一九二二年より開校し、隊附將校、下士に對し毒瓦斯防護法の教育を行ふ。

第六節 國家總動員施設

其の國民性と國情とに依り、國民の行動を統制する法律其の他を平時より公布するが如きことなきも、其の軍備方針に鑑みると、有時の日に必要な陸軍軍備の擴充を行ふ爲には、完備せる總動員施設に依るの外なきこと、

國民全般の能く理解知悉しある處であつて、所要の準備施設は著々として整備されつゝある。即ち法律的に表面に現はるゝ施設は顯著ならざるも、實質的には緊要なる施設を完備しつゝありと見られるのが、英國總動員施設の特色である。

従つて平時に於ける此の種公的施設の明瞭なるものは少いが、其の中央機關とも目すべきものは、樞密院内に存するものゝ如く、又國防大學なる特殊の施設が在つて、總動員の爲の最高指揮部要員を養成して居るやうである。

國防大學は、參謀次長又は軍令部次長を以て校長とし、陸、海、空軍の優秀なる佐官級將校と行政官廳要路の有爲なる事務官級官吏二十數名を年々研究員として召集し、所要の研究を行つて居る。

軍需動員の如きも之が爲の特別の規定等を設けて居らぬが、軍と民間工業の間には密接なる連繫が保たれ、民間工業の軍事轉用計畫も實質的に完成して居ると見られる。

今主要な海外自治領及植民地に於ける軍事費を挙げれば次の如くである。



佛 國

(参考として掲ぐ)

第一節 概説

一、国防上の立場と環境

佛國の国防を論ずるに、方りて獨逸との關係を重視せざるべからざることは、茲に喋々する迄もない。

抑々佛獨は古くより、犬猿の間柄に在り、世界大戰の結果獨逸に對して徹底的壓迫を加へたるも、其の國力恢復に對する疑懼は年と共に増大し、之が爲夙に波蘭、小協商との連衡を固くし、又一九二五年には伊獨白と共に「ロカルノ」條約を結ぶ一方、軍備の充實を圖り以て國土の完全を保持し來れるが、一九三三年「ヒットラー」の君臨は軍縮會議及聯盟脫退、「ザール」の恢復、再軍備宣言、獨軍の「ライン」進駐、續いて、英獨併合、西國內亂、「チエコ」併合となり、佛國の不安は益々募るに至つた。

佛國は一九三五年に入つて一月羅馬

協定を二月倫敦協定を結び、又「ストレーザ」會議に於て英佛伊三國の共同戰線を確保せるが、伊國の「エチオピア」遠征に起因する制裁をめぐりて英佛、佛伊の關係は極度に混亂に陥つた之は「ナチスドイツ」にとりては「ヴェルサイユ」の鐵鎖を完全に粉碎すべき好機を提供せるものにして、獨逸は偶々佛蘇相互援助條約の批准將に成らんとする機を捉へ、同條約を「ロカルノ」條約違反なりとして三月七日「ロカルノ」條約破棄「ライン」再武裝の舉に出でた。

佛國は西歐安全保障の爲、唯一のものとして同條約の廢棄を前にし、締約國を誘ひて對獨強壓に出でんとせざるも、英伊の完全なる協力を得るに至らず、偶々西班牙に於ける内亂の勃發は歐洲を思想上の二大「ブロック」に分裂せしめ、遂に伊獨の同盟、白國の中立還元、西國內亂、特に一昨年「ミューン」會談の失敗等は、佛國の對獨包圍陣を龜裂せしめ、凹み年の定員

不足と相俟ちて愈々軍備強化に邁進せしめたるものにして、其の途上遂に今日の大戦に遭遇したのである。

二、軍備方針

凡そ佛國々防の基調は國の安全を保持し、國權を防護し、併せて其の海外發展に資するに在りと爲して居るが、前項説述の事情に鑑みる時、其の軍備の方針が對獨絕對安全を主眼として定められあるは茲に更めて言ふ迄もない。又其の空軍に於ては、對英對伊の顧慮をも有して居ること固よりである。

從つて、世界大戰後軍縮の思潮が世界を風靡し、經濟的の不況亦一再ならず襲來した際にも、佛國は前者に對しては軍縮の前提は安全保障なりとして多少の軍縮を實施しつつも尙容易に譲らず、後者に對しては當局の施設と國民の自覺とに依り苦しきを忍びて爾來莫大なる飛行機と六十六萬の陸軍を建設し、尙多額の經費を費して東方國境要塞の構築を完了し、更に兵員を以て

一、兵役制度

第二節 軍制要綱

獨逸に拮抗し得ざるに依りて、軍の機械化、長期服役兵の増加、戰爭資材の改善を圖り、國民精神教育の向上と相俟ちて國防の萬全を期したのである。然るに一九三八年九月「ミュンヘン」會談に失敗せるは結局軍備就中空軍の劣勢に由るものとの判断の下に、更に一段と軍備強化に努力した。

佛國現時の兵役法は、一八七〇年普佛戰爭後の創始に係るものであつて、國民皆兵を主義とし、徵兵制を主體(軍の必要上長期の志願兵を一部採用)として居る。蓋し該戰役の大敗が對獨復讐の國軍を要求し、必任義務制の現出となつたのである。

在昔年頃の變遷

於て佛國の輿論は再び對外強硬に變轉し、一九一三年、三年制を採用することとなり、斯くして大戰に参加したのであつたが、大戰終熄後人口の減少に伴ふ勞働力の不足を補ふの必要に迫られ且は獨軍々備の制限(十萬)、「ライン」地方軍備の撤廢、聯盟機構の強固等を基礎として一九二三年春一年半在營を基礎とする兵役法の發布を見、一九二八年四月更に一年在營制を採用するの止むなきに至らしめた。然るに一九三六年乃至四〇年所謂凹み三年の間徵兵過齡壯丁の著しき不足に慪む佛國としては獨逸の再軍備に多大の脅威を感じ、或は再服役の獎勵、或は同年次の適齡壯丁中生月日に基く一部の入營時期變更、或は又内地駐屯「アフリカ」土人兵の増加等各種の彌縫策を講じつゝありしも、此等姑息手段を以ては到底半數に近き壯丁の不足を充足し得ず一九三五年三月十五日に至り、一年現役兵法第四十條の適時適用に依る二年在營制を採用するに至つて現今に及ん



で居る。而して此の制度は茲暫くは依然繼續せらるゝことになつた。

二、軍の構成

佛陸軍は三種に分たれ、各々本國軍隊及植民地軍隊を以て組織せらる。

1 本土部隊

原則として佛人より成り、本國に駐屯す。

2 海外部隊

佛人、土人、外人より成り、領土の占有並に防衛に任じ、常時其の土地に駐屯す。

3 遊動部隊

海外部隊の豫備にして佛人、土人より成り、通常本國或は北亞弗利加に駐屯す。

第三節 兵力及編制

(空軍を除く今大歐洲戰亂前迄)

一、平時兵力

在本國兵力 四四八、〇〇〇  
在北「アフリカ」及「ルヴァン」 一四六、〇〇〇  
在植民地及支那 六〇、〇〇〇

計 六五四、〇〇〇

二、常備兵團

1 本國に駐屯する部隊

歩兵師團 二〇(内七は一部)  
植民師團 一  
移動兵團 一

(イ) 北部「アフリカ」師團 二

及本國歩兵部隊 一

(ロ) 「セネガル」植民師團 二

(ハ) 混成部隊(約一師團に相當す) 一

戰車旅團 三(六聯隊)

騎兵師團 五(内一は機械)

砲兵旅團 四

工兵旅團 二

2 海外駐屯部隊

歩兵旅團 一三

騎兵旅團 四

第四節 航空

一、概観

佛國の地理的關係は、東隣諸國特に獨逸に對し空中防禦の安全を緊要とするのみならず、對英對伊政策の後援としても亦空中威力の強大を要求するものがあるとなし、世界大戰後財政頗る困窮せるに拘らず、大戰の際に大擴張せる航空部隊を平時依然として保有し表面は部隊数を増加することなく、積極政策の非難を避けつゝ極力内容の整備に努め、且莫大の經費を投じて大に民間航空を奨励し、有事の日直ちに之を軍用に利用し得るの方策を講じてゐる。

佛國航空の獨立は一九二八年末「ボアンカレ」學國一致内閣の際軍部就中海軍の反對を押し切り、政治的に航空省に獨立したのに始り、當初空軍軍人は陸軍航空に従事せる者のみを以て之に充當し、海軍軍人は依然其の儘の身分を保持して航空省の統轄に入るの變體的現象を現出し、爾後頻々たる編制改正を行へるも、要は内部に於ける大空軍論者と航空分屬論者との勢力消長に起因する部分的改正に過ぎなかつた、然るに列強空軍の獨立と國際情勢

ハ 氣球數 約 二四

2 豫備役空中勤務者

佛國は戰時空軍の膨脹を豫見して地方に航空團なるものを組織し、豫備役空中勤務者の養成及連絡勤務者一部の充當に資せんと企圖するの外、平時航空輸送會社に勤務する空中勤務者、政府補助操縦學校及民間操縦學校に勤務する操縦士並飛行機製作工場に勤務する操縦士は、其の年齢及訓練の如何に關せず、其の現職にある間及離職後一箇年間は陸軍航空部隊内に籍を置くべきことを規定してゐる。

三、民間航空

佛國民間航空の創設は概ね一九二〇年頃にして、同年に於ける營業成績は航空路長五千六百軒、輸送距離十五萬軒、輸送人員一千四百人なりしが、其の後政府の保護奨励と當事者の努力とに依つて顯著なる發展を遂げ、一九三三年度に於ては航空路長三萬八千軒、輸送距離一千萬軒、輸送人員四萬人に達した。而して當初は自由競争に委せ

とは一日の儉安を許さざるに至り、遂に一九三三年四月、空軍編成に關する大統領令の發布に依り、艦載航空隊並當時海軍協同部隊を除く全航空部隊を含む空軍が編成され、一九三四、三五年に亘り空軍編成法の發布を見るに至つた。尙一九三六年戰爭の初期に空軍の迅速なる開與が極めて重要なるに鑑み、平時より戰時の編制を採用して航空兵團編制の戰團單位に集結し置くを有利なりとし、空軍航空兵團編制を實施した。

佛國は國土防空に大なる考慮を拂ひ一九三一年國土防空總監を設け、防空上必要なる三軍統轄の機能と與へ、一九三六年三月防空に關する大統領令を發する等、航空防空に就きては陸軍と相並んで重要視して居る。然も尙近時獨逸の軍備強化に對抗する爲更に益々之が強化擴張中である。

二、空軍陸上部隊の兵力編制

1 現有兵力

即ち一九三八年には二箇年計畫を

以て約二、六五〇(第二線機を含めて四、七〇〇機)の第一線機を整備する計畫を立て、著々實施中に於て、國內生産を促進すると共に、外國より多量數を購入しつゝあり尙軍用機生産能力左の如し。

一九三七年 年産	約四〇〇
一九三八年 年産	約五〇〇
一九三九年 月産	二〇〇

尙逐次月産は増加せらるゝ見込なり。

イ 部隊數	爆撃 五五
	戰闘 四三
	偵察 四〇
	氣球 一二
北「アフリカ」及「ルヴァン」	約 二六中隊
爾他の植民地	約 九中隊
計	約 一八五中隊
飛行機數	約 四、七〇〇機
(内第一線機數約二、二〇〇)	
別に海軍に屬するもの	約 二五〇機



し爲五社鼎立して營業してゐたが、一九三三年以降之を「エリヤ、ユニオン」一社に統一し、其の監督は航空省民間航空局之に當り、器材、飛行場、飛行の安全等の諸問題には空軍のもの合せ省内外専門機關之を掌つてゐる。又近時戦時の要求を顧慮し、軍用機として採用せられたものに所要の改造を加へ平時輸送機として使用するの傾向がある。

第五節 化學戰準備施設

一、要旨

佛國が化學戰準備の必要を認めあるは、「フオッシュユ」元帥の「毒瓦斯の使用を禁じ得るものとせば戦争勃發をも禁止し得べきなり」との言に徴するも明である。唯目下航空兵力の整備に急にして、化學戰研究に對し多大の經費を支出し能はざるの状況にあるが如きも、其の防護法の訓練は徹底的に實施してゐる。

二、施設

陸軍に於ける機關は次の如くで、海軍は研究、教育等を陸軍に依託して居る。

1	陸軍省軍用化學課	研究部
1	ベルビリエ	製造部
1	試験所	教習部
	瓦斯教導部	

- 2 防護法及攻撃的用法の試験研究及教育に任ず。
- 2 瓦斯防護材料監査部
- 3 右の外化學戰委員會(内規的のもの)により、化學戰に關する一般の方針を定め、其の實施を指導統制す。

第六節 國家總動員施設

歐洲大戰間苦き經驗を嘗めた佛國當局殊に軍部が國家總動員法の制定に逸早く着手したのは正に至當の事ではあるが、大戰後二十年の後漸くにして之が發布を見た云ふ事は、蓋し總動員

「ライン」地帯に侵入したのに驚いた佛當局は一九三六年六月二十五日再び下院に提出したが、遂に眞面目な審議に入るに至らず、越えて一九三八年に及び獨逸の國併合、國際關係の險悪化は此の重要な總動員法を此の上放擲し置くを許さずして、一九三八年三月二十四日には下院を、六月十七日には上院を夫々一氣呵成に通過せしめ、七月十一日附を以て發布して、多年の懸案を解決したのである。此の法律は五章六十六條より成つてゐるが、各章には左記事項を規定してゐる。

- 第一章 總則に於ては總動員法の發動する場合及此の場合の機關並消極的防空に關する事項。
- 第二章 に於ては人員及資源の利用。
- 第三章 に於ては戦争指導、戦時に於ける統帥權及議會の運用等。
- 第四章 に於ては戦時經濟組織を。
- 第五章 に於ては特別規定中には戦時に於ける行政組織、軍官憲と地

方官憲との關係、交通々信機關の保護等。

獨 國

(今次戰亂直前のものとし、て参考のため之を掲ぐ)

第一節 概説

一、獨逸軍備の充實

獨逸總統「ヒットラー」は一九二〇年其の運動を開始して以來、次の三要件を以て獨逸の對外政策の根本と爲すものと提唱してゐる。

- 一、民族自決の原則に基き大獨逸國を練成す
- 二、獨逸民族の他民族に對する同權を獲得す、之が爲、「ベルサイユ」「サ・ゼルマン」兩條約を破棄す
- 三、獨逸民族の生活及過剩人口移植の爲に、國土及植民地(大戰後奪取せられたるものを指す)を取得す

一九三五年政權を掌握してよりは熱意を以て之が實施に邁進して來た。

法が重要な價值を有すること、從つて國民に對する義務を負はす事が大であるからである。併し乍ら其の二十年の長日月を費した理由は他にもあつたのである。即ち一度平和時代に入るや何時しか戦時の苦難を忘れて次の戦争準備を怠り、而して特に大戰後の平和軍縮謳歌、果ては獨逸の軍備を十萬に制限した事に安心し、又議論を好む佛國民として徒らに議論に日を費し、甚しきは之を放置して顧みる所がなかつたのである。

之を歴史的に觀るに一九二一年十一月十七日に高等國防會議が創設せらるゝと直ちに總動員の研究に着手し、一九二九年には下院を、一九二八年には上院を夫々通過したが、上院の加へた根本的修正は下院通過案と餘りに逕庭があつた爲更に研究を遣り直しつゝ暫く放置の状態に置かるゝに至つた。然るに一九三五年三月獨逸が「ヴェルサイユ」條約の軍事條項を蹂躪して十二軍團の編成に着手し、又翌三六年三月

而して第一段の目的は一九三五年に於ける再軍備宣言及之に次ぐ「ラインランド」進撃により、「ベルサイユ」條約の破棄を以て達成され、現在は第二段を解決して第三段に入らんとする時期にありと見るべきである。

而して此の第二、第三段の目的達成の爲に、(一)強力なる軍備と(二)前歐洲大戰に苦杯を嘗めたる資源戰的整備の兩者の缺くべからざるは明かであつて、第一段の目的達成以來此の兩者の整備の爲に盡されたる努力は異常なるものがある。

其の詳細は夫々の項目に於て述ぶるが、其の軍備の一部として設けられたかの「ジューグフリード」線なる國境築城地帯の如き、火器を有つてゐる「ベトン」體の數は左の通りと云はれてゐる。

一九三六年	一一九個
一九三七年	五〇〇個
一九三八年秋	一七、〇〇〇個
一九三九年夏	二二、〇〇〇個



殊に一九三八年五月「チェッコ」問題險惡となつてから、其の強力な組織と統制の力に依つて、莫大の人員資材を運営して之が強化に努力を集中したことは周知の事實である。斯くて所謂「ジグフリード」線は今や獨逸西方正面の一大防壁となり、必要の場合探る可き東方に向ふ攻勢に對し、愈々其の作戰の確實性を加へるに至つた。

第二節 獨逸國軍編制

一、獨逸國軍成立の經過

獨逸國軍は世界大戰後、「ベルサイユ」條約の桎梏の下に、所謂「十萬軍隊」として僅かに其の存在を保つて居たが、「ヒットラー」の政權獲得後、遂次「秘密軍備」を整備し、一九三五年三月十六日「再軍備宣言」に依つて公然之が再建を開始した、爾後銳意擴張整備に努むると共に、一九三八年二月四日に至り、軍最高人事の更迭に伴ふ最高統帥部の組織の變更を斷行し、國防軍を軍最高統帥者である總統兼首相

の直接統率する所となして今日に至つた。

二、獨逸國防軍編制の基礎法である「國防法」

獨逸國防軍の編制、使命、最高統帥部の組織等、軍に關する根本的基礎事項は國民の兵役、義務服役の原則と共に總て「再軍備宣言」に伴ひ一九三五年五月二十一日發布された、「國防法」に明示されて居る。

三、獨逸國防軍の構成大要

國防法に基く獨逸國防軍の構成大要左の通り。

イ、兵役の義務

總ての獨逸男子が兵役の義務を有するばかりでなく、戰時に於ては總ての女子も祖國の爲應役する義務がある。

註 本義務は單なる成文的規定であるばかりでなく、壯丁得員數と國防軍要員數との關係から事實に於て特別な不具者等を除き殆ど總ての壯丁が現役に服役

してゐる状態であつて國民皆兵の實が擧つてゐる。

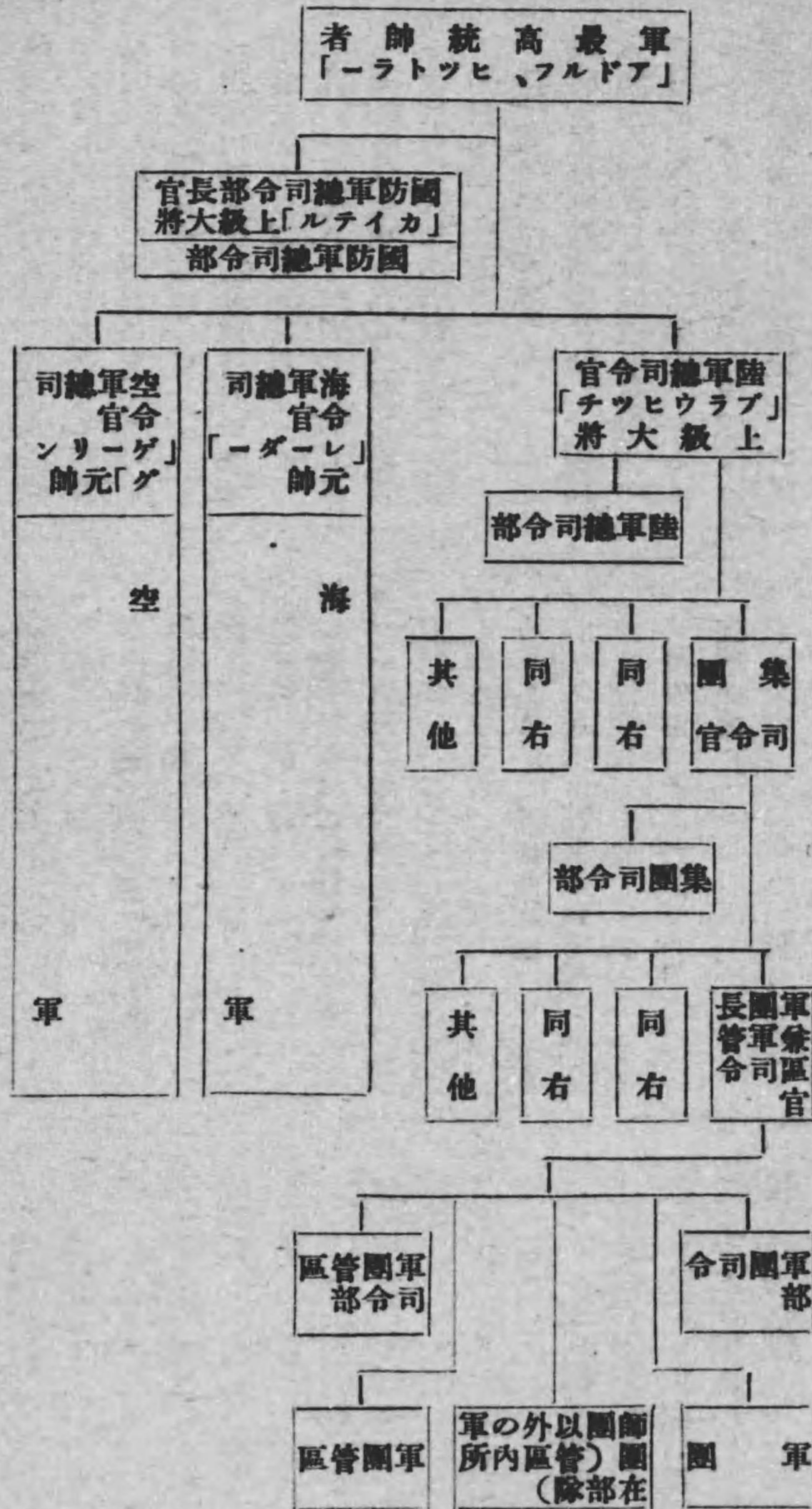
ロ、國防軍の使命

國防軍は獨逸國民「武器の擔當者」として外戰に當るものであることを明らかにし、且國防軍が獨逸國民の軍人的訓練の道場であることを示す。

註 他面に於て、黨が軍の任務に觸れることを戒肅し、兩者各明示された夫々の任務に邁進し、相犯すことのない様にする周到な用意が窺はれる。軍人の政治參與を禁じ、黨員と雖も服役又は召集間其の黨員であることの屬性を停止することを國防法中に規定されてゐる。

註 一九三九年六月郷軍大會に於ての「ヒットラー」の演説にも窺はれる通り、「軍人的國民」練成の要を頻りに説かれてゐる。

「統後の備」以上の「國民總て戰



士」であるとの思想を以て指導されてゐる。

ハ、國防軍の組成

陸、海、空の三軍から成り總統兼首相である「ヒットラー」は又最高

國防軍平時組成構見表

高統帥者として親しく三軍を統帥してゐる。(國防軍平時組成構見表参照)

ニ、國防軍總司令部

三軍統率の爲の「ヒットラー」の

軍事的幕僚部として國防軍總司令部がある。同長官は國防軍全般に關する軍政軍令の萬般に亘つて依命執行する權能がある。同長官は國防大臣である地位を與へられ



閣議其の他に於て他の各相及各長官に對し軍を代表してゐる。但空軍大臣の職域に觸れることはない。國防軍司令部は「ヒットラー」の指示に基き國防全般の統一ある準備を完する責がある。

註 一九三八年二月の改革以來國防省は廢止されて内閣に國防大臣なく、軍は行政組織の外に不獨獨立してゐる。

ホ、戰時國防軍の特殊地位

戰時若くは非常事態に際し、國防軍總司令部長官は兵役義務適用の範圍を必要に應じて擴大しうるばかりでなく、動員に際し、總ての兵役義務者の充用を決定し、之に指示を與へる權限がある。戰時國防軍の要求は總てに優先してゐる。

第三節 兵力及編成

一、陸軍兵力

イ、平時兵力(一九三八年一月公表)

- 六 軍集團司令部
- 一八 軍團司令部 (内三は山)
- 四二 步兵師團 (地師團)
- 四 自動車化輕師團
- 五 機甲師團
- 一 騎兵旅團

別に西部築城地帯守備兵團がある。

口、一九三八年十月「ズデーテン」問題解決の際に、九十八師團を動員したことは既に公表せられたところであるが、對波蘭作戰の際に動員した兵力は西部國境守備の兵力及總豫備兵力を合して約百二十箇師團であつたと判断せられる。

二、空軍兵力

空軍は先年「チエッコ」併合以後、其の組織を改め、爆撃機を主力とする空軍攻撃兵力を以て四航空艦隊に編成し、此等の航空艦隊司令部は平時に於ては防勢兵力たる防空用驅逐機及高射砲通信等の部隊並陸海軍協同の爲の航空部隊をも統轄訓練して居るが、戰時には此等の部隊は攻撃兵力と分離して

夫々の指揮系統に入る様に編制した。各航空艦隊は二個以上の飛行師團より成り、左の如く配置されてゐる。

- 第一航空艦隊(東部)伯林
- 第二同 (西部)ライク
- 第三同 (南部)ミュンヘン
- 第四同 (オスト)ウキーン

ケールニヒスビルヒ獨立航空兵團 (東普)

キール獨立航空兵團(沿岸) 教育飛行師團(伯林)

而して陸軍の軍團管區司令部に準じ全國二十空軍管區司令部を置く。空軍の現有兵力に關しては確實な數字を擧げることには大ツケ敷いが、前述攻撃の兵力のみでも約六千機に達し、總機數に於ても英佛を合したものを遙かに凌駕してゐることは明かである。

第四節 民間航空

一、民間航空

同社は尙支那の歐亞航空公司「プラデル」の「コンドル」、シンヂケート「航空會社」、「ツエツペリン」飛行船會社等と密接な關係にある。

「ルフトハンザ」の主要線は歐洲線を除けば南米線、北米線及極東線の三線で南米線に於ては一九三四年以來定期郵便飛行を實施し一九三七年の大西洋横斷回数四百回(前年八十八回、最初よりの合計三百五十回)で人員千五百名、手荷物三十二萬三千噸、貨物十二萬二千噸を輸送した。北米線では定期郵便飛行を計畫し一九三六年度に入回、一九三七年度に十六回の横斷飛行に成功したが目下試験期間中である。極東線は「シリヤ」、「イラク」、「アフガニスタン」、「バミール」高原經由の線を豫定し一九三七年概ね其の試験飛行に成功したが沿線諸國の許可關係からして目下は伯林「バグダット」間の郵便飛行(一九三七年十月開始)だけ實施され未だ全線の開通を見て居ない。

「ルフト」、ハンザの一九三七年に於

民間航空は航空省の航空局に統制せられ地方に十四の航空事務局を設置して其の管理に任せしめて居る。

一九三七年四月「ナチス飛行團」(「エヌ、エス、エフ、カー」)が設立された。これは「ナチス」獨逸の他の諸國體と歩調を併せる爲從來の獨逸「スポーツ」飛行協會並其の全所屬機關、團體等を統合して出來たもので獨逸民間航空の指導發達を任務とし空軍在郷軍人操縦、偵察、氣球操縦、「グライダー」飛行の教育を受けた者。「ヒットラーユーゲント」航空部に屬し十八歳を越した者、從來獨逸航空「スポーツ」聯盟の飛行及「グライダー」部に所屬せる者を以て國家的に組織し空軍に關する入營前の軍事教育及在郷軍人教育をも擔當してゐる。全國を十五の管區(「グルッペン」)に區分し「スポーツ」飛行學校六校、「グライダー」飛行學校七校及飛行機模型工作「グライダー」製作に關する學校等を備へて空軍第二線の養成に邁進しつゝある。

航空技術進歩發達の爲には航空省技術局の指導監督下に獨逸航空技術研究所「ゲツチンゲン」航空力學研究所其他十餘箇所の研究所「リリエンター」航空研究協會、獨逸航空科學院等が眞摯な研究に著々實績を擧げつゝある。

獨逸航空工業は周知の如く「ハインケル」、「ユンケルス」、「ドルニエ」、「フオツケ」、「ウルフ」、「バイエルン」、「ヒルト」、「ダイムラー」、「ベンツ」等の飛行機及發動機會社によつて世界に著聞し參加會社百餘社を擁する獨逸航空工業聯盟等の手を経て器材及技術の外國進出が年と共に隆盛の度を加へて居る。

二、航空輸送と其の國外發展

獨逸航空輸送は一九一九年開始せられたが一九二六年に至り獨逸「ルフトハンザ」株式會社を創立し商業航空を此の一社に統一し政府の指導補助と相俟ち著々實績を擧げ其の航空路は遠く國外に伸展して居る。



ける輸送成績を見るに飛行距離約千六百九十萬軒、旅客約二十七萬七千(前年二十三萬)貨物約三十九萬五千軒、手荷物七百噸、郵便三百三十五萬軒である。

ツエツペリン飛行船ヒンデンブルグ號が一九三七年五月南大西洋横斷十四回北大西洋横斷二十一回の後「レークハースト」に於て爆發後中止されて居るが當時建造中であつた姉妹船「ツエツペリン」第百三十號も既に竣工して居る。中止にいたる迄に「ヒ」號の前に出來た「ツエツペリン」伯號は實に百三十四回の南大西洋横斷、七回の北大西洋横斷、一回の太平洋横斷無事故の輝しい記録を残して居る。

三、防空

獨逸は再軍備以前より「ベルサイユ」條約は防空を制限禁止しあらずとて防空設備に非常な力を注いで來たが積極的防空機關として多數の高射砲部隊を有する外民間防空としては獨逸防空團があつて十五の支部を有し整然たる組

織を確立し防空學校、婦人防空學校等を設立して防空教育をなし又屢々且各所に防空演習、防空講習會を催し防空思想と施設の徹底とを圖つて居る。

第五節 化學戰準備施設

獨逸は一九一九年一月以來「ヴェルサイユ」條約に依り、毒瓦斯の研究、製造を禁止せられ、世界大戰中の諸施設は破壊されしも、平時化學工業特に染料工業の發達著しきものあるを以て、有事の場合多量の毒瓦斯を製造すること容易である。且現在に於ても秘密裡に研究を繼續しあることは明にして、殊に防護法に就いては工場衛生に關聯し「アウエル」、「ドレーガー」等世界著名の防毒面會社を有し、軍隊、消防隊は勿論、市民に對しても其の訓練を怠らず、將校以下全員に防毒面を供給しある外、戰用貯藏品を整備し、尙馬匹、犬鳩に至る迄防毒具を備へて居る。近時各所に瓦斯防護學校の設立を見、又政府は化學戰を準備する技術

化學會維持に莫大なる經費を支出して居るやうである。

第六節 國家總動員施設

獨逸に於ける國家總動員施設は其の國家組織が既に之に好適なる形態を有つてゐるので恐らく世界に類例を見ざる迄に發達して居ると言ひ得るであらう。國民の何人も何れかの黨組織の中に含まるゝが故に其の特性技能等の調査登録等は徹底して行はれあり。人的資源の統制運用は極度に發達してゐるし第二次四箇年計畫長官たる「ゲーリング」は其の目的達成の爲の全權を「ヒトラー」より委任されて行政各省及黨各機關に對する命令權を有し一九三七年以來全機能を擧げて獨逸民族生存の爲自給自足、資源整備に眞摯なる努力を續けて居る、此等の組織施設は此の小文に於て能く盡し得る所ではないが獨逸合邦以來數次の實際訓練を経て其の能力は著しく向上されてゐる。

ドイツ軍に對する觀察

陸軍省情報部

前大戰に苦闘五年、遂に堪へ得ず一九一八年十一月、ヴェルサイユ條約に無條件調印したドイツは、敗戦國として際せられた苛酷の負擔、言語に絶する壓迫に加ふるに、スバルタクスその他ボルシエヴィキの運動煽惑を極め、國內至る處に流血の慘事相次ぎ、巷には失業者の群が滿ち溢れた。貨幣價值は暴落し、希望と生氣とを全く喪失し、窮乏混迷行くところを知らず、到底再び立つ能はずと世界をして信ぜしめたドイツに、ヒトラー總統が一度び彗星の如く現はれるや、忽ちにして國力を恢復し、國勢日に上り、一九三五年三月再軍備宣言以來僅かに五年に滿たぬ短時日に戰備を充實し、英佛を相手とする爭鬪戰に再び立ち上つたのである。

開戦以來持久戰状態にあつた歐洲戰爭も、五月ドイツ軍によつて最初の火蓋を切られたノールウェー作戦によりいよ／＼本格的武力戰、實力戰が展開されてゐる。やや冒險と考へられた北歐作戦は、その優秀な空軍の活躍によつて成功を収め、相當困難と考へられたオランダ、ベルギー作戦も、徹底的な戦力發揚によつて旬日を出でずしてこれを

席捲し、殊にベルギー作戦の末期には、ベルギー、英佛の聯合軍百萬をフランドルの野に殲滅し、千古未曾有の赫赫たる戦果を獲得し、更に北佛に破竹の進軍を續け、遂にパリを攻略し歴史の一頁を飾るなど、ドイツ軍破竹の進軍戰こそは今や世界驚歎の的である。今こゝに、かくドイツ軍の優勝する所以について、一應の考察を試みて見ることにする。

一、ドイツの國策

ドイツの國策は極めて明確である。ヒトラー總統は一九二〇年、ナチス運動開始以來、(一)民族自決の原則に基づき大ドイツ國を練成すること、(二)ドイツ民族の他民族に對する同權を獲得する爲め、ヴェルサイユ、サンゼルマン兩條約を破棄すること、(三)ドイツ民族の生活及び過剩人口移植の爲めに、國土と植民地(大戰後奪取されたものを指す)を取得すること、の三大要綱を以て對外根本國策としてゐる。しかし一九三三年政權を掌握して以來、非常な熱意と全力を盡してこれが實施に奮進してきた、しかし第一段の目的、ヴェルサイユ條約の破棄は、一九三五年



における再軍備宣言と、これに次ぐライオンランド進撃によつて達成された。現在は第二段を解決して第三段に入らんとしてゐる時期であるとするべきである。しかしてこの第二、第三段の目的達成のためには、強力な軍備と、前歐洲大戦に苦杯を嘗めたところの資源的整備充實に拂つた努力は異常なものであつた。

かくヒトラーの政策は確乎不動であり、萬事プログラム的に進行してゐる。この計畫的政策に従つて軍備は充實され、準備されたのである。

二、國內態勢の整備

一九三三年ヒトラーが政權掌握後、卓越せる見識に加ふるに、確信ある斷行を以て、新國家の基礎を建設した。即ち、強引にしかも常に合法的に處理し、順を逐ひ筋を通じ既に事實を改革するに既存法の合法を以てし、暴力を用ひることなく民族革命を遂行したのである。こゝに、ヒトラー政權に對する國民の支持と信頼とを、いよゝゝ強力ならしめた重大要因があるのである。政權の確立に伴ひ、ヒトラーはその世界觀に基づき、第三ドイツ國家建設のため着々と國內の革新を斷行した。

しかしてこの國家態勢整備は、一に戰爭遂行、戰爭貫徹のための國家態勢の整備であつて、戰時即平時、平時即戰時の姿であるべく、凡ゆる分野において計畫が着々實施されてゐたのである。

三、作戰準備

以上のやうな政治情勢に基づいて作戰準備が整へられてゐた。しかして作戰準備は作戰目的に合するところの作戰兵力と作戰資材によつて整備された。しかもその作戰資材なるものは、質の上からいつても、量の上から見ても、列強に比べて飛び抜けて優良に整備することができた。それは、ヴェルサイユ條約によつて軍備を撤廢させられたことが、その再建に當つて、全く新しい近代戰型によつて裝備を整へ得ることとなつたのである。人間萬事塞翁の馬といふが、春秋の筆法を以てすれば、ヴェルサイユ條約がドイツの近代軍備を作らしめたこととなつたのである。

四、戦力の集中發揮

今次戰爭に於ては、この充分準備せられた作戰資材と兵力が、常に敵に對し絶對優勢を占め得るやうに、時間的に場所的に集中使用せられてゐる。今一例を以て説明すればオランダ攻略戦は僅か數日で終つた。これには周到な準備即ち渡河作戰資材の整備、パラシュート部隊、第五列部隊の活躍等、あらゆる取るべき攻撃手段が盡されてゐる。有名なエベネメル要塞の攻略の時間短縮も、かくの如き戦力の集中發揮によつて實現し得たのであつた。

しかも戦力の消耗を補ふに足る兵力資料を保有し、次ぎ次ぎと新鋭戦力を補充してゐるから、戦果の擴張は確實に實行し得るわけである。

五、統帥の妙

統帥が獨立不羈であることの利は、英、佛兩國が一々議會報告をやつてゐる間接さとは比較にはならないが、ヒトラーの場合においては統帥權が獨立してゐると云ふよりも更に、統帥、政略、國民の三者全部がヒトラーによつて完全に統合され、協調されてゐるといへる。しかしてヒトラーの統帥振りには、前歐洲大戦以來研究に研究を重ねたところに基づき、他國のなさんとする對策に對し、更にこれに先ずる對策を、常に勇敢に遂行してゐることが見られる。

例へば、マジノ要塞線に據つて安心してゐるフランス軍に對し、意表外の戦力發揮によつてこれを突破してその埒外になげ出し、折角の要塞も何等の價値を發揮させないやうにしたのもその一例である。

六、經濟資源の準備

前大戦の苦い經驗に基づき、アウトタルキー、つまり自給自足經濟の完整に全力を盡した。此のためにドイツ國內に不足する石油、鐵、軍事資材の貯藏には多くの努力を拂つてゐる。例へば、彈藥などは會戰彈藥的に計算し、これが整備には國費を惜まなかつた。従つて理窟通りに貯藏ができたわけである。飛行機、戰車の消耗に對しては、たとへ豫備を有つてゐなくとも、工業力は優にこれを製産し得る状態にある。

七、國民の一致團結

對英敵愾心は一兵一市民に至るまで徹底してゐる。この對英敵愾心は、結局ドイツ國民生存のためにあるのであるとの信念を把持してゐる。しかして英國を敵とする以外に敵を作らないやう、あらゆる考慮が拂はれてゐる。例へば占領地オランダにおいては、オランダの俘虜は全部開放し、常備軍だけはそのまま軍務に服させ、オランダ將校に對してはドイツ兵に皆敬禮させる等、對等國相互間の禮式を規定し、何等敵對又は侮蔑的觀念は認められない。

一方ヒトラーは、三三年政權を掌握するや、ユダヤ人を排撃し、英、米、ユダヤ資本金融の虜から脱し、國家が經濟的にユダヤ人に制肘されないやうに整備した。これはまた宣傳、防諜上からも有利な結果を齎した。

八、英佛軍敗戦の原因

ドイツ軍が多年眞剣に今次戰爭に關し研究を重ね、武力による速戰即決の方針の下に國家の總力を擧げて、戰爭準備に邁進しつゝあつたのに對し、英佛側は、協調外交により現状維持が可能であらうとの盲信と、前大戦における經濟戰爭過信の誤つた戰爭觀、更に自由主義的な國民性や政治態勢等に禍され、戰爭準備、特に武力戰準備を怠つた結果が、今次の戰爭における兩者の戰鬥力に格段の懸隔を生じさせたものと考へられる。

九、支那事變との比較考察



支那大陸における作戦は、西歐戦場における作戦と同一に論ずることはできない、地理的に、文化的に、はた又戦争の本質において趣きを異にする。先づ地理的に見ると、オランダ、ベルギーの戦場地域は、わが上海南京作戦にも及ばない猫額大の小地域に過ぎない。しかも兩者文化の差は比較にならない。交通網の發達した西歐戦場と原始時代の東亞の戦場とは、作戦用兵上の困難さにおいて雲泥の差ありといふべきである。また人口數より見ても、支那は四億に上る多數であるに對し、西歐戦

場の人口總數は多くも四、五千萬に過ぎない。従つて治安維持に拂ふ勞苦にも差異がある。その他詳細に見たならば、幾多性質を異にするものを發見できるのである。支那事變勃發以來、皇軍は幾多の電撃作戦、殲滅戦を敢行し、赫々たる戦果を收めてゐるが、本質的に見た東亞大陸の作戦には、西歐作戦の如く、しかく簡單に片付け得ない大自然の偉力をも吾人ははつきり認識しなければならぬ。

ドイツ空軍の歌

「航空記事」より 海軍一男氏譯詞

(一) 祖國のしるしぞ わがつばさ 猛きを驚と 返海山こえ 返翼の勝利は 胸に抱くは ヒトラー魂 先立ち行くは ゲーリング (繰返へし)

(二) 友は空に 傷つくも 我はひるまじ ともんく (繰返へし) 大空高く 翔るとき 我等を護るは イムメルマン、ベルケ (繰返へし)

我等は英國攻撃に向ふのだ 今日こそ我等は高らかに歌はん いざ飲まん 冷たき甘いワインを いざ一杯を合はせん 來たるべき出動命令のために (合唱) いざ腕をとらん、汝が眞白き腕を さらば我が戀人よ 我いざ行かん、いざ行かん 我等は今より 英國攻撃に向ふのだ

伊 國

第一節 概 説

一、國防上の立場と環境

現在の歐洲野亂に處する軍備の特種的擴張は別として、最近の伊太利膨脹國策の根幹は羅馬、伯林樞軸を強化して、地中海に於ては英國に代つて其の覇權を握り、中央「バルカン」及近東に於ては政治的經濟的地歩を確立して其の勢力伸張を策し、又毎年七十萬以上にも及ぶ人口増加對策として植民地擴大を希望し、現状を打破し積極的に經濟政策を遂行しやうとするにあつた。

初め獨國に「ナチス」勃興し中歐に對して其の銳鋒をあらはすに至るや、必然的に伊國の政策と正面衝突を惹起した、時恰も佛外相「バルター」及之に代りし佛首相「ラザアルノ」植民地提供と交換條件に獨國包圍陣參加の勸誘があつて、伊國は之を棄つべき機會

と考へて欣然應諾した(一九三五年一月羅馬協定)。斯くて獨國再軍備(一九三五年五月)後の善後處置たる「ストレーザ」會議頃までは本關係は堅持せられて居たが、伊國の膨脹發展策が武力に迄進み、伊「エ」紛争勃發するや急に形勢は變化を來した。即ち本紛争に初期伊國に同情を表して居た佛國が伊國の對立者たる英國側に轉向したので、伊國は從來の行き懸りを捨て斷然獨國と共同態勢をとるに至つた。

然るに伊「エ」紛争一應結末を見、「エ」國合併を既定の事實として認めらるゝや伊國の外交は漸次平和主義に傾き、先づ英國と事を議さざる如く周到なる注意を拂ふ様になつたが、元來對英地中海爭覇は現實の問題なると、又「ム」首相生來の野望との爲、伊國は軍備充實に汲ると共に、萬一の場合英國が地中海を封鎖せんことを顧慮し、「バルカン」近東諸國との親善關係促進に努力したのである。

第二節 建軍要綱

一、兵役制度

伊國の兵役制度は國民皆兵義務の平等を原則として徴兵制度を施行して居る。其の新徴兵令は一九二三年の改正に係り、在營年限を一年半と規定されて居るが、此の在營年限決定の經緯には國防上の要求と社會政策上の主張と相錯綜し、可成り興味ある經過を示して居る。

在營年限變遷の經緯、大戦前各兵種共二年在營制を採用して戰役を経過し休戦後一九一九年十一月一度在營制を採用したるも、遂に實施するに至らずして止んだ。次で一九二〇年四月社會黨出身「ボノミ」が陸相に就任するや、國家財政の狀態と大戦の教訓とに鑑み最少の經費を以て最大の戦時兵員を得んがため、在營八箇月制を定めて壯丁全部の入營を企圖し、下士學校の新設入營前軍事豫備教育の普及工卒雜役勤務の免除等の施設と相俟つて武裝國民



の實現を圖つた。然れども軍隊の實際的勤務、平時警備に對する處置及軍事豫備教育普及の困難等、實行困難の事由續發し、其の都度勅令を以て數箇月の在營延期を行ひ、辛ふじて軍備の缺陷を糊塗して経過し、終に翌一九二一年再び一年制に復したが、教育の困難と戰鬥力の不十分は依然たるものあり、其の結果十四箇月制とするに至つた。

次で一九二二年秋「ムツソリーニ」内閣の成立と共に、依然全壯丁の入營を主義とし、新に軍隊教育上の顧慮並戰鬥力の保持上、一年六箇月制を定め新徴兵令の發布を見るに至つたのである。

其の後一九二七年八月徴兵令の一部に改正を加へ、家族の状況に依る特殊の者に對し在營期間を短縮する恩典を與へた。然れ共此の恩典は一九三一年一月より實施せられたる軍事豫備教育の義務制度に依り、該教育を受けざる者には之に制限を加ふるの制とした。

二、兵役年限

現役 十八箇月  
全兵役 合計三十四年

三、軍の構成

伊國陸軍は本國軍、植民地軍より成り、其の他に武裝的團體として其の性質上殆ど陸軍軍隊と見るべきものに、護國義勇軍、税關兵團及警察隊がある殊に護國義勇軍は陸軍には屬せぬが國軍の一部と認められて居る。

即ち護國義勇軍は當初は「ムツソリーニ」内閣の黨勢擁護、治安維持の爲に創設せられたる謂はゞ「ムツソリーニ」の政治的私兵であつたが、一九二三年一月勅令を以て其の合理的存在を與へられ、次いで漸次其の任務を擴張せられ、一九二四年國軍の一部を形成することになり、其の經費も亦正規軍同様國庫の負擔する所となつた。

今や治安の維持、國土防空及軍事豫備教育並青少年訓練に任ずるの外、作戰軍にも直接参加し、經濟的軍備の見地よりして大なる役割を演じて居る。

部隊は滿二十一歳以上の黨員たる志願者より採用し、將校下士兵に區分し、軍隊組織と爲し、常時は高等司令部、聯隊本部の幹部のみを常置し、治安維持の爲出動の必要ある場合に大隊長以下を召集し、之に武器被服を貸與して勤務に服せしめ、又教育、觀兵其他の儀式の場合に於ても同様に召集して居る。而して義勇軍が戰時に於て幾何の能力を示すかは疑問とせられて居るが、對「エチオピア」戰に於ける黒襪衣師團の成果は、其の人員の大なると相俟ち、決して之が存在を無視する事は出来なかつた。今や内政の確立と共に、正規軍、黒襪衣軍を打つて一九二なし、益々純軍事的に指向せらるるに於て愈々然りである。

尙「ムツソリーニ」首相が陸、海、空の各大臣をも兼稱するに至れるは、彼が將來國防省建設に一步を進むるの前提なりやとも見られ、彼がファシスト國家完成の爲、本國軍隊と護國義勇軍並「ファシスト」黨を益々緊密に融

合せんとする方針に出ずるものと觀測せらる。

第三節 兵力及編制

(空軍は第四節航空に)

最近列國の軍備擴張及自國國運の發展に伴ひ、遂次軍備の充實に努力しつゝあつたが、一九三八年九月五日緊急勅令を以て、更に左の如く陸軍の編成を公布した。

軍 團	一七
步兵 師團	五一
自動車化師團	二
胸甲 師團	二
快速 師團	三
「アルプス」師團	五
「ザーラ」兵團	一
「エルバ」兵團	一

以上の外、國境守備は自轉車步兵聯隊、師團編成外の騎兵聯隊等、其の總兵力合計十二師に相當する部隊を有す之に依れば師團數に於ては從來の約二倍の擴張を見たのである。而して此の

編成は未だ完成せられあらざるも、現情況下に於ては之が急速完成に努力しつゝあるは想像に難からず。

植民地軍

伊國人は將校以下現役及豫後役の志願者より採用派遣し、土人は志願者を募集する。

「リビヤ」	伊國人及土人	約四〇、〇〇〇
「エリトリア」	同右	約四、〇〇〇
「ソマリヤ」	同右	約四、〇〇〇
其の他		約二、〇〇〇
計		約五〇、〇〇〇

尙ほ伊國政府は「エチオピア」征服後肅正工作の進捗に伴ひ、最近植民地軍の編成を決定した。同軍は將校三、五〇〇兵六〇、〇〇〇より成る大部隊で、内土民軍を十七旅團に分け、他に機械化、機關銃隊、騎兵等の特科隊を置く方針と傳へられる。

三、武裝團體としての陸軍的色彩を帯びるもの  
護國義勇軍 約四三〇、〇〇〇

(此の内三十八萬は常勤せず、必要に際し何時なりとも召集に應ず)

稅關兵團	約 二六、〇〇〇
警察 隊	約 一五、〇〇〇

第四節 航空

一、要旨

現首相「ムツソリーニ」は在野當初より伊國航空界の不振を慨しつゝあつたが、一度政權を得るに及び、一九二三年航空高等委員會を設け、陸、海軍及植民地航空を統轄するの制度を立て自ら其の長となり、次で一九二五年空軍省を設置して空軍を獨立せしめた。

二、空軍兵力

伊國空軍は一九三〇年六月末迄に、平時飛行中隊一八二(約二、八〇〇機)氣球中隊は飛行船中隊九を整備すべき計畫にて、著々之を實行したが、豫算の關係上計畫を完成するに至らざりしも、獨空軍の擴張に刺戟せられて空軍充實を圖るに決し、一九三四年度より十二億利の豫算を以て空軍整備六箇年



計畫を樹立したるも三箇年に之を實現し、伊「エ」戦争初期には師團司令部三箇襲撃司令部一箇を創設し、更に一九三八年末新に軍團を編成し、同種襲撃機又は爆撃機二箇以上の師團或は旅團並に一管區司令部を之に屬するの主義を執れり。即ち從來の管區司令部を師、旅團と並べて軍團を轄下に入れ、之をして地上勤務萬般を整備せしむると共に、師、旅團は専ら明日の戦闘に備ふる空中訓練に専念せしめ、以て空地兩勤務の調整統一と作戦用兵の輕快迅速を計り、空軍活躍の能率増進を期しつゝある。

空軍師團、旅團は夫々同機種之二箇

伊國各年航空機生産概況一覽表

年	生産機數	工場従業員數	摘要
一九一五	一、四〇〇機		世界大戦開始の翌年
一九一六	六、〇〇〇		
一九一八	一〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	
一九一九			
一九二二			

(休戦の翌年にして航空崩壊時代に入る)  
(「ファシスト」黨政権掌握航空再建時代に入る)

又は三箇聯隊以上を以て編成する空軍大部隊とす。一九三八年初め完成の分は

イ、部隊	八〇中隊	襲撃機	一三〇
爆撃機	六〇中隊	陸軍協同	二三〇
陸軍協同	二五中隊	海軍同	二一〇
海軍同	二〇中隊	艦載機	一〇〇
在「アフリカ」	三五中隊	豫備機	七八〇
計	二二〇中隊		
飛行機	一、七二〇機		
第一線			
内譯			
爆撃機	六〇〇		
襲撃機	四五〇		

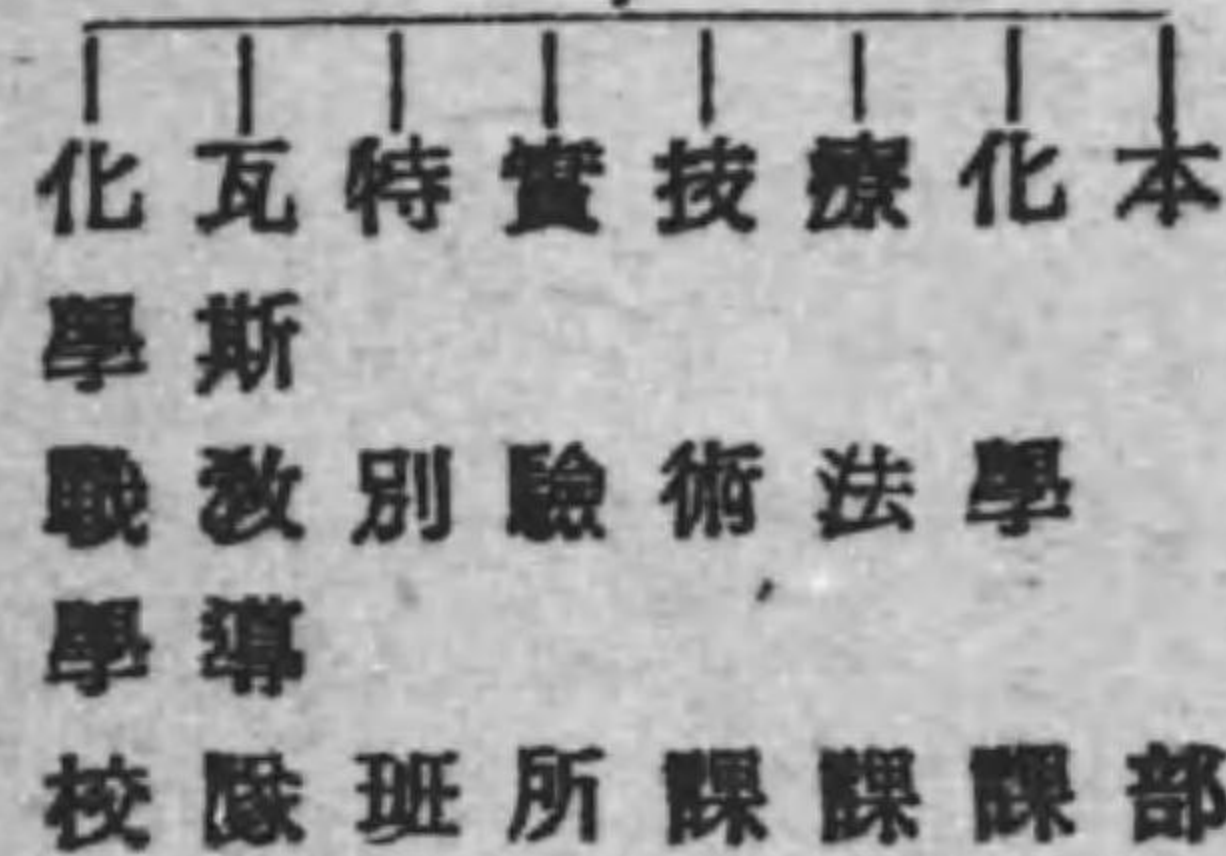
尙一九三六年の計畫に依れば、明一九四一年迄に三〇〇中隊、第一線機三、〇〇〇機となし居るも、前述の如く急迫せる現時局に於て之が完成を急ぎ居るは勿論、尙多量の飛行機を整備せんとしつゝある次第にして、併せて之を航空機生産能率に見るに左表の如くである。

三、民間航空  
伊國に於ける民間航空は他の歐洲列強に比し從來遅々として振はなかつたが、今や當事者の異常なる努力に依り其の面目を一新諸列強に比肩しつゝある。

第五節 化學戰準備施設

伊國に於ては、將來残されたる唯一

化學戰部—中央軍用化學研究所—



一九三五	一二、〇〇〇
一九三六	一八、〇〇〇
一九三七	二、二〇〇
一九三八	二、五〇〇乃至
一九三九	三、〇〇〇以上

〔金屬機の時代になりたれば從來の生産工程と同一視得ず〕

尙文部、大蔵、國民經濟、交通等の各省に屬して醫學及理化學を研究する諸機關は、軍部の研究、實驗に協力すべきものとして居る。

第六節 國家總動員施設

一、施設

戰爭に必要な機關の編制準備並國家諸機關の協力上緊要なる諸問題を審議する爲、國防最高會議を設け、總理大臣を議長とし、外務・内務・大蔵・陸軍・海軍・植民・國民經濟の各省大臣及航空高等委員を議員とするのみならず、軍事參議官會議々長・海軍將官會議々長・空軍總司令官・空軍經理總監も亦此の會議に列席して發言し得るの制として居る。



列國軍備概観

國防最高會議は其の審議事項の性質に應じ、左の諸機關中何れかを諮詢機關として利用することになつて居る。

1. 軍事參議官會議
2. 海軍將官會議
3. 航空高等委員會
4. 國家總動員委員會

國家總動員準備委員會は、國防最高

會議の必用に應ずる爲、國家總資源の編成、準備、利用の方法を研究する。委員長は總理大臣の奏請に依り勅命せられ、委員は參謀本部長、海軍軍令部長、空軍總司令官、空軍經理總監、伊國國立銀行頭取、國有鐵道總監、國防最高會議事務局長、各省及商船移民の委員會より出ず代表者各一名、教育及

經濟に關係ある大團體の代表者十一名、科學、工業、農業及商業界の權威者十一名から成つて居る。

尙國防最高會議には同事務局が附屬せられて居り、總理大臣の命令に基き國防最高會議を整理し、其の決議は關係各部に通報し、且之が實施の責に任ずるものである。

列國陸軍各備一覽

國名	區分		主要團隊數	摘要
	平時	戰時		
蘇聯	約二百二十五萬		步兵師團 百十箇師團 騎兵師團 三十五箇師團	從來の民兵師團の廢止は昭和十四年三月第十八回黨大會に於てウオロシロフ國防人民委員が確言した。
蔣政權を中心とする支那	約九十三萬		步兵 百五十二箇師團 獨立旅 三十六箇旅團 騎兵 七箇旅團	本表の外多數の不正規兵、土匪團ありて軍隊と略々同様の實力を有し、正規軍に改編せらるゝこと屢々である。
蘇聯	約二百二十五萬		步兵師團 百十箇師團 騎兵師團 三十五箇師團	其の兵數は算定困難であるが四、五十萬を下らぬものと判斷せらる。
米	約五十三萬		步兵 九箇師團 騎兵 三箇師團	
英	本國軍 約八十萬		步兵 二十箇師團 騎兵 二十箇師團	護國軍は最小限二十五萬と規定せられあり、著々其の實現を期してゐる。「ル」大統領は九月八日準戰時なる事を宣言國防強化に關し非常時權を發動した
國	本國外の兵力 約四十五萬七千		愛南新印 約十六萬六千 蘭阿蘭度 約三萬一千 西 約一萬三千 南 約三萬一千 東 約六千	以上の外外征に使用するは目下の所正規軍、地方軍、豫備軍、約七十萬にして今次戰爭に於ては少くも六十箇師團約七〇〇萬を動員し得べし本表の外に空軍兵力十萬を有す。

(昭和十四年末調)

列國軍備概観

國名	區分		主要團隊數	摘要
	平時	戰時		
蘇聯	約二百二十五萬		步兵師團 百十箇師團 騎兵師團 三十五箇師團	從來の民兵師團の廢止は昭和十四年三月第十八回黨大會に於てウオロシロフ國防人民委員が確言した。
蔣政權を中心とする支那	約九十三萬		步兵 百五十二箇師團 獨立旅 三十六箇旅團 騎兵 七箇旅團	本表の外多數の不正規兵、土匪團ありて軍隊と略々同様の實力を有し、正規軍に改編せらるゝこと屢々である。
蘇聯	約二百二十五萬		步兵師團 百十箇師團 騎兵師團 三十五箇師團	其の兵數は算定困難であるが四、五十萬を下らぬものと判斷せらる。
米	約五十三萬		步兵 九箇師團 騎兵 三箇師團	
英	本國軍 約八十萬		步兵 二十箇師團 騎兵 二十箇師團	護國軍は最小限二十五萬と規定せられあり、著々其の實現を期してゐる。「ル」大統領は九月八日準戰時なる事を宣言國防強化に關し非常時權を發動した
國	本國外の兵力 約四十五萬七千		愛南新印 約十六萬六千 蘭阿蘭度 約三萬一千 西 約一萬三千 南 約三萬一千 東 約六千	以上の外外征に使用するは目下の所正規軍、地方軍、豫備軍、約七十萬にして今次戰爭に於ては少くも六十箇師團約七〇〇萬を動員し得べし本表の外に空軍兵力十萬を有す。



邦 聯 蘇	名 國
約 八 千 機 (千五機線一第内)	飛行機所屬
飛行機 外に氣球中隊 七二〇中隊以上 若干	航空部
未詳	航空部
高射砲隊 同右大隊約 高射機銃約 聯大隊若干	高射砲隊 兵力及砲數
裝甲旅團 約 五〇 獨立戰車隊(大隊) 約 二〇 右の外歩兵及騎兵師團の大部は 機械化部隊を有す。 右戰車數 約 八、〇〇〇輛	戰車及機械化部隊 兵力及戰車數

列國新兵器整備一覽

(昭和十四年末調)

國 (考 參)	波	國
武裝部隊 約 七萬	約 二十七萬	武裝部隊 約 四十七萬
國境警備隊 國境監視隊 約 約 約 三萬 三萬 六千		護國義勇隊 警備隊 約 約 約 一四萬 三萬 五千
步兵師團 三十箇師團 騎兵師團 一箇師團 獨立騎兵旅團 一箇旅團 野砲兵聯隊 三十一箇聯隊 特種砲兵聯隊 三十箇聯隊 各種砲兵聯隊 二十箇聯隊		植民地軍 約 五萬
一九三九年獨波會戰前に 於ける兵力を示す。		

伊	獨	佛 (考 參)
約 六十五萬	正規軍 約 二百萬	正規軍 約 六十五萬四千
本國軍 約 六十萬 內憲兵 五萬		在本國兵力 約 四十四萬八千 在「アフリカ」 及「ルヴァン」 十四萬六千 在植民地及 六萬
步兵師團 五十一箇師團 自動車化師團 二箇師團 輕快師團 三箇師團 「アルプス師團」 「ザラ」兵團 二箇師團 「エルバ」兵團 一箇師團	步兵師團 四十二箇師團 自動車化師團 四箇師團 機械化師團 四箇師團 騎兵旅團 一箇旅團 突擊隊 等	本國に駐屯する部隊 步兵師團 二十箇師團 騎兵師團 一箇師團 戰車師團 四箇師團 砲兵旅團 三箇旅團 工兵旅團 二箇旅團 海兵旅團 四箇旅團
本表の外空軍約二萬六千 を有する	歐洲最強の國軍建設を企 圖しあるが如くである。	



伊 國	獨 國	佛 國 (考參)
約三千機 (屬所省軍空)	約六千機 (屬所省軍空) (んせ達に萬一約は數機總)	約四千七百機 (屬所省軍空) (百二千二約機線一第内)
飛行機 約二千機 ○ 爆撃機 八〇中隊 驅逐機 六〇中隊 陸軍協同機 二五中隊 海軍協同機 二〇中隊 在「アフリカ」 三五中隊	對波戰當時 約八十五箇師團 重機 約一五〇〇〇 輕機 約一五〇〇〇 戰機 約一五〇〇〇 註、以上は悉く攻撃機にして右 の外要地防空用並陸海軍協同用 の飛行機各數百機あり。	飛行機 約一五〇中隊 爆撃機 四一 偵察機 四一 氣球 二 球 二 尚北亞弗利加及「ルヴァン」其の 他の植民地の分を合すれば約一 八五中隊となる。
約十二億九千九百六十九萬利 (度年〇四、九三九一) (算豫省空航)	未詳	約五百三十三億九千五百九十九萬法
野戰高射砲聯隊 五(十二大隊) 義勇軍に屬する 砲隊 二五 砲數 一四〇門	空軍高射砲 約八〇箇聯隊 右の外要地防空用 並各部隊自用と して多數の砲及高 射機關銃を有す。	五 聯 隊
裝甲師團 二 自動車化師團 二 輕快師團 三 右戰車數 約一、五〇〇輛	重機械化師團 五 輕機械化師團 四 戰車數 約四、〇〇〇輛	戰車旅團三(六聯隊) 獨立戰車大隊 四 獨立戰車中隊 四 右戰車數 約一、五〇〇輛 其他豫備戰車 多 裝甲自動車中隊 約二〇

英 國	米 國
約五千二百機 (屬所省軍空) (機線二第は數半内)	約二千三百機
本國第一線機 約二、〇〇〇 爆撃機 五七中隊 戰機 二五中隊 其他 四〇〇機 海外派遣 二二〇機 艦載 二二〇機 計 二、六〇〇機 別に補助空軍 二〇中隊 右の外第一線機以外略々同數の 第二線機を保有す 外に海外自治領 七二五機	正規軍 偵察機 二〇中隊 戰機 四〇中隊 其他 七〇中隊 合計 一三〇〇機 護國軍 約二〇〇〇機 機數 約三〇〇機
約二億二千六百二十六萬磅 (磅萬千四算豫加追年九三九一に別)	約三億四千六百萬弗
正規軍高射砲隊 (海外のものを含 む) 二三箇中隊 (機械化) 砲數 二三〇 (二五〇)門 一部は旅團に編成 せらる 戦時は戰車を合し て防空師團を編成 す 地方軍高射砲隊 二十三箇中隊 砲數 未詳	八聯隊 砲數 約二〇〇門 外に高射機關銃 約五、〇〇〇 (本數字は豫備 兵器を含む)
戰車 約三五〇輛 右の外軍の機械化に伴ひ歩、騎兵 用輕戰車相當數を有す。 裝甲自動車 約一、二〇〇輛(推定) 印度には外に戰車三中隊裝甲自動 車五中隊を有す	中戰車聯隊 一一 輕戰車聯隊(八中隊) 七 獨立輕戰車中隊 一 計 一七中隊 右戰車數(豫備戰車を含む) 五〇〇輛 裝甲自動車中隊(騎兵師團配屬) 二 其他を合し裝甲自動車數 約二〇〇輛



營業課目

製出 三寫亞石  
版張 フ鉛眞  
一撮修 ッ凸銅  
式影正版ト版版版

諸官省御用

旭寫眞製版所

東京市京橋區榎町二丁目五番地十  
電話 京橋 (56) 七〇九七番

列國軍備概観

米 國

米國は東洋に於ける支那事變や、歐洲に於ける國際情勢の不安に刺戟せられ、昨年の議會に於て「軍縮條約がなくなつて以來各國は競つて海軍の擴張に浮身をやつして居るから、米國とも猶豫なく、斷乎たる決意の下に、之に對應する手段を採らねばならぬ」と云ふ見解の下に、其の海軍軍備の計畫として華府及倫敦兩條約に規定する最大限度迄建艦しようとする所謂「グインソン」案に、更に加ふるに各種に對して二〇%宛を追加する所謂「グインソン」案なるものを通過成立せしめ、更に本年に至り所謂第三次「グイ

其ノ二 海軍之部

ンソン」案なるものを計畫せらるゝに至つた。數年後是等の計畫全部が完成した時には、現在米國海軍の有する艦船と合せて、戰艦約二五隻、航空母艦約一〇隻、其他補助艦を合せ總計約二百萬噸に達する大海軍となるものと觀測せられる。

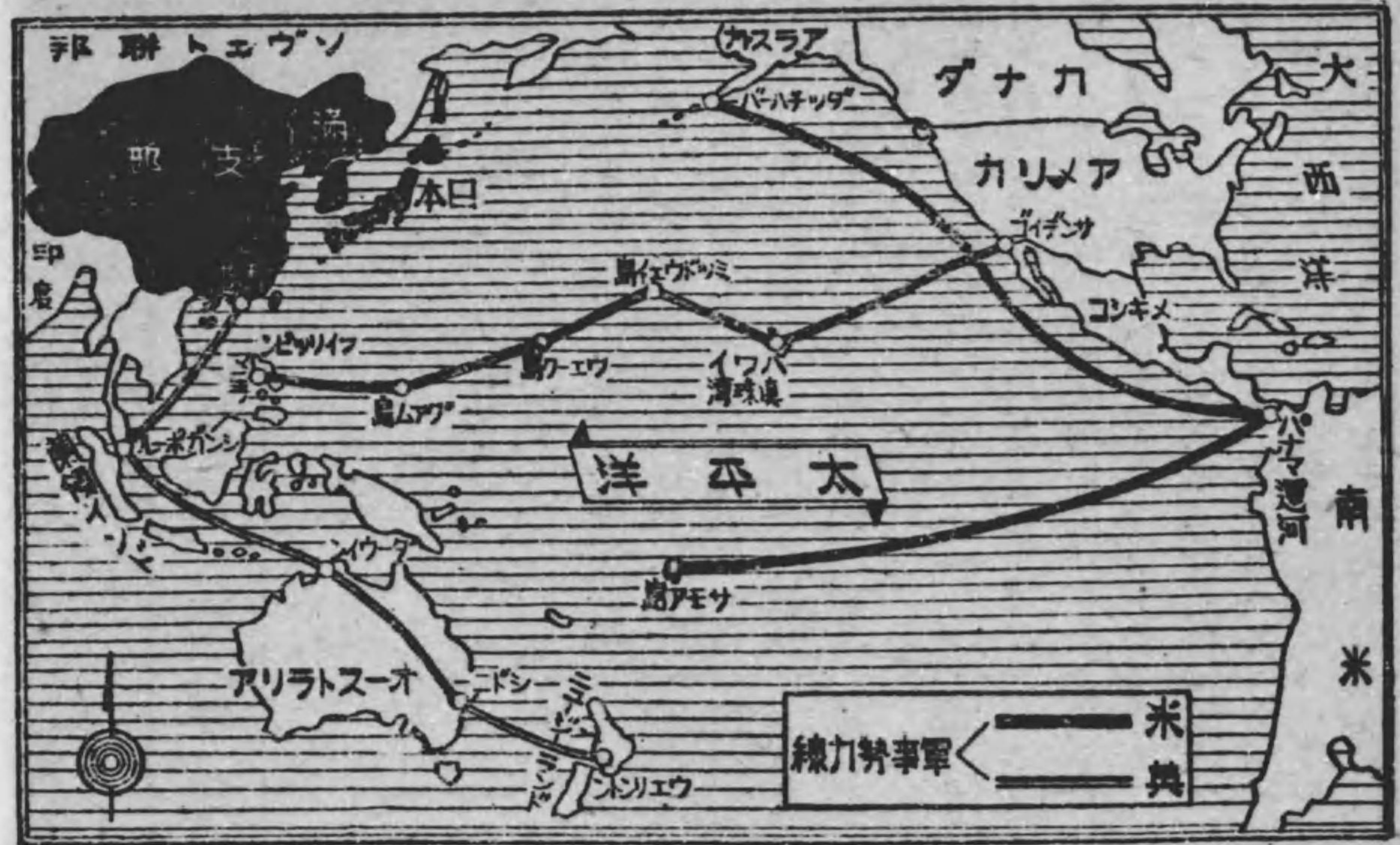
昨年來米國議會に於ては屢々國防充實に關する深刻なる討論が行はれ、以上の海軍擴張に基き、着々造艦計畫を進むる外、米本國沿岸「アラスカ」、「ハワイ」、「パナマ」、運河地帯に對する防備増強の目的を以て航空力の躍進的擴充が強調せられて居るのみならず、之と同時に米國西岸及太平洋諸島の防禦施設を急ぎ、彼の太平洋上の金城鐵壁

たる「ハワイ」眞珠港の基地及防禦施設を始め、「ハワイ」以西に於ける太平洋上の飛び石として重要なる「ウエーキ」、「ミッドウエー」、「ジョンストン」等の島々を始め、「アラスカ」、「アリューシャン」方面に於て、防備施設の増強と共に航空基地、艦隊泊地及補給施設の積極地建設計畫が議せられて居る。

以上太平洋上の飛び石たる戰略要點の防備強化の件は、昨年二月二十三日米國下院に於て大議論の末、例の「グナム」島を除き其の他は全部壓倒的多數を以つて通過して居り、「グナム」島に關しては其の整備が日本を刺戟し、戰爭に導く虞ありとの理由に依り否決せられたが、是には有力なる反對があり本年度亦問題となつて居る。斯くの如く自ら顧みて他國を刺戟すると思はる様な露骨な軍備充實が眞劍に議せられて居る情勢は大に注目すべきことである。

現に米本國より「ハワイ」、「ミッドウエー」、「グナム」を経て「フィリッ





「ビン」に通ずる太平洋横断の航空路に於ては、かの「チヤイナクリツパー」機が數年前より往復して居つて、太平洋横断飛行は既に實用の時代に移つて居る。斯くて有力なる大艦隊の建造と各戰略要點の防備及施設の増強と、相俟つて米國海軍の太平洋渡洋作戦準備は着々完成を見つゝある次第である。

附表

昭和十五年(一九四〇年)一月に於ける米國海軍現有兵力並に建造中及未起工の艦船

(潜水艦以上)

艦種	現有		建造中及未起工	
	隻數	噸數	隻數	噸數
主力艦	一五	四六千噸	八	三〇千噸
航空母艦	五	一〇〇	二	三五
甲級巡洋艦	一八	一七一	一	四四
乙級巡洋艦	一九	一五九	六	四四
驅逐艦	二二五	二八三	三〇	四八
潜水艦	一〇〇	九九	一四	一九
計	三八二	一、二九六	六〇	四四六

最近の動向

歐洲戰亂の推移に伴ひ米國の軍擴張は其後益々熾烈を加へ來り、特に英帝國の西半球後退説をめぐりては兩洋艦隊常設論が起り、關印、佛印問題と關聯して、極東進出にも力を注ぎ、大西洋方面の英領諸島を米海軍根據地としたばかりか、太平洋方面に於ても着々前進基地を獲得又は増強しつつある。而して之が外交方面に現はれては我日本との間に通商條約廢棄、重油、屑鐵輸出禁止、其他の聲明申入等となつて來て居るのである。

今之等海軍關係の米國動向につき主要なるものを左に擧げて見る。

海軍擴張計畫順調に進捗(其一)

ノックス海軍長官は八月廿八日の新聞記者團會見に於て海軍擴張計畫の進捗状況を説明大要次の如く言明した。「海軍擴張計畫は順調に進捗し中には計畫を超えて進んでゐるものがある、即ち(一)週當り労働時間の延長と三交代制を確立した結果海軍工廠従業員を三割方増員し得た(二)各種海軍根據地に於ける假兵營、訓練所の建設は豫定を超えて進捗してゐる(三)目下潜水艦十隻、驅逐艦七隻を建造中だが、これも豫定より三乃至九ヶ月早くなつてゐる。

(一)アナポリス海軍兵學校は、來る九月十三日の新學期から、二千三百九十六名といふ未だ曾つてなき多數の生徒を收容することとなつてゐる(二)多數の海軍軍備備士官を現役に編入せんとする法案は、御承知の通り既にルーズヴェルト大統領の署名を得た。

米海軍擴張計畫(其二)

米國上院は四月十八日九億六千三百萬弗の來年度海軍豫算案を可決したが、最終日の公聽會席上スタルク作戦部長は「日本が四萬三千噸級戰艦十二隻を建造してゐると云ふ情報には疑問であるが、八隻は建造中と確信する。米としては日米の五對三比率を維持する爲め六億五千五百萬弗の追加建艦案の通過を要する」と述べ、更に「現在日本の海軍勢力に對抗するため米國としては強力なる艦隊を極東に常置せしめよとの意見があるが、斯の如きは戰略上考慮する餘地なし」と一蹴し、グラム島強化が最上最簡單なりと力説した。尙聯合通信の報道は、來年度海軍豫算中には戰艦二隻の起工費を含んでゐるが、此の二隻が五萬噸以上ではないかと豫想してゐる。然かしニューヨーク・タイムズ紙は此の二隻は矢張四萬噸だと報じてゐる。が、愈々起工に着手した、ニュージャシー號の要目は左の如く決定したと云はれる。

▲排水量四萬五千噸 ▲艦長八百八十英尺 ▲艦幅百



八フィート▲十六吋主砲九門▲五吋副砲十二門▲搭載飛行機四機▲時速三十節以上

海軍擴張案(其三)

上院海軍委員の洩らす所に依れば、米の海軍擴張案は七年計畫(一九四六年度未迄)を以て軍艦總計七百一隻を建造せんとする老大なもので、その建艦内容は次の如くである。

- 一、主力艦 三十五隻
- 一、航空母艦 二十隻
- 一、巡洋艦 八十八隻
- 一、驅逐艦 三百七十八隻
- 一、潜水艦 百八十隻

米太平洋艦隊布駐常駐

米海軍は五月七日太平洋艦隊を常駐ハワイに常駐せしめるに決定したが、更に翌八日ハワイ海軍當局はハワイからの全兵力移動を無期限に停止する旨發表した。

米國建艦工程 (昭和十五年三月關)

艦種	隻數	艦種	隻數
戰艦	八	補加母艦	一

米國主力艦進水

米國海軍が完成を急いでゐた三萬五千噸級主力艦ワシントン號は最近竣工、愈々六月一日フィラデルフィアに於て進水した。同艦は一九三八年フィラデルフィア海軍工廠で起工、米海軍が目下建造を急ぎつゝある六十八隻の軍艦のうち最初に竣工したもので、米國に於て主力艦が進水するのは一九二一年コロラド號が進水して以來最初の事である。尚ワシントン號姉妹艦ノー・スカロライナ號も相次いで竣工、六月中旬ニューヨークに於て進水の運びとなる模様である。

米國兩洋艦隊案成立

米海軍では九月の十四日大統領の許可を得て一九四〇年度の米海軍の根本政策なるものを發表兩洋艦隊建設と航空

工掃母驅驅潛輕航	作海逐逐水	艦艇艦艦艦艦	艦艇艦艦艦艦	艦艇艦艦艦艦	艦艇艦艦艦艦	艦艇艦艦艦艦	艦艇艦艦艦艦
一	二	二	二	二	二	二	二
水電	驅	數	機	母	水	曳	艦
雷	潛	設		上	除		
艇動	艇	艦	雷	艇機	船用		
五	四	一	六	一			

勢力の強化の二點を強調した、右は一九三三年及び一九三七年に發表された米海軍の根本政策に訂正を加へたもので從來のものは「有事の場合二大洋を護り得るやうな艦隊勢力を擴張することを期す」といふ程度の曖昧なものであつたが今回のものは「太平洋及大西洋の双方において同時に大規模の艦隊行動を起し得る如き海軍を建設し維持すること」と明白に宣言し更に歐洲戦争の經驗に鑑み「海軍勢力の不可欠なる一部として航空勢力の發達を期す」と正式に聲明してゐる。

米國追加國防案

ルーズヴェルト大統領は七月十日議會に對し第四次國防教書を送り、既定の五十億弗國防計畫に更に四十八億四千八百萬弗(邦債概算二百八億五千萬圓)の軍事費支出権限を要請したが、その内容は海軍關係九億三千六百萬弗、陸軍關係三十九億一千二百萬弗となつて居り、新軍擴計畫の重點が大陸軍建設にある事が同十一日判明した。更にその内譯左の通り。(單位千弗)

- △海軍關係
  - 一、海軍七割增強案中に承認せられた軍艦百五十萬噸、補助艦艇十七萬五千噸の起工費 九三、〇〇〇
  - 一、航空機製造力擴充費(現金) 一二五、〇〇〇
  - (契約) 三七五、〇〇〇

- 一、補助艦艇新造、代換費 七五、〇〇〇
- 一、武器、彈藥購入費 八五、〇〇〇
- 一、海軍工廠費增加(ポストン、チャールストン、メーヤ島、ニューヨーク、ノーフォーク、眞珠灣、フィラデルフィア、ポーツマス、ピューゼット・サウンド、ワシントン) 七、〇〇〇
- 一、海軍根據地費增加 一、七〇〇

(内 購)

- グアム(將校集會所新設) 二七
- ツツイラ(サモア) 一八〇
- キーウエスト 一、二五〇
- 一、艦隊基地費(グアンタナモ) 五、〇〇〇
- 一、潜水艦根據地費(眞珠灣) 一、五〇〇
- 一、驅逐艦隊根據地費(サンディエゴ、サンペドロ) 七、〇〇〇
- 一、彈藥貯藏所新設費(バルボア) 四〇〇
- 一、海軍航空根據地費增加(アラメダ、シトカ、シャトル、ジャックソンヴァイル、ベンサコラ) 一、〇〇〇

太平洋に於ける空軍基地建設

米海軍では太平洋に於ける空軍根據地建設工事は豫定よりも著しく進捗し完成期は左の如く繰上げられるに至つた



と發表した。

即ち一九四一年七月に完成豫定なりしハワイ眞珠灣は一九四〇年十二月、一九四一年十月の豫定なりしハワイのカナオハは一九四〇年十二月、一九四二年五月の豫定なりしバルミラ島は一九四一年七月、一九四二年三月の豫定なりしジョンストン島は一九四一年八月に繰上げられた。

尙右の外ミッドウェイ島の空軍根據地は一九四一年末に竣工する見込みの由であり、アラスカに於ける空軍根據地ウナラスカ、コジャック及シトカ諸島の工事状況も順調であると發表された。

### アラスカに海軍基地

ノックス海軍長官は八月七日の定例会見に於いて米國海軍はアラスカ及びその近海の防備強化を圖るため第十三海軍區内に特別地帯を確定することに決定、近く新司令官を任命する旨發表した。

### オアフ島に海軍飛行基地建設

ホノルル海軍當局は八月九日オアフ島眞珠灣西方のパパー岬に一大海軍飛行基地の建設計畫を發表した。右新基地は眞珠灣内のフォード島飛行基地を補充するためのもので航空母艦用飛行機の基地に充てられる筈であると。

### 米空軍前進基地建設

アメリカ政府は今や國防強化に全力をあげてゐるが海軍省は八月二日深更に至り總額八百九十一萬四千弗に上る空軍前進基地建設契約を了した旨發表した。支出金額並びに契約内容次の通り。(單位千弗)(一)アリユージュン列島、ウナラスカ島空軍基地建設並にアラスカ南方コデディアク島空軍施設擴充費四、三〇五。(二)プエルトリコのサン・ホアン及シャーロット・アマリー兩地並にミッドウェイ島における空軍前進基地建設費四、六〇九。但しこれら建設計畫が何時完了を見るかについては海軍省當局は一切發表してゐない。

### 英對米基地租借正式承認

英米關係に畫期的緊密性を加ふべき英米兩國政府の西半球内英領島嶼、その他の海空軍基地租借交渉はこの程細目に關する取極めを終りロシア英大使は三日ハル國務長官に宛て公文書を以て「米國政府の英國に對する陸海軍用兵器並に資材提供の代償」として左記の各軍事基地並に同施設の九十九ヶ年租借を正式に承認した。  
(一)パナマ島東岸(一)ジャマイカ島南岸  
(一)セント・ルシア島西岸(一)トリニダード島西岸  
(一)アンチグワ島全部(一)英領ギアナのジョージタウン市を中心とする八十軒の地域

## 英 國

英國は昭和十二年を第一年とする十億五億(邦貨二百五十五億圓)五ヶ年計畫に依り再軍備に狂奔中であるが、此の老なる大計畫の目的は本國、海外領土及植民地に對する國防力の充實は勿論、最近益々多事多端なる國際情勢に鑑み自國の海軍力を以て諸外國に對する外交上の指導力を挽回し又集團保障體制を引續き有効に保たんとするに在ることは明かである。右の十五億磅の海軍擴張費は、最近英國議會に提出されたる海軍豫算により推定すれば更に増額せられつつある模様であつて、此の大計畫の完成期たる昭和十七年頃迄には、少くとも主力艦二三隻、航空

### 最近に於ける英國海軍建艦計畫

主 力 艦	計 畫 年 度		昭和八年度 (一九三三年度)		昭和九年度 (一九三四年度)		昭和十年度 (一九三五年度)		昭和十一年度 (一九三六年度)		昭和十二年度 (一九三七年度)		昭和十三年度 (一九三八年度)		昭和十四年度 (一九三九年度)	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
一	千	一	千	一	千	一	千	二	七〇	三	一〇五	二	八〇	二	八〇	

母艦一〇隻其他補助艦艇を合し總計約二百萬噸の大量の建設を完成するものと推定せられるものである。

即ち昨年一月二十七日のスタナップ海軍大臣の言に依れば、英國海軍の老なる建艦の状況は、平和時代に於て正に未曾有の大規模のものであつて今年度は實に一週間に平均一隻宛の割合で進水する由であり、之を以て見るも如何に英國が海軍の再軍備に畢生の努力を拂ひつつあり其の目的が奈邊に存するかを推察するに難からぬ次第である。空軍の擴張に關しても、海軍軍備に劣らぬ努力を拂つて居る。由來英國の空軍は統一空軍、即ち陸軍海軍と對立する空軍であつたが、之に伴ふ種々の弊害の爲一昨年より艦隊航空隊を空

軍より獨立せしめ海上の作戰力を一層強化せむと企圖しつつある。右の如き英國海軍及空軍が一朝有事の際、東洋方面に進出する勢力が、どの程度であるかは勿論其の時の情勢に依り定まるものと思はれるが、英の東洋に於ける最大軍港たる新嘉坡の施設に、長日月の努力と巨額の經費を投じて完成したのは云ふ迄もなく、濠洲北岸の「ポーターウイン」、支那沿岸の「香港」を始めとし、「ベナン」、印度洋の「セイロン」島、「ニコバル」島等の海軍及空軍根據地の整備、更に「アフリカ」の南を迂回して東洋に進出する軍隊航路の研究等と相俟つて英國艦隊の極東進攻作戦準備たることは云ふ迄もなく、此亦大に注目を要する事と信ずる。



其の他の艦艇	小計	潜水艦	乙級巡洋艦	甲級巡洋艦	航空母艦	若千	
						隻	噸
	一五三九三	一	三	一	一	一	一
	三九四二	三	二	三	一	一	一
	一七三九四	一	四	一	二	二	二
	六九三二	三	二	二	二	二	二
	二二二	一	六	三	一	一	一
	五六三二	五	二	八	一	一	一
	三六八七	三	七	七	二	二	二
	二〇一八	三	四	七	四	六	六
	三五七二	一	六	七	二	二	二
	二二三八	七	二	三	一	一	一
	一三三	一	七	一	一	一	一
	一五四三	一	四	八	二	三	三
	二七四一	一	六	四	一	一	一
	二七(七〇)	四	三	一	一	一	一

(註) (一) 括弧内は推定に依る。  
(二) 竣工せるものは竣工後の噸數に依る。

昭和十五年(一九四〇年)一月に於ける英國海軍現有兵力並に建造中及未起工の艦船(潜水艦以上)

艦種	現有力	建造中及未起工	噸數	
			隻	噸
主空母	一四	四四六	一	三三五
航空母艦	六	一一五	一	一三八
甲級巡洋艦	一四	四四六	一	三三五
乙級巡洋艦	一四	一一五	一	一三八
潜水艦	三三五	七四	一	六九一
計	一、三三八	七四	一	六九一

(註) (一) 昭和十四年(一九三九年)竣工として計上せるものには推定を含む。  
(二) 括弧内の數字は推定を含む。  
(三) 前表の艦船中には左記自治領海軍を含む。

加奈陀 六隻  
新西蘭 乙級巡洋艦 二隻  
漢洲 甲級巡洋艦 二隻  
乙級巡洋艦 四隻  
潛水艦 二隻

艦種	頭初の規定量	採用に依る増加量	規定量	計
主空母	一五隻	一	一五隻	一五隻
航空母艦	一五隻	一	一五隻	一五隻
乙級巡洋艦	三三五	二	三三五	三三五
甲級巡洋艦	一三五	一	一三五	一三五
潜水艦	一、二〇二	七六	一、二七八	一、二七八
計	一、二〇二	七六	一、二七八	一、二七八

ソ聯邦は最近其の陸軍及空軍が或る高度の水準に達したのと又歐洲に於ける種々の外交上の失敗等に自覺め國力推進の爲海軍力充實の急務なるを自覺

したるが如く、昭和十二年末以來制度、編制、人員、教育等各般の刷新を圖り、名實共に大海軍の建設に努めつつあるが高度の秘密主義の國である關係上其の眞相は判然しないが現在約三十三萬噸の艦船を保存し、その三分

の一約一三萬噸以上は潜水艦であるものと推定せられる。而して其の極東軍備は専ら潜水艦を中心とする防禦的軍備に努め、潜水艦七十隻以上を備へて居るものと思はれるが、是等は一朝有事の際東洋海面の制海權確保即ち大陸



と我國との交通及海外通商路の確保等に於て大に警戒を要するものである。航空機に於てはソビエツトは、總計六千機以上を保有し其の内約一五〇〇

昭和十五年(一九四〇年)一月に於ける蘇聯邦海軍現有兵力(潜水艦以上)並に建造中及未起工の艦船

艦種	區別	既成		建造中及未起工	
		隻數	噸數	隻數	噸數
主力	航空母艦	約一	七千噸	二	二四〇
甲級	巡洋艦	約四	三〇九	二	一六〇
乙級	巡洋艦	約九	三七〇	二	三五〇
驅逐	艦	約三	五二〇	一	二三五
潛水	艦	約二	一三〇	三	一五〇
合計		約二七	三三〇	約六	一八二

太平洋方面には右の内驅逐艦(五隻)潜水艦(七〇隻以上)等が配備せられ尙水雷艇(六隻)其他の小艦艇が配備せられてゐる。

獨逸

英獨海軍協定により對英三五% (潜水艦は對等) の獲得に成功して、ヴェ

ルサイエ條約の制限を脱し得た獨逸海軍は、其後着々建艦に着手し、更に英獨協定破棄以後は英艦隊に對し北海を護り、戦時には英國の通商ルート破壊

に添ふべき強力艦隊の建設に努力して居たが、昭和十五年一月の現有兵力は實に左の如くであつた。

昭和十五年(一九四〇年)一月に於ける獨逸海軍現有兵力並に建造中及未起工の艦船(潜水艦以上)

艦種	區別	現有		建造中及未起工	
		隻數	噸數	隻數	噸數
主力	航空母艦	四	七千噸	三	一〇〇
甲級	巡洋艦	二	二〇	二	三〇
乙級	巡洋艦	六	三五	七	二八〇
驅逐	艦	二	三七	八	一四〇
潛水	艦	六	二八	四	二〇
合計		九	一九二	五	二四一

今次歐洲戦に於ける獨逸海軍の状況は次項「今次歐洲戦に於ける海上作戦」の通りであるが、其後佛國崩壊、白佛海岸一帯の占據と共に目下頻りに空爆及砲撃を以つて對英上陸作戦を準備し

尙獨逸は逆に八月十七日對英國封鎖を宣言して、英國に出入せんとする各國艦船の航行を奪ひ、我歐洲航路船のアメリカ經由英國出入も殆んど杜絶せんとして居る現況である。

今次大戰に於て新に現出した艦艇で、獨逸は之を相當多數現有又は建造中であるが其詳細は不明である。

つゝあり、之に策應して其の海軍の行動も刮目されるが、其詳細は勿論不明で、唯白佛蘭海岸に於て時々英海軍と小闘を交へて居る外、潜水艦及機雷を以て英國周海に脅威を與へて居る。

英獨間の海戦としては別項南米ウルグワイ沖海戦の外、八月十三日英佛海峡に於て英驅逐艦と獨のEボートとの間に小闘あり、Eボート即ち米國で「蚊」と名付けてゐる快速小艇の活躍は

此の對英逆封鎖の水域は(ブルターニュ半島南岸)を起點として西南に進んで北緯四十五度、西經二十度の邊に至り、この點(ノルウエー、ベルゲン北方沖)より南行ベルギー海岸に達し、更にフランス海岸を走つて起點に歸る線を以て劃された全水域を含む。



〔参考〕

# 今次歐洲戦に於ける海上作戦 (六月迄)

海軍軍事普及部

## 目次

- 一、英佛の對獨海上封鎖戦
- 二、獨の海上作戦
- 英佛の海上封鎖に對する獨の對策
- 潜水艦戰
- 雷戰
- 小型戰艦に依る運河破壊
- 三、「ウルグワイ」沖海戰
- 四、北歐海戰に於ける海上作戦

- 獨側の作戦と其の成果
- 英側の作戦と其の成果
- 五、露白侵入以後の海上作戦
- 獨側の作戦
- 英側の作戦
- 六、佛國海軍を中心として見たる海上作戦
- 七、今後の作戦推移に關する觀察

(目次終)

## 一、英佛の對獨海上封鎖戦

一 般 今次歐洲戰爭勃發前より、英佛は獨と戦ふの已むなきに至る際は、其の勝利獲得の方策としては、絕對優勢なる海軍力による對獨海上封鎖と、之を基礎とし、世界に跨る強大なる經濟的勢力總動員による徹底せる對獨經濟戰

を計畫して居つたのでありまして、北海に於ける獨近海の機雷敷設原の公示、獨向戰時禁制品の拿捕による實質上の對獨海上封鎖は、宣戰布告と全く同時に、其の實施を見たのであります。而して英佛の對獨海上封鎖は、大體に於て第一次世界大戰當時と同様、間接封鎖の形を採り、之に用ひまする海上兵力は、獨空軍並に潜水艦の活動を考慮し、

一層後方に位置せしめて居る様であります。即ち昨年開戦直後に於きましては、主力艦數隻を基幹とする相當有力部隊は、北海北部のファース、オブ、フォース方面に居たのであります。獨空軍の襲撃を受け、多少の損害を蒙つた後は、蘇格蘭西岸方面に退いて居る様であります。而して蘇格蘭西北岸近くのスカツパ、フロロも屢々獨飛行機の襲撃に見舞はれましたのみならず、戰艦「ローヤル・オーク」、同泊地に於て獨潛の多く撃沈せられました以後は、哨戒艦艇以外は作戦上の必要ある場合のみ、同地に進出するもの如くに觀測されます。

封鎖戦の効果 右海上封鎖の効果と致しましては、戰爭の初期、海外より獨逸に向け、運送中の貨物の拿捕多額に上り、昨年末迄に英佛兩國は戰爭禁制品として合計約八十八萬噸の貨物を拿捕して居ります。獨逸の小型戰艦による通商破壊戦が、昨年十二月十七日ウルガイ沖に於ける「グラスピー」號の自沈により、一應結末を告げますと共に、英側の海上封鎖は殆ど完璧化し、一方十二月より實行に移しました獨貨拿捕令の適用、英國在外官憲、並に商社の巧妙なる協同動作による第三國經由獨向資源の防遏は、其の海軍艦船を世界の各航路の要衝に配置することに依り、着々其の効果を發揮し、獨逸が何等か打開策を講ずるに非れば、前大戰に於けるが如く、遂には經濟的に屈服を餘儀無くせらるるに非ずやと觀測されたのであります。

獨側對策の効果 然しながら豫期されたる英佛の海上封鎖に對抗する爲、獨逸は逆に英國海上封鎖を呼號して當初は小型戰艦及潜水艦及機雷を併用、次いで潜水艦及機雷を主用し、更に本年の初頃より航機による船舶擲撃を活潑化致しまして、英本國を中心とする商船に相當の被害を與へ北歐作戦の前月即ち三月末迄に、英國商船の被害約七十六萬噸、佛國船の被害約九萬噸、中立國船被害約四十六萬噸以上合計約百三十一萬噸(月平均約一九萬噸)に及び、之は前大戰直前、毎年二百萬噸の建造量を示し得たる英國が、最近は年約百萬噸に低下し居るに鑑み、無視し得ざる脅威に相違ありませぬ。

從つて英國側としては、之が對策に必死の努力を拂ひ、前大戰末期に採用し其の效を収めました

「コンボイ」 「コンボイ」システムを大々的に實施し、其の成果を挙げつつありまして、英當局の發表によりますれば、開戦以來五月一日迄に護送を受けたる船舶一萬九千隻以上の中で、撃沈されたるは三十一隻即ち六百隻に一隻だとのことであります。

事實、今迄の所では「コンボイ」を受けて居らぬ船舶に被害が多いと認められるのであります。之は從來、獨逸海軍及空軍による攻撃範圍が、「コンボイ」を大規模に適用しある英本土南西方海面に及び難かつたことにも因ると觀察致されます。然らば英佛の護送船航路は如何になつて居



るかと思はれ、大體英海軍の分擔と考へられますものは

- 一、サザムトン—米國・加奈陀線
  - 二、フリータウン〔西阿〕—ジャマイカ・トリニダツド〔中米〕線
  - 三、フリータウン—リオデジャネイロ〔南米〕線
  - 四、フリータウン—ケープタウン〔南阿〕線
- 佛海軍の分擔と考へられますものは

- 一、シエルブル・プレスト〔佛西岸〕—カサブラカ・ダカール〔西阿〕線
- 二、ダカール〔西阿〕—マルチニク〔西印度〕線
- 三、カルブランカ〔西阿〕—ニューヨーク〔北米〕線

の各航路であります。而して護送は、軍艦輸送船・客船及重油船に對しては必ず實施し、十二節以上の貨物船に對しては、單獨航行を許す場合がある様であります。

右護送航路の外、英海軍は多數の巡洋艦、特設巡洋艦を世界の各方面に分派し、且商船には中口徑砲及高角砲を一門乃至數門裝備し、通商保護の完全を期しつつあります。特に新西蘭濠洲より本國に至る線には力を注いで居り去る一月末及四月末此の方面よりの陸軍輸送前後に於きましては、戰艦一隻(ラミリス)以下、從來の濠洲新蘭西艦隊の大部よりなる強力なる護送艦隊を行動せしめて居りました。

## 二、獨の海上作戦

英佛の海上封鎖に對する獨の對策 以上申し述べました英佛側の海上封鎖に對し、獨逸としては陸路輸送のみに依つては重要物資の輸入を確保し得ない状況にあり、又通商破壊部隊や其の補給隊の出入等の爲、どうしても海外航路の維持を必要としたのであります。即ち前世界大戰の例に鑑みまして、アイスランド南方及諾威沿岸經由の航路確保を企圖し、之が爲には高速戰艦を初め、有力なる水上部隊並に若干の潜水艦及航空機に依る間接護衛、或は要する場合、直接護衛等成し得る限りの手段を講じたのであります。

昨年十一月二十六日、獨高速戰艦「シヤルンホルスト」「グナイゼナウ」以下が、英封鎖部隊中の一體たる特設巡洋艦「ラウルビンデイ」を捕捉撃沈したことがありますが、之等も交通線維持に對する作戦の一であります。又本年四月には遂に諾威作戦を敢行するに至つたのであります。其の動機の一つも此にあつたとも云はれるのであります。

其の他獨逸の海上作戦中、積極的方面に關し申し述べますと、獨逸は元來軍備の重點を空陸軍に置き、海軍は二の次に置いて來たのであります。従て英佛を對手に決戦をすること等は、思ひも依らぬ所であります。併し其の特徴ある兵力を活用して、相當の成果を擧げて居るのであります。九月十八日、北海に於て一隻の潜水艦は、英航空母

艦「カレーチヤス」を撃沈し、十月十四日にはU-I四六號潜水艦は、敢然、英艦隊根據地スカパフローに侵入して、戰艦「ローヤル・オーク」を撃沈し、他の主力艦一隻に魚雷一本を命中せしめて大損傷を與へた外、潜水艦・機雷・航空機の善用に依る對英本土逆封鎖及小型戰艦による海洋に於ける通商破壊等に於て、相當の成果を擧げて居ります。併し乍ら今次戰爭に於きましては、前世界大戰當時と情況を異にしまして、獨逸は海外領土も與國もなく、従て海外に補給其の他を獲得すること困難でありますし、又兵力の不足、特に行動力大なる潜水艦が皆無であります爲、當時程の活躍は見られなかつたのであります。

潜水艦 潜水艦は開戰當時約六十四隻、二萬七千五百噸其の内譯は二五〇噸級三十二隻・五〇〇噸級二十一隻・七〇〇噸級十一隻でありましたが、二五〇噸級は概ねバルチック海で乗員養成に使用せられました故、作戦に従事しましたのは二五〇噸級の残部若干と、五〇〇噸級以上三十三隻とに過ぎなかつたのであります。此等潜水艦の三分の一は補給修理に、三分の一は作戦海面往復の途にありまして十隻を稀に超える程度であります。是の如く、其の隻數は僅ではありましたが、之を以て對英逆封鎖に努め、特に北海及南西岸方面に主力を注いだのであります。英佛の對抗手段も發達して來ては居りますが、其にも拘らず、相當

の被害を與へて居ります。現在、潜水艦大量建造、乗員の大量養成に大童となつて居りますから、其の整備の曉には大活躍を期待されるのであります。

機雷 次に獨逸の機雷作戦に就てであります。自國或は陸軍作戦區域の海正面掩護の意味等、防禦的にも機雷を使用したのであります。對英本土封鎖に於ける機雷の役割を重視し、英本土南東岸は勿論、遠く西岸及南西岸に迄も機雷を敷設したのであります。使用兵力は不詳であります。主として輕快艦艇でありまして、情況に依り、潜水艦航空機も使用せられた様であります。

世に宣傳せられました獨逸磁氣機雷も使用當初は其の效果顯著なるものがありました。各種機雷に依り戰艦「ネルソン」「フッド」を觸雷破損せしめ、小艦艇其の他多數の商船を沈没せしめたのであります。英佛側の之に對する掃海及船體非磁化に依る對抗策が講ぜらるるに及んで、被害も漸次減少して參りました。

茲に磁氣機雷に關し、簡単に申し述べますと、本機雷には二種ありまして、一は淺深度水底沈置式で、他は水深稍大なる海域に使用するアンテナ式であります。

前者は鐵船が接近して、一定時間磁場が變化しますと、之に依り發火する様になつて居り、後者は磁氣裝置をアンテナ上端に裝備し、之が磁氣作用を受けた場合、沈置機雷に浮上させる様になつて居り、機雷が一定深度に達した



時、或は衝撃に依り爆發する仕掛になつた居るもの様であります。次は航空機の活躍に就てありますが、開戦當初、獨逸軍は海上訓練の不足と云ふ缺陷もあつたことと思はれますが、將來の大作戦を豫期して、兵力を拘置すると云ふ考へからか、海上に對する航空作戦は、比較的消極的であつたのであります。

航空機による海上作戦 即ちスカパフロー空襲、北海上に於ける英艦隊空襲等、華々しいものがありました。使用兵力は彼の大空軍としては、如何にも僅少であつたのであります。併し英本土南東岸方面に於ける商船攻撃には、極く僅かな損害を以て相當大なる成果を挙げ、對英逆封鎖の重大役割を演じて居ます。其の他北歐戰以後の作戦に就きましては後刻申し述べます。

小型艦艇に依る通商破壊 以上は英本土近海に於て實施された所ですが、海洋に於きましては、獨逸特有の所謂「ポケット」艦艇を利用して、通商破壊に従事せしめたのであります。即ち昨年八月下旬、開戦に先ち、「ドイツチランド」及「グラフシュペー」を出港せしめ、主として大西洋に於て、遠くは南米或は印度洋、マダガスカル方面に迄行動、補給船及拿捕船舶より燃料食料品其の他を獲得しつ約二十隻の敵國並に中立國商船を撃沈したのであります。「ドイツチランド」は十二月歸國したのであります。

て居りますが、其の後、獨逸小型艦艇の所業なることを感知し、凡そ左の如き搜索配備を採つた様であります。

英巡戰「レナウン」空母「アークローヤル」……………

…ケープタウン方面

甲 巡「カンパイル」……………

…フオー克蘭ド方面

甲 巡「エクセター」・輕巡「アヂヤクス」……………

…南米東岸。

輕 巡「アキレス」(新西蘭艦隊)……………

…南太平洋より大西洋へ。

右の他、英本國より驅逐艦數隻、地中海より戰艦「ラミーズ」及驅逐艦二隻、蘇土運河經由印度洋に移動佛國戰艦「ストラスブルグ」は本國より阿弗利加西岸に行動艦名不詳の獨逸艦搜索に大奮の活動を續けました。

(ハ)「シュペー」號發見の動機——「シュペー」號、補給艦獨商船「タコマ」號が十二月初め、ブラジル沿岸にて、或英國商船より燃料を購入せんとしたことにより、英海軍が獨逸の所在を感知し、南大西洋及智利方面行動中の英艦全部の集結を命じたる所へ、「シュペー」號が現れた次第であります。

(ニ) 戰闘概要——時十二月十三日早曉兩軍遭遇。場 所 ウルガイ國モンテビデオ東方約三〇〇運南

「グラフシュペー」はラプラタ沖に於て、英艦三隻に捕提され、遂に敢なき最後を遂ぐるに至つたのであります。作戦の成果に比し、其の代償過大なるやに思はれます。將來獨逸が英本土に對し、攻撃作戦を敢行する時機に投じて、快速戰艦・小型戰艦其の他特巡等をも使用して、斯の如き通商破壊戰實施するならば、實效以上に、英佛艦隊牽制の効果を期することが出來ると認めます。

三、ウルガイ沖海戰(別項歐洲戰記に詳記)

此の海戰は上述の通り、獨の小型戰艦により、通商破壊戰を英海軍が阻止せんとして起つた海戰でありまして、其の概要は次の通であります。

(イ) 海戰前に於ける獨逸艦「アドミラル・グラフ・シュペー」の行動——「シュペー」號は、一九三九年十月初旬より、十二月十三日に至る約三ヶ月間、主として南大西洋方面より印度洋西部に行動、略時を同うしたる他の獨小型戰艦の北大西洋行動と策應し、英艦隊の搜索配備を困難ならしめつつ、英國商船九隻・和蘭商船一隻計十〇隻五萬五千噸を撃沈して居ります。

(ロ) 英艦隊の「シュペー」號搜索配備——英海軍は十月二日、英艦「クレメント」號が南米東端沖にて「シュペー」號に撃沈せられた當時は、右撃沈は獨潜水艦の所爲と信じて居つたことは、情報省の發表にも現れ

米沿岸 参加兵力

(獨側)

戰艦「アドミラル・グラフ・シュペー」

一〇〇〇〇噸 一一吋砲六門 五・九吋八門

(英側)

甲 巡「エクセター」 八三九〇噸 八吋砲 六門

輕 巡「アヂヤクス」 六九八五噸 六吋砲 八門

同 「アキレス」 七〇三〇噸 六吋砲 八門

戰闘の經過

午前六時、射距離二二、五〇〇米にて「シュペー」先づ「エクセター」に對し砲戰開始、次いで「エクセター」應戰、「シュペー」の第四齊射「エクセター」の前面に命中、同艦は煙幕を利用退避開始、「アヂヤクス」「アキレス」砲戰加入、戰闘開始後一時間二十分にて戰闘一旦中止。

此の戰闘に於て「シュペー」の射撃は、敵の各艦に分火する方針に偏せし爲に、一艦一艦に集中して個々の撃滅を實現するに失敗せる模様であります。斯くて「シュペー」はラピラタ河口に向ひ、英艦「アヂヤクス」「アキレス」、追撃緩慢なる砲戰を行ひつつ西に移動、同日夜間「シュペー」はモンテビデオに遁入しました。



爾後獨艦は同港脱出の機を得ず、遂に十七日、同港港外に於て自沈致しました。

(木) 所見

此の海戦は、今次歐洲戦争に於ける第一回目の海戦らしい海戦であります。期待されたる獨の新式小型艦の威力が、何等か人的特に精神的要素上の缺陷、或は指揮官の誤判断等により、充分發揮されなかつた憾があります。對し、英國海軍は依然として敵を見れば必ず闘ひ、闘を始めたら仲々咬へて離さぬと云ふ様な傳統的な長所を失つて居なかつたことを示すものであることは、海上作戦、今後の推移に對しても注目の要があるものと考へられます。

四、北歐作戦に於ける海上作戦

(一) 獨側の作戦と其の成果

獨逸の北歐作戦は、北正面の防禦、資源確保等防禦的目的を主としたものとも見られるのであります。將來作戦に對する潜水艦基地、空軍基地獲得も、極めて大きな意義を有するのであります。

即ち、諾威南西岸は水深深く、機雷敷設に困難であるのと、大西洋方面に近くもある爲潜水艦基地として、好適なる港灣を有し、又英國北部に對する空襲を考へる時は極めて有利なる航空基地を提供するものであります。

兩軍發表の被害の詳細は、次の表を御覽願ひます。

北歐戰に於ける被害に關する英獨軍發表 (自四月九日 至五月九日)

	英		獨	
	喪失	破	喪失	破
主力艦	1	(11回)	2	2
巡	6	(23回)	4	2
驅	5	(10回)	11	2
潛	3	(4回)	5	
空母		(3回)		
運送船		(33回)		
其他艦船	5	(5回)	26	10
計	14	(89回)	68	
飛行機	23		33	

( ) 内數字は加害回数を示す

(二) 英側の作戦と其の成果

北歐作戦全般としては、英佛は確に獨に先手を奪はれ爲に失敗に終つたのであります。之は明かに空軍及陸

軍に於て充分の力を發揮し得なかつたことに因るのであります。即ち海上作戦としては、仲々積極的であつたことは、獨逸に云ひ掛りをつけられた諾威領海内機雷敷設

斯る目的を達する爲に、海軍力には非常な懸隔があつたにも拘らず、諾威上陸作戦を敢行したのであります。ナルヴィク上陸等、常識では一寸考へられない様な冒險をもやつて居るのであります。此の作戦に於て、獨逸が更に多數の潜水艦を使用して居りましたら、之に依り大なる被害を英側に與へ、又自國艦艇の損害も幾分減少することが出来たのではないかと思はれるのであります。被害修理其他各種の理由に依り、當時行動し得る潜水艦数は案外僅少であり、而も乗員の養成に、主力を注がねばならなかつたのではないかとも思はれるのであります。

此の作戦で、獨逸の最も苦心しましたのは、云はずもがな海上輸送でありまして、空軍の協力に依り、少くもオスロに至る航路だけは確保し様と努めたのであります。海上兵力の微弱なる悲しさ、空軍の活躍に不適の天候等にも災されて、艦艇及運送船の損害は、相當數に上つたのであります。即ち重巡一隻・輕巡二隻(發表は一隻)驅逐艦約十隻等を失ひ、其の他にも大損害を蒙つたものが戦艦・輕巡各一隻、獨海軍としては極めて重大なる傷手を蒙つた譯であります。

此の間、獨空軍は丁抹及諾威に基地を進めて、敵艦艇攻撃に努め、其の撃沈艦艇は、獨側發表に依れば、戦艦一・巡洋艦五・驅逐艦數隻になつて居ります。



でも判り、又豫め獨の作戦を感知し、既に三月頃よりスカッパローに待機して居た英本國艦隊は、獨軍の諾威上陸に先づたこと二日、即ち四月七日獨軍船團の北上を偵知し、直に出動して居るのであります。

其の後、海軍は極めて活潑に、空軍並に佛海軍の一部と協力、極めて果敢な行動を以て獨軍上陸作戦の阻止次第で英佛陸軍の上陸作戦協力、後には其の撤退作業協力に任じて居りますが、就中其の成果を収めたと認められまするものは、獨海軍艦艇に與へた損害であります。即ち此の作戦に於て、獨軍はオスロ方面に於て巡洋艦二隻を失ひ、北方ナルヴィック方面基地にて、新鋭驅逐艦數隻(英側は九隻と發表)を失ひ、又輸送船に於ても十五隻程度を撃沈せられたものの如くでありまして、此の作戦に

北歐作戦 (五月末日迄)		英の被害	同上中空爆によるもの	砲火其の他によるもの
巡洋艦	二	一乃至二	(一は空爆の結果 坐礁と思はる)	一
驅逐艦	五	二		三
小艦艇	約一三	一一		二
潜水艦	三乃至四		原因不明なるも當時の状況より推し空爆によるもの大部分と認む	

上述の巡洋艦の内一は四千噸の防空巡洋艦「カール」であり、他の一は古い乍ら約一萬噸の巡洋艦「エフィン

ガム」であること、驅逐艦以下の小型艦は、空爆に極めて弱きことは注目すべき所であります。尙獨側では五月

三日前後に於て、英の主力艦一隻を急降下爆撃により撃沈したと稱し、英は之を否定して居りますが、其の後の情報により未だ何れとも断定を下し兼ねて居る情况であります。

### 五、蘭白侵入以後の海上作戦

蘭白侵入後、獨逸は同方面沿岸に機雷を敷設すると共に高速魚雷艇を相當多數行動せしめて、海正面掩護に任せしめました。機雷に依る被害は明かではありませんが、魚雷艇は聯合側驅逐艦・輸送船等數隻を撃沈し、仲々活躍して居ります。

空軍の海上作戦に對する協力も圓滑に行はれ、敵艦艇輸送船攻撃の成果大なるものがあります。(表参照)

獨軍の蘭白侵入後に於きます英海軍の行動は、全般として消極的で、今日迄の情報では、獨空軍の攻撃、同方面海面が津瀬の多い關係上、主力艦・航空母艦等の大艦は同

### 白蘭作戦に於ける被害に關する英獨兩軍發表表 (自五月十日 至六月四日)

主力艦	英		獨	
	喪失	破	喪失	破
巡	5	10		

方面に姿を現して居ない様であります。而して其の活動も敗殘英佛陸軍の急速撤退作業協力を主として居る如く其の受けたる損害の大部分は、獨空軍の爆撃に基くものであり、英海軍は此の作業中、驅逐艦六隻其の他雜艦艇二四隻を失つたと、公表致して居ります。

### 六、佛國海軍を中心として見たる海上作戦

(一) 概況  
佛海軍は英海軍と協力し、昨年九月開戦以降、本年三月に至る七ヶ月間は、艦隊の大部及内戦部隊の全力を擧げ主として對獨封鎖作戦に従事して居りましたが、四月北歐作戦、次で五月白蘭作戦の開始以來、艦隊の一部を之等作戦に協力せしめ、又最近は伊參戰の時機切迫に依り固有の地中海艦隊に主力艦を増勢し、英艦隊と協力し伊國に備へて居る模様であります。

於ける獨海軍の被害は、元來兵力少なる同海軍の殘存兵力を、全般的に見て三分の二程度に低下せしめたことになり、注目を要する所であります。

而して本作戦に於ける海戦の様相中、英海軍が極めて勇敢に、戰艦「ウォースパイト」迄、狭い峽灣内に突入せしめて、驅逐艦を滅したナルヴィックの海戦の様相などは、今日既に可成り詳しく報道されて居りますが、我々が現今最も知らんと欲して居る獨空軍の英側艦艇に與へた損害の状況は、獨側より相當大きく傳へらるるに拘らず、英側が依然として、多く語らない爲に明瞭でない所があります。然し乍ら今日迄、英國が公表しました所



備考	飛行機	計	其他艦船	運送船商船	空母	潜	驅
佛驅七隻給油艦一隻沈没	204	36	24	1	1	1	6
	約3000	101	11	67	5	15	
			30	117		24	
	432						
	約2000						

(二) 艦隊の配備並に主要行動

大西洋艦隊(戦艦五、空母一、水戦二隊、潜艦一隊)を基幹とする有力部隊は、prest方面を、地中海艦隊(巡洋艦戦隊二隊、水戦二隊、潜艦一隊)の一部は、ツローン方面、残餘はカサブランカ、ダカルル方面を基地として、獨艦艇の搜索撃滅並に大西洋の海上交通線保護に當り、別に潜水艦・小艦艇及舊式艦艇よりなる内戦部隊を本國沿岸及北阿沿岸に配備し、沿岸防禦及通商保護を行ひ、北歐作戦及白蘭作戦には、主として大西洋艦隊の一部及北方の内戦部隊を當らせて居る模様であります。詳細のところは未だ判明致しません。

(三) 現在迄の海上作戦の成果並に被害

尙最近佛艦隊の大部は、東地中海(シリヤ、埃及方面)及西地中海(アルゼリア方面)に集中せられ、英地中海艦隊と協力し、専ら伊海軍に備へて居る模様であります。  
開戦後六箇月間に於ける成果として、佛海相は、船舶護衛隻數 二、〇〇〇隻、内四隻喪失。(植民地兵及労働者、加祭陀、印度、濠西軍等の無事輸送に成功)  
獨潜撃沈隻數 一一隻  
英海軍と協力しバルチック海以外に於ける獨海上交通の完全遮断に成功したと發表して居ます。

最近の地中海に於ける英佛對伊海軍の勢力比は概ね次の通りであります

概略	噸數				英	佛	計	伊
	戰艦	巡洋艦	特設洋艦	空母(又は水母)				
東地中海四〇萬噸	三	〇	萬	噸	一〇	二四	一六	七三
西地中海三〇萬噸	四	〇	萬	噸	三八	三二	二五	一〇六
計	七	〇	萬	噸	四八	五六	三一	一七九
伊	五	〇	萬	噸				一九六

七、今後の作戦推移に関する觀察(六月末發表)

獨逸は諾威・丁抹・和蘭・白耳義及び北佛占領に依り本土包圍の態勢を整へたものであります。他方ソム・エーヌよりマルメデイに至る線を挟んで佛軍に對峙し佛國席捲の姿勢にあるのであります。今後主作戦の英佛何れに指向せらるゝかは尙豫斷を許さぬ所ですが、海上作戦に限りすれば一部は既に申述べました所が、小型戦艦、巡洋艦、特設巡洋艦等に依る通商破壊、多數の潜水艦及び航空機に依る英本土方面無制限爆撃、機雷

戦強化等は實施の算大なるものと思はれます。

巷間傳へられる對英上陸作戦も必ずしも不可能ではなく獨逸が或る程度の制空權を獲得し英海軍に打撃を與へた場合は、高速艦艇、潜水艦及び航空機の護衛掩護の下に高速輸送艦艇に依り、陸軍を英本土南岸方面或は東岸若しくは愛蘭に輸送上陸せしむることも考へられる所であります。右の場合、島帝國英國がドーバー海峡の如き特殊の狭い海面に於て、獨軍を阻止すべき制空權をも含む眞の制海權を確保し得るか否かが英本土の安危の分れる點ではないかと考へます。



伊太利

イタリア海軍の目的はその地理的位  
置、人口の稠密及び重要資源たる鐵、  
石炭、石油等の大部分を海外に仰がな  
くてはならない弱點があるため精銳な  
る空軍の威力と相俟つてその海軍力を  
以て(イ)アドリア海の絶對的制海權、  
(ロ)地中海の制海權の掌握、(ハ)本國  
とリビア(引いては伊領東アフリカ)お  
よび多島海嶺諸島との連絡の確保を  
期するにあり、

しかし従来は必然的に佛國と均等  
なる海軍力を保有することをその根本  
方針となしたが、エチオピア遠征に際  
し、英佛、殊に英國海軍と對峙して衝  
突開戦の危機に直面して以來、英國地  
中海海軍力と對峙するを目標とするに  
至つた、蓋し伊英兩國の地中海爭覇戦  
は兩國にとつて宿命的なものであり、  
エチオピア攻略を機としてイタリアが  
地中海を益々自國の生命線とするに至  
つた以上、一方同じく地中海を重大な

る交通路とする英國との間には將來と  
も到底兩雄並び立たざるの關係に立つ  
よりないからである。

而して昭和十五年一月に於ける同國  
海軍の現有兵力及建艦状態は次の如く  
である。

艦種	區別		噸數	噸數	噸數
	現有	兵力			
主力艦	六	一六千噸	二	七千噸	
航空母艦					
甲級巡洋艦	八	七九	二		
乙級巡洋艦	一四	八一	一六〇		
驅逐艦	六一	八五			
潛水艦	一〇五	八〇	一六		
合計	一九四	四九〇	三〇	一二八	

(註)(一) 昭和十四年中に竣工と  
して計上せるものは推定を合  
む。

本年六月十日参戦後の伊海軍行動は  
別記の通りであるが、之を概括すると  
前述の如く其の優勢なる空軍を以て、  
連續數回マルタ、アレキサンドリア、  
ジブラルタル等の英海軍根據地に爆撃

を行ひ、又北阿佛領各地を海上より砲  
撃し、コルシカ島に上陸作戦を企圖す  
る等地中海各方面に互り活動を試みて  
居るが、海戦としては、七月九日イオ  
ニア海に於て英側戰艦三隻、巡洋以下  
多數と伊側主力艦二隻巡洋艦數隻との  
間に遭遇戦が行はれたが、兩國側共に  
其發表區々で其真相は不明である。

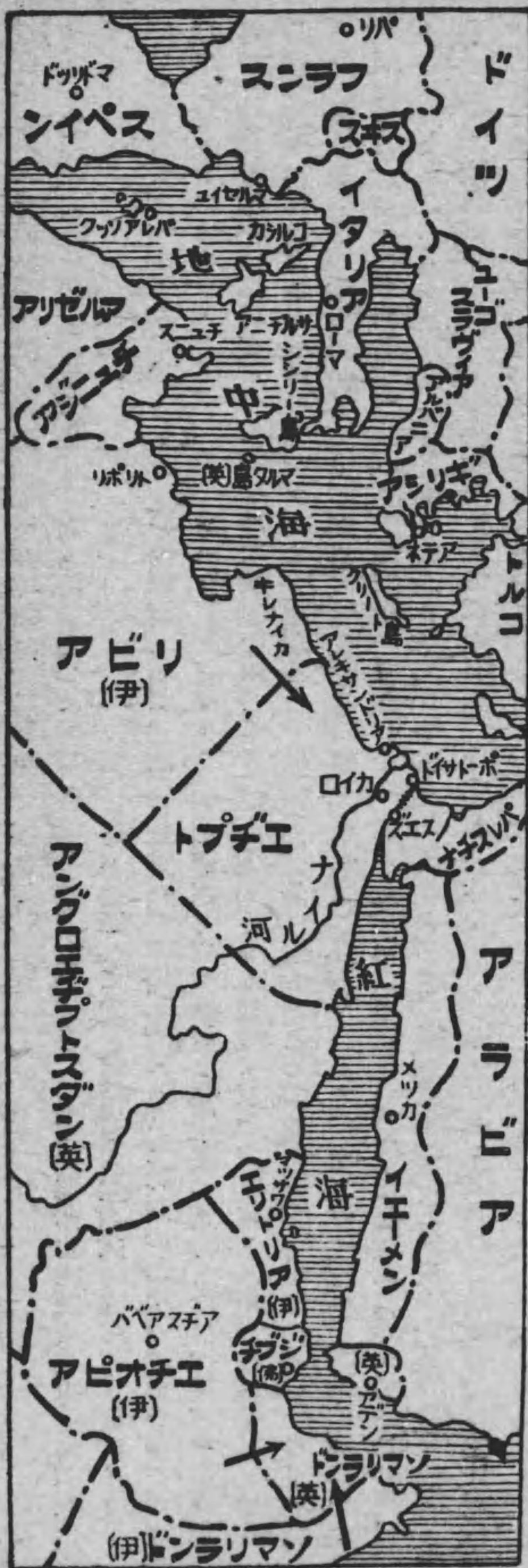
(参考)

イタリアの地中海作戦に就て

(本篇は阿部海軍中佐の某所に於ける講演筆記に  
して有益なる資料と認め其の一部を茲に抄録す)

(上略)地圖を一瞥すれば明かである通り、歐・亞・阿・  
三大陸に圍まれて大湖水の如き地中海上(廣袤約三百萬平  
方キロ、北海の六倍)、茲に、その周辺の島嶼・海岸には、  
各國の作戦根據地が點綴し、これ等を結ぶ線のもつ意義が

自ら各國の要求する制海の範圍を示してゐる、  
即ちイギリスは、ジブラルター・マルタ・アレキサンド  
リア・ポートサイド・スエズの要衝を連結する東西二千海  
里の所謂「帝國通路」を有し、更に東部地中海にキプロス島





並びにバレスチナのハイファの海軍根據地をもつてゐるので、昔ながらに地中海の制海權を全面的に掌握しようとする。

フランスも亦マルセイユ、ツローンを扇の要として、對岸アルゼリアのオラン・アルジェー・チュニスのビゼルタ等の作戦根據地を結ぶ線をもつて圍まれた海域を中心とする西部地中海の制海權を確保して、アフリカ植民地との海上交通路を保全し、物資の輸入路・土民軍（前大戦當時佛本國に輸送せる土民軍約七十五萬人）の輸送路を確保せんことを期する。なほフランスはコルシカ島にアヤツチオ遠くシリアの海岸にベールートの根據地をもつてゐる。

これに對して地中海の波に洗はるゝ半島國イタリアは、純然たる地中海國家として、地中海はその生命線であると主張して、敢然英佛の制海權に挑戦しつゝあるのである。而してイタリアの地中海における地理的戰略的態勢は、相當有利であるといへるのである。即ちイタリア半島の西岸北方にラ・スペチア、南方にナポリ東岸南端近くにタラントの軍港があつて、鎮守府が置かれてゐる。

アドリア海の奥には、獨立要港部ヴェニスがある。前記三鎮守府の下に、要港としてカステラマレ・ラ・スタビア、マダレナ、カリアリ、メツシナ、プリンデイシ、ポーラの諸港がある。對岸植民地のリビアにはエヂプトに接してトブルック、中部にベンガジ、佛領チュニスに近くトリポリ

がある。

一九三七年三月、リビア海岸の東西兩地方を結ぶ軍用道路が竣工して、ム首相自ら開通式に臨んだ。更にイタリアはシシリ島とチュニスとの間にあるパンテラリアの小島に築城して、空軍と潜水艦の基地となし、英のモルタ軍港の價値を全く喪失せしめ、イギリスの「帝國通路」はここに完全に遮断される運命となつた。このパンテラリア島はシシリ島とチュニスのボン岬との間の幅約百海里の海峡を、略五十海里宛に二分する位置にあるのである。

又イタリアは東部地中海にドデカネーズ諸島を領有し、その中ロードス島とレロス島には、有力なる海空軍根據地がある。

これ等の諸島は、地理的に地中海作戦上、極めて重要な地位を占めてゐる。即ち英のキプロス島に對峙し、且つ黒海から地中海への出口を扼してゐる。

イギリスにとつて、その「帝國通路」の遮断といふことは單に英本國と印度・濠洲・極東方面との最捷路を切断されるといふこと許りでなく、軍事的にも重大である。バレスチナのハイファ港には、イラク石油會社のキルクック油田から送油管が導かれてつて、キプロス島の海空軍はこれを防衛してゐるのであるが、その石油が地中海經由で運ばないことになれば、敵側に利用せられる恐れがあるから、イギリスの蒙る打撃は極めて大きいといはなければ

ばならない。

喜望峰迂回航路をとれば、バルシア灣はボンベイから八〇%、マレイ乃至アフリカ東岸からは五〇%、濠洲からは一〇%の航路延長となるのである。

しかしイタリア側にも致命的弱點がある。それは何といつても、地中海の東西の關門をイギリスに握られてゐることである。イタリアはその空軍と潜水艦を以て、英佛艦隊に打撃を與へ、イギリスの「帝國通路」を遮断し、フランスのアフリカとの海上交通路を脅すことが可能であるがイタリア自身も、その海上よりする物資補給の路を断たれ、所謂地中海の囚人たるの苦痛を満喫させられることになるのである。

だが西の關門ジブラルターの背後の地が、獨伊陣營と見做されてゐることは、注目に値するところであり、現にスペイン國民の一部が「ジブラルターを還せ」と絶叫しつゝある現状であつてイタリアの參戰に引續き、スペインの去就が問題となる譯である。直にスペインの參戰を見ないまでも、スペインが防備を強化し、ジブラルターの附近や對岸のモロッコに堅壘を築きでもしたら過去二百卅有餘年、難攻不落を誇つたジブラルター要塞は、俄然その價値を激減するに至るであらう。（ジブラルター海峡の幅員はユーロ一岬と西領モロッコのセウタの間が約十三海里、最狭部は僅かに約六海里に過ぎない。）なほスペインの去就に關聯

して注目に値するのは、フランスの面前西部地中海に横たはる西領バレアリック諸島のマホルカ・ミノルカ島の戰略的價値であつて、マホルカ島はスペイン内亂勃發以來、イタリア義勇軍が占據して海空軍の根據地化したところである。これに對して、果して英佛側が先手を打つか、イタリアが機先を制するか、豫断を許さないか、或は既に伊・西の間に諒解が成立してゐるのかも知れない。

地中海の戰略的態勢は概ね右の通りであるが、更にそこに、トルコとギリシャの兩國が現れて英佛陣營に参加する場合が考へられるので、地中海における戰略的態勢は、いよいよ複雑なるものとなるであらう。

イタリア軍は、參戰宣言と同時に行動を開始、南佛リヴェラに進軍し、チュニス・コルシカ・マルタ等にも攻撃を開始した旨傳へられたが、イタリアの作戦は概ね地中海の範圍を出でないであらうと思ふ。而して現在のイタリアの國力からみて、餘り手を擡げ過ぎないことを得策とすることは、イタリア自らの熟知する所であらう。これ今日までイタリアが參戰の時機を引延したと云ふよりは、その時機を掴み得なかつた所以でもあらうと思はれる。イタリアが參戰時機に對する條件として言明した「客觀的情勢並に自主的情勢」とは、イタリア參戰の時機は獨伊協同作戦の成果をして、今次戰爭の方向を決定的ならしむると同時に、イタリア自身の戰爭目的年來の宿望を達成するに役立つや



うな、千載一遇の好機に投ずるにありと云ふことを意味してゐたものと思はれる。  
ところがイタリアの狙ふところは、餘りにも廣く且つ大きい。即ち先づチュニス・コルシカ・ジプチである、ダルマチヤであり、更にスエズであり、ジブラルターである。究極において年來の宿望である地中海の制覇を目指すものであつて、即ち「ローマの海」を再現せんとするものである。

だが地中海における戦略態勢は、既述の通りであつて、イタリアが多方面におけるその要望を一舉に成就しようとするには無理があり、不得策である。必ずや作戦の範圍を限定し、攻撃目標の順序を定めて行動を開始するであらうと考へられる。而してイタリアのエチオピア領有に依つて、自ら先づ地中海東部の制覇に重點を置かざるを得ないことと考へられる。

これがため参戦と同時に、先づモルタ軍港を急襲してこれを占領し、一方チュニス・シリ・島の狭水道に依つて地中海を東西に二分し、英佛艦隊を個々に分撃するの策に出づるであらう。この事は、パンテラリヤ島を中心とするイタリアの優勢なる空軍と潜水艦、並に快速水雷艇の配備に依つて可能であるといへる。現にイタリア艦隊(約六十萬噸)は、その主力をタラトソ軍港に置き、一部をドデカネス諸島方面に配備せるものの如くである。

佛 國

大戦前の佛國は主として歐洲に於ける國防の爲伊太利及獨逸に對抗するに足る海軍力の充實に努力して居る關係上、東洋に於ける其の領土たる佛領印度支那の防禦及支那方面に於ける權益の擁護の如きは自國單獨に、有力なる海軍力を以て積極的に防禦する意志も實力も無いものと思はれ、専ら英米の餘威を藉り間接的防衛を期して居り其の東洋に於ける戦力は決して大なるも

のと云ふ事は出来ない、而して今次戦亂に於ても常に英國に追隨して我國に反對的態度を保持しつゝあつたのであるが、六月に到り俄然形勢一變、對獨降伏と共に其の有力なる海軍も一時其の去就を注視せられ、英國の甘言によつて其儘英國側に脱出参加するのではなにかと思はれたが、結局大部分は本國政府に復歸することとなり、唯一部の海軍將兵及び艦艇が英國側に走り、又本國復活を妨害せんとする英國海軍との間に七月三日アルゼリアのオラン

港に於て、思ひもよらぬ英佛海戦が行はれ、主力艦ブルターニュ(二萬五千噸)、ダンケルク(三萬六千噸)プロヴァズ(同上)驅逐艦一隻は撃沈せられ、唯ストラスブル(二萬六千噸)驅逐艦五隻は危地を脱しツローンに復歸した。英國の此の強行手段は佛艦隊が獨側に使用せらるゝを恐れて決行したものでたしかに成功ではあるが、他の殘存艦艇の其後の行動は不明であつて、リシュリユー其他相當多數の艦船は撃沈又は大破して居る現狀である。

昭和十五年(一九四〇年)一月に於ける佛國海軍現有兵力並に建造中及び未起工の艦船(潜水艦以上)

艦種	現 有		建 造 中		未 起 工	
	數	噸	數	噸	數	噸
主力艦	七	一六千噸	四	一四千噸		
航空母艦	一	二二	二	三六		
甲級巡洋艦	七	一五〇	一	三四		
乙級巡洋艦	一八	八〇	三	一七		
驅逐艦	七八	一三三	三	一七		

これに對して地中海方面における英艦隊約四十萬噸、佛艦隊約五十萬噸、計約九十萬噸、といはれてゐるが、其中の三分の二、即ち六〇萬噸(大部分英艦隊)は東地中海のアキサンドリア或はバレスチナ・シリヤ・キプロス方面にあるものゝ如くである。そして残りの三分の一、約卅萬噸が西地中海ジブラルター方面にあると傳へられる。なほ佛艦隊の主力はツローンに集結し、一部は對岸アルゼリアのアルヂエーに集結せるものゝ如くであるが、固より移動兵力たる艦隊の集散離合は臨機應變、絶えず行はれつゝあるもので、右は最近の或る時機における態勢を示したものに過ぎないのである。現に英艦隊の一部を、地中海方面に増援中とも傳へられてゐるが、六月十日現在、地中海における兩軍艦隊勢力を一括して示せば次の通りである。

英 佛 側	戰艦	空母	巡 艦	驅 艦	潛 艦
英 佛 側	八	三	一五	三六	四一
伊 側	六	〇	一九	一三〇	一〇五

巡洋艦以下奇襲部隊は、伊側が斷然優勢である。而して空母はイタリアにとつては、必ずしも地理的に觀て必要とは考へられてゐないのである。

イオニア沖伊、英海軍参加主力艦名  
伊、コンデ・イカブル號外二隻各二三、千噸一二、六吋砲十門、英、バーラム級三隻各三一、千噸一五吋砲八門



獨	伊	佛	米	英	日	國名
ハ	ア	フ			最	艦
ル	リ	ユ			上	名
メ	ガ	リア				基準排水量
ス	ス	アス				軸馬力
						速力
						砲兵
						雷
						搭載機

列國最新乙級巡洋艦一覽

列國最新甲級巡洋艦

獨	伊	佛	米	英	日	國名
ヒ	ボル	アル				艦
ツ	ルザ	ゼリ				名
バ	ア	リ				基準排水量
ア	ノ	ノ				軸馬力
						速力
						砲
						雷

附 表

獨	伊	佛	米	英	國名
不	リ	スリ	ノ	キング	艦
シャル	ツ	トシ	ノ	グ・ジ	名
ンホル	ト	ラユ	ース	ョー	基準排水量
ルス	トリ	スリ	スカ	ージ	軸馬力
スト	リオ	ブル	ロラ	ジ五	速力
明	オ	ユグ	イナ	世	主砲
					副砲

列國最新主力艦

合	計
一八三	七九
五四四	七五
四一	一九
二四〇	二三



國名	艦名	基準排水量	速力	兵	雷装
日	峯雲	一、五〇〇	三四節	六二	八門
英	アルフリヂ	一、八五〇	三六・五	八一	八
米	ポータ	一、八五〇	三六・三八	八一	八
佛	モガトル	二、八八四	三八	八一	一〇

大型駆逐艦比較表

國名	艦名	基準排水量	速力	兵	雷装
日	能登 瑞代	一四、〇五〇	一五・〇〇	特務艦ヲ改装ス	
英	アルバトロス	四、八〇〇	二〇・〇〇	九	
米	ライオン	九、五五三	一五・〇〇	二	
佛	コンマダン・テスト	一一、四七〇	一四・五〇	五	射出機四基設備
伊	ギセツベミヤグリ	一一、五〇〇	一五・〇〇	六	船艙ニ射出機各一基

國名	艦名	排水量	速力	搭載機數	記事	事
英	イグ	二二、六〇〇	二四・〇	二	五九	二
カ	カローチ	二二、五〇〇	三〇・五	一	一六	五
グ	グロリア	二二、五〇〇	三〇・五	一	一六	五
ア	アークローヤル	二二、〇〇〇	二七・〇	一	一六	七
米	ラングレイ	一一、五〇〇	一五・〇	四	一三	三
レ	レキシントン	三三、〇〇〇	三三・五	一	二〇	九
サ	サラトガ	三三、〇〇〇	三三・五	一	二〇	九
レ	レーンジャ	一四、五〇〇	二九・五	八	一一	七
ヨ	ヨークタウン	二〇、〇〇〇	三四	一	一二	一
エ	エンタープライズ	二〇、〇〇〇	三四	一	一二	一
ワ	ワスプ	一四、七〇〇	三四	一	一二	一
佛	ビエルン	二二、一四六	二一・五	六	八一	四
獨	グラフツエツペリン	一九、二五〇	三〇	一	七一	〇

水上機母艦比較一覽



列國軍備概観

艦種	巡洋艦		航空母艦	主力艦	艦種	國別
	級 B	級 A				
驅逐艦	(隻) 111 (噸) 1,010	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 10,000	(隻) 9 (噸) 22,000	日	本米
	(隻) 111 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 10,000	(隻) 11 (噸) 10,000	英	國
	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 10,000	(隻) 11 (噸) 10,000	佛	國
	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 10,000	(隻) 11 (噸) 10,000	伊	國
	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 10,000	(隻) 11 (噸) 10,000	獨	國
	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 10,000	(隻) 11 (噸) 10,000	「ソ」	國
	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 1,000	(隻) 11 (噸) 10,000	(隻) 11 (噸) 10,000	支那	

列國海軍既成艦艇概要 (基準排水量)

昭和十四年九月三十日調

獨	伊
ユ	ペフ
1	オ
1	ル
1	ラ
1	カ
250	591
250	591
1	1,167
1	787
130	178
70	85
70	85
1	214
3	68

列國軍備概観

國名	艦名	水上排水量	水中排水量	水上速力	水中速力	兵装	雷装
伊	ヴィ・アルフィエリ	1,498		39	41	210	6
日	伊伊七三七	1,495		27		210	6
英	セバーン	670	960	15	10	118	6
米	ポサルラモクン	1,350		20		117	6
佛	アゴスタ	1,379	2,060	18	10	113	450
伊	ビエトロ・カルビ	675	855	14	8.5	110	6

列國最新中及小型潜水艦

國名	艦名	水上排水量	水中排水量	水上速力	水中速力	兵装	雷装
日	呂三三	700		16		118	8
英	スピアフィッシュ	670	960	13.75	10	117	6
佛	ミナローブ	597	800	14	9	117	27







財 團 法 人

# 軍 人 會 館

# 宴

# 會

電話九段二〇〇〇番 自四一〇一  
至四一〇七番

(詳細は本文四七二頁参照)

## 兵 器、装 備

### 目 次

#### 緒 言

- 一、近代的裝備の内容と其趨勢
- 二、列國陸軍兵器概観
  - (1) 携帶兵器、歩兵裝備
  - (2) 對戰車砲、附、近迫戰兵器、防護器材
  - (3) 對空兵器、防空器材、投下爆彈其他
  - (4) 火炮及砲兵裝備
- 三、空軍部隊、降下部隊(落下傘)
- 四、軍の機械化及機械化部隊
  - (1) 軍機械化の理念と趨勢
  - (2) 帝國國軍機械化の回顧及將來
- 五、理學兵器、電氣兵器
- 六、海軍現代兵器

#### 緒 言

現代戰の特色は平戰兩時の明確なる區別を缺き、戰爭狀態は既に平時より開始せられ、經濟、外交、思想等各方面に亘り、廣汎にして深刻且執拗なる抗爭葛藤と化し、科學の異常なる進歩發達と國家相互間の複雑なる依存關係とは相俟つて戰爭の形態は多々益々變化の一途を辿りつゝある。

而して直接對手と交戦する戰鬪形式に於ても、前大戰以前の地面、水上の平面戰は、上空、地中、水面下の立體戰となり、時間的にも延長されて、宣戰の布告なしにいづしか交戦狀態に入り、又其の終末も明らかでなく、従つて参加人員は増大し科學の發達は使用兵器をして複雑多岐となし來つた。

斯くの如くにして近世科學の發達に伴ひ、列國軍は何れも文明の利器を活用して勝を制する工夫を凝らすに至つたのであるが、就中前大戰に於ては參加列國各々其の國運を賭して戦つた關



係上、必然的に裝備の長足なる進歩を齎した。即ち戦費として投せられた莫大な國費に依つて新戦用資材、特に新兵器の考案、研究製造に全力を盡くされた結果、航空機、戦車、化學戰に伴ふ各種資材や長射程砲等の現出を見及在來の火炮、銃器、通信器材其の他有ゆる戦用資材が劃期的進歩發達を遂げたのである。此の意味に於て「戰爭は文化の母」と云ふ語は、一例を擧ぐれば「前大戰なくして果して今日の航空機の發達を見たるや」との反問に對しては少くとも概念的には肯定さるべきである。

遮莫此の間平時状態に在つた國軍の整備が、自然列國に取殘さるる結果となつたことは亦止むを得なかつた所で、我日本も其の一國と見られぬでもなかつた。加ふるに列國陸軍は戦後益々競ふて新兵器の研究と裝備の改善とに努力せる結果其の編制裝備は更に改善せられ、劣等裝備の軍隊は戦場の優勝者たること能はざるべきは必ずしも

今次大戰を俟たざるも、列強軍部はもとより民間識者の夙に明見洞察せる處であつた。

偶々先年スペイン内亂の勃發するや伊、獨、佛其の他の列強は、何れも其の最新鋭武器を以て之に参加し、此の内亂は恰も列國新兵器の試験場たるの觀を示し、列強軍部は愈々以て其裝備の優良を以てせざれば到底戦場の勝者たるを得ざるを痛感したのであつたが、昨年今次大戰の起るや、一層裝備の重要な事を実證せらるるに至つたことは今更喋々を要せざるところである。

皇國に於ても當局は夙に茲に着目して夫々裝備の充實を計り。滿洲事變に續く熱河作戦又は昭和十二年以來の支那事變に於ては、相當優良裝備を以て支那軍を破つたことは已に周知の事であるが、獨逸開戦に先立つ直前、昨夏滿蒙國境に於て演ぜられたノモンハン事件に於て、今更乍ら最新科學に基礎を置く優良裝備の優性を確認せられ、

三、航空及防空裝備(各其項目を見よ)

化學戰裝備とは、毒瓦斯、燒夷彈、發煙劑等の化學的兵器を以て軍隊に攻防の威力を増加せんとする裝備を謂ふ。

毒瓦斯 毒瓦斯の兵器的使用は西曆一八九九年の海牙條約に依つて夙に禁止せられてゐるのであるが、世界大戰間、對手國が使用せりとの口實の下に參戰各國悉く之を使用したのみならず、航空機、戦車と共に戦場に缺くべからざる武器として認められたるは周知の事實である。

戦後一九二一—二三年の華府會議に於て日英米佛伊の五大國は更に右海牙條約の尊重を協定せしも、實狀を見ると、米國は會議の主宰者たりしにも拘らず、毒瓦斯の使用は他の戰闘手段より遙かに人道的にして危険少く且經濟的なりと稱し、爾來其の施設を完備して大々的研究に従事し、英國も亦華府會議の協定は五箇國間に限られ他の國

當時の畑陸軍大臣が卒直に其の真相を説明し所見を披瀝せるより官民間に於ても機械化熱、優良裝備の緊要を痛感して、之に關する研究又は實行團體が續々として組織せられ、軍官民一致して此の企圖に邁進しつゝある實狀である。

以下順序として前大戰以後の裝備即ち兵器、彈藥、器具、材料、航空機、海軍武器等の各般に互り沿革的に叙述し、特に機械化については詳細なる一項を割き、又斷片的乍ら今次歐洲戰に現出せる所謂新兵器につき略述を試みるであらう。

一、近代的裝備の内 容と其の趨勢

近代の裝備の内容は大體、火力裝備、機械化裝備、航空及防空裝備、化學戰裝備の四種に分類することが出来る。

一、火力裝備 火力裝備とは、輕、重機關銃、各種

の參戰の場合には效果なきを以て敵の毒瓦斯攻撃に對し國家及國民を防禦するは爲政者の責任なりとなし、尙英、米就中米國に在りては催淚瓦斯は人を殺害することなく警務用として極めて重寶のものなるが故に、之をしも戰用に供することを禁止するは却つて非人道の譏を免れずと軍縮會議に於て公言し、一切の瓦斯使用の禁制に關しては留保せんとする意向を有し、國際軍縮會議専門委員の報告も亦化學戰禁止は實際問題として著しく困難にして寧ろ不可能なることを指摘してゐる。其の他佛・獨・伊は固より波蘭・西班牙・チエツコスロバキヤ・羅馬尼等に至る迄之が研究及施設に努力しあるの現況であつて、各國の瓦斯使用に關する觀念は自ら窺はれる次第である。殊に、隣邦蘇聯邦が華府會議に於ける協定に参加しあらず、最近甚大の努力を以て化學戰準備に關する諸般の施設を整備し、化學戰に任ずる専門部隊を有するのみならず、一般部隊も小單位部隊に

歩兵砲、各種機關砲、擲彈筒、火炮特に重砲等、各種の威力大なる兵器を増加して、小は分、小隊より、大は師團、軍團に至る迄、夫々火力を最大に發揮し得る如くするを目的とするものであつて、列強は前大戰に於て多大の犠牲を拂つて之が充實に努力した結果何れも優秀なる裝備を有し、而も戦後引續いて之が充實改善に努力してゐる。

二、機械化裝備

大戰間火力裝備の發達並に陣地の鞏強化に伴ひ各國は裝甲に依る火力の損害輕減と内燃機關の利用に依る軍の機動性増大との二つの目的から、機械化裝備に著意するに至つた。即ち機械化裝備は、戦車、裝甲自動車、自動車、砲兵牽引自動車等を在來の部隊に配屬することに依つて、耐火力性と機動性を増加し、更に進んで右兩目的を具備せる裝甲自動車兵器及特殊自動車のみを以て所謂機械化兵團を創設し以て近代戰闘の要求に應ぜんとするものである。本項に就ては後に詳述する。



至るまで化學戰部隊を附屬するの徹底振を示しあるは、吾人の大いに注意を要する所である。

細菌戰 近來、細菌を以て敵國を攻撃するの策案が論議されるやうになつた。固より條約に於て禁止されてゐる處であり、又人道より黙視し難い所であるが、世界大戰の末期に於て既に一部使用せられたるやの形跡もあり又近來隣邦中に特に此の方面の研究準備に力を用ひある國もあるから、吾人は之に對しても無防禦であつてはならず十分なる研究準備を整へて萬一の日に悔を貽さぬの用意が必要である。

各國化學戰準備の施設 各國は、叙上の如く毒瓦斯が戰時に於て必ずや用ひらるべきことを豫期して萬端の準備を整へてゐるのであつて、其の性質上表面的には多く喧傳せられぬが、實際の研究は眞に眞剣深刻なるものがあるが其の施設は各國共、基礎の研究を政府に於て行ふの一方、他面に於て毒瓦斯の平時用途を獎勵助長し、盛んに化

學工業の發達を促進し、以て有事の日に有利に轉換利用することを企圖してゐるのであつて、化學戰に對する國民一般の常識を普及せしむるの努力と其の關心とは、未だ毒瓦斯の洗禮を受けざる我が國民の想像も及ばざる所である。

### 二、列國陸軍兵器概観

火力裝備の主體が兵器であることは論を俟たないが、機械化裝備に於ても航空、防空裝備に於ても結局之等は大小火炮、各種機關銃、小銃等即ち敵の人馬を直接殺傷し對手器材の破壊を目的とする兵器、兵器を有利に使用し得る爲の補助裝備と見られぬことはない、仍て以下各種兵器に關し述べるの

- 1 科學技術を最高度に兵器に應用して陸軍兵器の新式化に努め、歐洲大戰時代の所謂大戰型舊式兵器を逐次新式兵器と更新すること。
- 2 戰法の進歩改變に伴ひ、火力兵器即ち自動兵器たる各種機關銃及各種機砲を増加し、且新式化すること、
- 3 機械化兵器殊に装甲兵器たる戰車装甲車等を増加すること。
- 4 飛行機を極度に新鋭ならしむると共に其の量を増加し、空中威力を強大ならしめること。
- 5 對空兵器を充實し防空設備を完備しつゝあること。
- 6 指揮、連絡、情報蒐集、通信等に必要なる各種兵器を充實すること。
- 7 化學戰裝備を充實すること。
- 8 兵器整備に當りては之と併行して戰時に於ける補給の方法を講ずること。
- 9 戰團は勿論其の他に必要なる各種

器材を準備せること。

等で、其の範圍は直接戰團に必要な兵器から行軍、宿營は勿論、國內防備自衛に必要なものに至る迄實に多種多様である。而して師團の編組の如きも從來の師團の外、機械化師團、快速師團、空中投下部隊等が編成されてゐる。

#### (1) 携帶兵器、歩兵裝備

小銃 兵器の進歩、火力の増大した今日に於ても小銃が主要な兵器であることに變りはない。それは戰團に決を與へるものは歩兵であり、歩兵戰團に決を與へるものは突撃であり、小銃は重要な突撃兵器であるからである。小銃は既に完成の域に達してゐるので、近時之に劃期的改良を加へたもののあるを聞かない。唯歩兵裝備の増加に依つて小銃の遠距離射撃は餘り必要がなくなつて來たこと、制式統一、補給容易といふ點から、歩兵銃を騎銃程度に短縮し、同時に重量の輕減、操用の利便を得ようとしてゐる所がある。獨・伊國がさうである。其の口径

は獨り六・五耗を固執してゐた伊國も最近遂に多くの國に倣つて七・三五耗迄増大した模様である。

#### 狙撃銃 野戰築城の發達は戰場に際間的に現出する目標を捉へて素速く狙撃しなければならなくなつて來た。其の爲に、精密な照準器を具へた精良な小銃と、優秀な狙撃射手とを必要とする。従つて斬新な狙撃銃を裝備し又は一般の小銃に狙撃眼鏡を附して照準を精密且容易ならしめることが今や各國共に漸次普及の傾向がある。

自動小銃 自動小銃を現在裝備してゐる國もあるが其中で米軍は輕機を有しないので、自動小銃によつて之に代へようとしてゐるのであつて、分隊は自動小銃を中心とした戰團群である。此の新裝備銃は半自動的に操作が出来る式で、高速發射性能が其の特長である。試射の成績は一分間に六十發を容易に發射し得たといふことである。自動小銃も一般に増加の傾向がある。

擲彈銃 之は擲彈筒に代るもので小

銃の銃口に筒を附し小銃の發射に依つて概ね擲彈筒程度の彈丸を擲射しようとするものである。蘇・佛軍は何れも一銃を戰團群に有し、英・米軍も亦之を裝備してゐる。蘇軍が制式として採用してゐるジャコノフ式は小銃實包發射の際の腔壓を利用して手榴彈とは全然別個の銃用榴彈を擲射するもので、其の最大射程は普通約六百米であるが補裝薬を用ひるときは約八百米に達せしめることが出来る。英軍のものは之と異なり空包を利用するのであつて、其の射程は約三百米である。

機關銃 近年列國新銳機關銃の特徴と認むべき點を述べれば、照準眼鏡を採用し射撃精度の増進を圖り、銃口焰(發射の際の銃口に於ける火花)を除去して敵に發見せられぬ様に消焰器(簡單な筒を銃口に裝着して其の目的を達す)を附し、對空射撃を便ならしめる爲に補助具を設け、装甲板を貫徹する力を有する徹甲彈、彈道を示す爲彈丸飛行中光を發しつゝ進む曳光彈等の特



殊實包を採用してゐる。尙敵の偵知を避ける爲に消音器の工夫をしてゐる様である。

**輕機關銃** 歩兵の火力戰鬥に於て小銃は其の主役を重、輕機關銃又は狙撃銃、自動小銃に譲つて、補助的意義を有するに過ぎなくなる趨向が見へる。

米軍を除く列強の戰鬥群は概して一銃の輕機を中心として編成せられ、英軍小銃大隊の如きは五十二銃の輕機を擁し實質に於て輕機大隊になつてゐる輕機は所要に應じて三脚架を用ひ重機の如く射撃し或は高射の出来る様にしたものが多いが、獨軍は更に徹底して重、輕機關銃本體の制式を共通にし、唯銃架のみを異ならしめてゐる。之は整備補給と教育訓練の容易を現つたものと思はれる。元來輕機は重量に制限を受ける關係上放熱装置が不十分で随つて連續多數の射撃を發射することは困難であるが、此の缺點を補ふ爲戰鬥間加熱された銃身を簡單に交換する様にしたものが少くない。

**重機關銃** 世界大戰以來歩兵の重機

裝備數の増加は實に目覺しいもので從來概して歩兵大隊以上の兵器と考へられてゐた重機も今は歩兵中隊に迄裝備する所もあるに至つた。即ち獨・蘇軍は共に二銃の中隊重機を有し、歩兵大隊を通じて獨軍は十四銃、佛軍は十六銃、蘇軍は十八銃に達してゐる。

**機關短銃** 之は機關銃と異なり、拳銃實包を使用して隨意に單發及連發を爲し得るもので重量は四呎内外に過ぎぬ。携行並に取扱が容易な爲自衛用、近接戰鬥用等として各國で研究せられ、現に支那軍でも相當使用してゐるが、目下之を制式として裝備してゐる一、二小國もある。

**高射機關銃** 銃身は重機銃身、時としては輕機銃身を用ひ、高射照準具を附し、威力を増大する爲銃身を二乃至四箇並列したのもも米蘇兩軍に使用せられてゐる。

**固定式 飛行機に固定的に裝備して使用するものである。**

**旋回式** 飛行機と同乗席に裝備し、廣き射界を有し、又發射速度を増加する爲二銃身としたものもある。

**車載用機關銃** 重、輕機關銃を戰車、裝甲自動車等機械化兵器に裝備する爲狹隘なる所に於ても操用を便ならしめたものである。

**手榴彈** 手榴彈が近接戰鬥に於て重要な役割を演ずることは今次事變に於ても今更の如く認められた所である。各國の採用してゐる手榴彈は多種多様であるが、多くは攻撃用としては、比較的輕くて炸藥の威力を主としたものを用ひ、防禦用としては、破片威力をも大にし従つて重量も大なるものを使用してゐる。即ち其の重量は大體に於て攻撃用としては二百五十瓦位から五百瓦位迄で、防禦用のものには八百瓦以上に達するものもある。蘇軍現用の一九一四—一九三〇年型及一九三三年型手榴彈は何れも炸裂後破片となるべき外筒を裝脱することに依つて任意に攻撃用防禦用、何れにも轉換出来る様

になつてゐる。尙特殊手榴彈として、燒夷、發煙、瓦斯等各種のものが用ひられてゐる。

**歩兵砲** 近時の偉大な發射速度を有する自動火器は、短時間猛威を逞しうすることに依つて屢々歩兵戰鬥の運命を決する。随つて不意に現出する敵の自動火器を機を失せず處理することは歩兵の勝利を期する爲最も重要な事柄であつて歩兵自らが之を遂行する力を持つことが必要である。茲に乃ち歩兵砲が生れた。其種類は平射、曲射及平射曲射兩用又は二砲身等種々ある。

**連發砲** 平射の火器に對し地物や工事に據つて掩護されてゐる敵を制壓或は撲滅する爲に用ひられ、歩兵榴彈砲とも稱すべき此の火砲は今では有翼彈を用ひるものや、普通の蛋形彈を用ひるもの、さては口径よりも大きな有柄式彈丸を前裝するものから、立派に駐退復座機迄備つて一人前の火砲らしい形をしたもの迄種々の型式のものが出来てゐる。現在最も多く用ひられてゐるものは「ストークブラン」と稱する滑腔砲身、有翼彈式のものである。元來有翼彈は弱い速度で如何に彎曲した彈道で射撃しても飛行中轉倒しない利益を持つてゐるのである。一般に構造が簡單で、重量が少く輕快に第一線歩兵に追隨することが出来、大さの割合に威力大なる彈丸を發射して敵を震駭せしめ得るのみならず製造容易、價格低廉で大量整備に適するから各國共種々のものを裝備してゐる。即ち口径八厘級のものは聯、大隊砲として蘇、英は大隊に二門、獨軍は六門（有翼彈射程五百）佛軍は聯、大隊に各二門、口径六厘のもの歩兵中隊に一門を裝備してゐる。其の他英、獨軍は口径五厘級のものを小銃小隊に一門宛持つてゐるが、之は寧ろ擲彈筒と稱すべきものである。

支那軍が此砲を盛んに使用してゐるのは良く知られて居るが、其種類は口径四十一、七十五、八十三、及百五十耗の四種、射程は千六百乃至三千米である。

**歩兵平射砲** 敵の自動火器を狙ひ撃つて速かに之を撲滅する爲に良好な精度と、大なる初速を持つてゐる。對戰車射撃の任務を兼ねるのが通常である蘇軍は四十五耗の大隊砲を二門と聯隊砲として七十六耗砲六門を裝備し、佛軍は三十七耗の大隊砲一門を有してゐる。尙各國共對戰車任務を主として大砲を有してゐるが之は敵の自動火器を撲滅する爲にも用ひ得るであらう。

**歩兵榴彈砲** 獨軍歩兵聯隊は口径七・五厘の輕歩兵砲と口径十五厘の重歩兵砲二門を擁して其の威力を誇つてゐる。何れも其の細部の性能は之を明かにしないが、後者は其の形狀からして凡そ歩兵砲と云ふ觀念から縁遠いもので、歩兵聯隊の砲兵と言つた感じがする。總じて獨軍歩兵の火砲裝備が他に比して一段と強力なことは新軍再建の軒昂なる意氣の現れであらう。

(2) **對戰車砲、附、近迫戰兵器、防禦器材**  
近年戰車、裝甲車の進歩發達に伴ひ



之を撲滅すべき對戰車砲の必要は愈々切なるものがある。戰車の速度が増大するにつれ、之に對抗して隨時隨所に其の奇襲を破擯する爲には、成るべく輕易で、常に歩兵と行動を共にし得るものが必要であるが、一方今日の進歩した裝甲に依つて十分防禦せられた戰車を破壊する爲には侵徹威力の大なる火砲を以てしなければならない。此の運動性と威力とは火砲の構造上相反する要求であつて此等を如何に調和せしむるかは各國の齊しく苦心する所であらう。即ち運動性と發射速度とを主とするものは英、米軍の口径十三耗級佛軍の二十五耗加農等で威力を主とするものは獨、英、米の三十七耗砲、蘇軍の四十五耗砲及伊軍の四十七耗砲等である。

米軍三十七耗新對戰車砲は自動貨車を以てする高速度牽引に適するやうな砲架上に搭載されて居り、近距離に於ける臂力牽引可能にして砲車は防楯を裝してゐる。

蘇軍は四十五耗對戰車砲を聯隊に裝備してゐる。此の火砲は四十五耗と同じものであるが、大隊砲が繋駕編制であるのに對し對戰車砲は全部機械化して迅速な對戰車戰鬥の要求に適應せしめてゐる。尙佛軍は九門、獨軍は十二門の對戰車砲を聯隊に裝備してゐるのである。對戰車砲は目標が不意に現出し且其の移動が迅速であつて初速及發射速度の大を要する點に於て對空火器と似てゐる。従つて對戰車對空兼用砲は一時盛んに研究せられたものであるが、砲架、照準具、彈丸等共通ならざ

る點も亦多く現在兼用してゐるものは多くない。重量の多い對空對戰車兼用二十耗機關砲が軽量な同口径の自動砲に依つて代られようとしてゐるのも此の理由によるのである。

併し次に述べるよふに今次歐洲戰場では此兼用砲は可成り使はれてゐる。今次戰亂に於て戰車の多數が出現するや、對戰車砲は重要な火器となり其口径も増加し高射砲兼用のものは八厘程度に達したことは次表の通りである。白佛戰線に於て、獨軍の對戰車砲が佛軍戰車に對し猛威を振つたに對し佛軍のそれは獨軍の重戰車に對し無効であり、之が勝敗の大原因となつたことは對戰車砲の價値につき特筆大書するべきであらう。

列國對戰車砲諸元一覽表

名	稱	採用國	口徑 (耗)	射程 (米)	初速 (米秒)	彈量 (耗)	重量 (耗)	發射速度 (毎分)
---	---	-----	--------	--------	---------	--------	--------	-----------

對 戰 車 砲								
ブ	エルネスト・ブレダ		110	6,000	880	0.15	102	110
ホ	ツチキス		110	5,000	840	0.14	102	110
マ	ドセン	丁、諾、芬、エ	110	6,000	900	0.11-0.16	110	110
エ	リコン		110	5,000	830	0.11-0.14	110	110
ス	コツチ		110	4,000	800	0.15	110	110
ソ	ルール		110	—	880	0.15	110	110
ブ	ラウソン		110	—	885	0.118	—	110
ボ	フォース	瑞 典	110	—	900	0.15	1010	110-120
ホ	ツチキス	佛	110	8,500	900	0.12-0.15	110	120
ラ	イアット		110	4,000	840	0.110	—	110
ピ	ツカース	英	110	5,900	910	0.15	—	100
ボ	ツクス	和	110	—	665	0.148	111	115
ボ	フォース		110	11,000	610	0.16	—	—
ボ	フォース	佛	110	11,000	600	0.151	110	110











備考

方向射界は三六〇度のもの多く、高低は負一〇、正八〇が普通である。

附、近迫戦兵器、防護器材

白兵 最も原始的の兵器であつて、刀、剣、槍等の外、短刀、戦斧、鎗等迄も用ひられる。

拳銃 或種のものには精度益々良好となり短銃、又は自動小銃化しつつある。

手榴彈 既述のもの外、近時ガラス製のものまで出現した。

火砲放射器 近時戦車に装置せられ運動性と防護性を増加し、同時に其性能も進歩し、前大戦當時は其放射距離も近かつたものが、其後三四十米となり、今次大戦に獨軍の使用したものは七八十米に達すると傳へられる。

而して其の使用する燃料も従來の重油より一層高熱強力なものを用ゐて居ると云はれる。

鐵兜、防弾具、携帶防護 前大戦に

ポフォース五五口径M二二

智

八・五

一八、〇〇〇

七〇

一〇・二

六、〇〇〇

二〇

始めて使用せられた鐵兜は、其後各國に採用せられ、今日では殆んど各國軍之を使用して居る。又一部には防弾衣携帶防護等も用ゐられて居るが、未だ普通實用には遠いのである。

防霧面 防空之項に記してある。

(3) 對空兵器、防空器材、

投下爆彈其他

對空兵器 爆彈其他飛行機の發達に依つて對空兵器は不可缺の裝備となつた。獨軍は口径二〇耗、米軍は十三耗の高射機關砲を有してゐるが、一般の小銃及重、輕機關銃も所要に應じて對空兵器たり得るのである。獨軍は重機關銃の行軍姿勢を、二聯砲車上搭載として常に高射姿勢をとらせ、行軍間の對空防禦に當らせて居る。

近時飛行機の速力著しく増大し、又單なる偵察、爆彈投下、戦闘等の外、

地上掃射や急降下爆撃等をなすに至つたので、之に對する高射砲も前大戦時に比し異常なる發展をなし之に伴ふ觀測操作は更に躍進的に進歩した結果、其の命中率も大となつたことは次表により明かである。

發射彈數

一九一四年 一〇〇、〇〇〇  
 一九一六年 一〇、〇〇〇  
 一九一八年 三、〇〇〇  
 一九二九年 一〇〇  
 一九三六年 二〇  
 尙最近には五發にて一彈命中とも云

はれて居る。

次に列國高射兵器一覽表を掲げる。

各國高射兵器諸元一覽表

國 別	口徑(耗)	名 稱 (銃身長 (口徑))	初 速 (米・秒)	射 程 (米)		最大射角 (度)	發射速度(發・分)	
				垂 直	水 平		實	用 理 論
英 國	七・六	ル イ ス	七八〇				二五〇	五〇〇
米 國	七・六	ブ ロー ニ ン グ	七二三	二、五〇〇	三、〇〇〇			五〇〇
蘇 國	七・六二							
英 國	七・七	ブ レ ン					二五〇	五〇〇
日 本	七・七			二、〇〇〇				
瑞 典	七・九二		八三五				二五〇	
瑞 典	八	M 一 四 一 二 九	七七					七五〇
丁 抹	八	M 二 四 レ キ イ ル						
佛 國	八	T サ ン、エ チ エ ン						六〇〇
伊 國	八	M 三 五	七〇〇		五、二〇〇			六〇〇

二 大口徑機關銃 (一二・五—一四耗)



波蘭	伊國	英國	瑞典	舊智國	英國	伊國	佛國	佛國	米國	瑞西
五五	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	三七	三七	三七	三七	三四
	三九	五〇	六〇	六〇	四〇	六〇	六〇	四〇	五〇	
	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	
七六〇	六一〇	七二〇	六〇〇	九〇〇	六一〇	一〇〇〇	八〇〇	八二五	九一四	
五、一〇〇	四、二六七	四、〇〇〇	六、二〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇		五、〇〇〇	四、五〇〇	四、四〇〇	
九、三〇〇	七、一六〇	六、一〇〇	八、七〇〇	七、〇〇〇	五、七〇〇		七、五〇〇	六、五〇〇	六、七〇〇	
	九〇	九〇	九〇	八五	八〇	八五	八〇	八五	九〇	
	一〇〇	八〇	一二〇	一〇〇	八〇	一〇〇	一二〇	一二〇	一〇〇	
		二〇〇			二〇〇		二五〇	一八〇	一五〇	

四 小口徑高射砲 (三七—五五耗)

英國	佛國	瑞典	米國
二五·四	二五	二五	二〇·三
七〇	六〇	六〇	七〇
口徑	口徑	口徑	口徑
九一〇	九〇〇	九〇〇	八八五
四、八〇〇	五、〇〇〇	四、〇〇〇	
五、九〇〇	八、〇〇〇	五、四〇〇	
八〇	八〇	一二〇	
一〇〇	一〇〇	一八〇	一二〇
	一八〇	一八〇	

舊智國	丁抹	伊國	伊國	和蘭	瑞西	瑞西	佛國	伊國	瑞典	佛國	英國	米國	伊國	伊國
二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	一三·二	一三·二	一二·七	一二·七	一二·五	一二
MZ 三二〇	六 三〇	七 〇	六 三五	M 三五	七 〇	六 五〇	M 三五			C 七·A 六	九 〇	七 二	M 二一	九 六
口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑
八八〇	九〇〇	七五〇	八四〇	七〇〇	八七〇	八八〇	一〇〇〇	八五〇	八七〇	八〇〇	九一四	七六二	九四〇	九〇〇
三、八〇〇	三、五〇〇	三、〇〇〇	二、七〇〇		三、七〇〇	三、八〇〇		二、五〇〇		四、一〇〇	五、〇〇〇	四、五〇〇		
六、〇〇〇	六、〇〇〇	五、〇〇〇	五、五〇〇		三、〇〇〇	五、六〇〇		五、五〇〇		六、三〇〇	六、四〇〇	六、八〇〇		
八〇	八五	八五	八〇		九〇	八〇	八五	八〇		九〇	九〇	八〇		
	一二五	二〇〇			一二〇	一五〇	一五〇			二五〇	三〇〇	三〇〇		
二二〇	三〇〇	三〇〇	二〇〇		二八〇	三〇〇		二二〇		四五〇	四五〇	六〇〇		

三 超量機關銃 (二〇—二五·四耗)



防空器材 敵飛行機撃墜を目的とする防空火器と並行して其所在を偵知する観音機、防空燈等をはじめ情報を蒐

集し、適時適切なる防空指揮に任ずべき各種電氣的通信連絡装置等が必要とする外、防空氣球即ち阻害アドバルウ

ン、風迄も考案せられ現に阻害氣球はロンドンに防空に任じて居る。就中防火器即ち高射銃砲、高角砲等

佛	英	英	日	蘇	米	佛	瑞	瑞	伊	英	英	佛
國	國	國	本	國	國	國	典	典	國	國	國	國
九〇	九四	一〇二	一〇二	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇二	一〇二	一〇二	一〇二	一二七
五M二六〇	五M一六〇	四M二九〇	四M二九〇	四M二八五	六M二六〇	六M三四〇	四M二五〇	四M二五〇	四M二五〇	四M二五〇	四M二五〇	三M二八〇
口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑
八五〇	八二五	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九一四	九四五	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七三二	六〇〇
二、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、八〇〇	三、〇〇〇	二、〇〇〇	二、四〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
二五、〇〇〇	二六、五〇〇	二八、〇〇〇	二八、〇〇〇	二八、〇〇〇	二八、〇〇〇	二八、〇〇〇	二七、〇〇〇	二七、〇〇〇	二七、〇〇〇	二七、〇〇〇	二五、六〇〇	二八、二〇〇
八〇	八五	八五	八五	八五	八四	八五	八五	八〇	八〇	八五	八五	八〇
九	八	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
一〇	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一〇

五 大 口 徑 高 射 砲

白耳義	佛	英	英	伊	伊	瑞	諸	日	蘇	蘇	米	舊智	瑞	舊智
義	國	國	國	國	國	典	威	本	國	國	國	國	典	國
七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七五	七六	七六	七六	七六	八〇	八・三五
五M二七二	四M二九四	四M三一六	四M三一六	五M三三〇	四M三三〇	四M三三〇	六M二九六	四M三二九	四M三二九	五M三三〇	五M三三〇	五M三三〇	五M三三〇	五M三三〇
口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑	口徑
七〇〇	八五〇	八二〇	七五〇	九五〇	八〇〇	八五〇	八五〇	七二〇	八〇〇	六四〇	八五三	七五〇	七五〇	八〇〇
七、五〇〇	一〇、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	九、二〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	九、五〇〇	九、五〇〇	七、〇〇〇	九、〇〇〇	八、三〇〇	九、七〇〇	二〇、〇〇〇
九、八〇〇	二五、三〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二五、四〇〇	二五、二〇〇	二五、二〇〇	二六、八〇〇	二五、〇〇〇	二四、〇〇〇	二四、五〇〇	二三、〇〇〇	二四、〇〇〇	二五、〇〇〇	二八、〇〇〇
七〇	八五	九〇	九〇	九〇	九〇	八〇	八〇	八五	八五	七五	八〇	八五	八五	九〇
一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二	一二
二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二〇



の爲めに必要缺くべからざる観測機、照準算定具、測定機、聴音機と併用せらるゝ照空隊等は精度良好にして、全然自動的に操作し得る電氣精密機となり、著しく防空機關の發達を見るに到つたので、躍進的進歩を續けつゝある飛行機と雖も、最早在來の如く中距離以下の低空飛行及戦闘動作は著しく困難となりつゝある實狀である。

**投下物** 爆彈は飛行機より投下せらるゝ主要なるものであるが、投下爆彈と云つても其用途に従つて(イ)破片爆彈、(ロ)地雷爆彈、(ハ)破甲爆彈(ニ)焼夷彈、(ホ)瓦斯彈、(ヘ)細菌彈、(ト)發煙彈、(チ)照明彈等に分類せられ、あることは別項に於ても述べるところである。

(イ)は主として人馬殺傷用であり二十疋乃至三十疋の米國使用爆彈は八百個から千五百個と云ふ多數の破片を百乃至二百米の範圍に飛散せしめ、(ロ)の地雷爆彈は主として軍事構築物、建

物等の破壊に使用せられ、小は五十疋から二百、三百、五百疋、千疋等各種のものあり、次の破甲爆彈に到つては其の二百疋のものは優に五十六種のパトソ壁、十耗のクルツプ鋼を貫徹する威力を備へる。此の各種爆彈の威力の概念として今次歐洲戰に大威力を振つた獨軍急降下爆撃を想像するに、數千メートルの高空から數秒又は十數秒にて五百米位の低空まで急降下し來つた飛行機が時には一瞬にも及ぶ爆彈を目標に命中せしめた場合、果して如何なる状態を示すであらふか、之を思ふとマヂノ線の崩壊も決して奇蹟でなかつたことが了解せられるのである。

其他の各種爆彈については、今其の記述を略し、以下今次歐戰の新聞雜誌記事中より新種と思はれるものを參考として掲げる。但し其の實用價值に到つては尙研究實驗の餘地あることは勿論である。

**親子燒夷爆彈** 假名であつて、ソ聯ではモロトフのパン桶と呼ばれ、獨軍

も之と同様のものを使用したようである。

此の爆彈は尾端に風車があり、降下中空氣の抵抗による廻轉により作用を起し、一定距離に達すると、自動的に爆彈體が解體して多數の小爆彈を散布する仕掛である、而してソ聯のものは比較的的低空に於て、獨軍のものは高空に於て炸烈し廣範圍に散布せられるようである。

**強鳴爆彈** 爆彈にサイレンを取付けたもので、高空より強鳴を發し、比較的長時間之を續けた後落下するもの如く、實質的效果は普通爆彈と大差なしと思はれるが、人心に恐怖を與へる効果は相當大きいであらう。

**強力空中魚雷** 本年八月二十四日より廿五日早曉に亘るロンドン空爆に於て獨軍が始めて使用したと傳へられ、當時の情況を記して「此時獨空軍は新戰術を用ゐ、まづ飛行進路に沿ふて廣範圍に多數の燒夷彈を散布して火災を起さしめ、然る後強力爆彈を投じて爆

撃効果を一層大ならしめた。空中魚雷は之に使用せられ、大建築物に對し非常な効果を示した」とある。

**燒夷カード** 本年九月初頃、英軍がドイツ各地の農家、納屋、森林等に多數に散布したものでマツチ大のセルロイド板に燐を塗り、之を練火薬で覆ひ、落下後若干時間たつと燐の自然發火により火災を起さしめるもので、獨國は國民に注意を與へ、小兒等の負傷を警戒せしめた事も新聞記事に見えた。

**昆虫散布** 細菌戰の手をかへたもので、同じく英軍が散布したと傳へられたが、前項のカードと同じく其効力は未知數で、民心に多小の不安を與へた程度であらう。其の昆虫は馬鈴薯の害虫である、コロラド甲虫で、之を袋に入れて、南獨、ルクサンブル、ベルギー等に落下された。

(4) **火炮及砲兵裝備**  
以上は主として歩兵裝備であるが、火炮に至つては年々益々多岐複雑を極

むる一方で、平射、擲射、曲射の三種を以ては戰場に出現する各種目標に對する要求を満足し得ず、茲に其中間性能を旨指す新砲種が考案せらるゝ一方、これらの火炮を單一化し、同一砲身より種々の初速をもつて同一彈丸を發射し、各種の平射彈道、曲射彈道を兼ね得んとする希望は、加農と榴彈砲との中間性能を具有する所謂加農榴彈砲となつて出現し、今次歐戰でも戰場で其威力を發揮した。其加農榴彈砲の一例として、シユナイダー三五口徑八、五種加農榴彈砲を見ると、彈量十五瓦、初速六七五米、最大射程一萬五千米で、其後ポフォオース四〇口徑九種のもの、又ラインメタル三〇口徑十種五野戰輕榴彈砲も加農榴彈砲の一種である。

同じく今次歐戰に最も活動した火炮は前述の對戰車砲であるが、長距離火炮も前大戰に巴里を砲撃して驚かせた獨逸のベルタ砲以來其の研究が續けられ其結果新ベルタ砲となつて、英佛海峡を隔て、砲戰を交ふるに至つて居

る。

新ベルタ砲

口徑	二八〇耗
彈量	三〇〇耗
射程	二八〇耗
射角	六乃至七十度
初速	一八〇〇米

備考 彈丸は成層圈内に入り、千二百米の存速で二〇〇耗を前進すると云はれる。

これらの火炮はその特性、用途等により、機關砲、野砲、騎砲、山砲、野戰重砲、重砲、迫撃砲、列車砲等々の名稱を附せられ、その口徑小は二〇ミリより大は五六〇ミリに到る間、各種の口徑のものが實現してゐるが、各國を通じて陸戰のためには、加農としては七五、一〇五、一五五ミリ等、また榴彈砲としては一〇五、一五〇、二〇〇、二四〇、二八〇ミリ及びそれ以上の大口徑が標準的に用ひられてゐる。臼砲の口徑は一五〇乃至四〇〇ミリ位のものが多い様である。



以下必ずしも新式火砲のみとは限らぬが現用各種火砲の性能を記する。野砲及野戰砲之を口径から見ると七五耗、八三、八耗(三三三吋)(以上加農)、九四耗、一〇五耗、一二二耗(四・八吋)(以上榴彈砲)が先づ主なるものである。前者は即ち野砲で後者は

輕榴と稱すべきものである。此砲は從來各國共に野戰に於ける主砲とも云はれる程多數に裝備せられて居たもので、六馬又は八馬にて牽引されて居たものである。今參考の爲我が國の制式野砲の諸元(公表)は次の通である。

改造三八式野砲	九〇式野砲	九五式野砲	最大射程	全備重量(噸)
九,〇〇〇	三,〇〇〇	六,〇〇〇	九,〇〇〇	二,〇〇〇
			三,〇〇〇	一,五〇〇

次に輕榴彈砲に屬すべき各國火砲の諸元を表示する。

諸元砲種	口径(耗)	長身砲(口径)	速初(秒米)	量彈(噸)	程射大最(米)	方向	射界(度)	高低	量重列放(噸)	架砲	備考
十一蘇 二九 槽一〇年式	122		221 335	23	7,700	各 2	各 2	-3+45	1,360	單一 箭材	制式裝備
十一獨 九 槽一八年式	105		450	16	10,000	各 2		-10+40	1,800	單一 箭材	現制式ハ開脚式デ更ニ大ナル性能ヲ有スルモノト考ヘラレル
十比英 ツ 槽カ 一 ス	105	27.5	220 610	15	13,700		6 床板上	360	2,165		
十シ佛 ユ 槽ナ イ ダ 一	105		145 442	16	11,000			-6+50	1,627	脚 開	最近制式ニ採用シタト 言ハレルモノ

山砲 野砲に相當する口径六五―七五耗級の火砲を分解して駄載し得る様にしたことは各國軍とも共通してゐるが、野砲の様には口径増大の傾向が見えることは當然でもあり又注目すべきことである。即ち一般の七五耗級の山砲と共に十耗級の榴彈砲をも分解駄載して山地に使用しようとしてをり、更に十五耗級の山地榴彈砲も考へられてゐるが、之は砲身の重量が相當大となり、到底一部品として一馬に駄載することは出来ないもので、各國とも考を進めてはゐない様である。

身は他の部分と異つて二つに断ち切るわけにもいかないもので、せいと閉鎖機、薬室被蓋の部分と施錠部との二部分に分ける位である。そして一馬の駄載し得る重量は先づ一〇〇―一一〇位(鞍を除き)であるから砲身重量約一〇〇噸といふことが山砲の性能の限界を定めることになる。即ち砲身重量約一〇〇噸、口径七厘半といふ前提に依つて生れる性能は、砲身長概ね十五口径、最大射程五、〇〇〇乃至七、〇〇〇米といふのが現在各國の七厘級山砲に見られる所である。そして約一〇〇噸の砲身を載せた砲車の重量は約五〇〇乃至六〇〇噸、従つて概ね五馬或は六馬に駄載することになる。

度のもを各國が如何に製作し、裝備してゐるかは不明であるが、代表的なものとして、佛國のシユナイダーが作つてゐるものの諸元を掲げて見れば、

口径	一〇五耗
砲身長	一一、四口径
初速	三五〇米
最大射程	七、九〇〇米
放列重量	七四〇噸
緊駕重量	七六〇噸
結合砲身重量	二三五噸
砲架重量	三八二噸
註退機重量	六七噸
發射高	七九〇耗
轍間距離	一、二五〇耗
方向射界	九度
彈量	一二噸

十一米 九 槽二 八年式	十九日 槽一 式
105	105
473	
15	
11,000	10,000
45	
-5+45	
1,700	2,000
脚 開	脚 開
	公表諸元



八馬駄載或は騾馬  
問題となる砲身は一〇〇呎の内管と  
八一呎の被套とに分解してゐる。八箇  
に分解載してゐるが、一番重い荷物  
は前砲架の一二三呎である。

騎砲 各國共輕野砲に過ぎない。騎  
砲として獨特の構造を有するものは見  
當らない。輕野砲を一部分の構造の變  
更に依つて更に輕量ならしめたもので  
ある。但し近頃の騎兵が機械化せられ

つゝある傾向に應じて騎兵も亦單なる  
馬四輓曳のみでなく機械牽引し得る様  
になつて來てゐる。次に騎砲の諸元を  
掲げる。

砲種	諸元	徑口(耗)	速初(秒米)	程射大最(米)	量彈(尙)	量重列放(尙)	量重備全(尙)	架砲	備考
騎一蘇九砲〇二年式		76.2	593	8.750	64	1.210	1.670	材箭一單	
M米 I 騎砲		75	381	8.230	6.85	865		脚開	
騎シ佛ユ砲ナイダ		75	440	9.600	6.33	870	1.330	材箭一單	
一英三封度騎砲		76.2		7.860	5.9	950	1.650		

野戰重砲 各國共に十加及十五榴で  
あるが之を師團砲兵としてゐる國と、  
軍或は軍團砲兵としてゐる國とがあ

る。  
野戰重砲は構造上自然重量の制限を  
受けて一門を其の儘三駢輓曳せしめる

ことは不可能であつて、之を二車輛(多  
くは砲架車と砲身)に分解して各々を  
三駢で輓曳せしめるか、一門の儘なら

ば機械牽引とするのが普通である。我  
が國に於て嘗て三八式十加及十五榴が  
四駢を以て輓曳せられてゐた時代もあ  
つたが、火砲の性能増大に伴ふ重量増  
加と機械牽引の進歩に因る牽引力の増  
大と相俟つて、此の級の火砲を機械牽

引とすることが世界的の傾向の様であ  
る。  
十加 世界大戰以來火砲の射程が増  
大したことは驚くばかりであつて、三  
八式十加は當時長射程の中に入つてゐ  
たのであるが、其の最大射程は一萬に

過ぎないのに反して、今日九〇式野砲  
の如きは一萬三千を超えてゐる。従つ  
て野砲中の長射程砲たるべき十加は今  
日少くも一萬六七千から二萬位を撃た  
なければならぬ。今各國の十加の諸  
元を掲げると次の如くである。

砲種	諸元	徑口(耗)	長身砲(徑口)	速初(秒米)	量彈(尙)	程射大最(米)	高低	射界	量重列放(尙)	架砲(尙)	備考
蘇一〇一三〇式		107	40?	580	16	16.000	45	30	2.200	單一箭材	更ニ新式ノモノアリ
獨一〇一三〇式		105	53	890	15	20.000	-31 +45	55	5,700	開脚	
佛一〇一三〇式		105		735	16	17,000	0 +45	50	3.375		
英一〇一三〇式		120	37	707	22	14.700	-5 +42	8	4.877		

十五榴 近年の十五榴の特徴は之も  
亦射程の延長に在り、一面彈量を増大  
して單一彈丸の效力を増大した點であ

らう従つて榴彈砲と言ひながら砲身は  
甚だ長大なものがあつて一見加農と見  
誤らしめるものがあり、反對に前述の

十加は曲射彈道を得ようが爲に變裝藥  
としてゐるものが大部分である。勿論  
十加の場合最大射程附近を射撃するこ



とはそんなに履きはないので小射程の場合に砲身を愛惜するといふ意味のあることも勿論である。

砲種	蘇一 九〇九 一 九三〇 年式	獨五 一 九二九 年式	佛一 九二九 年式	英十 五 榴
口径(耗)	152	149	149	150
長身砲(口径)	2)	21	32	22
初速(秒米)		635	600	595
弾量(珄)	40	38	42	41
最大射程(米)	11.00)	15.000	15.000	15.00)
射界	高低	+45	+45	0 +45
	方向	3	40	45
最大射程(砲)	2.700	5.175	5.700	5.226
砲架	更ニ新式ノモノアリ	開脚	開脚	開脚
備考			砲架ハ前述十加ト共通	

大威力重砲(十五加、二十榴) 日露戦争迄は十五榴以上の火砲は要塞のもので先づ野戦には使はれないものと相場が定つてゐた。然るに日本軍が旅順要塞の攻撃に二十八榴榴砲を使用したことは、近代戦に於ける大口徑砲の野戦的使用の嚆矢を爲すものであつ

て、正に兵器史上特筆すべきことであつた。世界大戦に於て獨軍が四十二榴榴砲を白耳義要塞に對して使用したのも、其の著意に於ては吾人の精粕を嘗めたものと言ふべきであつて、此の點は彼等も亦認めてゐるやうである。二十八榴と迫撃砲とは日露戦争の兵器

方面に於ける二大傑作と言ふべきであつた。さて旅順に於ける二十八榴は單に我が海岸要塞のものを取脱して使用したに過ぎず、其の構造に於て何等野戦的使用に適するものではなかつたが、世界大戦に於て獨軍の使用した四十二榴

砲種	瑞一 典 十五加	舊チ エ コ 十五加	和十 五加
口径(耗)			
長身砲(口径)			
初速(秒米)			
弾量(珄)			
最大射程(米)			
砲架式様	簡單裝材一輪	簡單裝材一輪	簡單裝材一輪
放列重量(珄)	10.200	14.040	10.060
接續砲車重量(珄)	8.300	10.030	6.250
	6.200	9.260	6.250
備考			

は最初から野戦に使用する目的で裝輪砲架とし、戰場を容易に移動し得る様にした點に於て近代、重砲の眞の先驅を爲すものであらう。今日有ゆる口径の重砲が移動性を附與され、思ひがけない大口徑の砲彈が要塞ではない野戦の戰場に於て吾人の頭上に落下し來ることのあるべきを覺悟しなくてはなるまい。

大口徑重砲に移動性を附與するには二つの方法が採られた。一は列車砲とするものであり、他の一は自動車の發達に依つて重い火砲材料を適宜分解して強力な牽引車に依つて運搬しようとするものである。列車砲は大なる移動性を有するとはいへ、其の範圍は線路上に限られるので、寧ろ移動砲臺と稱すべきであるから、茲には省いて、後者に就て述べよう。

今日各國共に裝輪式十五榴榴加農 今日各國共に裝輪式のものを持つており、我が軍に於ても四五式の裝匣式に代つて八九式の裝輪十五加農の生れてゐることは周知の通である。そして裝輪式十五加の性能を通覽するに其の射程は概ね二〇、〇〇乃至二五、〇〇〇米、弾量は四五珄乃至五〇珄、放列重量十珄乃至十五珄砲身車と砲架車に分解し牽引車で牽引するのが普通である。今各國に於ける若干の例を左に表示する。



獨 ク ル ツ ブ 十五加	佛 シ ユ ナ イ ダ ー 十五加
	155
	50
	900
	50
	26.000
裝輪 材一 脚	裝軌 脚
10.140	17.400
6.000	9.000
8.200	12.000

二〇級榴彈砲 野戰重砲に於て十加と十五榴とが一對を爲してゐる如く、之より一段上の重砲に於ては十五加と二十榴とが一對を爲してゐる。而して裝輪式の大威力重砲は先づ此の程度が限度で、此の級迄の火砲は概ね砲身車、砲架車の二車に分解し牽引車で牽引して野戰的に運動することが出来るのである。此の級より大きくなると機械牽引が出来るとは言へ寧ろ固定砲架の火砲の材料運搬を機械力に依つてゐるといつた方が適當で、機動性のある火砲とは言へないであらう。二十級裝輪榴彈砲の性能を通過すると射程は概ね一〇軒を目途とし、放列砲車の重量も約一〇噸以内、榴彈砲である關係上十五加よりも寧ろ軽く、彈量は一三〇斤見當である。

砲種	諸元	口径(耗)	長身砲(徑口)	初速(秒米)	彈量(斤)	最大射程(米)	砲架式	放列重量(斤)	接續砲車重量(斤)	備考
瑞典 ホー ース 二一榴							裝輪 材一 脚	6.800		
獨 一九一 八年式 二一榴							履帶 裝輪 材一 脚	9.640	10.500	
英 ツカ ース 二〇榴							裝輪 材一 脚	9.093	10.500	

二伊	一榴	210	22	5.0	102	16.000	裝輪 脚	15.800	8.200	10.800	最近ノモノナリ
----	----	-----	----	-----	-----	--------	---------	--------	-------	--------	---------

觀測機關の編制裝備 砲兵觀測機關の編制に於て著目されるのは、各國共に測地、火光標定、音源標定の様な比較的重い觀測機關は師團或は軍團に於て一體にして獨立した部隊を形成する方法を採つてゐることである。即ち大、中隊などには輕易な觀測器材のみを與へて面倒な測地なんかは専門の部隊がやつて、其の成果を各隊が利用するやうにしてゐる。今此の方面の各國の編制を見ると概略左の様である。

蘇軍 師團砲兵の聯隊本部の中に指揮中隊があり、其の中に觀測小隊がある。軍團砲兵の野戰重砲兵聯隊には搜索大隊があり、測地中隊、地上標定中隊、音源標定中隊、氣象小隊等を有してゐる。

英軍 師團には野戰輕砲兵聯隊、重砲兵聯隊と共に砲兵觀測大隊があり、此の大隊は測地中隊、火光標定中隊、音源標定中隊より成る。

米軍 軍團砲兵の野重旅團に音源及火光標定大隊がある、大隊は本部、本中隊、中隊二より成り、中隊には火光標定小隊、音源標定小隊、通信小隊等がある。

空中觀測に就ては尙未解決の若干の問題がある。其の一は飛行機、他の一は氣球である。飛行機の發達に伴つて空軍化し、或

は既に空軍として獨立したつた國も多いので、地上部隊と協力する飛行機を如何にすべきやは研究の餘地が大きい。如何なる飛行機を使ふべきか、編制を如何にすべきか、又高射機關砲、驅逐機の發達した今日如何にして觀測すべきかも皆問題である。オートヂャイロといふものも砲兵協力用として各國に於て相當研究されつつあるが、之もまだ海のものとも山のものとも決定し難い。

氣球は飛行機の發達した今日、専ら砲兵の觀測機關と化したことは我が國の氣球が航空兵から砲兵に移管されたことに依つても明かであるが、之も亦空中戦力の増大した今日、大いに研究の餘地がある。



### 三、空輸部隊、降下部隊(落下傘部隊)

空中降下部隊(落下傘) 本研究は前大戦頃より各國共多少の關心を持ち、特に米蘇兩國に於て盛であつたが、一九二七年頃より研究を始めたソ軍は、遂に一九三四年に到り正規の落下傘部隊を認め當時之をデッサントなどと稱した。

ソ軍の降下部隊は、多數の爆撃機にて輕機又は小銃に依り武装せる部隊を所望の地點に運搬し、落下傘に依り降下せしめ、地上に到着するや直ちに戰鬥行動に着手し、要點を占領し、次で後續部隊として戰車、裝甲車、火炮等を携行する部隊を運搬し、適當なる地點に著陸して、先遣せる投下部隊と協力し戰鬥行動を進捗せしめんとするものである。

併し此の如き方法による一種の奇襲戰術が果して幾何の實用性あるやは、尙疑問視せられて居て、本春のソ芬戰

争に於ても、ソ軍の此部隊の活躍らしきことも聞えなかつたが、本年五月獨軍の和蘭席捲に於て、各地に此部隊を使用し、其兵力は落下傘一師團、次に述べる空輸部隊一箇師團で、多大の効果を收むるに到り最早其の實用化は疑ふ餘地なきに到つた。(歐洲戰亂記事参照)

而して之に使用する飛行機は爆撃又は旅客機等各種のものを用ゐて居るが、其の主要具たる落下傘については次の如くである。

落下傘は絹又は木綿、米國では近頃頻りに喧傳せられてゐるナイロンをも用ゐる、中徑約七米、面積は三十五乃至四十五平方米、重量六、五五乃至八五、之を用ゐて人員一人が降下する時は毎秒五乃至七米の速度を以て降下し來るのである。

落下傘には飛行機より飛び降りる時自動的の開くものと、降下者が自ら環を引くなどの方法により降下後若干秒の後に開かせる二方式があるようであ

るが、何れも傘の中心に孔が開いて居る、此の孔は傘が開く時のショックを緩和し、又降下中の安定をよくし、更に又空氣が傘の中に良く流れ込むようになるので浮力を大にする効があるのである。

さて此の落下傘を自動式に開かせるか、降下者が開くかは、降下する高度にも關係し、ソ軍のものは後者を採用し、獨軍のものは自動式が多いと傳へられるのは次に述べる其の用法にもよるのである。

即ちソ軍の落下傘は概して千米或は以上の高空より白晝公然と降下する寫眞が示すように敵地の後方遠き奥地に降下するもの如くも見られるが、獨軍の和蘭戰線に於ては薄暮又は天明前地上二百米位から隱密に地上に降下した例が多く、其何れを問はず戰場の廣狹、戰術的使用方法の差異から來てゐるので、其の何れを有利とは判定せられぬ。唯ソ軍降下部隊が未だ其の實價を示さぬのに比し、獨軍の降下部隊は

已に確實に實戰實用化して居ることを注意すべきであらう。

降下部隊は獨軍では一機十五人から二十人位を乗込せしめ、各人輕量なる自動小銃、輕機等を携帶せるは勿論であるが、獨軍では重機、輕機迄も分解して一人別々に降下し、降下後集結して其の威力を發揮したことも傳へられて居るが、此の如き手段は前記の如く隱密且つ低空よりの降下に非れば困難であらう。

最後に降下中の兵員の射殺については獨國は英國及蘭國に對し抗議したことも傳へられたが、ソ軍式の高空降下者は敵影なき奥地に非る限り此の危険は免れざるべく、又將來國際公法陸戰法規に關する新問題となるかもはかられぬのである。

空輸部隊 先年のスペイン内亂に於て、獨逸がフランコ軍を援助した時、獨軍用機三十機を以てモロッコからスペイン迄、土民軍約一萬を一週間の間に輸送したのが、此の方法の最初の實

現と見るべく、落下傘部隊と同じく、それ迄各國軍事界で研究題目となつて居たものが始めて實用具體化されたのである。

従つて今次歐洲戰亂に於ても、波蘭戰場をはじめ各戰場で、各國共に多少共此空輸部隊を使用し、ソ軍は芬蘭に於て相當大規模に之を使用したようであるが、眞に其の効果を發揚し勝敗の決に多大の寄與をしたのは、別項「歐洲戰亂記事」に見る如く、ノールウェー戰線に於て獨軍が行つたものである。

即ち海上の軍隊輸送が優勢なる英海軍に脅威せられて多大の困難を感じた獨逸は自國又は丁抹より一葦帯水のオスロに向つて空輸を行つたが、それよりも各個に孤立して英佛軍の奮闘を續けて居たトロントハイム、ナルヴィク等の友軍増強に大規模且つ有功に實行して戰局に重大なる影響を與へた。

當時軍事専門家の計算によれば、ドイツが此空輸に使用したと思はれる最

新ユニカー機は三十人乗りであるから、獨逸、南諸國なら一日三往復、ナルヴィクとしても二往復は出来るから一萬の軍隊空輸には、三十機を用ゐて四日間と云ふことになるし、以て其有用なることが分る。駐日獨大使館グラナウ大佐によればドイツ本國より一週間に歩兵三師團を輸送し之に使用したのは二百機との事である。

獨軍は其他も盛んに此の空輸部隊を使用して居るが、之に使用せる飛行機は、十六人乗の舊式一般旅客機でも差支ないし、又例のユニカー五二型の新舊各種を使用し一機に三十人、又はコソドル機に五十人を乗せて輸送して居る。

以上の落下傘及空輸法は、兵器又は裝備上の新案としては第二次的のものに過ぎなく、唯今次歐洲戰亂に於て正に實用化し有力視せらるゝに到つたものであるから、今和蘭戰線に於ける此兩者の活躍振りを總括すると、獨逸軍



は和蘭では落下傘二聯隊、空中歩兵一  
個師團を使用し、前記の如く之にユン  
カー五二號機(兵員二十人乗)コンドル  
機(同五十人乗)を配し、兵員の武裝と  
しては自働式輕機の外、折疊式自轉車  
を携帶、空中歩兵師團長も幕僚と共に  
自らロツテルダムに降下して之を指揮  
したと傳へられるほど、有力なる戰團  
一單位となりつゝあることは最早疑ひ  
ない、但地形敵狀、千變萬化のあらゆる  
戰爭に於て、如何なる敵軍、如何なる  
國土に於ても有力なりと断定出來ぬ  
ことは之亦多言を要せぬ處である。

### 四、軍の機械化及機

#### 械化部隊

##### (1) 軍機械化の理念と趨勢

四年の長日月と四千億圓に及ぶ國幣  
を消費し、各國其國力を賭して戦つた  
前大戰も、戦後久しからずして早くも  
ベルサイユ條約調印、國際聯盟成立と  
背馳し、年々醸成された世界不安に對  
しては、列強齊しく數次の陸海軍縮會

議に出席しては陽に平和を主張し乍ら  
國內に於ては已に大戰直後より戰略、  
戰術、武器、器材は勿論新戰術、新兵  
器等の研究に著手し、如何にして「次  
の戰爭」に於て勝利者たるべきかに苦  
心没頭しつゝあつたことは、今更隠れ  
もない現實であつたのである。  
而して之等研究の對照が先づ前大戰  
に向けられ、政略、戰略、戰術、兵器  
等各方面に亘つて檢討のメスを振ひ、  
就中最後の決をなす戰術の研究が、生  
々しい前大戰勝敗の因つて來る所以を  
第一に取り上げたのも亦當然の發足點  
であつた。

抑々前大戰が四年有半に亘る長期消  
耗戰となつた事は戰術上より見れば確  
に退歩であつた。其は火力萬能の弊に  
陥つて軍の運動性を忘れた爲であつ  
た。茲に大戰の尊き體驗に基き漸次作  
戰指導の思想に一大變革を齎らし、之  
に裝備を一致せしむる爲め先づ大空軍  
の擴張と併行し、戰車及自動車に依り  
軍に絶大の武力と卓越せる運動性と堅

靱なる防護力とを兼備せしめんとする  
所謂軍機械化と云ふことが重要視せら  
るゝに至つたのである。  
併し又其半面には此の革新的傾向に  
對する有力なる反對意見もあり、各國  
軍事専門家の間には可成り久しい間論  
議が続けられたことも事實であるが、  
結局今日に於ては、將來戰の形態とし  
ては國家總力戰が豫想せられ、各國民  
は持久長期の經濟戰を覺悟せねばなら  
ぬが、戰略、戰術上の觀點よりせば、  
少くも部分的又は一戰局に於ては依然  
速戰速決主義こそ千古易らざるべき鐵  
則である結論に到達したのであつた。

此の如き速戰速決主義なる戰爭の指  
導方針より見るも、同じく「武裝」「防  
護」「運力」の三者を兼備せる軍機械化  
こそ最も此主義に合致する勝利の鍵で  
あるとの歸結を見たのも亦當然であつ  
た。  
斯の如き思想に基き各國共軍機械化  
に關する研究の爲至大の努力を續けて  
來たのであるが、最近に於ける世界

的不安情勢の増大は益々之に拍車を  
かけ、爰に漸く研究時代を經過せる各  
國は、昭和十年前後より整備時代に入  
り、

#### 機械化兵團の創設

裝甲兵團とも稱し通常戰車、裝甲  
自動車の如き裝甲戰團車輛を核心  
とし之に自動車編制の各兵種を編  
合したるもの

#### 自動車化兵團の創設

從來の兵團を全部自動車編成とし  
たもの

#### 各兵種及後方諸機關の機械化

#### 自動車輸送部隊の創設

各種自動車より成り長距離に亘る  
軍の輸送に任ず

となり急激なる實現を見つゝあるので  
ある。

殊にドイツは強力なる國家統制の下  
に之が實現に邁進し、其結果が昨春秋  
に於ける對波戰並に本年五月に於ける  
對英佛戰に於て、彼の大空軍の爆撃と  
大裝甲軍の邁進の極めて緊密なる協同

の下に有史以來の理想的電擊作戰とな  
つて現はれたのである。此作戰に依つ  
て、現代戰に於ては高度に機械化され  
たる新裝備の軍は、常に主動の地位に  
立つて戰勝の榮冠を占め、之に反し時  
代に遅れたる舊裝備の軍は常に受働の  
地位に陥つて慘敗の憂目を見なければ  
ならない事を如實に立證したものと云  
ふことが出来る。

轉じてソ軍の裝備及戰團指導の思想  
に就て觀るに、所謂物質萬能主義であ  
つて、火力、航空、機械化、化學戰の  
各裝備に於て優れたる強力なる軍の正  
面よりの突破と、強大なる機械化兵團  
を以てする側背よりの攻撃に依り一舉  
に敵を包圍殲滅せんとするに在る様で  
あつて、之に對する爲めには相當の優  
良裝備を必要とすることは論を俟たな  
い所である。

軍の機械化に伴ひ機械化兵器の技術  
的進歩も亦眞に驚異すべきものがあ  
る。  
先づ戰車に就て見るに、其速度に於

て、障礙の突破力に於て、被裝に於て  
裝甲に於て劃期的の進歩を遂げ、更に  
特殊の任務に服する戰車も續々現出し  
眞に日進月歩の勢に在るのである。斯  
くして廣正面に亘り重疊に配備された  
る、大は百級級より小は二三級級にも  
及ぶ戰車大集團の邁進は、大空軍の爆  
撃と相俟つて現代戰の最高峰を占むる  
に至つたのである。「今や空に飛行機あ  
り、地に戰車あり、作戰の方式茲に一  
變せり」と云ふべきである。

戰車の進歩と共に、其他の機械化兵  
器即ち、各種の路外通過用の特殊自動  
車の外一般自動車も亦長足の進歩を遂  
げ、其結果益々軍の機械化を可能なら  
しむるに至つたのである。之を具體的  
に述べるならば、戰車隊は路外通過用  
の各種自動車の裝備に依り到る處に其  
の猛威を揮ひ、機械化兵團又は自動車  
化兵團は遠大の距離に亘り惡路を突破  
して戰略的重要任務の達成を可能なら  
しめ、自動車輸送部隊も亦是等各種の  
自動車に依り軍に偉大なる機動力を與



へ、歩、騎、砲、工、航空等の各兵種も亦益々其戦力を向上し、更に輜重及兵站諸機關も亦遠大なる地域に互り能く大軍の行動に追隨して大量の軍需品の補給に任し、以て迅速なる作戦の遂行を容易ならしむるに至つた。其他防空諸機關、化學戰諸機關、衛生諸機關及修理機關等も凡て機械化され、斯くして從來の人の力、馬の力が發動機の方に化しつゝあるのである。

(2) 帝國々軍機械化の回顧及將來

翻つて之を我國軍につき見るに曩に滿洲事變及上海事變に於て小規模ながら戰車又は機械化部隊が國軍に於ける初陣として活躍したのであるが、熱河戰に於ける百武挺身部隊の壯烈無比の長城突破戰、或は上海に於ける江灣鎮堅壘の蹂躪等に赫々たる武勳を樹て我國軍史上不滅の記録を述したのである。

今次事變に於ても、皇軍の作戦が今日見る如く全世界を驚嘆せしむる如き神速なる成果を收め得たる所以のもの

は、戰車及機械化部隊或は自動車砲兵の如き第一線部隊を初めとして、其他の自動車諸部隊の華々しき活躍に負ふ所頗る大なるものあるを知らねばならぬ。

先づ之を戰車及機械化部隊に就て見るに、事變當初北支及山西に於ける迅速なる運動戰、上海に於ける堅壘の突破、徐州會戰に於ける隴海線の遮斷、漢口及廣東攻略戰に於ける挺身的追擊戰、南昌に於ける陣地突破戰等全戰域に互り無敵鐵甲軍の武威を遺憾なく發揮したのである。

又今次事變間に於て砲兵の偉大なる威力が到る處に發揮され、之が常に戰勝の重大原因をなして居るのであるが、是等も自動車砲兵に依り其運動性を發揮し得た事が與つて力あるのである。

更に又此廣大無邊の地域に於て、大兵團の遠大なる距離に互る作戦が、斯くの如く神速に行はれ得たる所以のものは、之に追隨する莫大なる軍需資材

達せしむる必要があり、更に之に必要たる工業能力の飛躍的發達及國民の科學的機械的の向上を圖る事が緊要であることは之も多言を要しないところである。

戰 車

大戰後列強の戰車研究熱は益々盛んで技術上劃期的な進歩をなし、列強は其の裝備數の多きを競ひ空には飛行機、地には戰車を骨幹とする機械化部隊が近代化した軍隊の要素となつてゐる。

最新式戰車の進歩は其の速度の早いことである。速度を早くする爲に構造技術は極めて困難となり、有ゆる點に於て劃期的の改善を必要とした。前大戰にはじめて出現した頃の戰車の速度は八杆以下を普通とし十四杆に達するものは高速度戰車と認められたが、現在では三十杆、四十杆は普通で特別の構造により七十杆、八〇杆今大戰亂には九〇杆を走るものすら出現

の輸送及兵團の移動等に任ずる自動車諸部隊の偉大なる力に依る所頗る大なるものあるのであつて、近代に於ける大軍の作戦は鐵道に沿ふ地區に於てのみ行はるゝものなりとの鐵則を覆すに到つたのである。

今次事變に於て今日迄發揮せる帝國軍機械化諸部隊の偉大なる成迹は叙上の如くであるが其裏面に於て我國軍の機械化に關する人的物的兩方面に於ける幾多の缺陷に依り作戦の遂行上に支障を來さしめた事が無かつたとは云へないのであつて、將來是等諸部隊の價値を充分に確認すると共に、尊き體驗より得たる缺陷を是正しつゝ國軍機械化の促進に努むる事が肝要であると信ずる。

更に之を將來に考ふるに、今日滿洲國より支那大陸を横斷し南支に及ぶ蜿蜒一萬杆以上に互る長大なる我國國防線上に於ける作戦上の必要より、強大なる武力を隨時隨處に發揮すべき卓越せる機動力を極度に軍に要求する事は必

した。大戰當時の牛歩遲々の戰車は敵彈の目標となつて損害を受けることが多かつたが速度が早くなつたので、敵彈の照準は困難となり射彈を被らぬ内に敵陣に突入することが出来る。又低速度の戰車は陣地戰専用であつたが、高速度の戰車は自動車と行動を共にし機械化部隊の骨幹となつて大規模の機動戰に参加し得るのは、今次事變及歐洲戰亂の幾多の戰例が之を實證してゐる。

速度の要求が益々大となつた結果、無限軌道と車輪とを併用するもの、即ち高速度の路上行進には護謨輪帶附の車輪を用ひ、路外の行動を必要とする場合には此の車輪の上に無限軌道を裝するもの、或は車輪と無限軌道とを相互に轉換し得るものなどが考案され、又上陸戰闘、渡河戰闘などの任務に服する爲に水上に浮び陸上を疾走する水陸兩用戰車がある。

前歐洲大戰に於ける戰車を實戰上の見地から區分すると三種類に分けられ

然であり、其れと同時に我全土の二倍半にも餘る廣漠たる我占據地域内に於ける治安の維持には、所謂敵の企圖する神出鬼没のゲリラ戰に對して我も亦神速果敢なる行動を必要とする、更に世界軍事界特に隣邦ソ聯邦の軍備の情勢を考ふる時、高度軍機械化の促進は我作戦上並に東亞新秩序の建設上より緊要不可欠の急務である。

此の如くにして今次事變の成果に鑑み國民の軍機械化に關する關心と熱意漸く昂まりつゝある際、昨年秋に於けるドイツのポーランドに對する作戦及ノモンハンに於ける皇軍將兵決死の忠戰殊に本年五月に於けるドイツの對英佛電撃作戦は、全國民の心に甚大の衝撃を與へ、軍民朝野の間に軍機械化促進の必要が痛感せらるゝに至つた事は、我國防上喜ぶべき現象であつて、此點軍當局に於ても此機會に於て着々其實現に努力してゐるのであるが、此の如き高度軍機械化の促進には國軍全般の科學的裝備を軍の要望する程度に



る。即ち、

第一類 速力は遅いが重量の大なるもので半永久的な敵の陣地を突破するに使用するもの。

第二類 速力の遅い中戦車で半永久的な陣地から退却した敵が相當堅固に構築した次の防禦陣地に據つてゐる場合之を撃破する爲のもの。

第三類 軽戦車で自動貨車に依つて戦線近く運搬し他の部隊の攻撃を援助する爲多數のものを惜気なく使用するもの。

戦後戦車は有ゆる點で進歩したが、前記の三種類の分類は依然其の儘存在してゐる。只戦車は前述の通敵の陣地帯を突破する爲に造られたものであるが現在では之を運動戦に使用しようとしてゐるから此の點に關して將來種々の問題が生ずるであらう。大戦當時の戦車と現在の戦車とを比較すると大約左の如くなる。

最大路外速度は時速一〇哩であつたものが三〇哩となつた。最大行動半径

(給油一回のみに依る行動區域)は一五哩であつたものが一二五哩となつた。装甲板の最大の厚さは二十耗三十耗に達し、且特殊地金が使用されるに到つた。此等の數字は例外はあるが、併し現在の指針たり得るものと信する。武装即ち搭載火器は前大戦に使用された英軍の重戦車は六听砲二門と機關銃四を有してゐたが、現在の其の改良された型は三听砲一、機關銃三を有するのである。勿論砲、銃の性能は昔日の比でないし、射撃も多くは三百六十度回轉し得る砲塔に備へて前後左右に正確に行へるやうになつたことは明白である。斯くて現在の戦車は凡そ左の如きものとなつたのである。

輕戰車—重量二—八噸、乗務員二—三名、路外に於ける時速二〇哩以上、行動半径一〇〇哩以上、装甲板の厚さ半吋以上、機關銃一—二(機關銃二の場合には砲塔上に同軸に裝置し施回して全周射撃が可能とされてゐる)である。

中戰車(輕い型のもの)—重量一八噸迄、路外時速三〇哩、行動半径一二五哩、装甲板の厚さ一吋以上。乗務員五—六名、砲塔に同軸に砲一、機關銃一を全周射撃が可能なやうに搭載し、車體中に機關銃二を有する。(或場合には側面に小砲塔を設け之を裝置してゐる)

重戰車(重い型のもの)—歩兵に協同するもの、重量三〇噸迄、路外時速一五哩、行動半径一〇〇哩、装甲板は前述の中戦車より厚く、主砲塔に輕砲一側面の小砲塔に機關銃三を有する。

超重戰車—三十噸以上の戦車については最初の間は理論的可能性は成立するとしても、製作及實用に關し難點あり、加ふるに列國共に秘密にしてゐるので不明であり、従て今次歐洲戦亂の自佛戰場に獨軍の花形として出現した七〇噸戦車は當時専門家の間にも一時疑問視せられたのであつたが、其後其實在が明らかとなり、又佛軍に於ても七十二噸超重戦車を使用し、獨軍に分

捕られた其の寫真迄到着したので、其の概貌も見ることが出来た。今獨軍七〇噸戦車及佛軍九十二噸戦車につき外誌の所載記を要約すると、獨七十噸戦車は時速十軒乃至五十軒で、其の装甲は、最有効の對戦車砲と云はれる七十五耗砲に對しても防護充分であり(此の装甲は戦車の重量と相關々係あり、二十耗火砲に對して八噸以上の戦車、四十七耗火砲に對しては三十噸戦車に非れば對抗し得ず、七五耗火砲に對しては約百噸の戦車を必要とする)と云はれ、之が今回超重戦車の出現を見たい因子である)武装は機關銃數門、野砲より幾分小口径の火砲數門を備へて居ると云はれる。

佛軍の九十二噸戦車に到つては十五センチ又は七センチ半の砲一門、機關砲二、機關銃十を備へて居ると傳へられるから、正しく陸の甲鐵艦又は動く要塞とも見られる、従つて其機關も頗る強力なものが要求せらるゝのは當然であつて、ディーゼル機關に重油を用

ゐてゐるであらうと傳へられる。尙前記の獨軍に鹵獲せられた佛軍七十二噸超重戦車も獨軍の精良な對戦車砲又は高射兼用對戦車貫により穿貫せられて居るのを見ると、戦車と對戦車砲との拮抗は將來各國軍事技術家間の興味ある課題であらう。

快速戰車—超重戦車又は超々重戦車が前述の如く使用せられて居る一方、同じく今次戦亂に活躍を傳へられる獨軍の準戦車は機關砲一、機關銃一のみを備へる快速のもので指揮官一、射手二、操縦者一が乗込み、對戦車砲に對抗するには、著しく其高さを減じて一米五十位、又其の形状も敵彈の貫徹力を弱める爲め表面に見事なカーブを持たせ、之と快速とを以て、戰場を準の如く馳驅して、對戦車砲の餌とならぬやうにし、オートバイを同行して速に敵の要地を一時的に占領する等の任務を果したのであるが、輕量快速は一方には重量の制限を受け二〇耗以上の火砲には無力であると云はれる。

特殊戰車—其他獨逸「装甲部隊」誌によると、特殊戦車として、次の六種を掲げて居る。

通信戰車は戦車隊内に於ける情報及命令の傳達及上級或は比隣司令所(砲兵及歩兵)への情報及命令の傳達に任ずる。通信戦車は無線電信及無線電話送信裝置を裝備し、火器は自衛上必要なるもののみを裝備する。路外走行性は他の戦車と同様である。

工兵戰車は戦車隊の水路及斷絶地の通過を容易ならしめ、地雷地帯を破壊又は地雷阻絶を行ふ任務を有する。例へば架橋戦車は装甲の掩護の下に起重裝置に依り比較的廣幅の障礙物上に橋を押し出せる。

水陸兩用戰車は水深の十分にある水路を浮游前進し得る(此の場合の最大速度は毎時一五軒である)。水陸兩用戦車は渡河の場合に橋頭の構成を容易ならしむる任務を有する。陸地に於ては輕戦車と同様に戦闘する。

輕量擴張戰車は戦車を以てする攻撃



を掩蔽或は欺騙する爲に装甲の掩護の下に煙幕を比較的廣範圍に互り構成し得る。煙幕戰車は就中戰車隊及其他の部隊の敵よりの離脱を容易ならしむる爲に使用し、其の一部は瓦斯發射裝置を備へて居る。  
火燭發射戰車は掩護物に據る近距離活目標に對して効果を發揮する。  
機銃戰車、は戰車の戰果の敏速なる利用を可能ならしむる爲に、敵の效力射下に於て散兵を戰車隊の後方より追送するのみならず、戰車隊及最前線に在る歩兵にも最も重要な戰闘資材特に彈藥を追送する任務を有する。

各種自動車

裝甲車 快速力を有し偵察、搜索、警戒に任ずる所謂裝甲自動車と稱するもので、四輪、六輪、裝軌式等構造上種々の種類がある。  
牽引車 火炮等重材料の牽引車には一部に六輪自動式のものもあるが、大部は裝軌(無限軌道)を裝するもの又は

半裝軌式のもので牽引力の大小に依り種々の種類がある。

乗用自動車 指揮官用、偵察連絡用等色々の乗用車が使用せられてゐる。

自動貨車 用途に依り四輪の外六輪半裝軌等種々のものが使用せられてゐる。

特殊自動車 特殊用途の爲通信、觀測、修理、患者用、寫眞等各種の用途に使用せられる。

自動三輪車 傳令、斥候、連絡等に自動二輪車が使用せられ歐洲各國には其の部隊もあり輕機關銃も裝備せられてゐる。

自動車機構としては近時軍用自動車として最も必要なる路外運動性の増加を企圖し、又從來専ら使用したガソリン機關に代へ、重油機關を賞用せんとする傾向がある。

而して此種自動車に多數の歩兵を乗用せしめ第一線の戰車群の後方より同一速度を以て跟隨し戰車の收めた戰果を擴張し、勝利を徹底的たらしめたこと

とは今次戰亂獨軍の實行した方法であつた。

機械化部隊の實戰參加

以上の戰車、裝甲車、各種自動車を以て編制せられた部隊が、裝甲師團、機甲部隊等と呼ばれるもので今や各國共其編成を見ない國はない。而して今次歐洲戰亂に於て獨逸が使用した裝甲師團數は、波蘭に六個、白佛戰場に十一箇と云はれ、一ヶ師團の人員一萬一千人、戰車及トラック四七五臺、機械化砲兵は三千臺の車輛より成ると云はれる。

此の如く其他の各國も少くも數箇又は十數箇の裝甲師團を各戰場、各方面に分離集散して使用したことは、已に周知の事實で、別項「歐洲戰亂記事」によりても明らかである。  
次に參考として「獨逸裝甲師團」及蘇軍機械化兵團の編制並に蘇軍戰車について掲げる。

獨逸裝甲師團

- 裝甲師團の編制
- 自動車化搜索隊
- 戰車旅團
- 車載小銃兵旅團
- 砲兵聯隊
- 工兵大隊
- 對戰車大隊
- 通信大隊
- 裝甲師團は各部隊が自動車化されて居る。
- 各部隊の編制は次の如くである。
- 自動車化搜索隊
- 列外中隊
- 輕機關銃自動車小隊
- 自動自轉車連絡小隊
- 輕及重機關銃自動車中隊
- 一箇中隊は四箇小隊編成、自動車總數四〇
- 自動自轉車中隊

輕機關銃三箇分  
重機關銃四箇分  
隊編成の小隊

一三

輕及重機關銃總數

一三

重火器中隊

一三

戰車旅團

三二

二箇大隊編成の戰車聯隊

二

戰車聯隊の編制は概略次の如くである。

本部

一

指揮小隊

一

搜索自動車及自動自轉車あり

一

大隊は本部一、戰車、機關銃自動車及次に擧ぐる中隊五より成る。

中隊五の内三中隊は輕機關銃又は二〇耗機關銃を裝備する輕戰車六臺編成の小隊三より成る。

一中隊は指揮重戰車四臺及三七耗又は七五耗對戰車砲を裝備する戰車四臺編成の小隊四より成る。

一箇中隊は四箇小隊編成、自動車總數四〇

自動自轉車中隊

一中隊は七五耗迫撃砲二、三七耗加農三及重機關銃一を裝備する重戰車中隊。

故に各大隊の戰車の分布は戰闘小隊用約九〇、本部用約二五以上、豫備一〇である。

一箇聯隊には戰闘用約一八〇、本部用約七〇以上、豫備二〇である。

一箇旅團には戰闘用約三七五、指揮用又は豫備一三〇以上である。

小銃兵旅團

小銃兵は極めて遊動的な歩兵部隊で地區を占領しつゝ戰車の作戰を支援し或は其の安全確保を任務とする。

小銃兵聯隊

(路外走行六輪自動車載二箇大隊編成、各大隊は五箇中隊編成)。

即ち輕及重機關銃を裝備する小銃兵中隊三、七五耗迫撃砲二及三七耗對戰車砲三を裝備する重火器中隊一、重機關銃八及八〇耗擲彈筒六を裝備する隨伴中隊一。

自動自轉車大隊



各々輕機關銃九を裝備する小銃兵中隊重機關銃一二を裝備する機關銃中隊

- 砲兵聯隊 一〇五耗砲一二を裝備する大隊 (砲總數二四)
- 工兵大隊
- 工兵中隊
- 架橋兵班 (架橋縱列と稱す)
- 輕縱列
- 對戰車大隊 各三七耗對戰車砲(路外走行自動車又は六輪前車で牽引)一二を裝備する中隊三(一箇大隊の總數三六、一箇師團の砲總數約五〇)
- 通信大隊
- 電信中隊
- 無線電信隊
- 自動自轉車をも含む總ての種類の自動車の總數は殆ど一、〇〇〇に達し内戰車及機關銃自動車約五〇〇、砲

自動車二四である。此等が一列になつた場合の全長は明かに一〇〇軒以上である。

ソ軍機械化兵團

- 一、機甲旅團
  - 軍團司令部
  - 機甲搜索隊
  - 裝甲自動車大隊
  - 水陸戰車大隊(三中隊)
  - 自動車搭載歩兵大隊
  - 特種部隊
  - 連絡大隊
  - 工兵大隊
  - 化兵大隊
  - 高射砲大隊
  - 偵察飛行中隊
  - 戰團部隊
  - 第一裝甲旅團
  - 輕戰車三大隊
  - 自動車化砲兵一大隊 TK一五〇
  - 第二裝甲旅團
  - 中戰車三大隊
  - 自動車化砲兵一大隊 TK一五〇
  - 第三自動車化旅團

自動車搭載歩兵三大隊  
自動車化砲兵一大隊  
對TK砲一大隊  
自動車  
約五〇〇

自動車  
約五〇〇

- 二、機甲旅團
  - 旅團司令部
  - 搜索中隊 (輕裝甲自動車一八)
  - 戰車大隊 (大隊は三中隊、一中隊は戰車一六輛) TK一五〇
  - 自動車搭載歩兵大隊
  - (三中隊、對TK砲中隊一) TK一五〇
  - (四五耗砲六門)
  - 自走又は自動車化砲兵大隊 (三中隊、七六耗砲)
  - 其他所要機關
  - 三、戰車旅團
    - 旅團司令部
    - 搜索中隊
    - 戰車大隊

名 稱	乘員	武 裝	裝 甲	速 度	重 量	備 考
「ター」 二六型戰車 (二砲塔)	三	輕機關銃 三七耗砲	(甲) 五一三	(耗時) 三五	全備 八	
右同 (單砲塔)	三	輕機關銃 四五耗加農	六一一六	最大 八	全備 九・五以上	最近は單砲塔を 主とす

TK中隊 (中隊は重戰車一〇) 三  
砲戰車中隊 (七六耗砲戰車五) 重TK  
連絡中隊 約一〇〇  
戰團保證中隊  
(交通、化兵、防空、工兵各小隊)  
修理大隊  
材料廠  
四、裝甲自動車旅團  
旅團司令部  
搜索大隊  
裝甲自動車大隊

步兵大隊  
自動車搭載狙撃中隊三、中隊  
は三小隊及MG一小隊(MG四挺)  
砲兵中隊(七六耗砲四門、自  
動車搭載又は機械索引  
連絡中隊  
戰團保證中隊  
(防空小隊、化兵小隊、工兵小隊)  
修復中隊  
五、戰車聯隊  
本部  
戰車大隊  
(大隊は三中隊、中  
隊は戰車約一六輛)

搜索中隊 (水陸戰車約一六輛)  
補助部隊  
(連絡小隊、行動援助小隊)  
(防空小隊、化兵小隊)  
六、戰車大隊  
本部  
搜索小隊  
補助部隊  
(連絡小隊、工兵小隊)  
(化兵小隊、防空小隊)  
戰車中隊  
(中隊は輕又は  
中戰車三小隊)



「ベリ・デー」 戦車	「デー」 三七型水陸兩用車	「デー」 二八型重戦車	「デー」 超重戦車	「フオート」 六輪装甲自動車
三	二	六	一〇	四
輕機關銃 四五耗加農 (聯裝)	輕機關銃	主砲塔 七六耗砲 副砲塔 高射機 左右機 輕機關銃	主砲塔 七五耗砲 輕機關銃 高射機 副砲塔 右前四五耗砲 左前四五耗砲 右後四五耗砲 左後四五耗砲 機關銃	砲塔 四五耗加農 輕機關銃 探照機 輕機關銃
最小 六一七 最大 二二	最大 一〇	九一三五	三五以下	六一一六
裝札 約五〇 車輪 約七二	陸上 四〇 水上 六一八	最大 四五 常用二〇一三〇	最大 四〇 常用二〇一二五	路上 最大 七〇 後退 八
一	二・八	約二三	約五〇(三五)	約七
	「デー」三八型改正 型戦車あり一般 に形位大きく砲 塔左側にあり		新式のもの は「デー」三五型と 謂ふ	

○騎兵師團装甲部隊

(各騎兵師團に装甲部隊一あり)

装甲自動車中隊 (一六輛)

水陸戦車中隊 (一六輛)

輕戦車中隊 (中隊は「ベリ・デー」型一六輛)

防空小隊

對戦車砲中隊 (四五耗砲四門、自動車編制)

其他工兵、連絡兵、化兵若干

五、理學兵器、電氣兵器

銃砲火力が益々威力を發揮する様につなれたのは、火力の運用殊に射撃術の進歩に負ふ所頗る多く、適時適當なる

地點に有效なる火力を集散離合し、最も有効に威力を發揮することが、今日進歩せる射撃術の眞髓であつて、之が爲には各種光學的電氣的測測、射撃指揮及照準用具を必要とする。即ち戰場に於て敵の未だ視えざるに我は十分敵情を偵知し、敵の距離測定等の精度不良なる際、我は速かに精密なる諸元を決定し敵に先んじて、有效火力を發揚することは精密なる理學兵器の力に俟たなければならぬ。又火光、砲聲に依り敵の位置を決定する。

火光測定機、音源測定機や、高所又は上空より高度又は測量に依り、地理的位置を決定する、學的兵器等、理學兵器の進歩は寔に著しいものがある。

今次歐洲戰亂に於ては、英獨空軍は赤外線探知機、テレビジョン、透雲光線等を実用し、從來不可視とせられた雲霧も全然障礙とならざる迄も相當程度は克服して爆撃又は防空に資して居る。

電氣兵器は之を分類すると電氣應用兵器と電氣的威力兵器とに區分することが出来る。電氣應用兵器は通信器材、各種動力器材等其の種類が多く、今や世界は電氣の世界と稱せらるるが如く兵器に於ても益々其の使用範圍擴大せられつつあるが、此等は寧ろ補助兵器である、戰鬥の主目的たる殺傷、破壊等の威力兵器として歐洲大戰後半期より列國に於て研究せられつつあるものに殺人光線、無線操縱、電氣砲等があると傳へられる。

要するに科學の不斷の進歩發達に伴ひ各國共將來科學的新兵器の研究創造に多大の努力を拂ひつつあり、又我國に於ては曩に陸軍が科學者に呼びかけ科學兵器協會の結成を見たことは別項の如くである。

六、海軍現代兵器

戰艦主砲 一九一〇年頃迄は各國共



戦艦の主砲に十二吋砲を採用したが、砲身の長さ、弾量、初速何れも其の限度に達し之以上威力を増大することは頗る困難とせられた。然るに船體防禦の進歩に伴ひ、穿徹後に於ける砲彈の炸烈力を高むるにあらざれば破壊力を逞しうすることは出来ないといふことが問題となつた。此問題を解決するには砲の口径を大にさへすれば初速を減じても所要の力を得ることは可能なるのみならず、砲の侵蝕を減じ、其の命数を大ならしめ得、尙其の上に大距離の彈著観測も容易であるとの理由の下に十三吋半を計畫製出し、續いて一九一三年には十五吋砲を採用し、更に現代最新戦艦には十六吋砲を裝備し、口径は益々増大するの趨勢にあつた。然るに一九二一年華府に於ける軍備制限條約に依り主力艦は口径十六吋以上を裝備すること能はざる状況の儘今日に及んだ。

中小口径砲 水雷艇の出現により之

が防禦として一八七〇年代にガットリング、ノルデンフェルト、ホッチキス等各種の機砲が案出せられ、何れも小銃口径より漸次發達して口径一吋乃至一吋半のものも造られるやうになつた。爾來更に水雷艇の發達と魚雷射程の延伸により、必然的に水雷艇防禦砲の威力増大に當面し、遂に一八八三年にホチキス及ノルデンフェルトの五七糎速射砲が現出、同時に一吋及三吋速射砲も製造され、間もなくクルップ社口径一二糎半の速射砲を製作し、次で一八八七年アームストロング速射砲の出現を見た。一八九〇年頃無煙火薬採用、高脚砲架の出現によつて名實共に速射砲となり、十二糎砲、十五糎砲の如きは戦艦の副砲、巡洋艦の主砲として各國海軍殆ど同時に採用した。一方華府會議に依り新に出現する一萬噸巡洋艦の主砲としては八吋砲に制限せられ次で一九三〇年ロンドン海軍條約に依り巡洋艦にして六・一吋砲、驅逐艦

五・一吋砲の備砲を搭載するものも出現し得るやうになつて現在に至つた。高角砲は歐洲大戰時代に於ける航空機の發達に刺戟せられ、漸次艦船にも裝備されるに至り、其の口径三吋乃至五吋位である。

彈 丸

徹甲彈 彈帽を有し、此の彈丸の主目的は重裝甲艦を貫徹し且重要部を破壊するにある。従つて大口徑砲用彈丸に主用される。

通常彈 概ね第二流以下の裝甲を貫徹し、且其の内部機關に大損害を與へんとするもので、徹甲彈に比較すれば炸薬量を多くしてあり中口径砲用彈丸に主用される。

高爆彈 爆發威力により非裝甲部を破壊し人員を殺傷せんとするにあるので、多量の炸薬を有し小口径砲に使用される。

機銃彈丸 之は對航空機用として使用され、襲撃し來る敵機を打落す爲に

は高角砲と機銃とを併用する必要を生じ、列國軍艦は兩者を併せ搭載す彈丸の大きさは昆式四十糎から留式七糎七に至る迄種々雑多であり、又同じ口径の機銃彈でも用途により彈丸の種類が分れる。

水雷兵器

魚形水雷 世界各國共魚雷兵器に關しては之を嚴秘にするも從來各國共水上艦艇用魚雷の直径は二十一吋(五十三糎)が最大のものであつたが、最近英國ネルソン級戦艦に二十四吋魚雷を使用することを公表し、米國では二十五吋魚雷を實驗中とのことである。又獨逸は歐洲大戰の終期に二十五吋魚雷を用ひたと傳へられ、漸次雷徑増加に努めてゐることは明かである。又炸薬量も増加し、米國二十五吋魚雷は三一七噸、獨逸の二十五吋魚雷は其の量實に四〇〇噸と稱せられる。

推進機關並に原動力も從來は空氣式多氣筒機關が主用されたが、米國に於

て電氣推進機關實現し無線操縱魚雷に成功せりと傳へ、又獨逸は潜水艦に使用せる内火式機關を魚雷に採用すれば魚雷として極めて重要な利點であると稱し此等より推察するに將來は空氣式多氣筒に代り、電氣推進機關、内火式機關等幾多一層兵術上の要求に副ふものが實現するものと思惟される。

主力艦に於ける魚雷裝備

最近主力艦に於ける魚雷の價値を疑はれ、主力艦より魚雷發射管を撤去せんとする傾向にあり、最近伊太利海軍は戦艦は勿論巡洋艦に對しても發射管を半減又は全廢するに至つたと傳へられる。然るに獨逸の新巡洋艦には四聯裝水上發射機二臺を裝備する計畫の由推知し得た。尙一萬噸以下の小艦艇に對する魚雷兵裝に關しては各國共相當の考慮を拂つてゐる現狀である。

魚雷空襲

伊太利海軍に於ては飛行機を以てする新雷撃法が試みられた。其の方法は高度約一萬呎魚雷にパラシュートが裝

著され、縦舵は魚雷が射入後弧圓を畫く如く固定され、魚雷は水面を打つと同時にパラシュートから離脱して機軸が發動し、五十節の速力で圓を畫いて馳走し、敵艦隊の集合する港内若くは碇泊地に對し使用するもので、今日の實驗は不成功であつたが、攻撃法に就ては更に研究中の由である。

佛國に於ても海軍の制式雷撃機としてラテコエール二九八型を完成した。

該機は現代的大艦隊に對し恐るべき攻撃能力を有してゐると云はれてゐる。大群を以て敢行し、敵の高射砲々火を分散せしめ、其の間に何れかの雷撃機をして敵艦接近の機會を得しめて効果を奏するのである。

雷裝モーターボート

世界大戰の産んだもので主として潜水艦の驅逐に使用された。従つて主兵裝が爆雷である。現時は魚雷を主兵器とするモーター・トービド・ボートと改稱され、目標は戦艦襲撃にある。

佛海軍採用のエスコルツールと稱す



るものは一種の對潜水艦用で驅逐艦類  
似の小艇ではあるが、船體の構造を強  
固にし凌波性を加へて大洋上の行動に  
適せしめ商船隊保護に任せしめんとす  
るのである。

今次歐洲戰亂には此種快速艇は各國  
共活躍をなしたるが、其例として  
伊獨英の三國の快速艇の要項を掲げら  
れと次の通りである。

一、イタリアの快速艇(M.A.S.)

動力 ディーゼル機関

三、〇〇〇馬力

排水量 四六トン

武裝 機銃二

四五センチ水雷發射管二

艦長 三二メートル

艇幅 五・九メートル

吃水 一・四メートル

二、ドイツの快速艇

(シユネルボート、Eボート)

動力 不明

排水量 不明

武裝 機銃一

五〇センチ水雷發射管二  
乗員 一二

更に最近イタリア筋からの情報によ  
るとドイツ最近の快速艇は艇長一〇一  
三〇メートル、幅員三二五メートル、  
排水量一〇一四〇トン、乗員五一九  
動力五〇〇—三、〇〇〇馬力、速度三五  
—五〇ノット、水雷發射管や高射砲の  
他に人工霧發生装置や敷設水雷除去の  
掃海装置などを持つ怖るべき威力のも  
のだと記されてゐる。

三、イギリスの快速艇

英の快速艇に關する記載は詳細には  
分らないが、今次日支事變で我が軍が  
廣東攻略を行つたとき珠江の入口に現  
はれた時速約四十ノットの快速艇は英  
國よりの供給によるものだと云はれる  
から、英國快速艇の性能も略想像が  
つかわけである。

四、米國の快速艇

「モスキー(蚊)などと呼ばれるもの  
多數を就役、又は建造中であるが性能

其他は以上の諸國と大同小異で本年三  
月其最初の公試を行つた P16 は四六  
節を出し定員十名、航續二千哩、ピッ  
カード型電動機千二百五十馬力、發射  
管爆雷及機銃を備へて居る。

機械水雷

機械水雷は防禦兵器の範圍に入るも  
のであるが、近代本兵器の發達に伴ひ  
概ね何れの海面にも所要の深度、間隔  
を以て任意に敷設することを得るに至  
り、使用法の如何によつては多分に攻  
撃的性能を帯ぶるに至つた。

機雷種別には管制式、非管制式、無  
繫維式あり、管制式には感知發火式、  
電氣觸發式あり、非管制式には繫維式  
無繫維式あり、無繫維式には自動式、  
他動式あり、今各名稱に就き作働の大  
要を述べる。

電氣管制機雷 信號浮標、水中聽音  
機又はスモーク、ブイ等を使用して敵  
艦位置を探知し、陸上に發火する。

視發兼觸發機雷 陸上にて敵艦を視  
認發火するか、或は敵艦の觸雷により

發火する。

普通機雷(角式機雷) 一般に使用さ  
れてゐる標準機雷で、艦の外部に突出  
せる數本の角が艦船に觸れると内部の  
ガラス鏡が破壊し、其の藥液が電池の  
基版に作用し電流を起し信管に通ず  
る。

特種機雷(アンテナ機雷) 機雷鏡の  
上に一定の長さのアンテナを附し、其  
の何れの部分が艦船に觸れても爆發す  
る。即ちシーセルを應用したものであ  
る。

二重機雷 一筒が爆發するか又は敵  
に掃海されると、他の一筒が海底から  
上昇して有效な位置をとるもの。

潮流機雷 強潮流の海面では機雷が  
傾くので、流壓の少ない流線型にした  
もの。

潜水艦用機雷 潜航中敷設するもの  
で、筒の中より送り出すものと艦外搭  
載のものを離脱せしむるものがある。

連繫機雷 機法二筒を繋いで沈置す  
るもので、型式ではなく使ひ方による

名稱である。

網機雷 防潜網に附けるもの。

時限機雷 敷設後暫く海底に留まり  
調定時限經過後適當な深度に浮上する  
もの。

浮流機雷 浮沈水雷の一種で潮上か  
ら敵艦へ流しかけるもの、又上下に浮  
沈して一定の調整深度を保つもの、二  
種がある。

曳航機雷 爆雷を曳航して之を潜水  
艦に衝突させ、爆破の目的を達する爲  
に用ひられる。

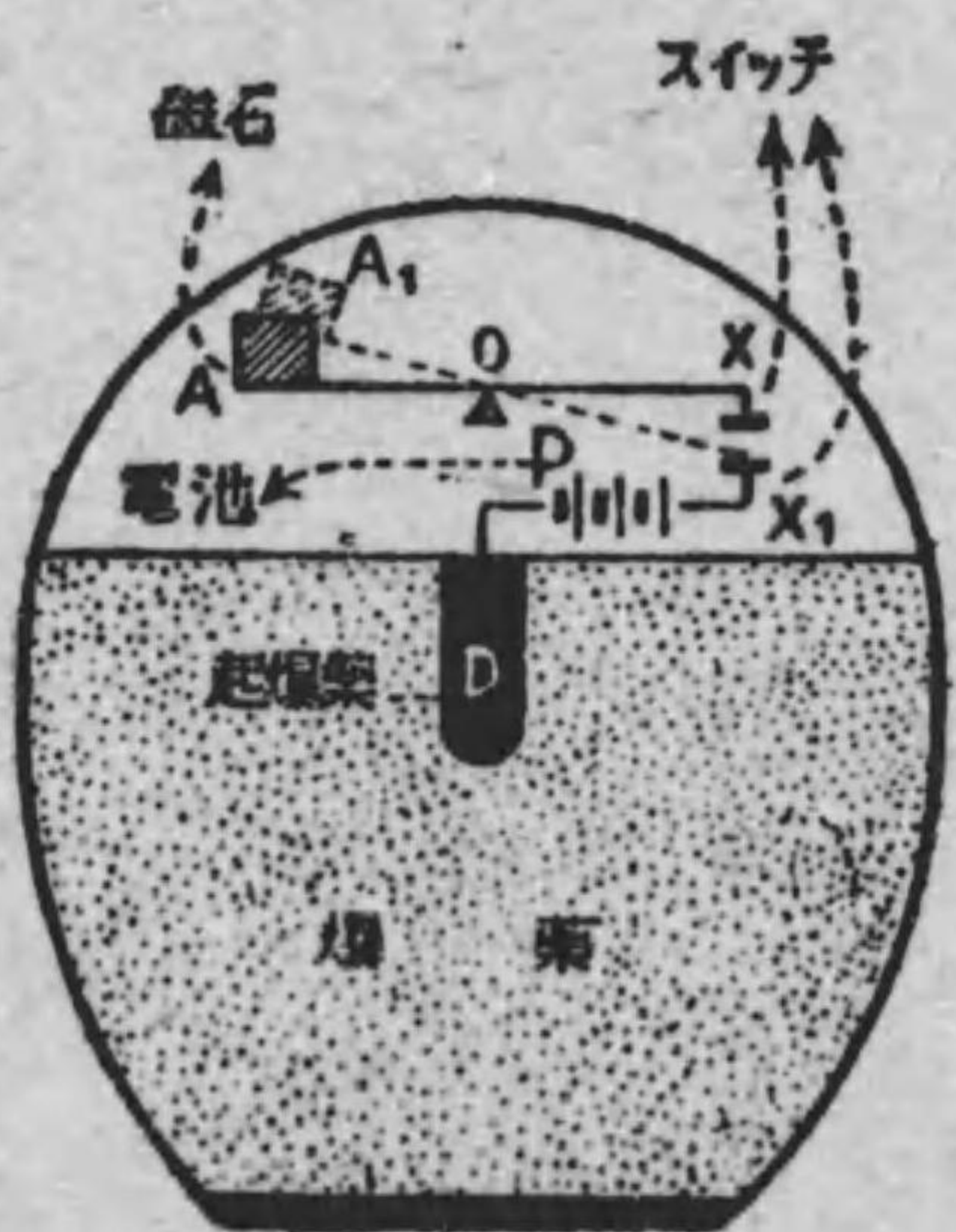
磁氣機雷 今次歐洲海上戰に初めて  
現出したもので、獨海軍が昨夏以來使  
用したと云はれるものである。

長さ八呎、直徑二呎、重量千二百斤  
裝藥量六百五十斤、外殼はシユラルミ  
ンの如き非磁性のものである。

本機雷は任意の海上に、飛行機によ  
りパラシュートを附し落下され海底に  
沈下敷設される。

作用は上方海面に船舶が來ると電磁  
針の一端が上つて切觸器に觸れ、電驛

器に作用して電池を働かせ、切斷器を  
閉ぢ爆發するのである。



對潜兵器

爆雷 圓錐形をなし、内部には爆藥  
と發火装置とを包藏してゐる、發火裝  
置は水壓により作働する如き機構を有  
し、豫め調整された深度に達すると、  
擊發發火によつて爆藥を爆發せしめる  
のである。爆雷は艦艇の艙部投下臺に  
搭載し、直接人力によつて滑落せしめ  
るか、又は臼砲をY字形に組立てたや  
うな爆雷發射砲を以て裝藥發火により  
發射を行ふ方法がある。爆雷砲の射程  
は約五十米で發射の方向は艦艇の操縱



により目標指向せしめるのであるが、旋回俯仰自在の遠距離爆雷砲を装備するものもある。

爆雷を搭載する艦艇は、専ら潜水艦特に使用する快速内火艇を始めとし、沿岸警備に任ずる哨戒艇、又は艦隊の護衛艇として其の前後左右に随伴する驅逐艦等である。

水中聴音機 出現當初のものは潜水艦狩に従事する艦艇の艦尾より曳行し或は陸岸基地より水中に設置し、潜水艦推進器翼の回轉によつて傳播される音響を電氣的裝置を介して聴取するにあつたが世界大戰中幾多の實驗を経て漸次發達を遂げ、各種艦艇の艦腹に之を裝置するに至つた。米、獨、佛各國海軍に於ても用ひてゐる。

將來戰に於ける新兵器 (伊紙所載)

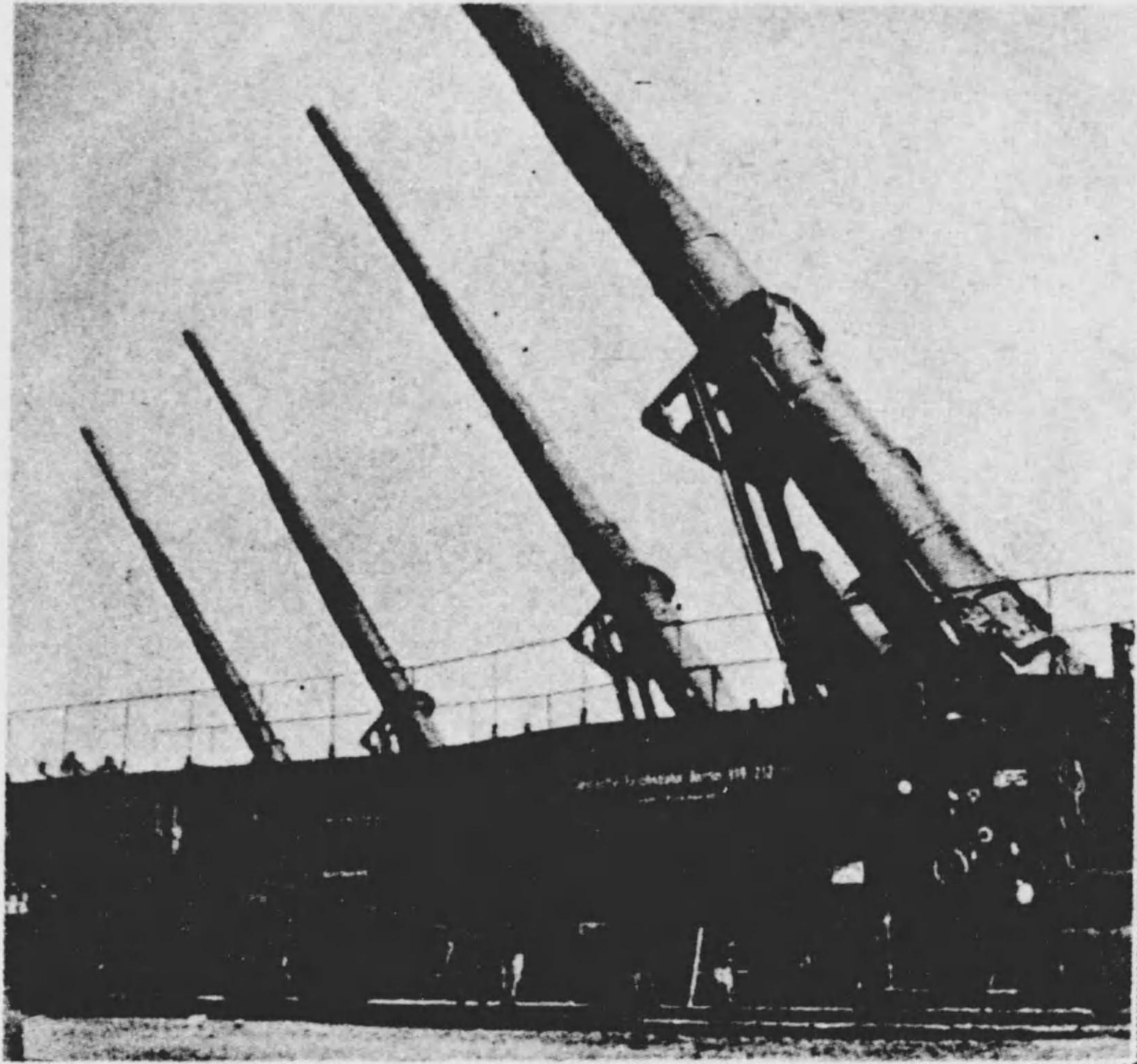
- 1 無線操縱  
船舶、飛行機、戰車等
- 2 爆撃、雷撃の遠距離操縱を含む  
船舶特に潜水艦に對する超音波の應用  
標定、測深、電話、方位測定等
- 3 不可觀赤外線の利用  
暗中又は霧中寫眞暗中の光學通信
- 4 テレビジョン軍事的應用
- 5 遠隔爆、破誘導用輻射線
- 6 ロケット裝置及ロケット彈
- 7 輻射線、電場又は磁場の低下に依る機關停止裝置  
飛行機、自動車、自動自轉車等
- 8 強力光線或は輻射線に依る眩惑、目潰し
- 9 殺人稔射線、人體組織破壞線
- 10 紫外線、ラヂウム放射線、陰極線、超音波、電波、電磁波、同超短波等  
未知の世界或はラヂウム等に存在を豫想せらるる恐るべき新爆藥
- 11 無音、無焰、無煙火砲或は電磁氣砲
- 12 高壓電氣に依る電氣鐵條網類
- 13 遠心力利用機關銃或は電動機同調機關銃
- 14 飛行潜水艦
- 15 飛行戰車
- 16 飛行機阻止壁
- 17 落下傘式氣球に全屬線及爆藥を附したる空中阻止彈



砲射高の軍陸が我



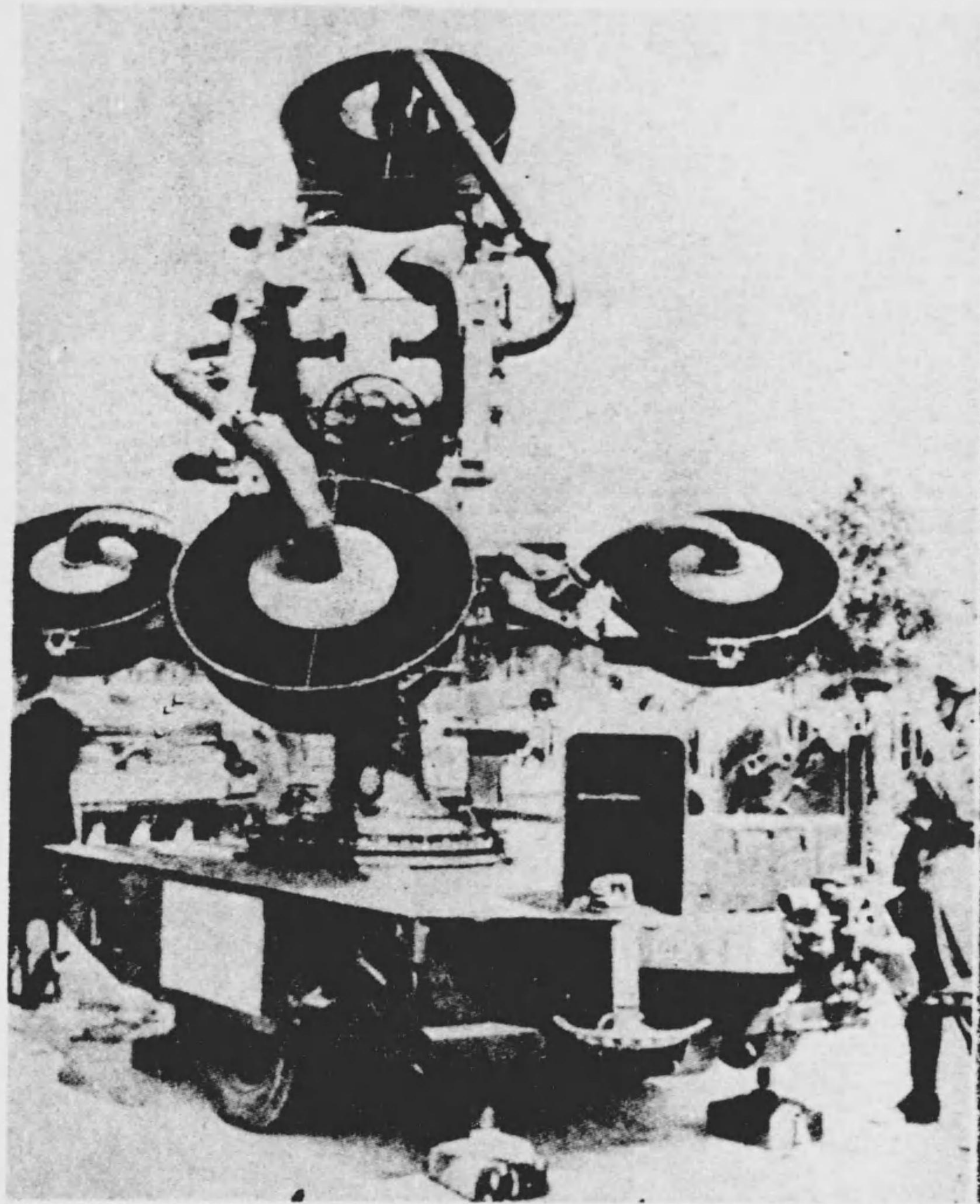




列車砲 (ドイツ)



工場の空を護る  
(防空観測と高射砲)



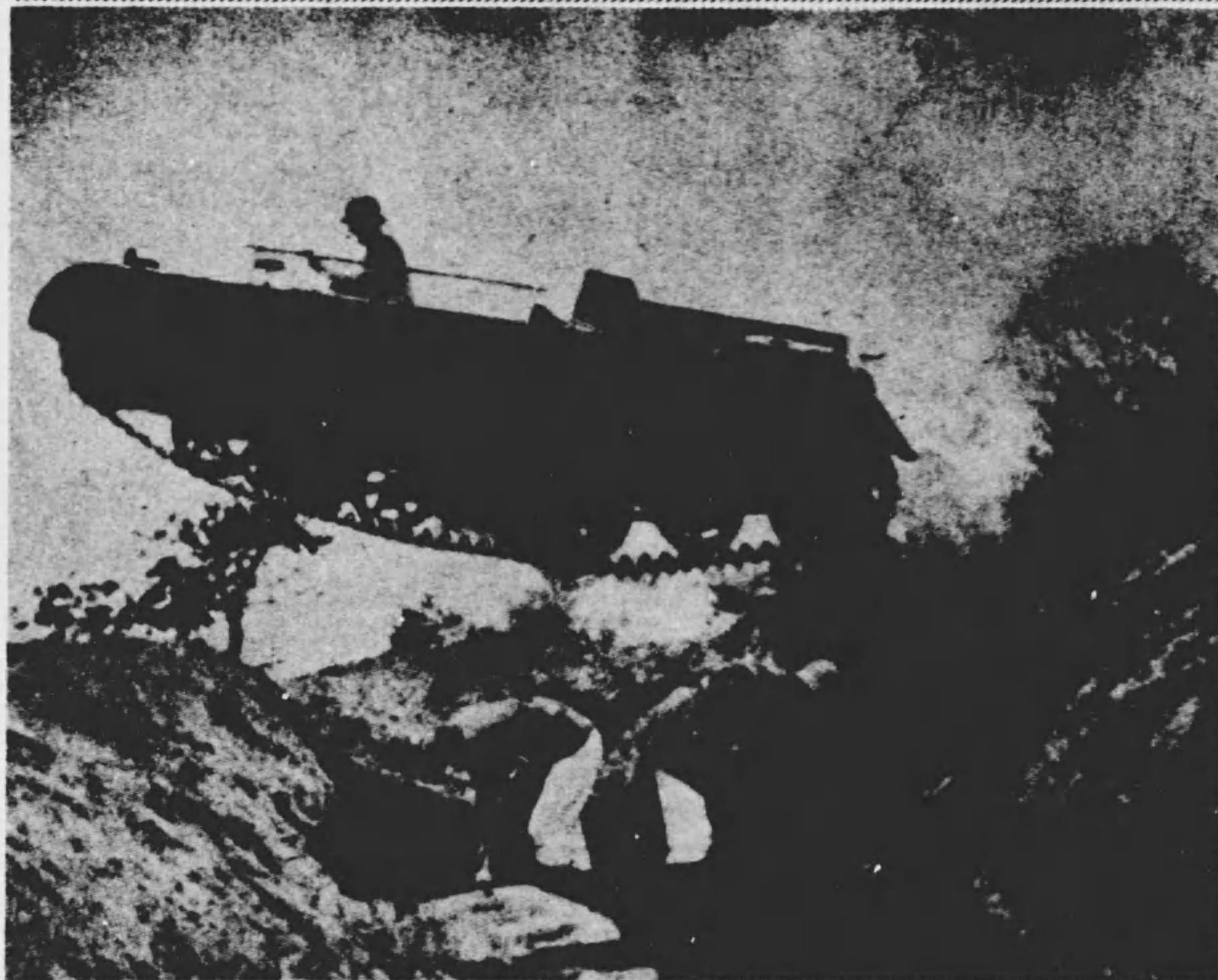
聴音機 (フランス)



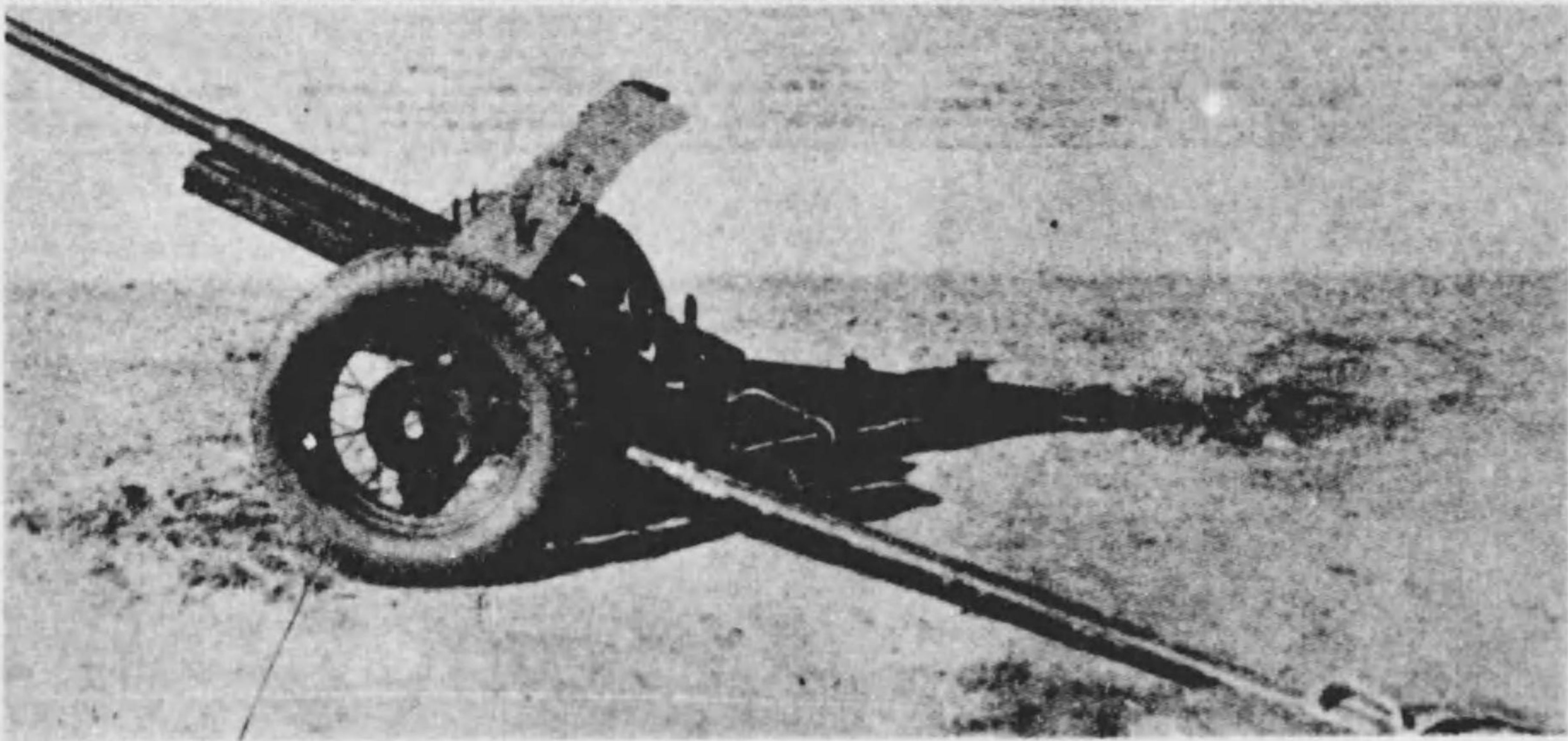
(聯ソ)銃撃狙ルベイナス



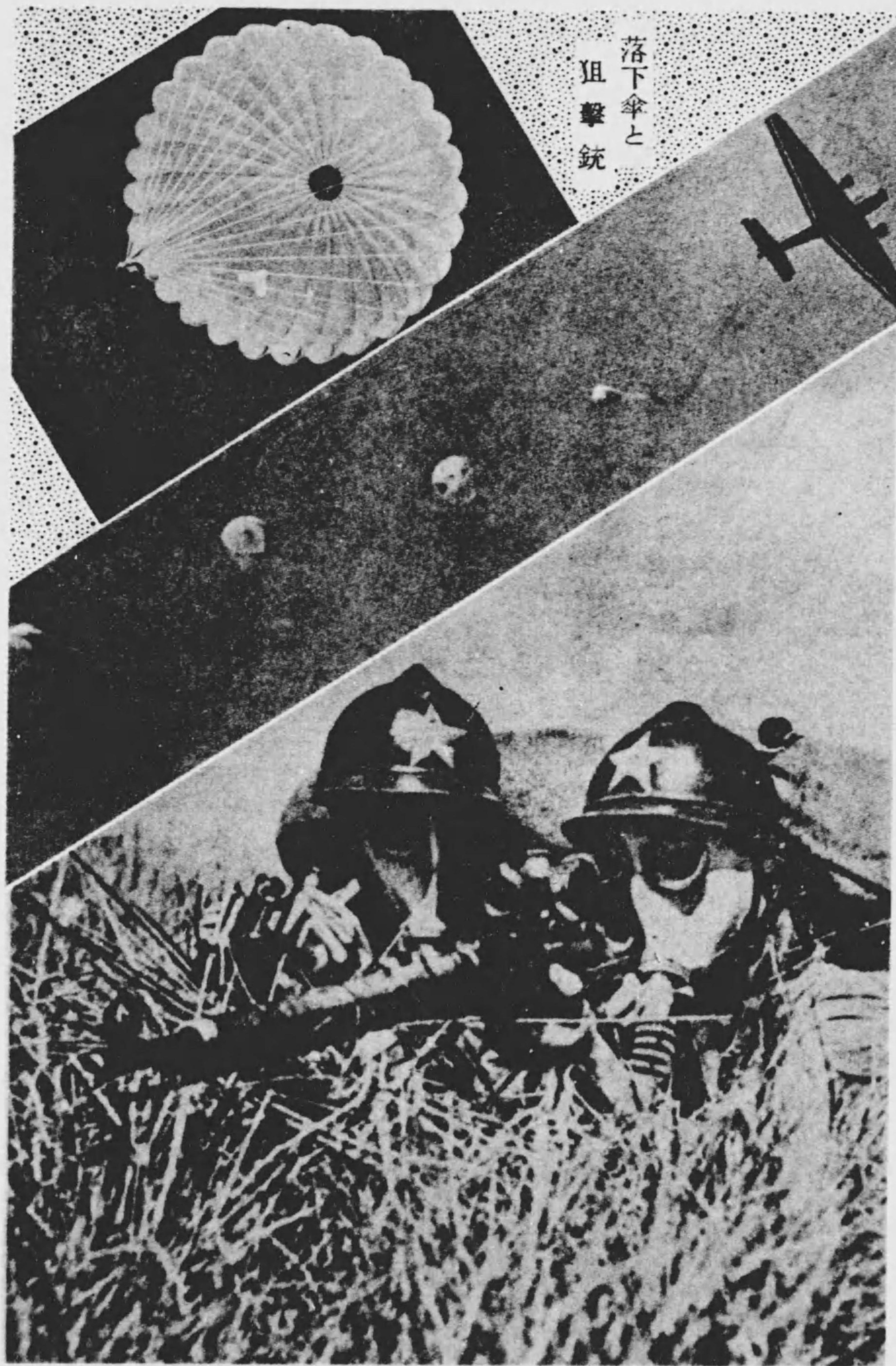
跳ぶ獨軍戰車



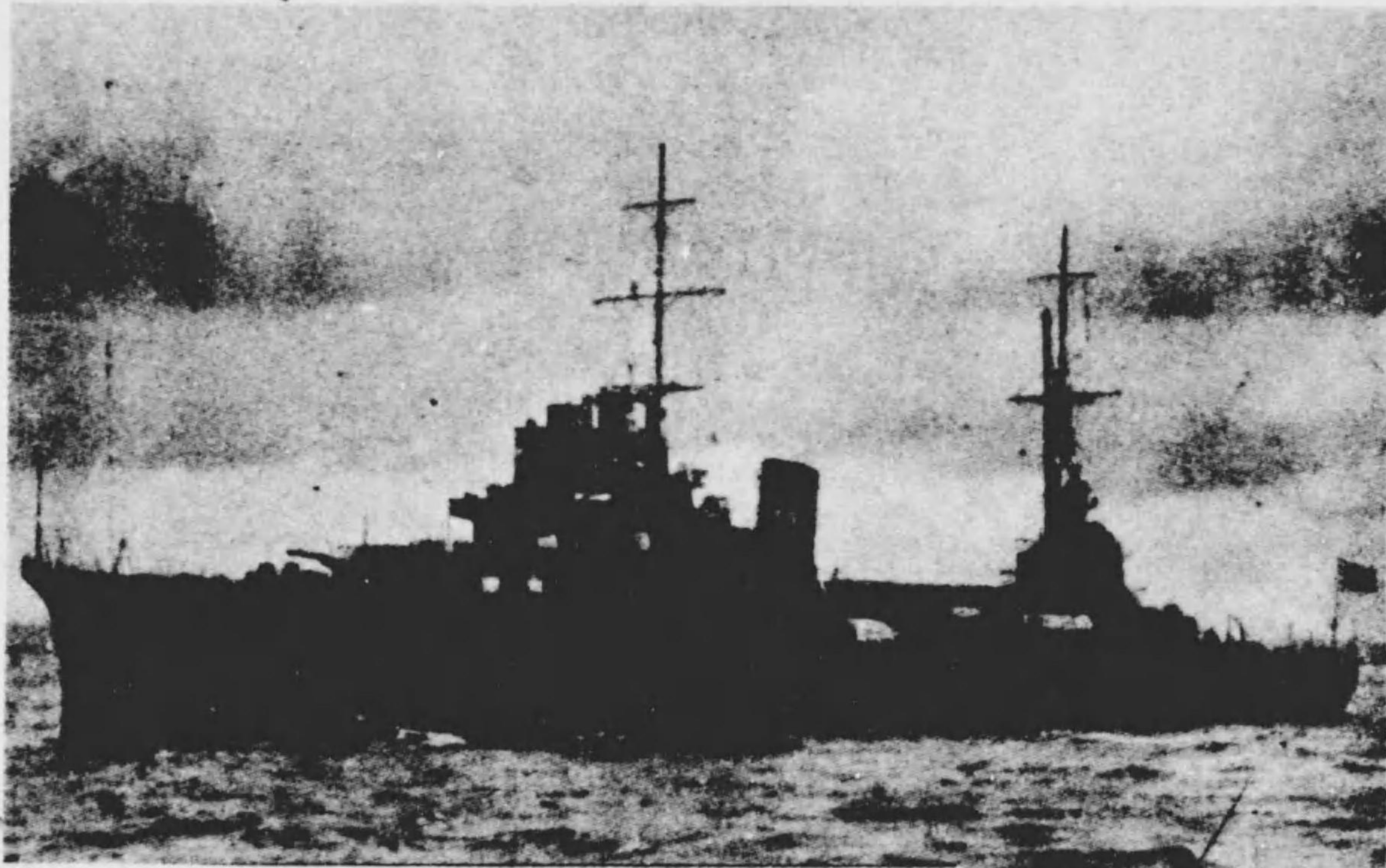
一九四五年四月五日對戰戰車砲(ソ聯)



落下傘と狙撃銃





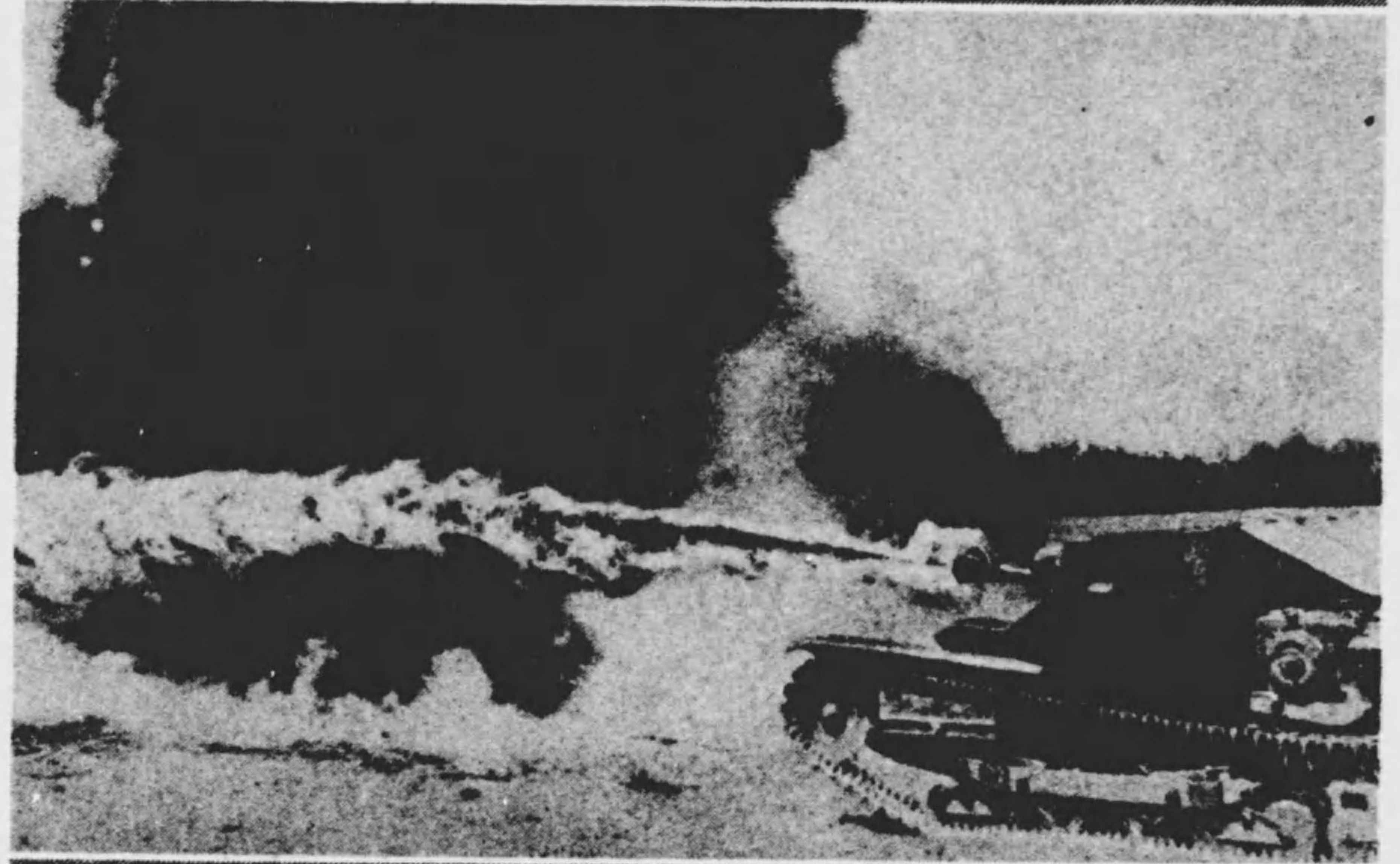


島鹿艦軍新國帝

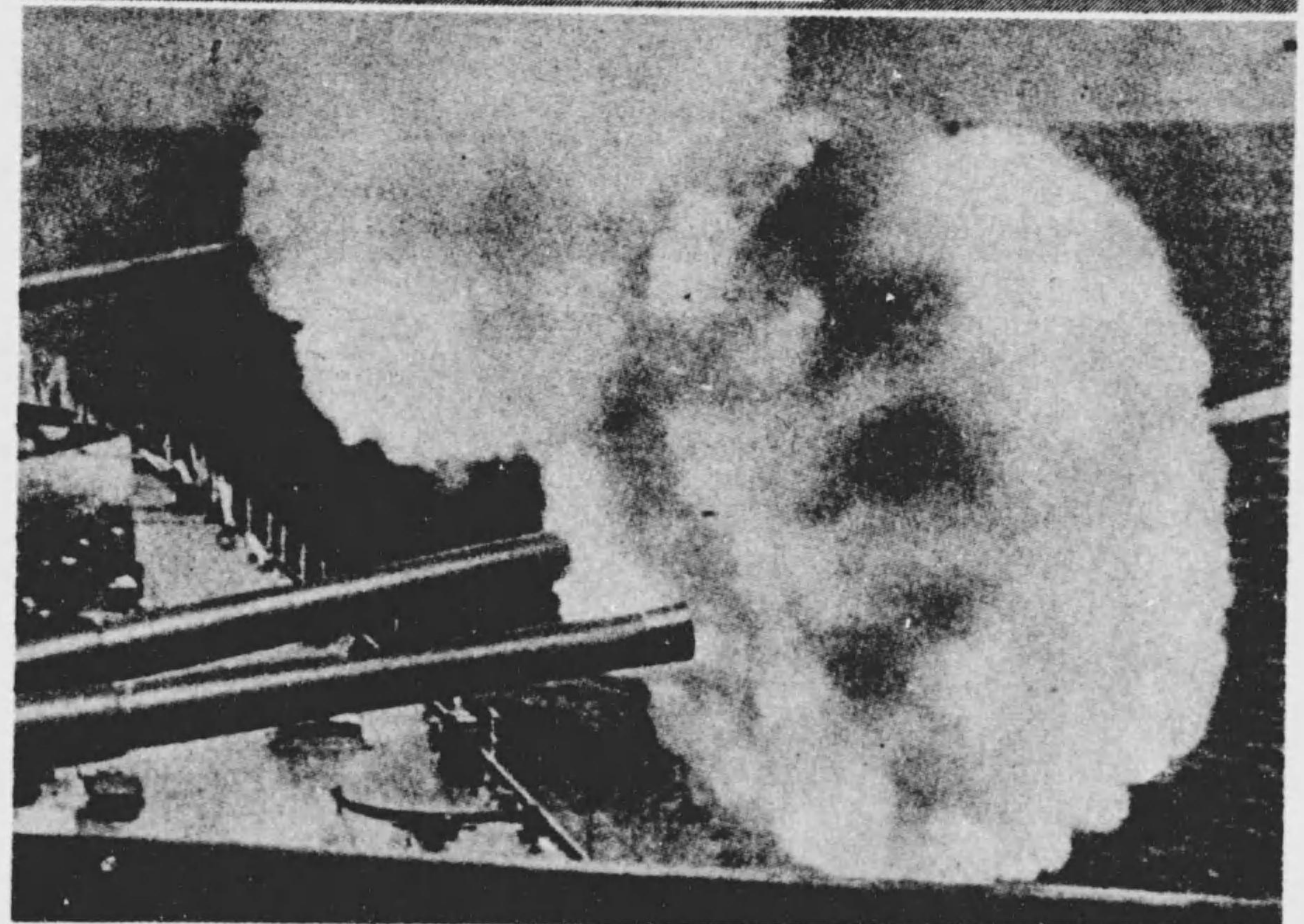


我が聯合艦隊の勇姿

車戰射放焰火

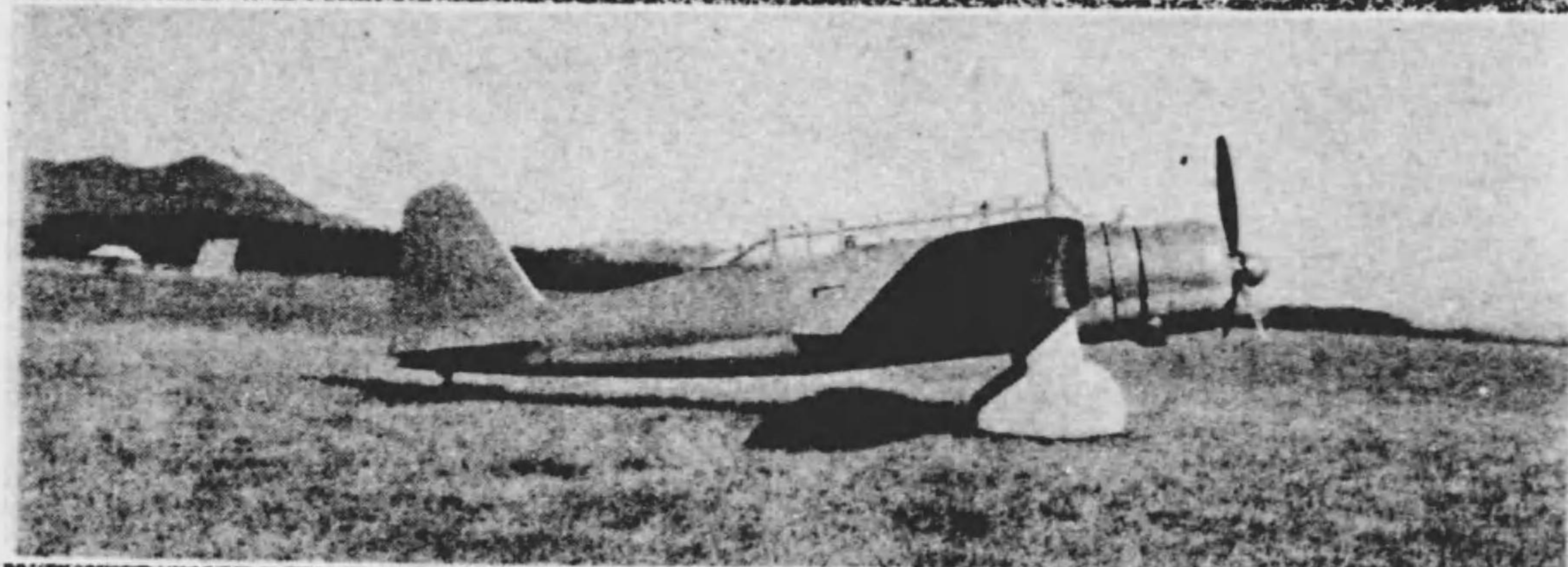


射齊の砲艦

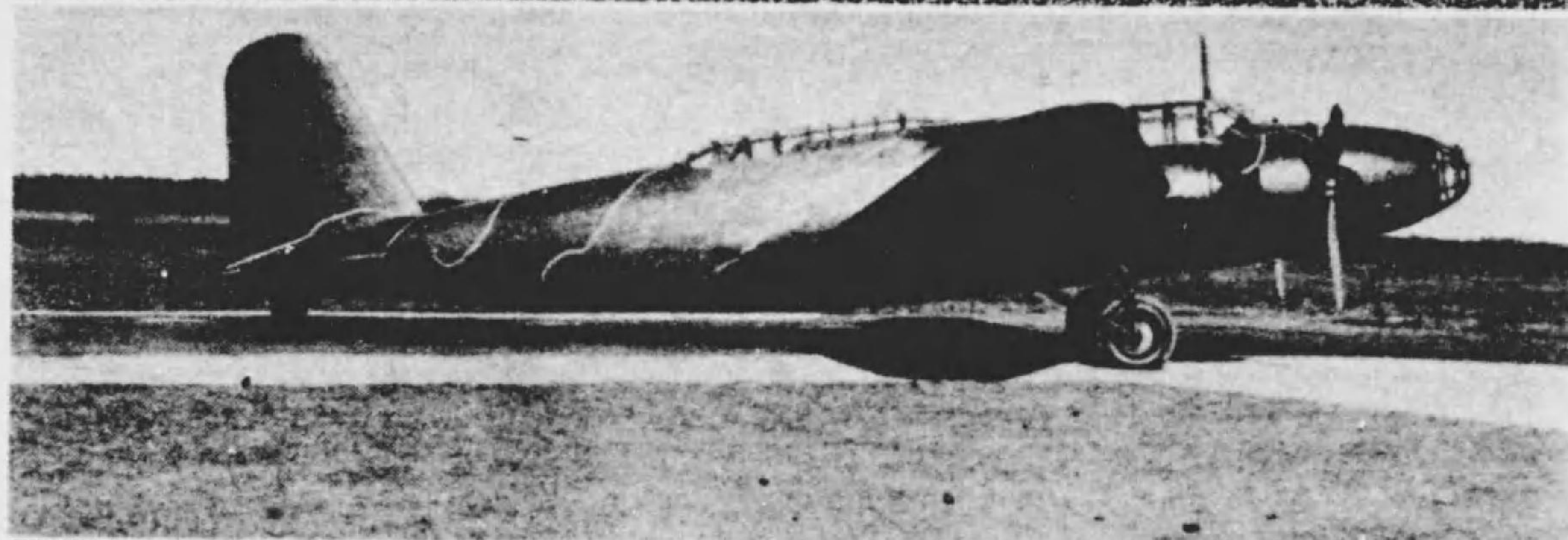




機 撃 爆 軽 軍 陸



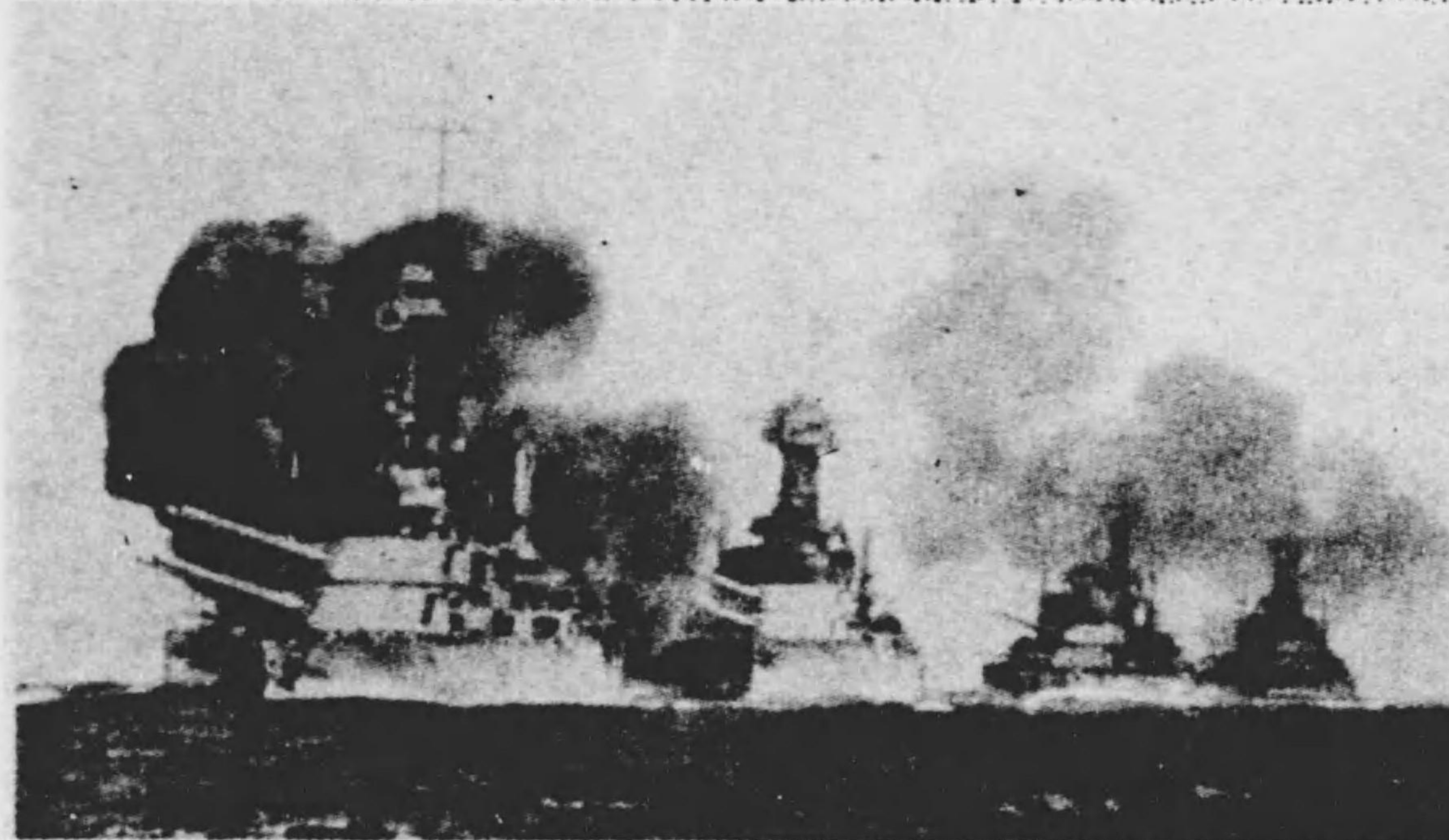
機 撃 爆 重 軍 陸



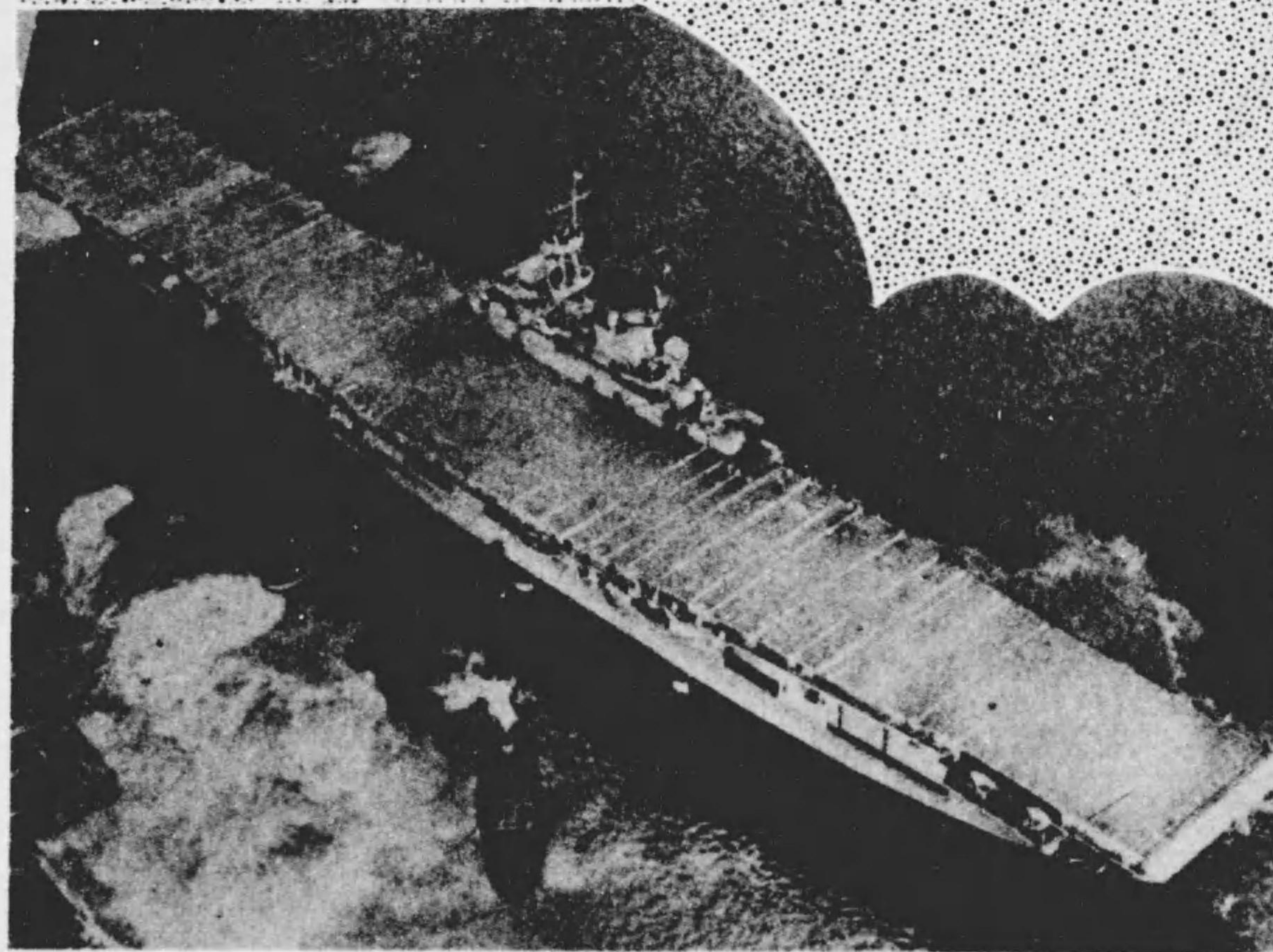
機 闘 戦 軍 陸



容 威 の 隊 艦 力 主 國 米

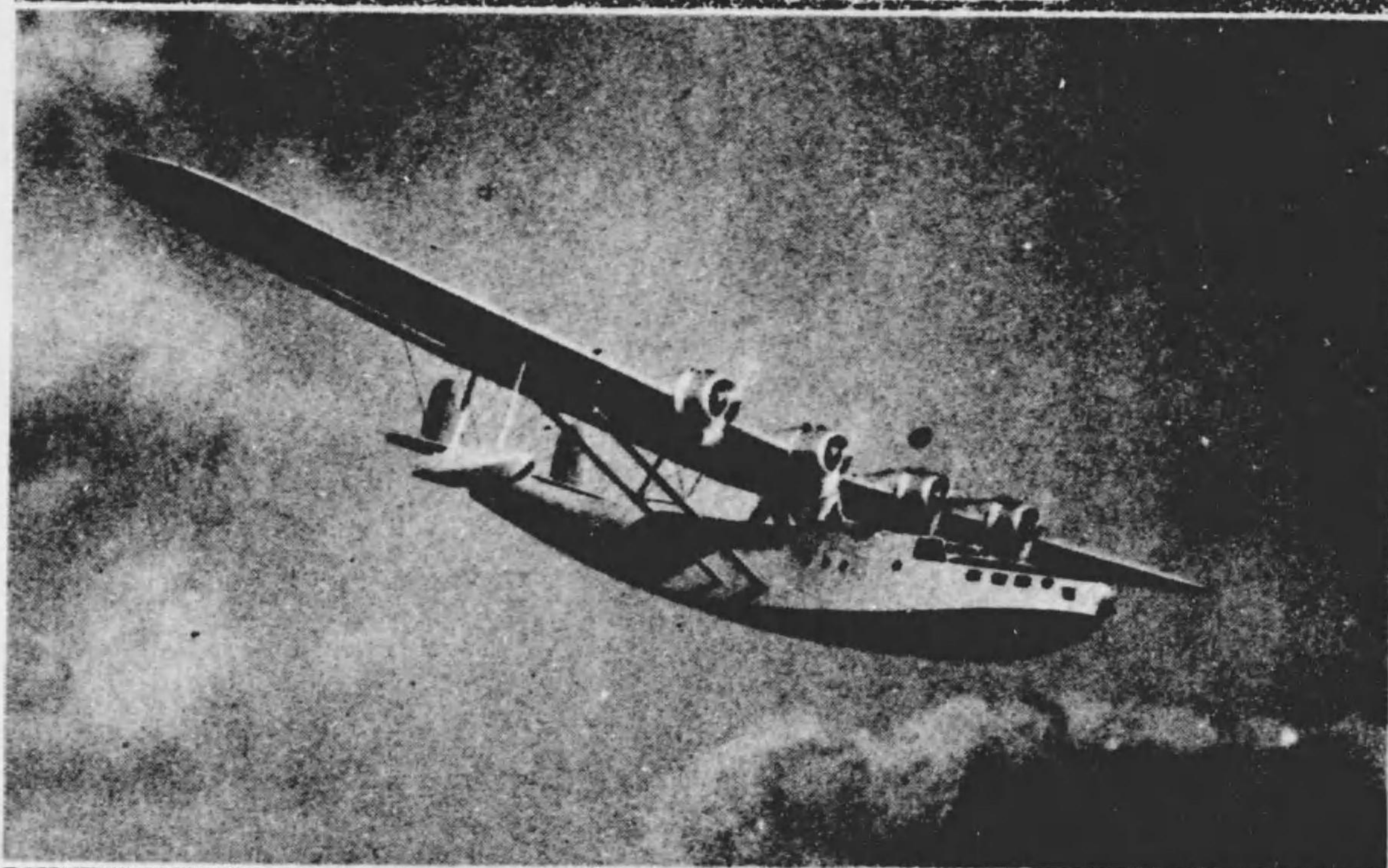


號 プ ス オ ウ い し 新 も 最 ち ろ の 艦 母 空 航 つ 持 の カ リ メ ア

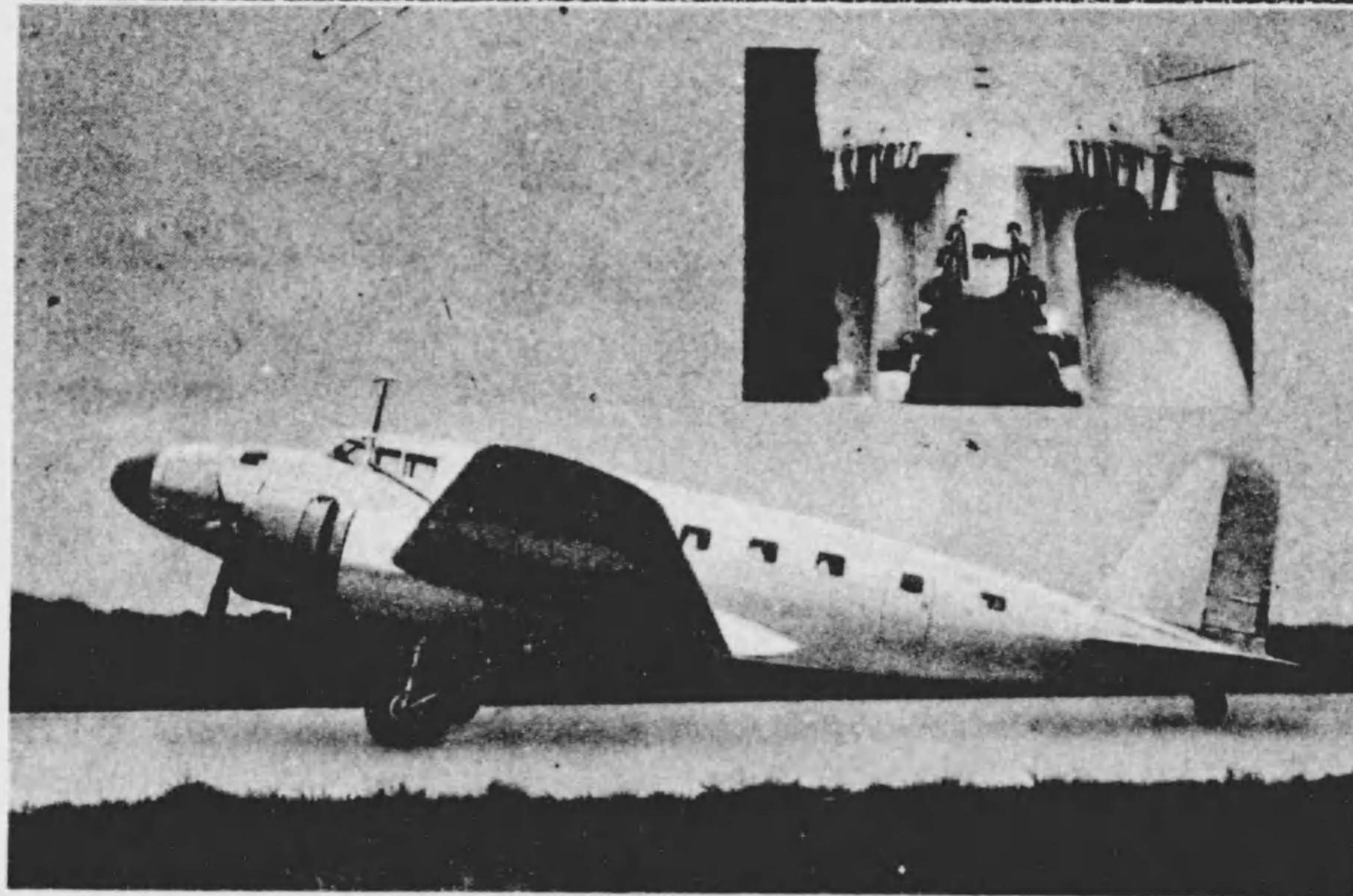




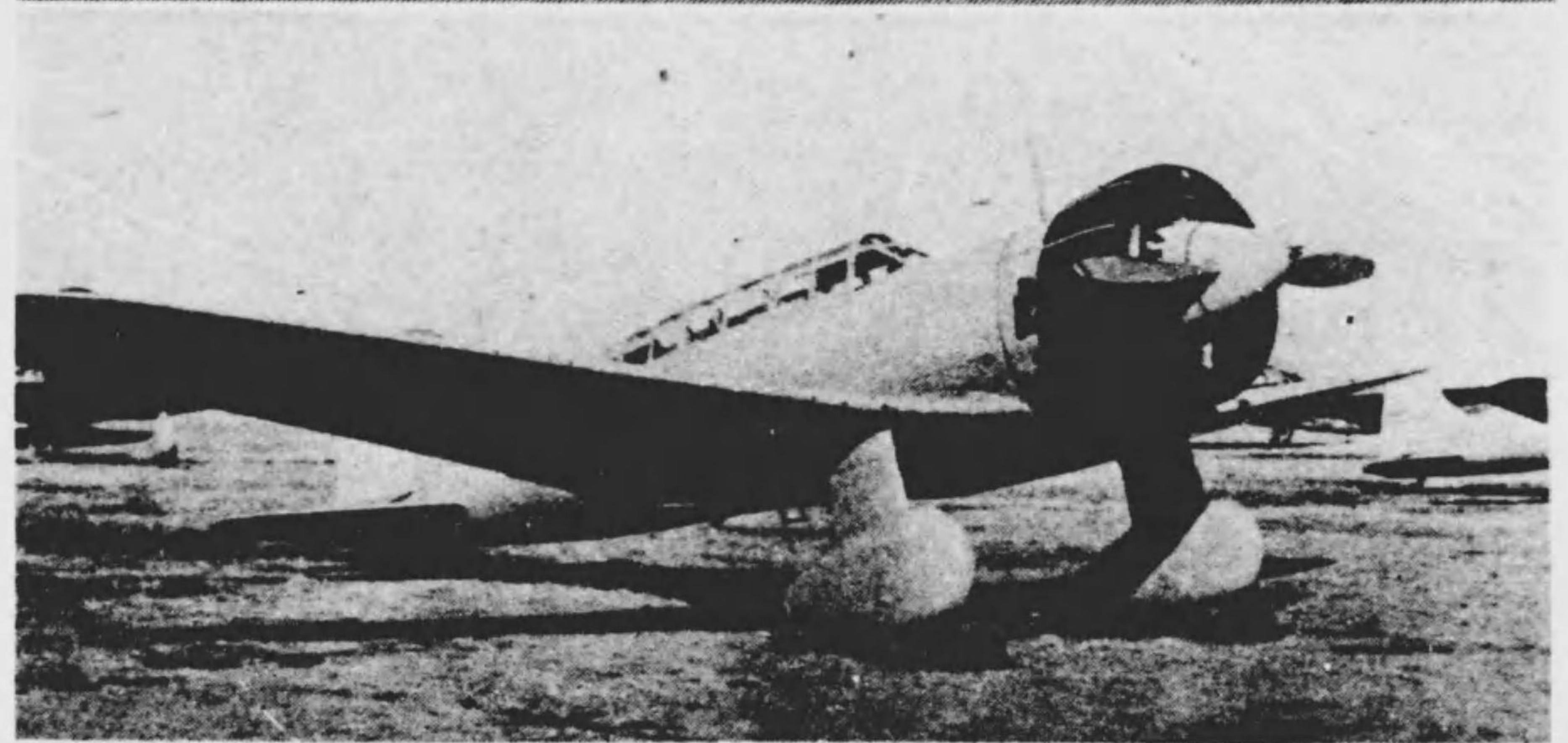
艇行飛型大式西川



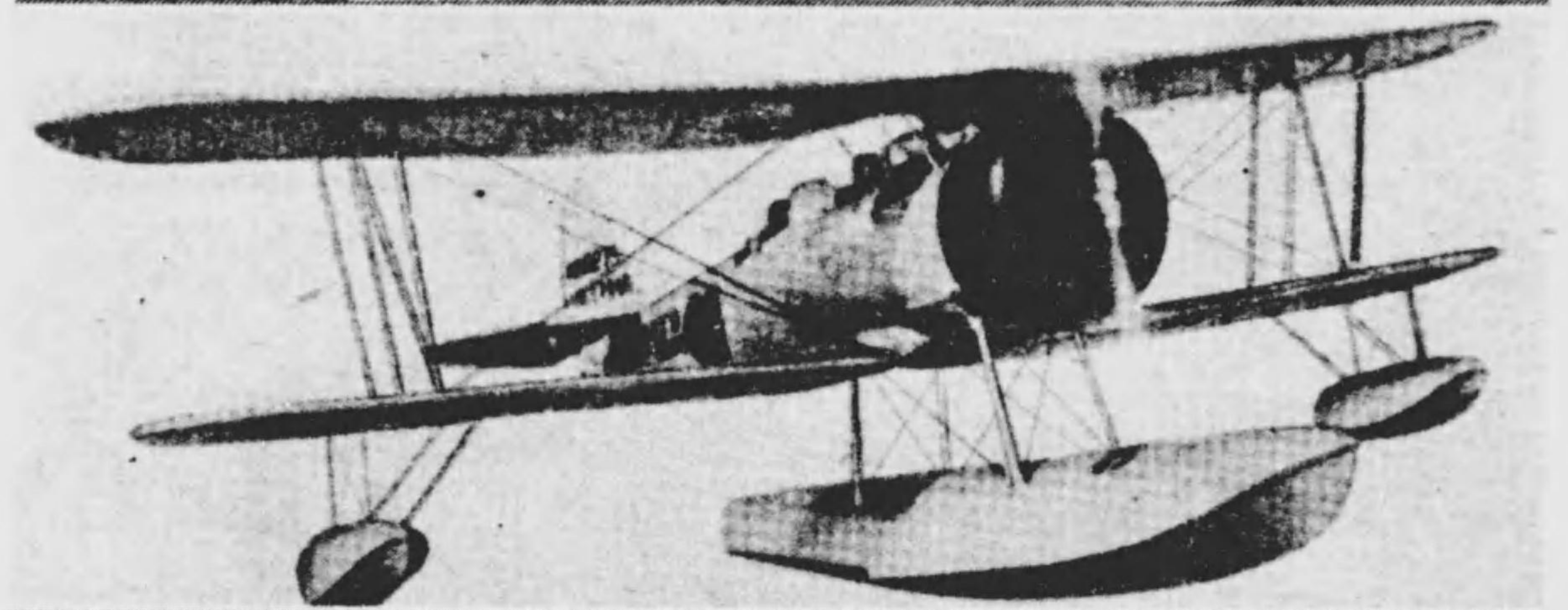
機客旅型O=C M菱三



機察偵軍陸



機察偵上水軍海

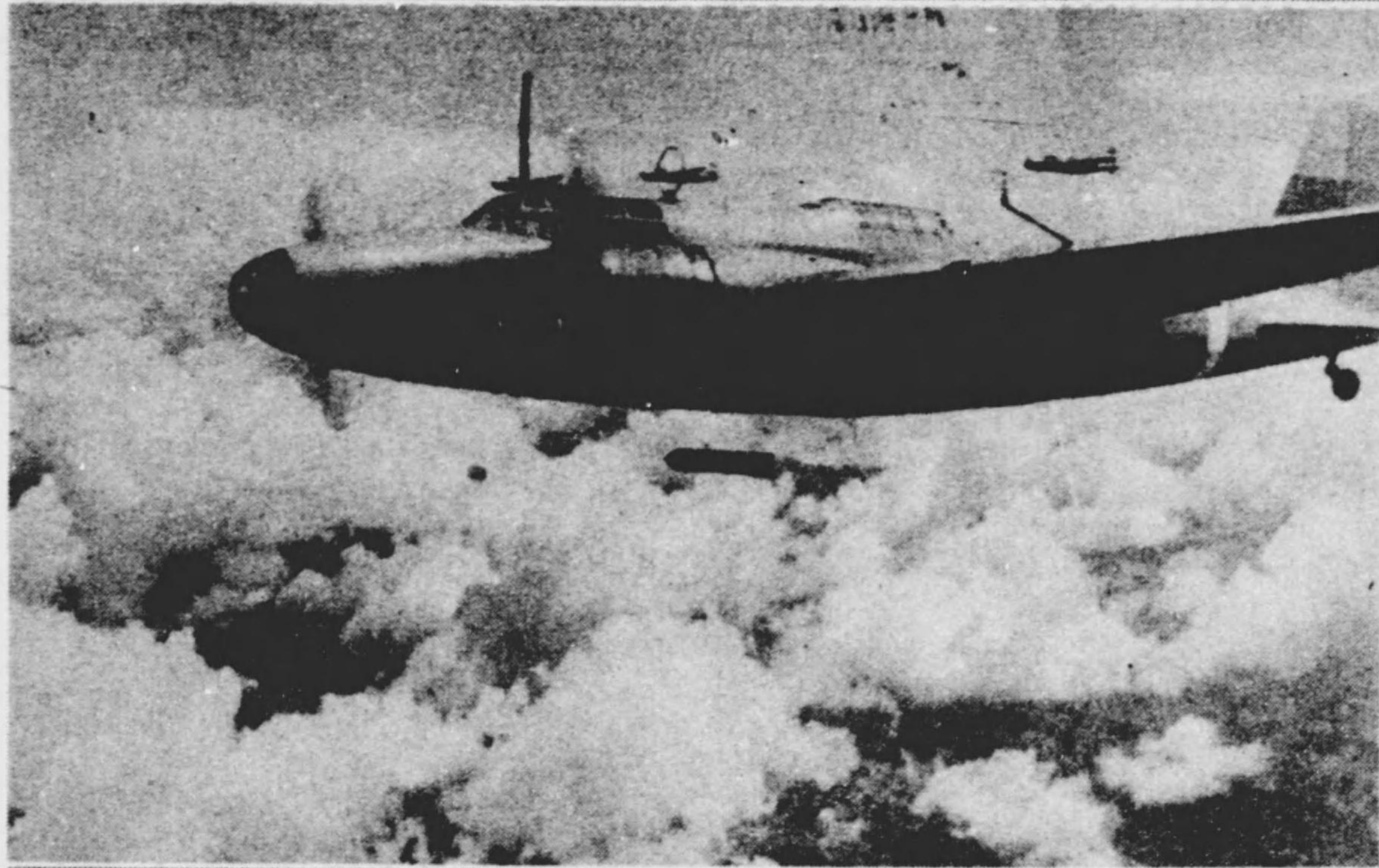


機送輸者患軍陸

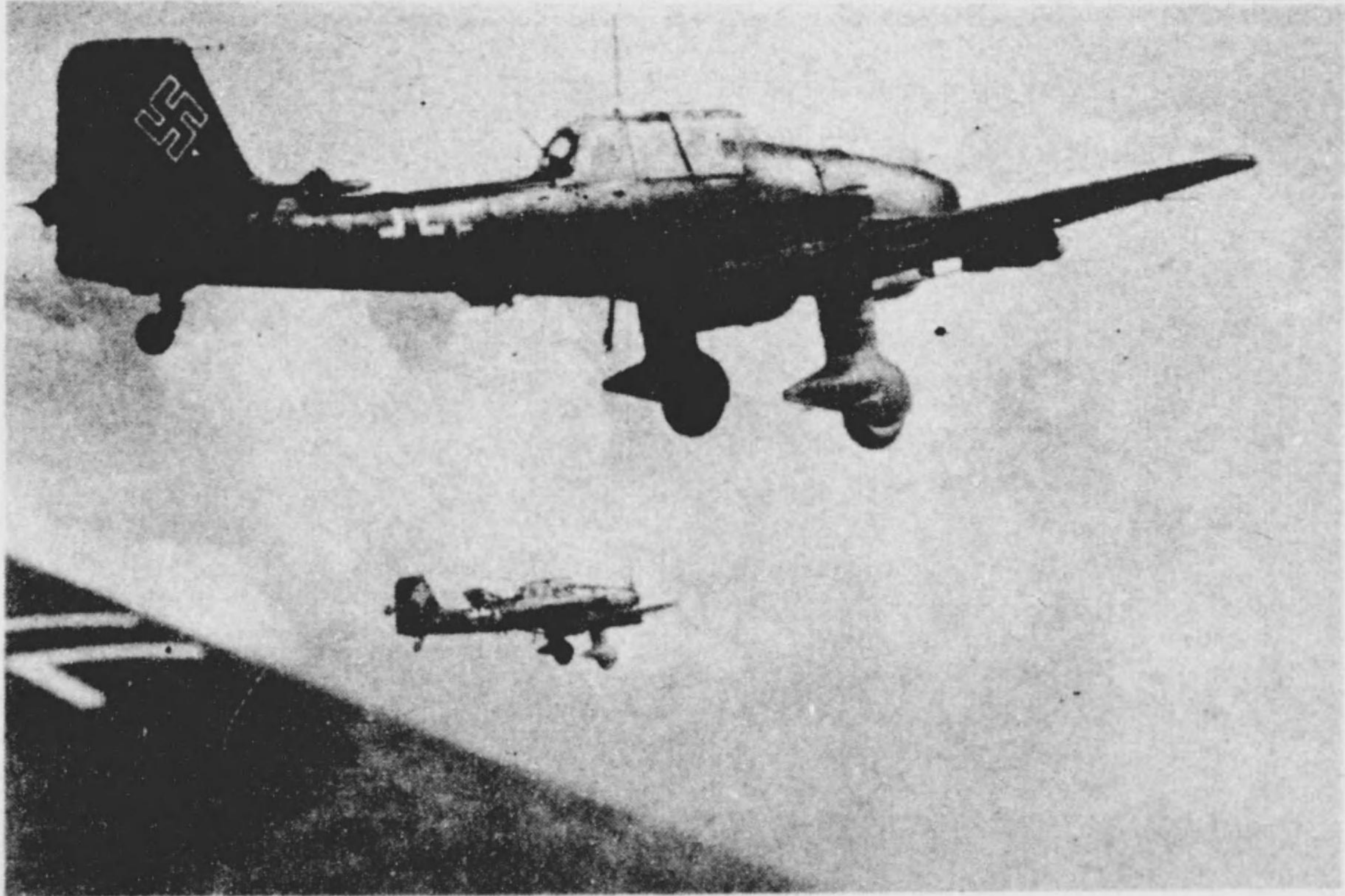




那利の下投弾爆の機撃爆重新軍陸



機撃爆下降急七八UJスーカユ獨ふ向に撃爆士本英





# 航 空

## ○航空の重要性

航空の重要性は「空を制するものは世界を制す」の一言に盡きる。事實、航空は世界文化の最先鋒を衝くものであつて、一國航空の振否は、平時に於ては國策遂行上大いなる影響を有し、戦時に際してはその勝敗を決する鍵として、國運の盛衰を左右するものである。今や、空氣のあるところ總て航路である。戰場である。航空に無關心であり、航空に熱意なき國家は、世界の落伍者たるを免れ得ぬ。これを今次支那事變四ヶ年の跡を偲び、又、今次歐洲戰爭に於ける獨逸軍の活躍に懲して、人的、物的兩方面に於て、質・量共に優秀なる空軍が如何に偉大なる戰果を擧げたかに依つて見ても、明瞭なるところである。

帝國々軍航空、帝國及列國民間航空  
今次歐洲戰爭に於ける獨逸空軍の活躍  
波蘭、白蘭、北佛各戰線及英本土  
日本人航空記録、航空計及關係法規  
附表一軍用機、民間機等十表

尙述べれば、嘗て航空機の登場せぬ時代、イタリアはエチオピアと交戦して撃破された。しかるに、先次の伊エ戰爭に於ては、イタリアは精銳なる空軍を擁し、國際聯盟の反對を押し切りエチオピアを一擧に征服してしまつた。當時、イギリスは地中海上に大艦隊を擁し、イタリアを極度に牽制せんと試みたが、イタリア空軍の優秀を恐怖して、遂にその目的を達成することが出来なかつたのである。即ち、制空それ自體が戰捷の重大素因をなすものなのである。

今や、列國は強大なる空軍建設を國防上の一大事業として多數の技倆卓拔せる人材と、多量の優秀なる飛行機とせるに盡力してゐるのである。然し一國の航空勢力、國防力といふものは單に軍航空のみをもつて構成さるべき

ものではない。軍航空と、民間航空との兩者が完全に發達し結合されてこそ、始めて一國の航空勢力、國防力が構成され、その能力が發揮されるのである。

即ち、今後の空軍は純然たる戰鬥用飛行機のみでなく、輸送機、商業機等の備へを必要とするのであるが、これ等の機種も、平時民間に發達完備されてゐれば、有事の場合には之を徵發する丈で事足り、空軍編成擴張のために莫大なる國帑を投ずる必要もない。又戰時にあつては、搭乗員の戦死負傷等によつて、短時日に空軍勢力は減少されるものであつて、その補充は實に容易なことではない。しかし民間操縦士を多數に有してゐるならばその補充も亦急速に達成することが出来るのである。

尙又、某國將校が「航空は彈丸と同じく消耗品なり」と喝破した如く、事實航空機はその性質から相互に損害を蒙むることが甚しく、戦時に於ける第



一線機は、通常二三ヶ月にして損耗されて終ふのである。飛行機が長期の貯蔵に堪へ得るものであるならば、平素より多量に整備して置かれるのであるが、飛行機の進歩發達はその止まることを知らず、昨日の新鋭機も明日は時代遅れと化して、使用不可能たるをまぬがれないのである。即ち、戦時に於ける甚大なる損耗を急速に補充するために、平時より航空工業の組織經營に弾力性を有せしめ、如何なる非常に際しても、その生産能力を擴張出來得るやうに設備してゐなければならぬのである。列國が盛んに民間航空・航空工業の振興に盡力してゐることも凡て首肯出來ることである。

我が民間航空を見るに「航研機」「ニッポンニ神風」等の輝しき榮譽、驚異的な進歩はあつたが、歐米列強に比較して未だ全面的に誇り得ることが出來るであらうか。その必要とする質に於ても、又量に於ても一歩も二歩も否數歩も未だ遅れてゐると云はざるを得ない。

得ないのである。飛行場に就いて見ても、アメリカは約二千三百、ドイツは約二百、本邦より狭いイギリス本土のみにしても百二十餘の飛行場を設備してゐるのに比し我國は僅かに四十餘ヶ所に過ぎぬ。民間機に於てはアメリカの約一萬一千機、イギリスの約一千七百機、飛行操縦士はアメリカの二萬六千人、イギリスの約六千人、我國はこれに遠く及ばないのである。これに依つても我民間航空の如何に振はざるかを立證出來るのである。列強の水準線まで我民間航空を引上げることは我國民に課せられたる義務としなければならぬ。元より之は容易な事業ではないが優秀なる飛行機を安價に生産し、技師卓抜の飛行士を急速に養成し充實すると共に、國內飛行場の増設、航空路の開闢、航空工業の振興等に官民一致して努力しなければならぬ。

今や、我國は、世界情勢の急變に從つて、高度國防國家建設を目指し銳意邁進してゐる。東亞共榮圈を確立し、

經濟的自給自足の目的を達成するため東亞の廣大なる區域に亘つて緊密な連繫を維持し、國威を保持することが絕對に緊要である。これがためには航空機の如き優秀なる機動性を有するものを利用しなければ不可能である。

再び云ふ「空を制するものは世界を制す」と。我々は急速に我國の航空文化の發達を圖り、質的にも量的にも卓絶した航空勢力を堅持し、東亞共榮圈確立、進んでは世界平和のために儼然として位してゐなければならぬ。

○陸軍航空部隊の活躍

陸軍航空部隊はその本來の使命が、陸軍地上部隊と協力して、その視覚となり觸角となることにある結果、比較的華やかな舞臺に乏しい。従つてその戰績は世間に宣傳される種類のものが少ない立場にある。だが、それだけに地上部隊の赫々たる戰果の蔭には、常に陸軍航空部隊の、絶間ない、不斷の協力が大きな功績を捧げてゐることを

忘れてはならないのである。

事變勃發と同時に擴大なる全支にわたる制空權を掌握し、寧日なく活躍を續けたその陸軍航空部隊も、その後ますます整備擴充されて、ノモンハン事件には、戰史未曾有の大戦果を擧げて世界を驚倒させた。爾來ますますその威力を發揮して、事變三、四年間のわが陸軍の活躍は、蜿蜒四千料に亘る全戰線における陸上部隊の協力作戦から次第にその餘力を驅つて海軍部隊とともに、進攻作戦を完行、全支にわたる敵重要據點の爆撃を開始し、さらに奥地重要據點に對する遠距離爆撃にもその威力を發揮した。

その中でも、最近一年間に於ける目覺ましかつた戦績を拾つて見れば、昭和十四年十一月から十二月にかけて行はれた「北海上陸、南寧殲滅戦」に協力して赫々たる武功を樹てたのを手初めに、敗殘の抗日軍が最後のあがきとして内外への虚勢示威作戦として蝗螂の斧をふるつた所謂「冬季攻勢」に、

十四年十二月から今年五月に亘る「廣東北方掃蕩戦」に、十五年二月の「山東半島掃蕩戦」に、零下數十度の酷寒の地蒙疆地區に轉戦、傳作義軍を完膚なきまでに殲滅した「五原附近掃蕩戦」に、同じく一月二月の間に行はれた「浙東掃蕩戦」に、四月五月の間の「晋南作戦」及び「江南掃蕩戦」に、何れも地上部隊と緊密なる協力の下に大なる戰果を獲たのであつた。

湖北河南兩省にわたる敵のいわゆる第五戰區は、敗殘の首都重慶防禦の第一線として蔣介石が最も力を注いで、李宗仁を總指揮として湯恩伯、孫連仲、張自忠ら麾下の抗日軍での精銳を配置し、しかも同戰區は武漢の要衝に近接してゐるので、懲りずにはば／＼わが軍の虚を狙つて治安の攪亂を計つてゐた。

わが軍は五月一日を期して信陽、隨縣、安陸の線より突如行動を開始し、前面に對峙せる敵約三十餘萬に對し一大殲滅戦の火蓋を切つた。この襄東作

戦に次いで、李宗仁自から指揮する三十九ヶ師約三十五萬の敵が盛んに武漢を強化する襄西方面に向つて作戦、六月十一日夕刻、遂に宜昌を占領した。宜昌は大型汽船の溯江し得る最奥地で揚子江有数の貿易港である。従つて事變後殊に武漢攻陥後蔣政權の四川運入以來、抗戦力補給の中軸輸血路としてまた重慶正面の最後の防壁として、蔣介石はこゝに麾下中央軍の精銳を駐屯せしめ、軍事經濟雙方の生命線として死守してゐたものである。故に宜昌陥落は極度に重慶政權を驚かし、その經濟的影響はもとより、更に軍事上直接重慶の正面を脅かされる態勢となつたのにいたく狼狽したのであつた。これを見てもこの宜昌作戦がいかに意義あるものが判明するのであるが、わが陸軍も全線に亘つて地上部隊と協力してこの作戦を容易ならしめたことは勿論である。

わが海軍の全支沿岸封鎖とともに、援將物資の輸送は完全に封鎖されてゐる。



るにも拘らず、第三國の手に依る物資輸出入はなほ繼續され、殊にその大動脈は香港、ビルマを通ずる英國系の援蔣ルート並びに佛印及廣州灣を通じての佛國系援蔣ルートが僅かに残されたる輸血路であつた。依て帝國は屢々外交的折衝によつて英佛の反省を促すとともに、わが航空部隊は實力を以て粵漢線、滇越線を爆撃してこれを遮断したのであつた。佛印については、日佛現地當局においての話し合ひの結果、九月二十二日協定の成立を見、二十三日歴史的の佛印進駐が開始されたのであつたが、英國は一旦閉鎖した瀾滄ルートを再開したため、海軍航空部隊は直ちに追攻効果橋其他のルート要衝を爆破してこれを遮断したのであつた。かく、全支に亘る作戦に協力したる外、陸軍航空部隊は、先づ十四年末の十二月二十六日から二十八日にわたる三日間連續、敵赤色の最大據点であり且敵軍再建の本據たる甘肅省蘭州への大空襲は、稀れに見る大規模の猛襲で

事變初つて以來の大編隊をもつて赤色援蔣ルート據点の潰滅を企圖したものであつた。重慶を中心とする四川省奥地の爆撃も、十五年に入つては陸軍航空部隊もしばしばこれを敢行し、殊に五月中旬より猛烈敢行された連續大空襲には、海軍航空部隊との緊密なる協同作戦に本づき陸軍航空部隊は六月中旬だけでも十數回にわたる大空襲を敢行、重慶市中はもとより、その周辺の飛行場その他の軍事據点を徹底的に爆撃、その間空中戦において敵機五十數機を撃墜するの輝かしき戦果を挙げた。さらに四川の要都、成都大空襲を敢行、同市外西南地區の敵軍事施設なかんづく重要軍需工場および督辦處など重要機關に全弾命中、各所に火災を起さしめ甚大な損害を與へたが、その際成都上空において敵機十數機と交戦して二機を撃墜した。

### ○今次歐洲戰亂に於ける獨逸空軍の活躍

空軍が戦時に於けるその勝敗を決する鍵として國運の盛衰を左右するものであることは第壹章「航空の重要性」に於て述べた所であるが、それを如實に我等の眼前に展開してくれたのは今次歐洲大戰に際しての獨逸空軍の活躍振りである。若し今次の歐洲大戰に於て獨逸があれだけの空軍を整備してゐなかつたら、制空權を掌中に收めることを得しなかつたら、その結果は想像して餘りある、即ち今日の如く、世界戦史に輝く獨逸の大戦果は得られなかつたことであらう。

しかも、獨逸空軍が今日の大をなし世界にその覇を唱えたのは僅かに五ヶ年間の短日月であつた。一九三五年三月ヒットラーが空軍再建宣言を發表して世界を啞つと云はせた時、獨逸空軍は僅かに三六中隊第一線機四三〇機、總軍用機數一四〇〇機を保有するに過ぎ

なかつた。しかるに半年を経た同年末には七〇乃至八〇中隊に擴張し、第一線機は七五〇乃至九〇〇機に整備したのであつた。

### ポーランド戰線

前歐洲大戰はバルカン半島の一角から起つた拳銃の音が開幕のベルとなつたのであるが、今次の歐洲大戰は一九三九年九月一日の早朝、朝霧をついて進攻した獨逸爆撃機がワルソーの上空から落下した爆弾によつて開幕された。だが、事實の遠因は一九三八年三月十二日獨逸合併から胚胎するものとなすに至るまでである。

開戦六週間前にダンテツヒ廻廊問題で獨逸間の風運急を告げ、歐洲の政局が頓に緊張してゐた頃、ポーランドのスマグリ元帥は「吾等は伯林を一時間にして空襲し、精銳なる陸軍を以て敵首都を指すは決して難事に非ず」との豪語を、蓮花一朝の夢と化せしめ、獨逸空軍の威力はスマグリ元帥の言をその

まゝ伯林をワルソーに置き換えたのであつた。

ポーランド戦に於ける獨逸空軍の活躍は大體に於て左の三つに分つことが出来る。

- (イ) 制空權の獲得
  - (ロ) 地上協力戦に直接、間接
  - (ハ) 政略攻撃
- 徹底的に空軍を驅使し、この大戦果を得たものである。

(イ) 獨逸の制空權の獲得  
九月一日朝の天候は到る處、濃霧であつて飛行隊の活動は非常に制限せられたけれど、獨逸空軍は一齊にポーランドの重要飛行根據地の爆撃を敢行したその重なる地點は、ワルソー、ブツチヒ、デルシャウ、グラウデンツ、カツトウイツツ、クラカウ、ラドーム、等の飛行場であつて、ポーランド飛行隊及防空部隊は局所に於て防衛に當つたけれど、獨逸空軍を惱ますことも出来ず、完全に損害を蒙つたのであつた。第一日の立上り様に叩き付けられた

ポーランド軍は、第二日矢つぎはやに起つた獨逸空軍の猛撃を受けた。前日に比して更に廣範圍に亘り大規模に攻撃を敢行した獨逸軍は、グチンゲン、クラカウ、ロツヅ、ラドーム、デブリン、プレストレスポール、ルブリン、ルツクの飛行場に猛烈な爆撃を行つた。この日を以て波軍は精神的にも實質的にも叩きのめされたのであつた。第三日は第二日に今一つ輪をかけた大規模のものであつたが、波空軍はもう完全に潰滅に瀕し、立ち上る氣力さへなかつたのである。かくして三日間にして全ポーランドの空は獨逸空軍の獨壇場となつたのである。

而して獨逸が對ポーランドの戦に使用した兵力は約二五〇〇機、當時の獨逸所有機一〇〇〇機に對して二五%であつた。又ポーランド軍が所有する機數は、爆撃機一八〇機、驅逐機四〇〇機、近距離偵察機一二〇機、多用途機二〇〇機合計九〇〇機であつたが、その中七四一機の損害を受けたのを見て



も制空權は何れに在つたかは判然とするであらう。

(口)地上協力戰

先づ交通線の破壊によつてポーランド軍の機動を阻止した。ポーランド參謀本部が開戦第三日に於てはや敗戦を自覚したと稱されてゐる。その最大原因は獨逸軍に逸早く制空權を獲得されたことが確實になつたことと、鐵道線路殊に停車場爆撃の結果、兵力の運用が殆んど不可能となつて大混亂を來したためである。開戦第一日に於てさへ、後方から常設十ヶ師を前線に送るべく輸送中であつたが、交通線を破壊されたために遂に徒步行軍するの已むなきに至つた。しかもこのために行軍隊は混亂を來し、ために、命令の傳達等も至難となつた。ポーランド軍最初の作戦では、作戦經過の途中(九月下旬)に、獨逸南方集團に對しロツツ及びクラ・ゴラ高地帯を據點として攻撃に移り反撃に出る計畫であつたが、これも輸送杜絶のため、遂にその實施を

断念するに至つたのである。

其の他、行軍縱隊に對する空襲、豫備隊、既設陣地、砲兵陣地の爆撃、橋梁破壊、トーチカの攻撃、と直接協力戰にも盛んに活躍したのであつた。就中、通信戰の破壊遮断には目覚ましいものがあり、有線通信施設を根本的に破壊し、或は奪取した暗號書を利用して敵の無線通信を混亂し、九月九日以後には全くポーランド軍は無線有線共に通信の使用を禁止されたやうなものであつた。

數日の激戦の後、ワイタゼル河畔に集中してゐたポーランド軍の主力約五箇師團がワルソーに連絡を求めた。ポーランド軍はその退路を東と北とに轉じて、ウイスゾグロートとブズラ河の淺瀬で、獨逸軍の包圍を突破しようと試みた。この點が獨逸軍の戦線が比較的弱かつたのであるから、この作戦は決して無謀なものではなかつた。この事獨自身も認めた所で、ポーランド軍が移動を開始するや獨逸軍も直ちにこの線

の補強のために移動を開始したのであつた。所がポーランド軍は獨逸軍には精銳なる空軍が、非常に緊密なる連絡を以て地上協力戰を準備してゐること

を忘れてゐた。即ち、ポーランドの師團の先頭が渡河點の真近に達した時、獨逸降下爆撃機の大編隊の大攻撃が行はれた。それはウイスゾグロートへの街路とグヅラ間約百軒の大領域に數時間亘つて爆撃を加えられたのである。ポーランド軍は隊列を正して移動してゐた。が、その先頭がグヅラ河渡河點に達したとき、この攻撃が敢行され、ポーランド軍は混沌と逃げ惑ふたのであつた。

(ハ)政略攻撃

獨逸軍は一方首都ワルソーに對して政略攻撃を敢行したのであつた。獨逸軍は連續的に敵飛行場を初め軍需工場敵高等司令部を爆撃すると同時に、無辜の住民を損傷することを極力避け反面に於て、後方にパニツクを起さしめる目的を以て労働者街を爆撃し、別し

て工業地帯はこれを完膚なきまでに痛撃し、その結果、住民は右往左往路上に充滿して一大混亂を生じ、遂に當局の統制の如きは一顧も與えざる結果となつた。

しかも、ポーランドの防空準備は甚だ不十分で、住民の負傷者に對する衛生材料にすら事缺く状態で、戰意を全く失つたのである。

九月四日、ワルソーが獨逸軍の猛爆の下に在りながらも、スミグリ元帥は「波蘭軍は勇敢に戦ひつゝあり、我等の忠勇なるポーランド兵は假令最後の一兵となるもワルソーは放棄せず」と豪語した。それにも拘らず、僅かに二十四時間を經ない九月五日夕刻、自ら先だつてルブリンに移動し、同所も獨逸軍の猛爆に堪えかねて、半日ならずしてプレスト・リトウスタに移動したが、此處でも同じ運命に追ひたてられて槍傷としてレンベルグに逃避したのであつた。かくの如く、指導機關が屢々その位置を急變した爲、指揮錯亂して作

戰に重大なる悪影響を及ぼしたことは争はれない事實である。

ノールウエー作戦

ポーランドはソ聯と共に割譲し終つてから後、一冬を靜穩に過した歐洲の戰局は昭和十五年四月九日、獨逸軍が突如、デンマークを即座に降伏せしめ、北歐に進撃を開始するやまたも歐洲の天地は硝煙漲る巷と化したのであつた。

大體に於てノールウエー作戦は空軍對海軍、制空權對制海權の戦鬪と見ることが出来る。猶これを空軍の活躍に就き、詳細に検討すれば次の三に分つことが出来る。

(イ)輸送機による軍隊輸送

(ロ)海軍對空軍

(ハ)彈藥糧食の空中補給

(イ)輸送機による軍隊輸送

四月九日獨逸軍艦がオスロ灣内に進入しようとしたのに對して砲火を浴せたので遂に本格的戦争となつた。ノール

ウエーの首都オスロ、ベルゲン、スタヴァンゲル、クリスチヤンサンデ、トロントハイム、ナルヴィク等の要港はその日のうちに獨逸軍の手に歸した。十日にはナルヴィクで英獨海戦があり、十一日にもトロントハイム沖で英獨海戦が行はれた。

戦鬪は、初期に於ては制海權を握る英海軍がドイツ輸送船に對しては有利の立場であつた、依つて獨逸軍はガブレッツ男指揮の下にユンカース、コンドル等の型の輸送機二百機を以て一週間に歩兵三箇師をノールウエーのオスロ、スタヴァンゲル飛行場に輸送した。最初、獨逸軍がデンマークを一日にして攻略したのは、デンマーク海岸を利用して、北歐作戦の足場にしようとしたのであつた。然しながら軍隊輸送を飛行機によつたため、その必要はなくなり、直接獨逸本國からオスロ、スタヴァンゲル飛行場に、この距離七百軒を一日數回の往復で輸送を敢行した。この際は主として軍隊輸送のみを以て



し、武器弾薬は海上輸送に依つてゐたのである。

(ロ)空軍對海軍

これは言葉をかえて云へば、制空權勝つか、制海權は依然として空からの脅威を抑制することが出来るかの空海大立體戰であつた。しかもこの結果は明らかに制空權が勝つたのである。戰闘初期各所に起つた海戰は獨側に不利、英は海軍國の名に負かず北海の制海權を手中に收めてゐた。然し優勢なる空軍を有する獨軍は前節の様に多量の兵を空輸するだけの制空權を掌握してゐた。その後、イギリス輸送船は英國軍艦に護られトロントハイム方面に向つたのを、獨逸偵察部隊の知る所となり直ちに百五十機の獨爆撃隊が出動、戰闘艦、巡洋艦に猛爆を加へたため、英軍は一部をトロントハイムに上陸せしめたのみで、大部を諾威北部のナルヴィクに上陸せしめた。然しトロントハイムの北部及南部に上陸した英軍は、ユンカースの急降下爆撃によつて猛爆

を加えられ、又武器弾薬貯藏所も大損害を蒙り、遂にトロントハイムは獨軍の手に歸し、獨空軍は此處に飛行基地を得たのであつた。

この空海立體戰に於て、最も世界の耳目を聳動したのは急降下爆撃機による大型艦の爆沈であつた。五月三日、ナムソン沖合に於てユンカース(Uncas)から落された一箇の爆弾が、英のウォースパイト型戰艦(三萬六千噸級)を三十秒にして北海の藻屑と化せしめた。ニユースが、ケーブルで、ビーコンで世界中に傳つたときは、各國の軍事専門家が啞然としたのであつた。輕巡洋艦や驅逐艦が大型爆弾を以て完全に撃沈され得るだらうとは想像されてゐたが、大型艦が、假令それが偶然砲塔附近に落下されたとしても一分足らずで撃沈するとは想つてゐなかつた。そのため輕率な論者は直ちに「軍艦不用論」を唱えるものさへ出たのであつた。

(ハ)彈藥糧食の空中補給

然しながらナルヴィクは英諸兩軍の聯合軍が非常に優勢であり、海上は英軍艦によつて封鎖されてゐた。そのためナルヴィクに孤立してゐた獨逸軍の援助は、主として空中輸送によつて行はれた。武器、彈藥、食糧から大砲の如きものまで空中輸送によつてナルヴィクに運んだのだつた。オスロからトロントハイムに、そしてナルヴィクにと空輸された彈藥は一日五十噸以上であつた。如何に獨空軍が活躍してゐたかは、この數字が雄辨に物語つてゐる。

そしてトロントハイム北方二〇〇軒のステンケルフ、スナーゼン等に新しい基地を得た獨逸軍は急降下爆撃機を送つて、英包圍軍に徹底的猛爆を加へ且つ船で退却する所に痛弾を浴せた。英軍が唯一のたみとしたナルヴィクさへ、空軍の目覚ましい活躍によつて獨空軍の手に歸し、遂に時の英首相チェンバレンをして「飛行場が敵の手中に歸してゐたので、戰闘機の使用は殆ん

ど我々に許されなかつた。また必要な大砲及び戰車を揚陸せしめることは不可能であることが數日前に明白となつた。英空軍の活躍にも拘らず、自國民の生命さへ無視するドイツは、續々増援部隊を派遣し、その數我々の許された數より遙かに多かつた。敵軍を前にしての撤退は困難のものなるに拘らず有力な海軍とベーヂエツト司令官の果斷及び一般兵士の勇氣と忍耐によつて獨軍の鼻先でアンダルスネスの全軍を撤退せしめた」と、一兵も損せざる名譽ある撤退を以て、戰敗の不名譽を覆はしめたのである。

○白蘭戰線

越へて五月十日、獨軍は突如として白蘭戰線に兵を集めたのである。即ち五月十日未明を期して、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグの國境を一舉にして突破した。

(イ)落下傘部隊

オランダ方面の戰爭は主として空軍

によつて行はれたので、これは非常に興味多いことである。即ち落下傘部隊及空中輸送部隊を利用したのであつた。

オランダで落下傘部隊が降下された主なる場所はワール・ホーフエン飛行場、ソール河のドルドレヒト橋梁、マース河のモールドイク橋梁であつた。五月十日拂曉、スポーネツク中將これが全般の指揮に當り、自からはワールホーフエン飛行場に着陸したのである。

ワールホーフエン飛行場の攻撃は、獨空輸諸部隊が爆撃機に掩護され、ロツテルダム市に接近、朝霧に被はれた飛行場を低空から不意に、格納庫其他飛行場諸施設に對し爆撃を開始した。これと相前後して落下傘部隊は飛行場の東側、南東側、及び西側畑地に集團降下して三方向から飛行場の攻撃を開始し、友軍機の爆撃や地上掃射と協力して飛行場警戒部隊を驅逐し、高射砲陣地を占領すると共に通信網を破壊し

終つた。それと同時に獨空輸部隊は續々と飛行場及その附近の海岸に着陸したのである。部隊が飛行場に到着後三十分間にして全員は戰闘に参加、一時間後には完全に飛行場を占領し、十日の午前中には早やレツク河の橋梁を確保したのであつた。

獨逸軍は極力橋梁の破壊されるを防止することに力を注いだ。それは機械化部隊が五日後にはロツテルダムを占領するため各河川を安全に通過させねばならなかつたがためである。

モールドイクの橋梁を占領した時は落下傘部隊のみであつた。橋の兩側に降下した約二箇大隊の落下傘部隊は、オランダの二箇師團に對して五日間守り續けることに成功した。その間、フランスの戰車隊はその南方から攻めなければ、これは獨軍急降下爆撃のためには五日後にロツテルダムの郊外に達してその快速振りを誇つたのであつた。



今一つ落下傘部隊がベルギー、エベンメール要塞を奇襲して今後の戦術に一大變革を來すだらうと論議されるに至つた。エベンメール要塞は前大戦にも猛進撃の獨軍を數日間釘付けにしたアルベルト・ケーナル運河を制する天然の要塞に、あらゆる科學設備を施してゐた。獨落下傘部隊はウイチツヒ中尉の率ゐる僅か八十名の突撃隊で二十四時間にして、エベンメール要塞を守備する一千名を捕虜とし二百名を斃したのであつた。八十名で八名毎に一組を作り、装甲圓蓋の砲臺を完全に占據して友軍地上部隊の到着まで確保したのであつた。

(ロ)ロツテルダム空襲

獨逸は白蘭戰線に於て五日間にこれを攻略する作戦を立てたが、大略作戦通りに遂行することが出来たのである。その原因は空軍の活躍が大部をなすもので、落下傘部隊、空輸部隊を後方に降下させ、地上機械部隊の進撃を容易ならしめると共に、アントワープ

ブラッセルを猛爆した。一方佛蘭西全土に亘つて空爆を敢行して、メッツ、ナンシー、ランス、ロミク、ドイツ、リオン等各地の佛空軍基地に猛爆を加へて、白蘭戰線に援軍するいまをなからしめた。

五日の後、即ち五月十四日には獨逸機械化部隊はロツテルダムの郊外に到着した。だが、和蘭軍が頑強に抵抗するため、市街に突入することが出来なかつた。依つて獨逸は三時間の猶餘を與へて降伏を勧告したが、それは和蘭軍に拒否されたので、爆撃機五十機を以て、二十分後にはロツテルダムの三分の一を廢墟とするまでに痛弾を浴せたその事がヘーグの最高司令官に傳へられたのでウインケルマン將軍は全オランダに降伏命令が發せられたのである。

○佛蘭西戰線

(イ)制空權の獲得

これは獨逸軍がポランドに於て行

つたと同様、開戦第一日にしてフランス全土の基地に對して爆撃を加へた。(前節参照)即ち開戦二日にしてフランス機及英國機一千機以上撃墜、或は爆破され、約十ヶ所の補給飛行機廠は爆撃された。かくして西部戰線に於ても獨逸空軍は完全に制空權を獲得したのであつた。

(ロ)マヂノ線突破

マヂノ線はジャールヴィル及びセダンが最も弱い部分であつたから、獨逸軍はその部分を突破する作戦を樹てた。然しながらマース河渡河に困難があつた。別して獨逸機械化部隊の渡河に就ては非常に困難であつた。依つて獨逸爆撃隊は幅三杆の最も脆弱の部分の間斷なく連續爆撃し、後方及び側面部隊の援助も爆撃によつて妨害を與へたのであつた。此の爆撃が非常に猛烈であつたため、マヂノ線の抵抗力は全々封ぜられてしまひ、その間に獨逸機械化部隊は易々と、マース河の大量渡河に成功した。そしてかく空地密接なる協力の

下にマヂノ線は突破されたのである。

かくしてカリニヤン、モーブージュ間で苦もなくマヂノ延長線を突破した獨軍は、夜に入りベリより百餘キロのレテルラオン、サンカンタン等に達した。フランスの形勢は遙かに重大化するに至つた。遂にガムラン將軍は全軍將士に左の如き悲痛な布告を出さしめた。「祖國フランスと、我聯合國並に世界の運命は現在進行しつゝある。我々の側において戦はれつゝある戰闘に總てがかゝつてゐる。英空軍も我々と同様全力を擧げて奮闘してゐる。我部隊にして進撃し得ないならば、突破し來る敵軍に對し、陣地を捨てるよりも、むしろその場に戦死せよ。フランス史上重大危機に當つて常にさうであつた如く、今日のモットーは我々は勝たねばならぬ、然らずんば死あるのみ。」

(ハ)地上協力戰

地上歩兵部隊が敵の妨害を受けたる場合は直ちに停止し、戰車隊が直ちに前進攻撃す。戰車隊が止れば直ちに急

降下爆撃によつて攻撃して突撃路を開く地理的に、空間的に時間的に空地密接なる連繫を以て攻撃したのであつた。

五月十日から五日まではオランダ戰六月四日までの白佛戰に於て行はれた激戦は殆んどかくの如く、空地一體となつて進撃した。その間、イギリス、オランダ、ベルギー、フランスの空軍の撃退された數は二七三〇機に上つた(獨逸發表)と稱されてゐる。五月二日から五月二十四日に亘る、フランダーズ戰線のカンブレ、ヴァンラセーヌ及びアルトアに於ける戰車大遭遇戰は實に世界戰史に特筆さるべき大激戰であつた。其時には先づ獨逸降下爆撃機の大編隊で、側面から襲撃して來た聯合軍戰車千數百臺に、連續降下爆撃を以て損害を與え、その間隙に乗じて獨逸戰車を突進せしめたが爲、遂に獨逸軍の大勝利となり、彼我數千臺の戰車遭遇戰も此處に閉幕となつたのであつた。獨逸では、空軍と地上の機械化部

隊との連絡のために特別に完備した通信部隊が使用されてゐた。配置された通信隊は無電のみならず、有線電話をも使用して約一千キロほどの間も有線電話を掛けることの出来るやうな、優秀な裝備を備へて、司令部と有線通話し、空地連絡を完全ならしめた。

白軍五十萬の無條件降伏で獨軍の英佛包圍作戰は愈よ有利となつた。廿八日中に獨軍包圍線は約三十キロ前進して四、五十萬の英佛軍はダンケルク、オステンド間五十キロの海岸線でリールを繋ぐ三角形、廣さ東京府位の地域に追詰められた。包圍圈内の英佛軍はイーブル北方に擁護陣地を敷き、獨軍の進撃を喰止めつゝ主力をダンケルク方面に集結し、軍艦及輸送船で英本土に遁走を企てた。これに對し獨軍は聯合軍の脱出阻止のため空陸から猛攻撃を加へ、二十九日にはオステンドを抜き、またカッセルポベリンゲンの線でフランダー地方の佛軍の主力を捕捉し、カッセル東方のステインザオルド



では佛第一軍團長プリュー將軍並に麾下全幕僚を俘虜とした。

聯合軍にあつては頑強にダンケルクを死守し同港から英海空軍の掩護下に敗残軍の脱出を試みた。英佛軍の一部の脱出に成功したが、その他大部分はこゝでも獨空軍の猛威力のため或は殲滅され、或は俘虜となつた。かくして六月四日、さしものダンケルクも遂に陥落したのであつた。

英佛沿岸を占領した獨軍は、息もつかせず六月五日拂曉より對佛新攻勢に出で、ウエイガン防禦線も、獨空軍の緊密なる連絡によつて一舉にして突破、その間十數回に亘つてバリ爆撃等があつたが、遂に六月十四日獨全部隊は威風堂々巴里に入城して、往年プロシヤ軍を粉碎して歸つた奈翁を迎えた凱旋門は、今日ではその所を異にして獨逸ヒットラーを迎える歡迎門となつたのであつた。

英本土攻撃

ヒットラー總統は八月五日午前、世紀的大歡迎を受けてベルリンに歸還した。席の暖る暇も無く直ちにゲールング空相、ブラウヒツチ國軍總司令、レーダー海軍總司令以下の軍首腦を召集して重要會議を開いた。勿論、會議の内容は嚴秘に附せられ、又種々極東政策、近東政策、對米政策等の重用案件もあつたであらうが、英本土攻撃敢行を議せられたことは想像に難くない。

然り、想像の如く八月八日獨總統大本營は「ドイツ空軍は八日朝、イギリス諸港外に機雷を敷設し、兵器工場高射砲及び探照燈陣地を爆撃した。しかもこの空襲で、ドイツ空軍、イギリス驅逐機二十九機を撃墜し、その際われにも二機を失つた。又同時にイギリス海峡航行中の護送船隊を襲撃、商船十二隻合計五萬五千トンを撃沈、七隻を大破せしめた他、英驅逐機五機を撃墜し、我方も五機を失つた。」と發表した。

○帝國陸軍航空

陸軍機の種類及任務・陸軍航空部隊の任務は、制空權を確保して、敵國の都市・要地等を空襲し爆撃し、或ひは又敵情の搜索、地上友軍部隊の協力等、凡ゆる手段を以て戰捷の途を開くために、空中行動をとるにある。

陸軍航空部隊に於ては、その遂行する任務に應じて、各種の軍用飛行機を整備してゐる軍用飛行機の主眼とするところは、その機種に依つて相違を有するが、戰鬥任務遂行にあるのであるから、機體各部は一般民間飛行機に比して鞏固に作られてゐることは勿論のこと、その任務遂行に萬違なきやうに一切の裝備が完備されてゐる。その機種は、用途上により大體次の如くに區分されてゐる。

- 一、偵察機
  - 近距離偵察機
  - 遠距離偵察機
- 二、戰鬥機
  - 單座戰鬥機
  - 複座戰鬥機
  - 多座戰鬥機

飛行機製造所、ケント州、ティムズ河口飛行場、ササンプトン、リンカーン、フエリックスストウ工場、ミッドランド港灣施設飛行場、船渠等殆んど英本土の要衝至らない所なきまでに猛撃した。

九月に入つては更にその手を緩めず反つていよいよ本格化して來た。九月八日にはゲーリング空軍總司令官は自からロンドンの上空に至り、歸還後「目下恐るべき攻撃が晝夜を別たずロンドンの上空で進行中である」と全世界に放送して、世界の人心を恐怖せしめたのであつた。

街に浴せかけた。

擊墜數の如きも、兩國とも宣傳で何處まで眞實か全く請合へたものではない。今、參考のために兩國の發表數を比較して見よう。

英國の發表

八月中の損失機數は獨空軍の一一三九機に對し英空軍は僅かに二七〇機、九月は獨逸の一一〇九機に對し英國は三〇五機であつた。但しこれは英帝國上空の空中戦のみに關する戰果である。

獨國の發表

「八月初旬の對英空襲強化以來、英側は二四七四機が撃墜されてゐる。八月中最も戰果の擧つた週間は十二日より十八日に至る一週間で、その間の撃墜機數六四三機、九月中、戰果最も優秀であつた週間は、二日から八日に至る一週間で、その間の撃墜機數は四四二機となつてゐる。八月初旬以降の獨空軍の總損失機數は七〇五機である。」



三、爆撃機  
輕爆撃機  
 重爆撃機  
 超重爆撃機

四、襲撃機

五、練習機

六、輸送機

七、病院機

一、偵察機・飛行機が軍用として最初に使用されたのは、上空から敵情を

搜索する任務を帯びてであった。即ち偵察機としての飛行機が初めて軍用機として戦場に現はれたわけである。然し、現在に於ける偵察機の任務は廣範圍に及ぶやうになつて、敵情、地形、その他諸般の偵察に任ずる外、指揮連絡、砲兵戦に於ける目標搜索並に射撃観測、軍馬、車輛、簡易なる築造物等に對する爆撃攻撃、或ひは又歩兵の突撃路の開拓や友軍の危機を救つたり、尙奥深く進入して、敵國の首都、大都會、飛行場、軍港、要港、防空施設、列車、自動車等の動きまでも偵察するのである。科學戰、機械戰たる近代及

び將來の戰爭に於ける偵察機の使命は實に重大であるといへる。

近距離偵察機 偵察機の任務は前述の如く廣範圍に互つてゐるため、それ

の使命に依つて現在では近距離偵察機と遠距離偵察機の二種がある。近距離偵察機は戰場附近の近距離を偵察し、直接軍隊に協力する飛行機であるため、戰術偵察機とも云はれる。その任務は、敵行軍状態、敵機械化部隊の状況、敵展開状態、敵兵力とその陣立位置、堡壘、砲臺等の設備、戰場附近にある敵兵器、彈藥倉、糧食等の搜索尙、砲兵隊の射撃観測や、指揮官のための指揮連絡等、各種の任務を遂行するのである。

遠距離偵察機 は、遠距離を飛翔して敵軍の背後や、敵國內の情況を探る

戦略的任務につくため戦術偵察機とも稱される。その任務は、開戦と同時に敵國內奥深く進入して、師團の動員状態軍隊の集中個處、動員軍隊の行動等を搜索したり、敵輸送路の情況、敵飛

行場、敵空軍根據地等の搜索に當るのである。

裝備・性能 偵察機は、操縦者の外

に偵察者並に通信員を搭乗させ、長時間の滞空を必要とするし、又、偵察に要する器材及武器、彈藥等を積載しなければならぬため機體は可なり大きくなる。裝備としては、通信設備として無線電電話機、信號拳銃、信號彈、通信筒、手旗及び視察を補助ため航空寫真機を有してゐる。火器としては前方固定機關銃を裝備する外、同乗者用としての旋回機關銃を裝備し、その外少量の爆彈を積みこむこともある。又中には胴體の下方を射撃するため胴體下に銃口を出してゐる下方機關銃を裝備してゐるものもある。

二、爆撃機・爆撃機の任務は云ふまでもなく戰爭の目的達成のために必要

なる目標、その人馬たると物體たるとを問はず、又堅固なる陣地、砲臺たると都市、艦船、構築物たるとを選ばず凡ゆる目標に對して爆撃を敢行し、之

を徹底的に粉碎撃滅して敵の戦意を動減するにある。爆撃機は爆撃目標の大小、航空範圍の遠近等に依つて前記の如く輕爆撃機、重爆撃機、超重爆撃機の二種に區別整備してゐる。

輕爆撃機 輕爆撃機は通常四、五百

噸の爆彈を積載してゆく。他の爆撃機に比すれば、航続距離も短く、搭載量も少いが機體が割合に輕快であるため、その特性を利用した方面に使用される。その任務は主に戰場附近に於て砲兵の射撃の届かぬ地點に對する爆撃敢行である。又、決戦の時機に至るや地上部隊の戰闘に直接協力し、敵第一線部隊を襲撃するのである。尙、偵察の任務に服する場合も非常に多く、ためにその性能は大體偵察機に類似してゐる。然し、爆彈積載量が多いため機體も馬力も偵察機に比すれば幾分大である。裝備としては、爆彈裝置、固定機關銃、旋回機關銃、その他偵察機と同様に無線通信機、機上照明具、救急用具、航空寫真機等が備へられてゐる

主要裝備たる爆彈裝置についていへば今迄は眞の下面等に爆彈を装着してゐたが、近時速度を出す關係上胴體内の爆彈倉に入れておくやうになつた。爆彈の投下は、電氣裝置や手動裝置に依つて、全爆彈を同時に、又數彈毎同時に、或ひは一發毎にも投下することが出来るのである。

重爆撃機 は、通常千噸から二千噸

内外の爆彈を積載し、約十數時間の航續力を有してゐる。乗員は少くとも五六名搭乗してゐる。發動機は二基以上を装着し、馬力も強力なるものを使用し、速力は巡航三、四百軒位であるが、近來列國を見るに戰闘機に匹敵する速力を有するものも現れてゐる。重爆撃機の任務は、敵地の奥深く突入して、敵航空勢力の撲滅、敵國の軍事・經濟・政治の中樞要地の爆撃破砕、港灣・停車場・橋梁・鐵道等を爆撃して敵國の輸送動脈の切斷、或ひは、軍隊の集中地等敵の作戦上重大なる影響を與へる要地、要點に對して爆撃を敢行して敵

の作戦を破滅させてしまふ等、戰略的任務に服するのである。裝備は輕爆撃機同様、爆撃裝置、無線裝置、その他各種裝備が整然と施設されてゐる外この種の爆撃機には自動操縱裝置が施され、又、酸素吸入器も裝備されてゐる。酸素の量は、高度を増すにしたがつて減少するものであるが、高度、五千米位になると空中の酸素量は半減されてしまふのである。従つて、重爆撃機隊の如く高空に於て戰闘を續行するものには酸素は絶対に必要なものである。

超重爆撃機 近時、列國の空軍は、

搭載爆彈量、航続時間等の強大な爆撃機を作つて開戦頭頭に於て敵國の首都及び軍作戦機態、中樞を急襲し大爆撃を敢行して、一舉にしてそれ等の要地を覆滅してしまふ企圖が眞剣に研究されてゐる。既にこの種の爆撃機が各國に於て次々に建造されつつあるが、その性能、裝備等は極秘にしてゐるため詳細を知る由もない。強馬力の發動機



四臺以上を装着し、大量の威力の激烈なる爆弾を積載し、三百軒以上の速力を以て、機関銃の外軽砲をも装備し、敵戦闘機の攻撃もはねのけ、堂々と敵國上空に現れて大爆撃を敢行する、その威力の如何に偉大であるかは、想像するに難くない。超重爆撃機の優劣は實に戦争の勝敗に對して一大影響を與へるものである。

三、戦闘機・戦闘機の主要使命は、制空、防空、偵察機及び爆撃機の掩護にある。即ち、友軍地上部隊の作戦を支援するために敵機をその上空に一機たりとも近づけてはならないのである。制空権の獲得は戦闘機の重大使命である。今後の戦争は、地上部隊が如何に強力であつても、制空権が獲得されてゐなければ、その勝利は不可能なことである。次に都市、重要港灣、工場、停車場等の重要地點を空襲し来る敵爆撃機群を要撃し撃墜し防空の使命を全うすることである。偵察機又は爆撃機の掩護任務は、偵察機は戦闘力が

弱いし、爆撃機は機體が重いため、敵戦闘機群の攻撃に對し思ふやうに應戰して勝利を得ることが困難であるため戦闘機の掩護が必要なのである。戦闘機隊は、偵察機隊・爆撃機隊と行動を共にしその周囲を護り、敵機と遭遇した場合に直に之と應戰、撃墜し追ひ散らす、偵察機及び爆撃機の任務を完遂させるのである。戦闘機の種類には単座戦闘機、複座戦闘機、及び多座戦闘機等がある。

單座戦闘機 これは搭乗者一名の非常に輕快なる戦闘機である。前方固定機関銃を唯一の武器として、軍の如く敏捷に高等飛行の秘術を盡して敵機に追ひ迫り猛射を浴びせ弾丸盡きれば體當りをもつてしても敵機を撃墜せんとする攻撃精神頗る旺盛なる飛行機である。然し、單座戦闘機は小型であるために長時間滞空してゐることが不可能である。従つて遠距離に行動することが出来ない。現在、列國の單座戦闘機の滞空時間は大體、三時間内外である

尚、今日戦闘機として任務を遂行するためには、大體水平速度は時速三百軒以上、上昇能力は五千米まで九分以内上昇度は八千米以上でなければならぬのである。

複座戦闘機 複座戦闘機は名前の示す如く搭乗者二名である。従つて武器としては、操縦者用の前方固定機関銃の外に、他の一名の持つ旋回機関銃がある。火力の點に於ては單座戦闘機より一段と優勢になつてゐるが、機體も大きくなり、重量も増加するため、行動が幾分鈍重になる缺點を有する。然し、單座戦闘機は航続力が少いたためその任務の一つである偵察機や爆撃機の掩護には限りがある。遠距離飛行の場合には送り得る最大距離まで掩護し、又その歸途を向へてやるやうにする必要がある。そこで、この掩護任務には航続距離の相當に長い、火力の強い複座戦闘機及び後述の多座戦闘機が使用されるのである。

多座戦闘機 多座戦闘機は、偵察機

及び爆撃機の掩護に絶対必要なる遠距離飛行の可能な、しかも速力の速い武力の強大な戦闘機であつて、普通二名乃至五名位の搭乗者を有する。武装としては機関銃、重機関銃、輕砲を装着し、その上少量の爆弾まで備へてゐる。遠距離飛行も可能であれば時に依つては爆撃も敢行するし、その上戦闘力強大だとすれば、特に萬能機とも稱すべきである。近時列國は多座戦闘機の計畫に力を注いでゐる。

四、襲撃機・又の名を攻撃機とも稱してゐる。大體輕爆撃機に似てゐる。その任務は敵軍の地上攻撃であつて、友軍の地上部隊協力にある。道路上を行進する敵部隊、集合部隊、騎兵部隊、戦車部隊、砲兵陣地、機関銃陣地等あらゆる敵軍を直指して襲撃し、完膚なきまでに壊滅するにある。敵軍を木端微塵に粉碎してしまふには、地上數十米の低空に舞ひ下り、敵軍の頭上から機関銃の猛射を浴びせたり、爆弾投下を敢行しなければ優秀な戦果は擧げら

れない。高空から爆撃したり機関銃射撃をしてゐたのでは、命中率もよくない。即ち、襲撃機は上空より急降下を行ひ爆弾投下を敢行したり、低空を匍ふ如くして敵を急襲しては機関銃火を雨霰と浴びせかける勇敢なる飛行機なのである。

五、練習機・練習機は飛行術の習得に便なるやうに特別の構造を以て作られ、初歩練習機と中間練習機及び爆撃の照準法や目標の偵察、砲兵の射撃觀測等の空中作業を實習させるための作業練習機との三種がある。わが陸軍に於てもこの三種を備へて、初歩には教官が同乗して指導を與へ、相當練習を積んだ時には單獨飛行をさせ、初歩練習機より中間練習機へ進み、特殊飛行を充分訓練して後、漸次に高性能の實用機に移らせるのである。然し、練習機と云つても性能が鈍重ではあるが、機體が悪いといふのではない。練習機もわが空軍の一翼であり軍用飛行機の一勢力なのである。初歩練習機を除く

他の練習機は、相當の威力を有してゐるのであつて、航空兵力の補充としてそれ相當の任務を遂行し得るのである。

六、輸送機・輸送機はその名の如く兵員、器材、食料等を必要に應じて急速に目的地に輸送する任務に服する。その活動の作戦上に及ぼす影響は頗る大である。この機の性能の特徴とするところは、出来るだけ多くの人員及び物資を一氣に目的地に運び得ることである。尚、民間の大型輸送機もまた、戰時に於ては軍の輸送機として利用し得られることは云ふまでもない。今次の歐洲戰爭に於て一躍有名となつた獨軍落下傘部隊も軍及民間輸送機に依つて敵の上空に送られたものである。

七、病院機・病院機の内部は寢臺その他病室としての設備が完備され、看護兵も搭乗するやうになつてゐる。又胴體には大きく赤十字のマークを描きその任務を明確にして敵の不當攻撃の無きやうにしてゐる。輕微なる負傷者



ならば、野戦の假病院に於て手當も出  
来るが、重傷者になると一刻も早く後  
方に送り適當の手當が必要である。こ  
ゝに此の飛行機の優秀なる性能が役立  
つのである。

以上軍用機のうち、練習機・輸送機・  
病院機の三種は、空軍の主體ではない  
が、軍の輜重隊・衛生隊、また海軍の  
特務艦の如くやはり缺く可からざる空  
軍の一部なのである。

帝國陸軍航空の沿革及び現状・我國  
の陸軍飛行機は、大正七八年頃まで殆  
んど外國製のものを使用してゐたので  
あるが、航空工業の進歩發達に伴ひ、  
逐次國産機を使用するやうになり、最  
近に至つては急速なる進歩を遂げ、品  
質に於ても、性能に於ても歐米列國の  
それに比肩し得る純國産優秀機を得る  
やうになつた。我精銳なる陸軍航空部  
隊は、今次事變勃發するや立どころに  
制空權を確保して地上友軍部隊と密接  
なる連繫の下に南北わかつた縦横に活  
躍し、戰果を擴大し、列國をして驚嘆

の眼を眩らせてゐる。今次事變に於け  
る陸軍航空部隊の活動は作戰の終始を  
通じて地上協力作戰を主體とし、時の  
經過に従つてその戰闘も變り航空擊滅  
戰或ひは政略的攻撃の形式をとつて來  
たのである。事變勃發より最近に至る  
支那大陸に移動した陸軍機の延機数は  
約六萬機、その九割迄が地上協力作戰  
である。現在我戰線は蜿蜒五千料以上  
に及び、この長い且つ廣い戰線を我陸  
軍航空部隊は、晝夜をわかつた地上友  
軍部隊と協力、黙々として作戰に心血  
を注いでゐる。敵航空勢力の擊滅戰は  
十三年春よりである。その主なる戰闘  
は襄陽・西安・歸德・蘭州等の大空中  
戰である。十四年の三回の蘭州攻撃に  
は敵機百二十機を血祭に擧げ、本年春  
三回の攻撃にも百三十機を屠つた。ノ  
モンハンに於ける空中戰に於ては僅三  
ヶ月間に千三百八十九機の敵機を擊滅  
し世界戰史に千古不滅の輝かしき一頁  
を加へた。しかも我損害は百餘機に過  
ぎない。現在に至る擊滅記録は約二千

機に及んでゐる。政略的攻撃は海軍航  
空部隊と協力、重慶・成都・等奧地攻  
撃を續行し赫々たる戰果を擧げてゐ  
る。

然し、明治四十三年十二月代々木練  
兵場に於て徳川・日野兩大尉が、佛國  
より購入せるアンリッファアルマン式、  
獨國より購入せるグラード式の兩機を  
操縦して、森より高く飛んだといつて  
嘆賞せられたる本邦飛行の嚆矢より現  
在の精銳なる陸軍航空を建設するまで  
三十餘年間、我陸軍航空は實に血の滲  
む如き航空苦闘史を綴り來つたのであ  
る。我陸軍の航空發達史では、明治三  
十六年より大正七年迄を研究時代、大  
正八年より十三年迄を發達時代、大正  
十四年以降を整備、つづいて躍進時代  
と分けて考へることが出来る。次に帝  
國陸軍航空發達の概要を記してゐる。

研究時代(明治三六—大正七年)  
明治三七年◇氣球隊日露戰役に出征、  
旅順攻圍戰に参加す。  
明治四〇年◇中野電信隊に氣球隊編成

さる。

明治四一年◇交通兵團司令部設置さる  
明治四二年◇六月、臨時軍用氣球研究  
會創設さる。

明治四三年◇三月、日野式單葉第一號  
戸山ヶ原に於て滑走試験◇十月、奈  
良原式アンゼニ一號試験飛行す◇所  
澤飛行場設置に着手◇十二月、徳川  
大尉アンリッファアルマン式にて、日  
野大尉グラード式にて本邦最初の飛  
行をなす。

明治四四年◇四月、所澤飛行場開設さ  
る◇六月、操縦教育開始◇六月、徳  
川大尉所澤—川越間野外飛行に成功  
す。

明治四五年◇飛行術教育開始さる。  
大正元年◇秋季大演習に飛行機及飛行  
船参加す。

大正二年◇木村・徳田兩中尉、東京  
所澤間野外飛行に墜落殉職す◇初め  
て爆彈投下試験を行ふ。  
大正三年◇歐洲戰勃發し飛行機始めて  
青島戰に参加、偵察・爆撃・敵機と

の交戦に威力を示す。

大正四年◇臨時飛行隊復員◇所澤—大  
阪。所澤—高田、所澤—弘前間の飛  
行決行◇陸軍航空大隊編制成る。

大正五年◇制式一號機試験飛行、マス  
式氣球東京—大阪往航す◇風洞工事  
竣工◇上層及夜間氣流観測實施◇各  
務原飛行場設置◇滿洲耐寒飛行決行  
す。

大正六年◇航空大隊を航空第一大隊と  
改め、第二大隊増設に着手◇飛行機  
に無線裝備◇耐暑山岳水上飛行研究  
◇射擊觀測航法研究偵察術教育開始  
さる。

大正七年◇制式二號機完成◇航空第三  
第四大隊増設決定◇西伯利亞出征◇  
機上射撃開始◇伊國飛行隊援助。  
發達時代(大正八一—一三年)

大正八年◇航空課、航空本部、航空學  
校新設さる◇佛國飛行教官招聘、フ  
ォールス大佐等五十餘名來朝◇氣球  
隊新設。  
大正一〇年◇下志津、明野兩分校設置

◇航空研究所、航空評議會設置さる  
◇日本製乙式一型偵察機支給さる。

大正一一年◇航空隊を飛行隊に改稱。  
大正一二年◇飛行第三大隊完成す◇陸  
軍航空兵科創設さる。

大正一三年◇飛行第四、第五、第六大  
隊完成◇各飛行學校獨立す。

整備及び發達時代(大正一四年—)  
大正一四年◇航空兵科獨立す◇飛行大  
隊を聯隊に改む。

昭和元年◇航空兵士官候補生採用開始  
◇甲式四型戰闘機採用す。

昭和二年◇八七式重爆撃機完成す。  
昭和三年◇支那事件に出動す◇八八式  
偵察機完成す。

昭和四年◇飛行聯隊の充實完了す◇八  
八式偵察機を以て内地臺灣間無着陸  
飛行決行。

昭和五年◇航空部隊聯合大演習を行ふ  
◇樺太密林地方寫眞撮影◇中華民國  
政府の委託にて航空教導團派遣す。

昭和六年◇滿洲事變に出動す。  
昭和七年◇上海事變に出動す◇愛國號



飛行機献納の擧ぐる〇九一式戦闘機八八式二型偵察機支給さる〇九二式偵察機完成す。

昭和八年〇立川技術部に於て飛行演習の天覽を賜はる〇帝都防空演習に参加〇明野に於て特別航空演習開く〇少年航空兵第一回募集〇濱松陸軍飛行學校創設さる〇國民献納の愛國號飛行機百臺を突破す。

昭和九年〇少年航空兵第一回生入校〇濱松に於て航空兵演習實施す。昭和一〇年〇航空本部の編成改正され陸軍航空技術研究所、航空本廠獨立す〇熊谷陸軍飛行學校、陸軍航空技術學校創立さる。

昭和十一年〇航空兵團創設さる。昭和十二年〇七月、支那事變勃發し活動躍す〇東京航空學校新設さる。昭和十三年〇航空兵團を飛行集團に改正〇水戸飛行學校、陸軍航空整備學校新設さる〇航空總監部新設航空兵科軍隊の教育を掌らしむ〇航空士官學校獨立す。

昭和十四年〇ノモンハン事件起り活躍す〇支那事變及び滿蒙國境に於ける陸軍航空部隊の綜合戰果(六月下旬現在)撃墜一千九百三十四機に達す。

〇昭和十五年〇少年飛行兵制度成る〇銚田陸軍飛行學校創設さる。

帝國海軍航空

海軍航空の本務は、艦隊の眼となり手足となつてその作戰に協力し、制空權を獲得するにある。

廣袤幾千萬方哩、この渺茫たる大洋を戰場とし、而も、行動力の甚大なる海軍力を行使する海上作戰に於て、特に重要視されることは、先づ敵情を知るといふことである。

嘗ては、巡洋艦が艦隊の眼となつて敵情偵察の任務に服してゐたが、航空機の出現と、その發達に依つて、偵察任務は航空機の遂行するところとなりここに艦隊の視力は著るしく増進するに至つた。

更に、止まるを知らぬ航空機の驚異

的進歩發達は、敵情偵察のみならず、艦隊作戰上に一大革新をもたらすに至り、今や、守るにも攻めるにも、航空機なき海軍は、魂なき人形に等しきものとなつたのである。

海軍航空部隊の任務を要約すれば次の如くである。

- 一、戰術的偵察
- 一、艦隊戰に於ける遠距離索敵
- 一、敵飛行機の撃墜
- 一、艦船爆撃
- 一、主力艦隊に對する雷撃
- 一、敵輕快部隊の攻撃反撥
- 一、彈着觀測
- 一、煙幕展張
- 一、交通線上に於ける通商の破壊並びに保護、等々。

右の如く從來各種水上艦艇の擔任してゐたところの殆んど全部を包含してゐるのである。如何に航空が海上作戰に於て、重要な任務を遂行するものであるかが肯首されることと思ふ。尙、海軍航空部隊は、單に海上のみ

ならず陸上に於ても重大なる役割を演ずるものである。このことは、過ぎし上海事變に、又、今次の支那事變に於て明らかにされてゐるところである。

海軍機の種類

海軍には、航空母艦・水上機母艦及び戰艦・巡洋艦・潜水艦の如き飛行機搭載艦があり、又陸上航空隊が設置されてゐる。従つて、使用する場所によつて陸上機・艦上機・水陸兩用機・水陸互換式・飛行艇等異つた機種が整備されてゐるのである。

陸上機・陸上航空隊の陸上飛行場に於て使用されるものであることは云ふまでもない。

艦上機・航空母艦に搭載する。陸上機と同じく車輪を有するものである。航空母艦上の飛行甲板を、陸上飛行場の如く滑走して發艦し降着する。その構造の陸上機と異つてゐる特殊な點は脚に母艦の飛行甲板の拘捉裝置を捕へる鈎を持つてゐることである。

水上機・飛行甲板を持たない水上機母艦・戰艦・巡洋艦・潜水艦等に搭載され、又、陸上航空隊水上班に用ひられ、單浮舟の機と双浮舟の機とがある出發は艦上より起重機によつて水上に降し水上滑走によつたり、射出機(カタパルト)によつて艦上より射出する方法をとる。降着は海上に着水した後本艦に揚收されるのである。

水陸兩用機・水上機又は飛行艇に車輪を併用したもので水陸何れにも發着が出来るものである。

水陸互換式・同一式の機體を水上機としても、又陸上機としても使用出来る如く、隨時に迅速簡單に車輪と浮舟とを換裝し得る様にしたものである。

飛行艇・翼を有する「ポート」である。最近の飛行艇は極めて大型となり大「ポート」に翼をつけたといふ方が正しくなつた。主として陸岸を基地として大洋上に遠征活躍するものである。

海軍機は、軍事上の任務に應じそれ

く適したる特種の性能を與へられてゐるがこの任務の方面より機種を區分すれば、戰闘機・偵察機・攻撃機・練習機等がある。但し以上の各種の飛行機は、独自の任務遂行に專用されるばかりとはいへない。それ〇〇他の任務を兼ねるものが少くない。例へば、戰闘兼偵察機とか攻撃兼偵察機といふが如きである。又、國に依つてその名稱も異つてゐる。即ち、我海軍に於て攻撃機と稱するものは或る國に於ては爆撃機と稱し、又爆撃兼電撃機と稱されてゐる。

海軍機の任務・性能

戰闘機・戰闘機の主なる任務は空中戰闘である。即ち敵機を撃墜して空間に敵影を皆無にし、完全に制空權を獲得せんことを目的とするものである。又、我艦隊の上空を警戒して、來襲する敵機を邀撃し、撃墜し、驅逐し、戰場上空にある敵偵察機や觀測機等を攻撃することも任務とする。或ひは又、



味方の偵察機攻撃機等の諸飛行隊の掩護にあたり、これら諸飛行隊を扼止せんとする敵機を駆逐撃墜したり、敵艦艇上に急降下して機銃弾の猛射を浴せしめ、或は軽爆弾を携行して敵艦上の構造物や潜水艦等を爆撃し之を破壊することもある。

戦闘機はその任務遂行上、性能は最も軽快と敏捷とを必要とし、機態は激烈なる空中操作に耐えるやう極めて堅牢でなければならぬ。従つて形態は一般に小型にして単座のものが多く、これに強馬力の發動機を装備してゐる。今日列國の主要戦闘機は、五五〇馬力乃至六〇〇馬力、或ひはそれ以上の發動機を装備するものがある。速力も五〇〇軒時以上に及ぶもの、又戦闘機として特に重要とされる上昇力に於ても三〇〇〇米を約三分といふ優秀なるものも出現するに至つた。又、最大上昇限度一、〇〇〇〇米に達するものもある。

戦闘機の火器は、空中戦闘用の機銃

である。単座戦闘機は、プロペラの翼の回轉する隙間を通して前方を射撃する固定機銃を二挺以上装備し、又は、主翼前縁のプロペラ回轉圏外に機銃を装備してゐる。愛機を自由自在に操縦して敵機の死角へ突進し、この機銃を以て敵に猛射を浴びせ、敵機を撃墜するのである。

偵察機・偵察機の主任務は搜索偵察

であることは勿論であるが、現在では偵察以外、廣汎なる任務を遂行してゐるのである。これを要約して見れば、

- 一、艦隊前路の哨戒、潜水艦に對する警戒
  - 一、彈着や敵艦の針路・速力等の觀測
  - 一、魚雷・機雷に對する見張り、煙幕展張
  - 一、艦隊在泊中の港灣泊地の警戒
  - 一、遠く敵艦隊及び陸上の搜索偵察
- 小型爆彈の爆撃實施  
等々、枚擧にいとまのない位である。しかし、大遠距離偵察の如きは、航

距離の大な攻撃機或ひは飛行艇に依つて行はれることが多い。偵察機搭乗員は以上の如き任務の關係上、優秀なる偵察眼・戰術眼を備へると共に、又、優秀なる通信力を有さねばならない。従つて偵察機には操縦員の外に偵察員電信員の搭乗者が必要である爲、機は多く複座又は三座で、戦闘機に比較すれば形態も大であり、速力・上昇力等の性能も輕快敏捷なる戦闘機より低下することは已むを得ぬことである。

しかし、偵察機は屢々敵戦闘機と遭遇し襲撃を受けるため、之を撃墜して任務を遺憾なく達成するために、出来る限り性能の優秀を圖らねばならない。よつて近時は必要に應じ、戦闘の任務も有効に遂行し得る様に整備した複座の偵察兼戦闘機といふべきものも出現して居る。

偵察機の火力に就ていへば、敵機に來襲に備へて一般に操縦者用の固定機銃と、偵察者席に旋回式聯裝機銃を裝備してゐる。尙、後下方より來襲する

敵に對應するため、胴體の内部より下方を射撃出来るやうにした機銃を併裝するものもある。

今日の偵察機の發動機は六〇〇馬力ものものが多く、前述の偵察兼戦闘機の如きものでなくとも、時速三〇〇軒以上に及ぶものがあり、上昇力は四〇〇〇米へ約六分、上昇限度一〇、〇〇〇米以上に及ぶものも出現する様になつた。

偵察機には、艦上偵察機及び水上偵察機がある。艦上偵察機は航空母艦に搭載され、水上偵察機は戦艦・巡洋艦潜水艦等に搭載される。又、水陸兩用機・水陸互換式のものを用ひてゐる國もある。潜水艦に搭載する水上偵察機は一〇〇馬力前後の小型のものであり従つて性能も前述の如く優秀なものではない。又、水上機には浮舟があるため、その性能は陸上機に比較して幾分劣勢となることは否めない。

攻撃機・攻撃機とは、帝國海軍に於ては、爆彈又は魚雷を携行して、敵艦

或は敵要塞等を攻撃するものと呼ぶ、國によつては、攻撃機を爆撃機兼雷撃機と呼ぶところもある。英、米、伊等の國は後者の名稱を用ひてゐる。即ち所要に應じて同一飛行機が爆撃機ともなり雷撃機ともなつて活躍するからである。しかし、それ、別個の専用機にするものも皆無ではなく、將來に於ては特に専用ものが出現するかも知れない。

陸上攻撃機・所謂重爆撃機は、敵國

或ひは敵軍の重要基地を爆撃する戰略的任務を遂行する關係上、航續力・爆彈搭載量も巨大なものがあるが、海軍の艦上攻撃機は艦内に收納し、艦上に於て取扱ふ必要上、陸上機の如く無制限に大きなものは用ひられないのである。今日の艦上攻撃機は、一般に六〇〇馬力乃至七〇〇馬力、又はそれ以上の單發動機式のものが多い。爆彈は五六百磅を搭載し、魚雷は八百磅程度のものを裝備して敵を攻撃するのである。近來の攻撃機には、時速約四〇〇

軒、上昇力は六〇〇〇米へ約十三分、上昇限度約九〇〇〇米に達するものも少くはない。

近時、高空より急降下によつて敵艦上に轟進、果敢なる爆撃を敢行する方法をとつてゐるが、これが所謂輕爆撃機或ひは爆撃戦闘機と呼ばれてゐるものである。

飛行艇・飛行艇は海岸を基地として遠く大洋上に遊弋し、艦隊に隨伴して搜索或ひは攻撃任務に従事するもので海軍用としては極めて重要な機種である。前述した如く、飛行艇は「ポート」に翼をつけたものであるから、海上航空に適し、特に耐波性に至つては一般水上機の遠く及ぶところでない。機體も大きく従つて搭載量も亦航續力も甚大であり、遠距離偵察や長時間の哨戒任務に最適である。米國に於てはこれを哨戒機と呼んでゐる。飛行艇は長時間遠距離に任務行動する關係上、いよ／＼その機體は大型のものとなり、性能も優秀なるものが出現するやうにな



つた。米國に於ては「シヨルスキド四二」「マルチン」「クリツパー」等といふ大型で極めて優秀性をもつた飛行機を出現させた。又、英國の「エンサイオン型」といふ旅客飛行機は重量二十一噸、九〇〇馬力發動機四基裝備、旅客四十人を收容し得る大型飛行機である。

日本の如き海國に於ては、搭載量の大きな飛行機は、軍用としてのみならず、航空運輸用としても亦、大いに有用すべきである。

海軍に於て用ひられてゐる飛行機は數年前までは四五百馬力發動機二基裝備のものが多かつたが、近來では六〇〇馬力乃至八〇〇馬力、又それ以上優秀なもの三基或ひは數基裝備したものも出現してゐる。

練習機・練習機には陸上練習と水上練習機とがあり、初期の操縦練習に用ひられる。今日では大體一〇〇馬力乃至二五〇馬力のものが多く用ひられてゐる。従つて練習機による操縦法を卒

業したからといつて、直ちに、性能の著しく進歩發達を遂げた最近の飛行機の操縦は不可能である。更に、比較的高性能を有する中間練習機によつて練習をして、それから實用機に移るのである。

輸送機・海軍に於ては前記以外に交通連絡・人員物資輸送用として輸送機を有してゐる。輸送機は一般民間使用の商用機と大差ない。

帝國海軍航空の沿革と現状

帝國海軍航空はいふまでもなく軍用機密に屬するものがあるため、詳細にこれを記すことの出來ぬことを諒とせられたい。

明治十年五月西南の役に輕氣球を使用し戦況の進展を計らんとして、陸軍省より海軍省に輕氣球の製作を依頼し來つた。よつて海軍兵學寮機關科で製作し、始めて築地海軍練兵場でその飛行實驗を行ひ、上昇百二十間に達した。同年十一月七日、天覽に供されたが風

の爲案が切斷され、遂に氣球を失つたその後、氣球の研究は遺憾乍ら中斷され、そのまゝに放置された。

明治四十二年に臨時軍用氣球研究會の官制が發布され、海軍よりも參加した。次で、四十五年六月、海軍航空術研究委員會が創設され、神奈川県追濱に飛行場を設置し、カーチス式七〇馬力水上飛行機二臺を米國に、ファルマン式七〇馬力水上飛行機二臺を佛國に注文し、その製造監督たる海軍兵科將校と機關官に、傍ら飛行機操縦その他各種の實習調査に従事させた。

大正元年十一月以後、歐米より歸朝した飛行將校指導の下に、將校下士官の訓練を開始した。これ以前、外國飛行機が輸入されるや、その研究を横須賀海軍工廠に命じ、爾後半歳ならずして國産機を實用するに至つた。大正二年「若宮」は、カーチス及びファルマン式飛行機を搭載して、始めて海軍小演習に参加した。大正三年八月、日獨開戦するや、帝

國海軍の飛行機總數實に十二機、飛行將校僅に十五名に過ぎなかつたが、この僅少な人員と機材とを、母艦若宮に搭載し青島戰に参加し、能く偵察に、彈着觀測に、爆撃等に活躍、イルチス砲臺を沈黙させ赫々たる武功を樹てた。大正五年、初めて海軍航空隊三隊新設豫算が成立し、逐次航空軍備の充實に向つて進んだ。大正十年、臨時海軍航空術講習部を新設、世界大戦中空軍に參加した英國のセンビル大佐以下三十名を招聘して、霞ヶ浦及び横須賀に於て航空術を傳習させた。

畫が成立した。本計畫の完成は昭和六年であるが、その後二十數隊の増設計畫が成立した。爾來、霞ヶ浦、横須賀、館山、佐世保、大村、吳、佐伯、大湊、鎮海、鹿屋、木更津、大分、筑波、鈴鹿、鹿島等に陸上航空隊約二十五隊を設置し、尙、その他各地に航空隊の増設を計り昭和十二年末迄には、大體約三十數隊を整備見込みのところ今次事業が勃發した。

昭和七年上海事變に際し、又、今次事變に於ける我が海軍航空部隊の目覚しき活躍、赫々たる武功は、今更喋々するまでもない。從來、機材に於て外國に比して遜色のあつたことは、航空後進國としてやむを得ぬことであつたが、最近、機材に於ても、技術方面の發達を見、帝國海軍新銳機中には外國新銳機と比肩し得るものが少くなく、近くこれ等を凌駕するものも出現することゝ信ずる。

陸軍制式飛行機諸元表 (昭和十二年迄の公表分)

Table with columns: 區分, 名稱, 用途, 構造. Rows list various aircraft models like 九一式, 九二式, 八八式, etc., and their uses such as 偵察, 轟炸, 練習.



飛	式 制														
	機 擊 攻 上 艦			機 爆 擊	機 察 偵				機 闘 戦						
一五式二號飛行艇	九二式艦上攻撃機	八九式二號艦上攻撃機	八九式一號艦上攻撃機	一三式三號艦上攻撃機	一三式二號艦上攻撃機	九四式艦上爆撃機	九一式水上偵察機	九〇式三號水上偵察機	九〇式二號偵察機二型	一四式三號水上偵察機	一四式二號水上偵察機	九〇式偵察機三型	九五式艦上戦闘機	九〇式艦上戦闘機	三式艦上戦闘機
複(艇)	複(艦)	複(艦)	複(艦)	複(艦)	複(艦)	複(艦)	複(双舟)	複(双舟)	複(單舟)	複(双舟)	複(双舟)	複(艦)	複(艦)	複(艦)	複(艦)
五	三	三	三	二	三	二	一	三	二	三	三	二	一	一	一
ローレン	九一式	イスパノ	イスパノ	イスパノ	イスパノ	壽二型	神風	ジュビター	壽二型	ローレン	ローレン	壽二型	壽二型	壽二型	ジュビター
四五〇	六〇〇	六五〇	六五〇	四五〇	四五〇	四六〇	一三〇	四五〇	四六〇	四五〇	四五〇	四六〇	四六〇	四六〇	四二〇
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
九三	一一八	一一五	一〇八	一〇五	一〇一	一四〇	九一	九九	一四三	一〇二	九四	一四五	一九〇	一五五	一三〇
一一・〇	四・五	三・〇	三・〇	四・七	四・七	六・七	四・〇	六・五	六・五	七・〇	六・九	六・五	三・五	三・〇	二・五
													三一・〇	五一・〇	六一・〇

帝國海軍飛行機(昭和十二年迄の公表分)

種 機	名	稱	型式	座席	發 動 機		最高節速力(巡航)	航 續 時 間	上 昇 力
					名	稱			
							(分)	(分)	(米)

機 動 發	馬 力	名 稱	機 型	能 性			目 要 主						使用材料
				上 昇 時 間	上 昇 限 度	水 平 速 度	座 席 數	全 備 重 量	主 翼 面 積	全 長	全 高	全 幅	
空冷星型	四〇〇	ジュ式	水冷V型	四分〇秒	約九、〇〇〇	三〇〇	一	約一、五〇〇	約二〇・〇〇	約七・〇〇	約三・〇〇	約二・〇〇	金屬骨格
空冷星型	五〇〇	ベ・エム	水冷V型	四分〇秒	約八、五〇〇	三三〇	一	約一、七〇〇	約二四・〇〇	約七・〇〇	約三・〇〇	約二・〇〇	金屬骨格
空冷星型	四〇〇	ベ・エム	水冷V型	一分八〇秒	約五、二〇〇	二一〇	二	約三、〇〇〇	約四八・〇〇	約二・〇〇	約四・〇〇	約二・〇〇	金屬骨格
空冷星型	四〇〇	九二式	空冷星型	一分二〇秒	約五、八〇〇	三三〇	二	約一、八〇〇	約二六・〇〇	約九・〇〇	約三・〇〇	約二・〇〇	金屬骨格
空冷星型	七〇〇	ベ・エム	水冷V型	三分〇秒	約七、〇〇〇	三三〇	二	約三、一〇〇	約六八・〇〇	約一〇・〇〇	約三・〇〇	約二・〇〇	金屬骨格
空冷星型	四〇〇	ジュ式	空冷星型	一分〇〇秒	約八、〇〇〇	三三〇	四	約四、六〇〇	約五五・〇〇	約三・〇〇	約四・〇〇	約二・〇〇	金屬全
水冷V型	四〇〇	ベ・エム	水冷V型	四分〇秒	約五、〇〇〇	一八〇	不定	約七、七〇〇	約二〇・〇〇	約一八・〇〇	約六・〇〇	約三・〇〇	金屬全
空冷星型	七〇〇	九三式	水冷V型	一分四〇秒	約五、〇〇〇	三三〇	不定	約八、一〇〇	約二五・〇〇	約二五・〇〇	約四・〇〇	約二・〇〇	金屬全
空冷星型	三三〇	九五式	空冷星型	三分〇秒	約六、五〇〇	三三〇	二	約一、四〇〇	約三五・〇〇	約八・〇〇	約四・〇〇	約二・〇〇	金屬骨格
空冷星型	四〇〇	ジュ式	空冷星型	一分五〇秒	約六、〇〇〇	二五〇	數名	約二、九〇〇	約五〇・〇〇	約二・〇〇	約四・〇〇	約二・〇〇	金屬骨格
空冷星型	一五〇	九五式	空冷星型	一分七〇秒	約五、三〇〇	一七〇	二	約九〇〇	約二六・〇〇	約八・〇〇	約三・〇〇	約二・〇〇	金屬骨格



伊	米	蘇	獨	國
ファイアット B.R.20	ボーイング B-17	エス・ペー 3型	ヘンシェル He111K	アミオ 351
引込脚・中単翼	引込脚・中単翼	引込脚・中単翼	引込脚・中単翼	引込脚・中単翼
四・五二・五二・一六・一四・七	七・九三・〇三・五五・五七	三・一〇・三三・三六	三・八二・二四・五三・五五	四・五〇・一五・五〇・五〇
七	六三・四	六	五三・六	五〇
四三三	四一〇	四〇〇	四〇〇	四八〇
四三〇	四三〇	四三〇	四三〇	四三〇
三〇〇〇	四八〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇	四〇〇〇
三〇〇〇米迄	三〇〇〇米迄	三〇〇〇米迄	三〇〇〇米迄	三〇〇〇米迄
九〇〇〇	六〇〇〇	六〇〇〇	六〇〇〇	六〇〇〇
三	三	三	三	三
三三〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇
同一機中二機	本機の改良機	同一機中二機	同一機中二機	同一機中二機

機 行		機 習 練	
八九式飛行艇	複(艇)	九〇式水上練習機	複(陸)
九〇式二號飛行艇	複(艇)	九三式水上中間練習機	複(双舟)
九一式飛行艇	單(艇)	九〇式水上練習機	複(双舟)
三式二號陸上練習機	複(陸)	九〇式陸上機作練習機	單(陸)
九三式陸上中間練習機	複(陸)	九〇式陸上練習機	複(陸)
九〇式艦上練習機	複(陸)	九〇式艦上練習機	複(陸)

列國現用主 艦艇要目表

機 名	型式	乗員	寸法	法	速度	航続	速上	限上	武	装	摘要	
ブリストル、ブレ	中単翼	三	幅 九・七	全長 一三・三	全高 三・〇	翼面積 一八・〇	最大速度 四三〇	巡航速度 四〇〇	航続距離 一八〇〇	上昇速度 三・三	九〇 乗員	
ハンドレベーチ	中単翼	三	幅 九・七	全長 一三・三	全高 三・〇	翼面積 一八・〇	最大速度 四三〇	巡航速度 四〇〇	航続距離 一八〇〇	上昇速度 三・三	九〇 乗員	
グイッカリス、ウ	中単翼	三	幅 九・七	全長 一三・三	全高 三・〇	翼面積 一八・〇	最大速度 四三〇	巡航速度 四〇〇	航続距離 一八〇〇	上昇速度 三・三	九〇 乗員	
エリントン	中単翼	三	幅 九・七	全長 一三・三	全高 三・〇	翼面積 一八・〇	最大速度 四三〇	巡航速度 四〇〇	航続距離 一八〇〇	上昇速度 三・三	九〇 乗員	
オー45	中単翼	三	幅 九・七	全長 一三・三	全高 三・〇	翼面積 一八・〇	最大速度 四三〇	巡航速度 四〇〇	航続距離 一八〇〇	上昇速度 三・三	九〇 乗員	



機 名	型式	乗員数	寸 法		速 度	航 続 距離	上 昇 度	上 昇 限 度	武 装	摘 要
			翼幅	全長						
ウエストランド・ライオン	固定翼	二	二五・二五	九・一五	四・四二	二四・二	三八	七九〇	三	陸軍協同機
アプロ・アンソン	低翼	二	二七・二〇	二・二九	四・〇	八・一	三三	五九八	二	沿岸偵察機
サンダーランド	高翼	六	八四・九	二六・〇	一〇・三	二八・一	三三六	六三〇	七	偵察機飛行
アンリオ	高翼	三	一五・〇	一〇・三	二・九	三・五	三五〇	七〇〇	三	偵察機練習用
ポテ	低翼	二	一六・〇	三・〇	三・〇	三・〇	二七五	七〇〇	不詳	偵察機
ラテコエール	高翼	五	二六・〇	二・一一	六・五	二・一〇	二七九	七二〇	三	偵察機偵察機

列國現用主要偵察機要目表

機 名	型式	乗員数	寸 法		速 度	航 続 距離	上 昇 度	上 昇 限 度	武 装	摘 要
			翼幅	全長						
カーチス・ホーク	低翼	二	二二・六	八・七	二・八	一・六	四〇	一〇〇〇	四	佛國に輸出さる
セバスキー	低翼	二	一〇・九	七・七	三・〇	二・〇	四八二	九四八	二	軽爆弾
カーチス P40	低翼	一	九・一	七・六	三・四	一・一	五〇	六二七	一	不詳
マツキー C200	低翼	二	一〇・五	八・九	三・五	二・六	五〇	一〇〇〇	二	最大時速五〇ノットを有する如く研究中
ファイアット G50	低翼	二	一〇・七	七・八	二・九	一・八	四八〇	一〇八〇	二	機械性能不良なるを以て改良機G55を製作中
ファイアット CR42	複葉	一	九・七	八・三	三・〇	一・九	四三八	一〇〇〇	二	

機 名	型式	乗員数	寸 法		速 度	航 続 距離	上 昇 度	上 昇 限 度	武 装	摘 要
			翼幅	全長						
ブレタ	高翼	二	二五・五	二・一五	四・〇	一・八	五〇〇	八五〇	一	無武装時五五ノット
スーパーマリン	低翼	二	二二・五	九・一五	三・四	一・五	五八〇	九〇〇	八	
スピットファイヤー	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	
ホーカー・ハリケーン	低翼	二	二二・二	九・五	四・〇	一・三	五〇〇	一〇三〇	八	
ポールトン・ポール	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	
ル・デフアイアント	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	
マルセル・プロット	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	
シユル 151	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	
デボアチン	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	
モランソルニエ	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	
メツサーシュミット Me109	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	一〇九R型参考
メツサーシュミット Me110	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	最大時速七五ノット
ハインケル He112	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	電機機
イー・16	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	同一機中二機の字あるは機種の異なる
イー・17	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	イー・16に比して性能一段と向上す
イー・19	低翼	二	二二・〇	九・一五	三・六	一・三	四八〇	九〇〇	八	イー・16に代るべき新機として開発中

列國現用主要戦闘機要目表



機種	型式	機関	最大時速	70%巡航	航続距離	武	装	製作國	摘要
N 一六	低単	同	四六〇	三五〇	同	同	同	同	
N 一七	同	液	五二〇	三九〇	同	キ二、キホ一	同	同	
ボーイング	同	空	三七二	三〇〇	六五〇	キ	二	米	P三六型
ホーク	複	同	四〇〇	三一〇	七二〇	キ	四	同	
クラアマン	同	同	四二〇	三二〇	一〇〇〇	キ	二	同	三型
セバスキイ	低単	同	五一〇	三五〇	九〇〇	キ二、キホ一	同	同	新型
グロスタリ	複	同	四〇一	三四〇	八五〇	キ	四	英	
デバーチン	低単	液	四五〇	三五〇	九〇〇	キ二、キホ一	佛	佛	
CB	同	空双	四五〇	三〇〇	一二〇〇			蘇	
バルデイ	同	空	三七五	三二〇	一七〇〇	キ	三	米	
シユライク	同	同	三三〇	二八〇	一三〇〇	キ	三	同	
コルセア	複	同	三一〇	二六〇	一一二五	キ	三	同	
ノースアメリカ	低単	同	三三〇	二七五	九〇〇	キ	一—三	同	
ペランカ	同	同	四九〇	三三〇	一八五〇	キ	三	同	
ボーイング	同	空双	三六〇	二九〇	一八〇〇	キ	五	同	
スチンソン	同	同	三三〇	二七六	一三〇〇	キ	一	同	

機種	型式	機関	最大時速	70%巡航	航続距離	武	装	製作國	摘要
N 一五	複	空	四一〇	三二〇	七五〇	キ	四	蘇	
マツキ C	89	高翼機	五二〇	三二〇	一〇〇〇	米迄		蘇	遠距離偵察機
カプロニ CR	134	引込脚	三九〇	二九〇	一〇〇〇	米迄		蘇	陸軍偵察機
カント Z	501	高翼機	四二〇	三二〇	一〇〇〇	米迄		蘇	
マリーチン	167W	引込脚	三三〇	二五〇	一〇〇〇	米迄		蘇	
ロッキード	212	引込脚	三三〇	二五〇	一〇〇〇	米迄		蘇	
ノース、アメリカ	N, O-47	中翼	三三〇	二五〇	一〇〇〇	米迄		蘇	同一機中に二機字あるは偵察機と偵察の場合に異なる
アレク(APK)	3	高翼機	三三〇	二五〇	一〇〇〇	米迄		蘇	水上偵察機
セバスキイ	2PA	陸軍用	三三〇	二五〇	一〇〇〇	米迄		蘇	水上偵察機、偵察機として米國より輸入せらる
エル	1-3C	固定脚	三三〇	二五〇	一〇〇〇	米迄		蘇	偵察機
ドルニエ	DO23	高翼機	三三〇	二五〇	一〇〇〇	米迄		蘇	偵察機
プローム・ウント	HS 128	高翼機	三三〇	二五〇	一〇〇〇	米迄		蘇	遠距離司令部偵察機
ハンシエル	HS 128	固定脚	三三〇	二五〇	一〇〇〇	米迄		蘇	遠距離偵察機

支那空軍飛行機諸元表



考 備	ハンケル	ユニーカー	フォード	同	ダグラス	ビーチクラフト
1、複、低單、高單は夫々複葉、低翼單葉、高翼單葉を表す。 2、空、液、空又は夫々空冷、液冷、空冷双發を表す。 3、キ、キホ、は夫々機關銃、機關砲、を表す。 4、本表の外飛行機はあれど現在使用せらるゝものゝみを抜萃收録せり。	同	低單空	高單三空	同	低單空双	複空
	液	空	三空	三三〇	三〇五	三〇五
	三四〇	二八〇	二二〇	二九五	二八〇	二七五
	二九五	二二〇	一八〇	一九〇〇	一六〇〇	九五〇
	一一〇〇	一〇〇〇	一一〇〇	一九〇〇	一六〇〇	九五〇
	同	獨	同	同	同	同
	H九〇型	舊型		DC三型	DC二型	

各國空軍擴張表(第一線飛行中隊)

年	獨	伊	英	佛	事 件
一九三三	二〇〇 (英佛側推定)	一一九 (五月末)	九〇 (一月推定)	一六六 (六月末)	一月 ヒットラー獨首相就任
一九三四	三〇〇 (英佛側推定)	一一二 (六月末)	九四 (六月末)	一七八 (六月末)	六月 佛國器材更新三ヶ年計畫策定 六月 伊太利器材更新六ヶ年計畫策定 八月 英國空軍擴張五ヶ年計畫策定 八月 ヒットラー獨總統就任

一九三五	三六 (六月)	一三六 (八月)	一〇五 (六月)	一八〇 (六月)	四月 獨空軍再建宣言
一九三六	一〇〇・一一〇 (六月)	一三八 (五月)	一一〇 (三月)	一八三 (五月)	五月 伊太利エチオピア併合 八月 スペイン内亂勃發 十二月 日獨防共協定締結
一九三七	一四一 (六月)	一五〇 (二月)	一二三 (六月推定)	二〇〇 (六月)	二月 英國五ヶ年十五億磅國防計畫策定 十二月 日獨伊防共協定締結
一九三八	二五〇 (六月)	二〇〇 (二月)	一四〇 (六月推定)	二二八 (六月)	四月 獨埃太利併合 九月 ズデーテン問題再發 九月 ミュンヘン會議
一九三九	三五四 (六月)	二七二 (六月)	一六六 (六月)	二五〇 (六月)	四月 チェッコ併合 六月 獨伊軍事同盟締結 四月 伊、アルバニヤ併合 九月 第二次歐洲大戰勃發

民間航空の重要性

一國の航空勢力國防力といふべきものは、決して軍航空のみをもつて構成

されべきではない。軍航空と民間航空とは骨肉の關係を有するものであつて、兩者の擴充と結合によつてこそ、始めて一國の航空勢力を構成し、その

偉容を堅持し、その能力を遺憾なく發揮し得られるのである。民間航空が、戦時に於て、航空軍備の準第一線となることは疑ひなきこと



ろで、列國が民間航空の指導發達に盡力してゐる所以も總てこゝに存するのである。歐米列國が、現に採用しつつある航空政策を見るに、その手段方法は、それ／＼異なり又それ／＼特色を有してゐるとはいへ、平時大いに民間航空を發達せしめ、有事の場合之を軍用に轉ぜしめることによつて、空中勢力の充實擴大を容易ならしめんとしてゐる方針に於て、列國は何れもその目的を一つにしてゐるのである。

即ち、ソ聯の國防飛行化學建設協會制度並に民間機の構造に關する統制政策。又、嘗て、第一次歐洲戰爭に敗れ軍用航空を全廢せられた獨逸は、民間航空の名に依つて、鋭意その發達に努力し一九三五年空軍再建を宣言するや直ちに之を軍航空に轉用した如きは其の最も顯著なるものである。

商業航空の使命 民間航空の主要なる分野を形成するものは、航空輸送事業を内容とする商業航空である。その使用を要約すれば、經濟、産業、貿易

の發達の先驅であり、遠隔廣大なる版圖統治、外交政策の完遂を期する手段として又文化の向上の手段として缺くべからざるものであり、國防の第二線として現代國家の生存興隆の上に重大なる使命を有するものである。

尙又、有事に際しては、直ちに之を軍用機に轉用し、又操縦者を徵用するのである。之は前述したソ聯、獨逸の列に徴しても了解されることであり、或ひは又獨逸の諾威進攻の際使用したコンドル・ハインケルの輸送機も、白蘭戰線に於ける落下傘部隊を搭乗せしめたのも民間機であつた。

戰略・政略的定期航空路 我が國防上特に注意を要するものは列國航空勢力の海外進出である。即ち、今時列國は、自國航空勢力の海外進出を圖り、一面、有事に備へ自國工業の擴充強化に力を注ぐと共に、他面、海外に政略的定期航空路を獲得獨占せんとして、猛烈なる競争を展開してゐることである。之れ即ち、平時の定期航空路は、

戰時の作戰航空路として、航空兵力の移動に大なる影響を與へしめる爲である。例へばソ聯の在歐航空兵力はシベリアの定期航空路に依つて、數日を出でずして極東に集中され得ることが考へられるし、米國の太平洋航空路は直ちに兵力の極東進出の足場となるであらう。又、その飛行場及び諸施設は、有事の際直ちに空軍の基地と化し得るのである。従つて、戰略的或ひは政略的某目標に對して、平時より爆撃包圍態勢を取り得るのである。

特に我國の國防上、注意を怠つてならぬものは、時に當り意外なる脅威を與へ得る支那及び極東に於ける列國の航空施設である。

列國の民間航空の現状

一 獨逸民間航空

第一次歐洲大戰の結果ヴェルサイユ條約に依つて軍事航空保持を禁止された獨逸は、將來戰に於ける航空武力の價値を認識して、獨逸軍保持を秘か

に民間航空に求め、重要國策として鋭意發達につとめたため、こゝに民間航空の異常なる發達を促進した。又他方、スポーツ航空としてグライダー熱が勃興し、國民は就つてこれに参加した結果、世界滑空王國を實現するに至つた。

而して、一九三五年ヒットラーの再軍備爆彈宣言なるや、この充實した民間航空並びに國民的航空熱によつて瞬時にして今日の如き壓倒的な優勢極る獨逸空軍の實現を見るに至つた。これこそ、民間航空即空軍の生きたる證據である。

今日の獨逸民間航空は凡てゲリング元帥の空軍省に於て統轄され、ナチス航空團(NSFK)によつて統制強化して戰時下に愈々その威力を發揮しつつある。

國民に對する航空思想の普及と訓練は徹底したもので、幼年團ヒットラー少年團により幼年時代より飛行の教育を行ひ、直ちに飛行機の操縦及び整備

に入り得る準備を進めてゐる。

ナチス航空團は一九三七年四月、それまで存在してゐた獨逸スポーツ航空聯盟及びその所屬團體の總てを解散し統合單一にして新設された團體である。その編成は師團、聯隊、大隊、中隊、小隊より成り、團員は平時には空軍定員の許す限り入隊して、正規の訓練を受け、第一線の任務に服し、有事の際は在郷軍人であるなしに拘らず團員たるもの役に立つ限り全部空軍の一員として出動するのである。従つて、獨逸民間航空は、空軍の第二線といふよりは、軍隊への豫備、訓練基礎訓練といふべきである。

しかし、團員の總てが必ずしも操縦者となるわけでは勿論ない。或ひは地上勤務に、氣象、無線、通信、或ひは製作方面に當る等、その進むべき道は多方面に互つてゐるのである。

定期航空 獨逸に於ける定期航空は一九一九年二月に開始され、政府の補助政策に依つて多數の航空會社の出現

を見たが、一九二六年一月に至り、國內競争を避け外國空輸會社に對抗せんため結合單一化し「ルフトハンザ」航空輸送會社を創立した。同會社は創立以來、(一)距離五〇〇軒以下の國內線(一)距離一、〇〇〇軒を限度とする歐洲各首都を結ぶ國際線、(一)世界的國際線、即ち歐亞連絡線及び歐米連絡線の開設を方針として着々航空路の開拓に努力した。現在國內に於ては、延距離二七、〇〇〇軒の四十八線、歐洲に於ては、延距離二六、〇〇〇軒の二十六線を有してゐる。國際線としては、獨逸南米線、獨逸北米線、及び歐亞航空公司的の經營する支那國內線がある。

但し、國際線は歐洲戰爭勃發により一齊に中止された。一九三九年夏現在に於ける定期航空路線の總延長は七四、八五四軒、世界第二位である。

又獨逸は現在、飛行船を商業航空に使用してゐる唯一の國であるが、そのツェッペリン飛行船の優秀性は嘆賞に値する。ツェッペリン伯號飛行船は一



九三七年九月を以て、第百回の大西洋横断を七ヶ年無事故の記録を以て終了したが、それ迄の飛行距離約百二十五萬軒、輸送旅客數一萬一千五百、荷物郵便物八萬軒に達する成績を挙げた。

### 二 伊太利民間航空

伊國の民間航空は、他の歐洲列強に比し從來遅々として振はなかつたが、ムソリニ首相の「航空國家」建設の空軍第一主義に依つて一九三六年より航空義務兵役が設けられ、民間航空も又重要視されて、その發達助長のために空軍省の監督指導下に王國航空聯盟に統制されるに至つた。かくて、空軍豫備役幹部の養成、航空思想の宣傳、國民の航空スポーツ訓練等に當つてゐる。

王國航空聯盟は、獨逸やソ聯の如き單一團體ではなく、各種の團體で存在してゐるのを統轄し指導監督に當るものであつて、各地方植民地毎に支部を有し、組織的に活動してその効果を擧

げてゐる。

定期航空・國策會社のアラリトリアをして地中海を中心とし、アフリカの勢力範圍に力を用ひしめてゐる。政府の定期航空事業に對する補助金は、初度施設のものを除き、一九三六年に於ては七千八十萬利であつた。一九三九年夏現在に於ける定期航空路線總延長は四九、九七〇軒である。

インド通過を以て泰國との航空路開拓に成功し、本年(一九四〇年)三月ローム・バンコック間毎週一往復するに至つたが、歐洲の戦火に捲込まれ一時中止された。

### 三 ソ聯民間航空

列國中異色ある民間航空を保有してゐる國である。政府當局が自ら民間航空を指導經營し「何を措いても空へ」のスローガンを掲げ大空軍建設に邁進してゐる。即ち、一九二七年、ソ聯邦國防飛行化學建設協會(オソアピアヒム)を創立して、從來の航空國防團體

を結合統一し、政府指導の國策機關として軍事航空の援助、一般航空の指導と、學生より、大人に至るまで航空を主とする國防知識の普及に努力してゐる。

同協會設立の年早くも會員二百萬人に達し最近に於ては二千萬人を突破したと政府當局は發表してゐる。又同協會の乗員養成を見るに、各共和國、州各都市に指導部を設け、空軍の協力下に協會附屬の飛行學校に於て飛行機操縦士、グライダー滑空士の養成に極力努め、軍飛行學校入學候補者を教育してゐる。今日に於ける同協會養成の民間飛行士は一萬名を突破したと發表してゐる。

又、今次歐洲大戰の龍兒となつた落下傘部隊こそは、ソ聯に於て早くから實施、訓練され來つたものであるが、同協會も亦、之に盡力、全國に千數百の落下傘降下の訓練塔を設け、現在に於ける降下訓練を受けた者は、二百萬人に達するといはれてゐる。

### 四 米國民間航空

米國の民間航空は、地理的環境と國民性及びその富とに依り、自然發達に俟ち、政府は只飛行場等の設備を行ふのみであつたが、最近、國際情勢に鑑み獨逸、ソ聯等の如き統制には勿論到らないが、民間航空より空軍要員の獲得を目指しつつあることは看過出来ない。

米國の民間航空は世界第一を以て任じ、一九三八年調に於ける飛行機數は一一、一六〇機、操縦士は二六、一四四人の多きに及んでゐる。操縦士中、約一萬に近き優秀者は、有事の際直ちに空中戰士として第一線に立ち得ることは特に注目すべき點である。

定期航空 米國に於て始めて定期航空の開設したのは、一九一八年五月、ニューヨーク・ワシントン間の郵便飛行からである。爾來、米國の地理的環境と商工業の發達とによつて國內航空は急速の發展を遂げ、今日に於ては約

實にソ聯邦國防飛行化學建設協會なるものは民間航空の指導團體であると共に、空軍の一翼として大いなる役割を演じてゐるのである。

定期航空・ソ聯は一九二八年より第一次航空五ヶ年計畫、更に第二次、第三次の航空五ヶ年計畫を樹て、航空線路の大擴張に努力してゐる。國情の上から國際航空路としては殆んど見るべきものはないが、その廣大なる版圖も空中交通機關により非常に短縮され、軍事上、經濟上測るべからざる利便を與へてゐる。

主要線は、モスコイ・バクー線、モスコイ・タンケント線、浦鹽・ペトロパウロフスク線、モスコイ・浦鹽線等である。殊に第一次五ヶ年計畫の重要線として企圖されたシベリア横断たるモスコイ・浦鹽線は距離八、〇〇〇餘軒に及び、モスコイ、ノヴォレピリスク、イルクーツク、ハバロフスク等を經て浦鹽に達し、ハバロフスクに於て北樺太及びカムチャツカに至る線と

連絡してゐる。又蘇滿國境地方にも多數の支線の開通を見、尙、最近に於ては新疆を經由して支那内地に連絡をつけるに至つた。

ソ聯の交通路は凡て軍事的を第一義として設置されてゐることは明らかである。シベリア鐵道沿線に於ては、不時着陸場を完備し、且つ其間隔をもつて完全なる飛行場を整へ、平時航空に便すると共に有時の際に於ける空軍の輸送に遺憾なからしめてゐる。

ソ聯の民間航空としての特異なる事業は、魚群搜索、害虫驅除、寫眞測量、播種、北極探險等の産業や開拓事業に於ても飛行機を活躍せしめ、多大な効果を擧げてゐることである。

一九三八年度に於ける定期航空の實績は、飛行總距離五三、二九七、〇〇〇軒。輸送旅客數一八〇、〇〇〇人、輸送荷物量二六、五〇〇、〇〇〇軒。輸送郵便物量六、八五〇、〇〇〇軒である。



二十の會社が經營する航空路は實に五萬三千軒を越へてゐる。十萬の人口を擁する都市は凡て航空交通の恩澤に浴し、民間飛行場の如きも二、二八八に達してゐる。

國際線は南米大循環線、太平洋橫斷米亞運路線、大西洋橫斷米歐運路線の三大航空路があり、之は總てペン・アメリカン・エアウェイズ會社の經營するところ、國際市場開發の先驅となつてゐる。

南米循環線は一九三二年に完成されマイアミを起點として南米沿岸を廻り中米を經由してグラウンスマイルに歸還するものであり、ラテン、アメリカ諸國との貿易關係を緊密にし、距離實に三三、〇〇〇軒に及ぶ大幹線である。

太平洋橫斷線は一九三六年四月開航され、サンフランシスコ―香港間距離一四、〇〇〇軒といふ世界最大の海上航空路である。

尙、一九二九年四月、米支航空契約

倫敦を中心として航空路は歐洲大陸に伸び、中央アジアに走り、或はアフリカ大陸を横斷し更に印度、漢洲、香港に迄も達してゐる。

尙、香港線は米國の太平洋航空路と香港に於て連絡し、且つ中國航空公司の香港乗入を許可し倫敦上海を連絡するに至つたが、第二次歐洲戰亂の爲、倫敦―香港の航空は中止された。その他にも種々變更支障を來してゐる。

一九三八年度に於ける定期航空の統計について示せば次の如くである。

- 一、飛行總距離 一七、二六六、八〇〇軒
- 一、輸送旅客數 二四、〇〇〇人
- 一、輸送貨物量 二、五三三、〇〇〇軒
- 一、輸送郵便物量 一、六〇八、〇〇〇軒

- イ、飛行機 一、一、一、一、一
- ロ、操縦士 一、一、一、一、一
- ハ、飛行場 一、一、一、一、一

六 佛國民間航空

今次の歐洲戰爭に敗戦した佛國は今後如何に立ち直るか疑問であるが、そ

に基き米支合辦の中國航空公司を設立支那内地に航空路を開設したが、最近は昆明ラングー線により英國のイムペリアル・エアウェイズと接続するに至つた。

一九三八年度の定期航空諸統計を示せば次の如き實績を擧げてゐる。

- 一、飛行總距離 一二九、六九三、〇〇三軒
- 一、輸送旅客數 一、五三六、一一一人
- 一、輸送貨物量 四、二五三、六七〇軒
- 一、輸送郵便物量 一

五 英國民間航空

英國民間航空は凡て空軍省の下に統轄されてゐるが、民間團體はそれの立場に立つて存在してゐる。只注目されるべきは、近年來獨逸の空軍に備へて、民間操縦者は從來總豫備軍であつた原則を捨て去り、空軍は民間飛行學校や各航空團體と協力して戰時に對應

の所有する民間航空路についても同様である。

佛國の有する國際幹線はフランス―南米線、フランス―マダガスカル線、フランス―佛領印度支那線の三線である。フランス―佛領印度支那線は一九三一年一月支那の西南航空会社の廣東―河内線に連絡して支那とフランスを結んだが、歐洲戰爭の爲めに壊滅した。

佛國の一九三八年に於ける定期航空業績は飛行總距離一四、四八五、二九六軒、旅客總數九六、六一九人、貨物輸送量一、三五四、四〇八軒、郵便輸送量一、一六九、三四七軒である。

七 支那民間航空

米國系の中國航空公司及び獨逸系の歐亞航空公司とによつて、支那の民間航空は支配されてゐる。

中國航空公司は一九二九年四月に創設され、一九三二年米支航空新契約締結に依つて米支合辦となり、上海―南

する航空要員の養成に努めて來たことである。

空軍擴張を重要とする一方經費の點より平時に於ける民間航空事業の獎勵發達に努めて來た政府は、之が補助には多額の補助金を交付して來た。一九三八年に於ける補助獎勵金は一二四三〇〇〇磅、一九三九年は二、五二〇、〇〇〇磅である。一九二九年四月に航空會社インペリアル、エアウェイズを創設、小會社を之に統合して政府の監督下に置き、同年より年々補助金を交付して空輸業務を遂行し逐年成果を向上して來つたが、一九三七年補助金交付協定を更新して、一九三八年より向ふ十五年間、多額の補助金を交付することとなつた。

定期航空 インペリアル、エアウェイズの活躍は目覚しく、その海外主要航空路には倫敦―シドニー線、倫敦―カルカタ線、盤谷―香港線、倫敦―ダーバン線、カルトゥム―タコラデ線等、世界航空路地圖を一瞥すれば、

京―九江―漢口―宜昌―萬縣―重慶―成都間線、南京―徐州―濟南―天津―北京間線、上海―寧波―温州―福州―廈門―汕頭―廣州間線の三線を計畫しその一部を經營し來つたが、一九三三年汎米航空會社と國民政府との協定後支那側の持株は逐次米人の手中に收められ、名目は米支合辦であるが現在の實權は全く米人に握られてゐる。その發展は進歩し前記三線の外、重慶―貴陽―雲南線を完成し、更に成都―巴安―康定―拉薩線の開設を見るに至つた。

八 帝國民間航空

民間航空團體の統合 紀元二千六百年十月一日、我民間航空團體の統合が成立、こゝに大日本飛行協會の誕生を見るに至つた。即ち、我國航空創始後間もなく創設され、航空思想普及に、



航空事業助長獎勵に大なる功績を樹て來たつた帝國飛行協會と、十年の歴史を有する日本學生航空聯盟及び大日本青年航空團、滑空技術に努めた日本帆走飛行聯盟の四團體が發展の解消を遂げ、こゝに新團體大日本飛行協會の誕生となり、戦時下高度國防國家建設に即應する民間航空の新體制が成つたのである。同協會は民間事業中の航空機製造並に航空輸送等を除いた總ての航空に關する普及指導、練成の大事業に邁進するものである。

我が民間航空の世界的地位について云へばその必要とする質に於ても、量に於ても歐米列國に比して格段の差異がある。一步も二歩も否數歩も遅れてゐる状態にある。即ち、當局と協力して航空日本の擴充強化の確立を一日も早く實現を見なければならぬ。

定期航空・我國の定期航空は大正十一年十一月堺大濱―徳島間を結んだのがその始めである。同年十二月東京―大阪間、翌年大阪―別府間の運航を見

るに至つたが、これが我定期航空の黎明期であつた。昭和二年に至り政府は朝野の本格的定期航空の要望に鑑み航空輸送會社設立準備委員會を設けしめ翌三年十月資本金一千萬圓の日本航空輸送株式會社が設立された。同社は翌四年四月東京―大連線を手始めに、逐年國內線の充實を計ると共に内臺線、日滿線、日支線と、順次航空路を延長した。

昭和十三年十二月、日本航空輸送株式會社は前年設立を見た國際航空會社と統合せられ、資本金二千五百五十萬圓の大日本航空株式會社が誕生し、次で第七十四議會に日本航空株式會社法案が提出され、これが通過を見るに及び昭和十四年八月特殊法人として資本金一億をもつ大日本航空株式會社が設立された。同社は設立一年足らずして日泰定期航空の實施、南洋線の擴張等輝かしき發展振りを示した。

日泰定期航空路は福岡―臺北―廣東―河内―盤谷を通ずるもので、現在毎

週一往復、純國産三菱一型輸送機に依つて實施されて居り、日泰間を三日で結んでゐる。又、南洋線は横濱―サイパン―パラオを結ぶ航路で、二週一往復、純國産川西四發飛行艇に依つて實施されて居る。横濱―パラオ間は僅か二日間である。尙、大日本航空株式會社では、サイパン―パラオ―オラック―ポナペ―ヤルトを結ぶ南洋群島内航空路の開設を企圖し、明春定期航空が開始される豫定である。

現在日本の航空路は三萬軒に達し、旅客、郵便物、貨物等を日々輸送し、日滿支間、南洋、泰國との間に迅速且緊密なる連絡を取り、東亞新秩序建設の重要な役割を果してゐる。昭和十三年定期航空に於ける実績を示せば次の如くである。

- 一、飛行總距離 六、三三、七三三
  - 一、輸送旅客數 六八、四七九
  - 一、輸送郵便物量 七五、三三三
  - 一、輸送貨物量 三、七五、八九七
- 尙、大日本航空會社では、「滿洲航

空」及「中華航空」兩會社と協力大陸航空路擴充に乗り出し、立ち遅れた國際航空路の開設に傾注することとなつた。

滿洲航空・滿洲國に於ては一九三二

年創立された滿洲航空株式會社が逐年航空路を擴張し現在では總計約一萬二千軒に達する航空路を經營してゐる。

開設に努め創立日なほ淺いにも拘らず本年八月末現在では總計約七千三百軒の航空路を經營してゐる。

附表

東亞主要航空路 (昭和十五年六月現在、航空局調)

航空線路	距離 (軒)	所要時間 (時)	旅客賃金 (圓)	經營者	飛行回数
東京―米子	一八二・六	三・〇	七・四〇	大日本航空會社	每日一往復
東京―天津	九〇・九	三・〇	一・〇五	大日本航空會社	每日一往復
東京―青島	五〇・九	二・〇	一・〇五	大日本航空會社	每日一往復
東京―北平	六五・〇	四・一	一・〇五	大日本航空會社	每日一往復
東京―上海	二九・二	三・五	二・八〇	大日本航空會社	每日一往復
東京―南京	二九・二	三・五	二・八〇	大日本航空會社	每日一往復
東京―大連	九四・二	五・〇	九・七五	大日本航空會社	每日一往復
東京―平壤	二九・二	三・五	二・八〇	大日本航空會社	每日一往復
東京―新義州	一八・六	三・〇	七・四〇	大日本航空會社	每日一往復



空 航

牡丹江	哈爾濱	牡丹江	新京	新京	奉天	大連	大連
富同饒實東半八	富佳依通	哈	中輯通	濟輝圖	包張承錦	佳哈新奉	別松高
截面	木	爾江			家	木爾	滿洲
錦江河清安河通	錦斯爾河	賓	鎮安化	津春們	頭口德州	新賓京天	府山松
六六四三二一	四三二一	二	四三二	五四三	三七八二	一八六三	四二一
七一六一二八八	五一三六	七	二二六	七四九	六三八〇	八七二五	二九四
五五五〇〇〇	五五五〇	〇	〇五五	〇〇五	五五〇〇	〇五五五	〇〇〇
四四三二一一〇	二一一〇	一	二一一	二二一	七四三一	五四二一	三二一
三〇〇一二〇二	四五二五	四	二四一	五〇四	三四〇一	二〇四二	一一〇
五五五〇五〇五	〇〇〇〇	〇	五五〇	〇五〇	〇〇〇〇	五〇〇五	〇〇〇
九八六四三二一	五三三二	二	四三二	五四三	四七四一	九五四二	二一一
七八七六二六二	六九〇〇	八	二二五	六四七	五九三五	六七一三	八八〇
每 週 二 往 復	每 日 一 往 復	每 週 三 往 復	每 週 二 往 復	每 週 三 往 復	每 週 二 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復

空 航

橫濱	京城	台南	台北	台北	福岡	大阪	大阪	大阪	東京	東京	京城		
パサ イ ラ バ オン	清成	馬	廣	台宣花台高台台	台那	高德	福米	長富金	新長	札青仙	大		
	津興	公	東	北南港東雄南中	北朝	知島	岡子	野山澤	湯野	幌森臺	連		
四二 一八 〇〇	五二 六七 〇〇	九 二五	七 七六	六 四三	二 一〇	一 六九	二 一八	五 三〇	五 三二	三 二八	九 六三	五 五〇	
サイ パン より	七〇	二 〇	三 三	五 四四	二 一一	〇 五	三 二	二 一	二 一	二 通	二 一	四 三一	二 一
〇〇	四 二五	二 五	二 〇	二 五〇	四 五三	四 五〇	五 二〇	五 二〇	四 三	五 過	五 五	一 五	一 四
三 七五	三 一六	一 〇	一 〇	六 五	四 三	二 一	一 六	一 八	三 二〇	二 一三	二 一〇	五 三一	四 一五
每 日 二 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復	每 日 一 往 復

大日本航空  
株式會社



空 航

路	支	那	總延距離三、七二五杆	經營者	飛行回數
台上北北北 北海京京京 廣台大張上南徐濟天 家 東北同口海京州南津連津	佳木斯 新 京 哈爾濱	滿海齊 哈齊嫩黑孫北 洲拉哈 爾哈 安 里爾爾 賓爾江河吳鎮	黑河より 四二一三二一 四三一 六四三二二一 三四四四一三 五五四 二五四三〇一 〇〇〇〇〇〇 〇〇五 〇五五〇〇五	公中 華 航 司空	每 週 二 往 復
九七三一 二四二七 五〇〇〇	一、 二九六四一 四七八〇二 〇〇〇〇〇	一、 二〇七五四二 七〇七二二七 五〇〇〇〇五	三二二 二四一 五〇〇〇	一 二四七 〇五〇〇	每 週 四 往 復
二二二 二四一 五〇〇〇	五五五 四三〇 〇〇〇〇	四二一 三二一 〇〇〇〇〇	二二二 二四一 五〇〇〇	一 二四七 〇五〇〇	每 日 一 往 復
二二二 二四一 五〇〇〇	五五五 四三〇 〇〇〇〇	四二一 三二一 〇〇〇〇〇	二二二 二四一 五〇〇〇	一 二四七 〇五〇〇	每 週 三 往 復

空 航

佳木斯	新 京	新 京	奉 天	奉 天	牡丹江	佳木斯	佳木斯
湯	錦赤林林開通	三綏穆牡	大岫安寬輯通桓	北天錦	東	饒同富蘿鶴	富寶
原	州峰西東魯遼	口河站江	連巖東甸安化仁	京津州	安	河江錦北鎮	錦清
九七六四三二 三八五〇九二四 五五五〇五五〇	五四四三 三八一六 五五〇〇	八六五四二二一 一〇一二九三七 五五〇五五五五	七六二 三一〇 〇〇〇	二 四二二一 一六〇三三 五五五〇〇	二 四二二一 一六〇三三 五五五〇〇	二 一六〇三三 六五〇〇	二 一六〇三三 六五〇〇
〇 一五二二 五五五五五〇	六五四三二一 三三二二 五二五〇	五四三三二一〇 四二三〇一三五 〇〇五〇〇〇五	三三一 五一 〇〇〇	一 三二一〇〇 〇一三五 〇〇〇五〇	一 三二一〇〇 〇一三五 〇〇〇五〇	二 一〇〇 〇〇	二 一〇〇 〇〇
一 〇七九六六六	一 八六五三二 六五四四 六九八一	一 七五五四三二一 二八二四一四七	一 六五一 六一五	一 三五二一 二八七八九五	一 三五二一 二八七八九五	一 三二 四一	一 三二 四一
每 週 一 往 復	每 週 二 往 復	每 週 三 往 復	每 週 三 往 復	每 週 三 往 復	每 週 一 往 復	每 週 四 往 復	每 日 一 往 復

株滿  
式洲  
會航  
社空



型 式	名 稱	機 種	性 能			機 造
			全備重量(斤)	搭載重量(斤)	航続距離(里)	
相羽式ツバメ六型	神風式	二五〇	一、〇七二	一、〇七二	二〇〇	複木、陸
同 ツバメ七型	同	二五〇	一、一〇〇	一、一〇〇	二〇〇	複木、陸
同 ツバメ八型	同	二五〇	九〇〇	九〇〇	二〇〇	複木、陸
同 ツバメ十型	同	二五〇	九〇〇	九〇〇	二〇〇	複木、陸
エアスピード式エンヴオイ型	リンクス式	二五〇	二、六〇〇	二、六〇〇	二〇〇	単低木、陸
アヴロ式五〇四K型	ル・ローン式	二五〇	八〇〇	八〇〇	二〇〇	複木、陸
ビーチクラフト式C一七E型	ライト・ホワール・ウインド式	二五〇	一、六〇〇	一、六〇〇	二〇〇	複金、陸
BFW式BF一〇八B型	アルグス式	二五〇	一、二六八	一、二六八	二〇〇	複金、陸
シエルヴァ式C一九型	ジエネツト式	二五〇	七〇〇	七〇〇	二〇〇	複金、陸
(オートジャイロ)						
ダグラス式DC二型	ライト・サイクロン式	二五〇	八、一六〇	二、六〇〇	二〇〇	単低金、陸
ダグラス式DC三型	ライト・サイクロン式	二五〇	八、一六〇	二、六〇〇	二〇〇	単低金、陸
D・H式ブス・モス型	ジブシ式	二五〇	九八〇	九八〇	二〇〇	単高木、陸
フエアチャイルド式二二型	メナスコ式	二五〇	七九〇	七九〇	二〇〇	単高金、陸
フオツカー式F七B型	ライト・ホワール・ウインド式	二五〇	四、五〇〇	一、六〇〇	二〇〇	単高木、陸

本邦飛行機要目

(昭和十四年十月現在、航空局調)

同 一三	同 一二	同 一一	同 一〇	昭 和 九
一六、二一二	一一、〇五三	七、三六五	四、六六八	三、〇一五
六、一五二、七二二	一七、四一〇、六〇二	六、四九七、二二七	三、〇一三、〇七二	三、三九九、九四五
六八、四二七	五〇、一四九	二〇、九九六	一一、七七二	一三、二一一
七五四、三二二	五九六、九一四	三五七、二五九	二六五、五四八	一九九、二三三
二七五、八四九	二五二、五七二	八三、九四八	六八、八四八	五八、七七八

【同 累 年 較】

線 路	航 空 距 離 ( 杆 )	旅 客 ( 人 )		郵 便 物 ( 斤 )		貨 物 ( 斤 )	
		輸 送 量 ( 人 )	輸 送 量 ( 斤 )	輸 送 量 ( 斤 )	輸 送 量 ( 斤 )		
大日本航空	一九、六四七、四一、三七四	—	—	—	—	—	—
(但し一日の飛行距離)							
安藤飛行機	六七	八、三〇八	一二二	八、一七四	八二	—	—
東京航空	一五〇	九、六〇〇	五五	八、二八〇	—	二八二	—
日本海航空	二四〇	一四、四〇〇	四四	一〇、五六〇	二八	—	—
總 計	二〇、一〇四	—	—	—	—	—	—

定期航空輸送成績

(昭和十四年度、航空局調)



日 本	飛行機	操縦士	飛行場	飛行距離	輸送旅客量	輸送荷物量	輸送郵便物量
—	—	—	—	六、一五三、七三三	六八、四三七	二七五、八四九	七五、三三三
				一九三八年定期航空			

列國の民間航空状況

(航空局調)

三 菱 式 雁 型	壽 式	四、五〇〇	二、三〇〇	八、四〇〇	二	三、〇〇〇	三〇〇	單低金、陸
三 菱 式 鷹 型	同	四、五〇〇	五、三三三	一、七三三	三	三、〇〇〇	二〇〇	單低金、陸
三 菱 式 雙 發 輸 送 機	金 星	九、〇〇〇	—	—	二	—	二〇〇	單低金、陸
中 島 式 A F 型	壽	四、〇〇〇	一、七一〇	四、七四〇	二	八、五〇〇	一八五	複木、陸
中 島 式 A N 一 型	同	五、〇〇〇	—	—	一	—	三、五〇〇	單低金、陸
中 島 式 A T 二 型	同	四、〇〇〇	—	—	二	—	三、一〇〇	單低金、陸
パ ー シ ヴ ァ ル 式 ガ ル 型	ネ ビ ア ジ ャ プ リ ン 式	一、五〇〇	一、〇一〇	一、七〇〇	二	一、一〇〇	三〇〇	單低金、陸
サ ル ム ソ ン 式 D 六 型	サ ル ム ソ ン 式	六、〇〇〇	五、三三三	二、二二二	二	四、〇〇〇	二〇〇	單高金、陸
テ イ ラ ー カ プ 式 J 一 二 型	コ ン チ ネ ン タ ル 式	四、〇〇〇	四、二九	一、七五	二	三、三三三	一三	單高金、陸
セ ヴ ア ス キ ー 式	ラ イ ト サ イ ク ロ ン 式	八、〇〇〇	—	—	二	—	三〇〇	單低金、陸
二 P A — B 三 型	ラ イ ト	—	—	—	—	—	—	—
ト ラ ベ ル エ ア 式 四 〇 〇 〇 型	ホ ク ー ル ウ イ ン ド 式	三、〇〇〇	一、一七〇	四、五〇	二	九〇〇	一七	複木金、陸
ワ コ 式 X P F 七 型	ジ ャ コ プ 式	三、五〇〇	一、三三九	三、八五	三	一、一〇〇	三三	複木金、陸

フ オ ッ カ ー 式 ス ー パ ー 右 型	ジ ュ ビ タ ー 式	四、〇〇〇	二、七〇〇	一、〇六〇	八	一、〇〇五	一七〇	單高木、陸
同	壽	四、〇〇〇	一、七三〇	一、〇三二	八	一、一三〇	一九〇	同
フ オ ッ カ ー 式 ス ー パ ー 左 型	ジ ュ ビ タ ー 式	四、〇〇〇	二、七〇〇	一、〇六〇	八	一、一三〇	一九〇	同
ユ ニ ヴ ァ ー サ ル 水 陸 交 替 機	神 風 式	二、五〇〇	九、六四	九、九	四	七、六五	一六〇	同
瓦 斯 電 式 K R 一 型	神 風 式	二、五〇〇	九、六四	九、九	四	七、六五	一六〇	複木、陸
同	同	二、五〇〇	九、六四	九、九	四	七、六五	一六〇	複木、陸
瓦 斯 電 式 K R 二 型	同	二、五〇〇	九、六四	九、九	四	七、六五	一六〇	複木、陸
瓦 斯 電 式 T R 一 型	同	二、五〇〇	九、六四	九、九	四	七、六五	一六〇	複木、陸
ア ン リ オ 式 二 八 型	ル ・ ロ ー ン 式	八、〇〇〇	八、〇〇	二、三三	二	二、四〇〇	八〇	複木、陸
ハ イ ン ケ ル 式 一 一 六 型	H . M 式	二、四〇〇	六、九三〇	二、六二〇	六	四、五〇〇	三〇〇	單低木、陸
石 川 島 式 R 五 型	シ ー ラ ス 式	二、三三	七、八三	二、四二五	二	二、五〇〇	一四八	複木、陸
一 四 式 二 型 水 上 機	ロ ー レ ン 式	四、五〇〇	二、八三〇	八、六〇	六	五、三〇〇	一三〇	複木、水
一 五 式 水 上 機	イ ス パ ノ ス イ ザ 式	三、〇〇〇	一、九五〇	五、四〇〇	二	七、五〇〇	一三〇	複木、水
航 空 研 究 所 長 距 離 機	川 崎 特 殊 液 冷	七、五〇〇	九、二〇〇	三、〇〇〇	二	二、三〇〇	二〇〇	單低金、陸
九 五 式 一 型	九 五 式	三、五〇〇	一、四七〇	四、八三	二	—	一六五	複木、陸
九 五 式 三 型	九 五 式	三、五〇〇	一、四七〇	四、八三	二	—	一六五	複木、陸
ロ ッ キ ー ド 式 ア ル テ ア 型	ウ オ ス プ 式	五、五〇〇	二、五八四	一、〇五九	四	九〇〇	二七〇	單低木、陸
ロ ッ キ ー ド 式 一 四 W G 三 型	ラ イ ト サ イ ク ロ ン 式	八、〇〇〇	七、九五〇	三、二六八	四	三、三三〇	三、八五	單低金、陸
三 菱 式 鳩 型	三 菱 式	四、〇〇〇	一、九〇〇	七、七〇	五	—	二〇〇	單高木、陸



國名	定期航線 (一九三九)	飛行距離	旅客數	貨物量	郵便量	備考
英吉利	一、六六六	六、四〇〇	三三三	一七、三三六、八〇〇	二四、〇〇〇	二、三三三、〇〇〇
佛蘭西	二、四七四	一、四九五	二〇一	一四、八八五、二九六	九六、六一九	一、三三三、〇〇〇
獨逸	八八四	二、三〇〇	二〇一	一八、八三三、九〇〇	三三三、一〇一	四、九六七、一九八
北米合衆國	一一、六六〇	三、一〇〇	二、二八八	二二、六九三、〇〇〇	一、三三三、一〇一	四、三三三、六七〇
伊太利	三三九	七〇八	五	一〇、〇〇〇、三三九	二八、〇一八	二、三三三、三三三
和蘭	一一三	八七	三	九、八八六、九八三	二四、七三九	一、七三三、三三三
白耳義	一八七	—	—	二、三九九、七三三	三〇、三三三	五、三三三、三三三
ソ聯	—	—	—	五三、二九七、〇〇〇	一八〇、〇〇〇	三、三三三、〇〇〇

主要各國に於ける商業航空統計 (西紀一九三九)

國名	定期航線 (一九三九)	飛行距離	旅客數	貨物量	郵便量	備考
日本	△二五、三六二	六一九	六八、四二七	二七五	七五四	( ) 内、數字ハ西歷紀元年數
英國	五八、九三八	*一、七二四	*二、三三三	*二、三三三	*一、六〇八	
米國	一三三、七九六	一一、九六九	一、五三六、一一一	四、二五三	*九、四二八	
獨逸	七四、八五四	二、〇三八	二九九、三〇一	*四、九六七	五、七〇五	△(一九四〇)
佛蘭西	七五、五二四	一、四四八	九六、六一九	一、三五四	一、一六九	* (一九三七)
伊太利	四九、九七〇	*一、〇四〇	*一、一八〇、〇一八	*二、一二五	*五五九	# (一九三六)
ソ聯	六四、〇二九	#五、三二九	*一八〇、〇〇〇	*二六、五〇〇	*六、八五〇	
和蘭	四四、六一二	*九八四	*一四一、七二九	*一、七五三	*六九二	

民間飛行場 (昭和十五年現在)

名稱	所在地	種別	滑走區域
東京羽田	大正區船町	水陸	東西六〇〇米 南北六〇〇米
大阪	大正區船町	水陸	東西七二〇米 南北四〇〇米
福岡第一	粕屋郡和自村	水陸	東西七九〇米 南北八〇〇米
福岡第二	多々良	水陸	東西五五〇米 南北一五〇米
廣島	大竹町	陸	東西八五〇米 南北九二〇米
那覇	那覇郡	陸	東西六〇〇米 南北六〇〇米
京都	伏見區	陸	東西六〇〇米 南北六〇〇米
新義州	義州郡	陸	東西六〇〇米 南北六〇〇米
大連	周水子屯	陸	東西六〇〇米 南北六〇〇米
松江	水子屯	水	長六〇〇米 幅二〇〇米
仙臺	七郷村	陸	東西七五〇米 南北八二〇米
札幌	七郷村	陸	東西九〇〇米 南北八〇〇米
青森	油川町	陸	東西七八〇米 南北七〇〇米

名稱	所在地	種別	經營者
富山	倉垣村	陸	長七〇〇米 幅二五〇米
新潟	松ヶ崎村	陸	長六〇〇米 幅一五〇米
都城市	五十市村	陸	長四二七米 幅一五〇米
名古屋	港區稻永新田	水陸	長六〇〇米 幅三〇〇米
米子	加茂村	陸	長五五〇米 幅三〇〇米
臺北	松山莊	陸	長九四六米 幅七〇〇米
臺南	解顔面立石洞	陸	長九〇〇米 幅七〇〇米
宜蘭	宜蘭街金六結	陸	長九五〇米 幅六〇〇米
臺中	沙鹿莊	陸	長八〇〇米 幅八〇〇米
臺南	永寧莊	陸	長七〇〇米 幅一、〇〇〇米
臺東	卑南莊	陸	長一、二〇〇米 幅一、〇〇〇米
中島大井	東京市品川區大井町	水	中島飛行機株式會社
滋賀	滋賀縣坂本村	水	海軍豫備航空團
川西鳴尾	兵庫縣鳴尾	水	川西航空機株式會社
堺大濱	堺市大濱南町	水	日本航空輸送研究所
城崎	兵庫縣城崎町	水	日本海航空株式會社



航空

宮島	廣島縣佐伯郡大野村	水	惠美重美	大阪市附近	一〇〇〇	三〇	五
高知	長濱	水	高知新聞社	大阪市附近	一〇〇〇	三〇	五
館山	靜岡縣濱名郡南庄内町	水	徳田五一郎	太刀洗附近	一〇〇〇	三〇	五
桐生愛國	群馬縣新田郡笠懸村	陸	帝國飛行協會	京城附近	一〇〇〇	三〇	五
衣ヶ原	愛知縣舉母町	陸	熊崎惣二郎	京城附近	一〇〇〇	三〇	五
大津	大津市馬場	水	藤本直	蔚山附近	一〇〇〇	三〇	五
中越	新潟縣北魚沼郡千田村	陸	帝國飛行協會	蔚山附近	一〇〇〇	三〇	五
山梨	山梨縣中巨摩郡玉幡村	陸	山梨縣在郷軍人航空研究會	蔚山附近	一〇〇〇	三〇	五
埼玉第一	入間郡宗岡村	陸	帝國飛行協會	蔚山附近	一〇〇〇	三〇	五
深川浦	東京市深川區枝川町	同	同	蔚山附近	一〇〇〇	三〇	五
阪神	河内郡大正村	陸	阪神飛行學校	蔚山附近	一〇〇〇	三〇	五
東京羽田	東京市附近	陸	東京一週	蔚山附近	一〇〇〇	三〇	五

各國主要民間飛行場

大連	蔚山	京城	福岡	大阪
周水子	蔚山	京城	太刀洗	木津川尻
周水子	蔚山	京城	太刀洗	大阪市附近
周水子	蔚山	京城	太刀洗	大阪市附近
周水子	蔚山	京城	太刀洗	大阪市附近
周水子	蔚山	京城	太刀洗	大阪市附近
周水子	蔚山	京城	太刀洗	大阪市附近
周水子	蔚山	京城	太刀洗	大阪市附近
周水子	蔚山	京城	太刀洗	大阪市附近
周水子	蔚山	京城	太刀洗	大阪市附近

其一、飛行機之部(陸上及水上) 航空記録 (昭和十五年六月航空局調 軍人會館圖書部抄録)

種別	記録	國名	操縦者	使用機	發動機	場所	年月日
(時、力、耗)	七五五、一三八	獨	フリッツ、ウエン	メッサシユミット	D-1、B-600-A型	アウグスブルグ	昭四、二六



航空

其三、自由氣球之部

離距線直 (陸着無)
六、三八四 四軒
獨
エツケナー博士
ツLZ エツペリ ン號
馬四マイ 力五〇 一五五 五基〇
トリス米 フドト エンツ ンまで ハ
一昭三、 九、一〇、 一迄一

其二、航空船之部

(米) 度 高		離距回周 (右 同)		離距線直 (陸着無補無)		同
一三、五四二	一七、〇八三 米	五、二〇〇	一二、九三五	九、六五二	一一、五二〇 軒	七〇九、二〇九
伊	伊	伊	伊	英	英	伊
マウ (水上機)	佐マ リオ・ベチ少	カバマ ロニ、ストツ	ダト ガンツイ 大尉	ベ ネツト (水上機)	コケ レツト 少尉	ア フラン チエス エ
〇Zカ 型プロ ニア一 〇型一	業機カ プロニ (陸上 複)	型カ (水上機) 五〇六	イサ 八二P D型	シヨ コト・メ イ (水上機)	ウウ ヰル、ス リ (陸上機)	M水 C七上 二型機
	ピア ツジ ヨ RC型	三二フ 六ア五 〇R・馬 C・ロ力 三四メ 型一	型オ アル 八二八 〇馬R 力C三	Iア 型七 四〇馬 力ネ J―	カ八 サス四 二〇馬 力 ペ	二八〇 〇馬力 、 IAATT AS六 型フ
ヴァ イニ ン、 デ、	伊 國 モン テチ エリ オ	・メ サ ル ト グ オ ン レ	ガ リ ア ・ モ ン フ	オ ダ レ ン ジ 河 口 間	埃 及 イ ス マ イ リ 間	デ セ ン ツ ア ノ
一昭 九、一 二五四	一昭 〇、一 二二三	昭 五、一 二七二	昭 七、一 三四	一昭 〇、一 六三	一昭 一、一 五三	一昭 〇、二 三九



種別	記 録	國名	操縦者	使用機	發動機	場 所	年 月 日
距離	三、〇五二 <small>千</small> 米	獨	ベルリナー	エクスプロラー 第二號		シラ ビ チ ツ イ ド	昭 一、一 一〇
時間	八十七時間	獨	カウレン			ビ ター フ エル ト	大 正、一 三二
高度	二二、〇六六 <small>米</small>		アンダーソン大尉、スチヴンス大尉			レ ニ ン グ ラ ア ド	大 正、一 三二
距離	三、〇五二 <small>千</small> 米	獨	ベルリナー			ベ ル ム、 ビ セル ト	大 正、一 三三
時間	八十七時間	獨	カウレン			ベ ル ム、 ビ セル ト	大 正、一 三三
高度	二二、〇六六 <small>米</small>		アンダーソン大尉、スチヴンス大尉			レ ニ ン グ ラ ア ド	大 正、一 三二

日本人記録

◆最初の陸軍飛行

明治四十三年十二月十九日代々木原で、徳川工兵中尉(好敏、現中將男爵)フアルマン式を操縦して四十分三千米を飛行した。之に次ぎ日野歩兵大尉(熊蔵)はグラデー式を操縦離陸した。昭和十五年十二月此記念すべき地點に記念碑を建設すべく地鎮祭が取り行はれた。

◆海軍航空隊の創設

大正五年神奈川縣追濱に初めて、横須賀海軍航空隊が創設せられた。

追濱は實に我が海軍航空發祥の地で今記念碑が建てられてゐる。

◆神風號防敵飛行

大阪朝日新聞の神風號は、安邊、河内、片桐の三氏により大正十四年七月二十五日代々木原を出發しシペリアを経て八月二十三日モスコイ着、九月二十八日パリ、十月十二日ロンドン、十月二十七日ローマに着す。此の航程一萬六千千米である。

◆偵察機長距離飛行

東京帝大航空研究所の長距離機は昭和十三年五月十三日、木更津飛行場を離陸し熊谷、小田原の三角飛行を

なし、飛行時間六十二時間廿二分四十九秒、周回飛行距離一一、六五一千米の一の世界新記録と一萬千米飛行における平均時速一八六千米七七五の世界記録を樹立した。此操縦者は藤田陸軍航空兵少佐であつたが、同少佐は昭和十四年中支戦線で殉職した。

◆ニッポン號世界一週

大阪毎日新聞社のニッポン號は昭和十四年八月二十六日、東京羽田飛行場を出發、太平洋を横斷(十四時間廿四分卅九秒)して北米に飛び、中南米各地を経て十月五日、大西洋を



横断、アフリカのダカール着、更にスペインのセビラよりローマに着し之より歸航の途につき、地中海を横断してバララ、印度を経て九月十九日、臺北飛行場に着、翌九月廿日東京羽田飛行場に歸着した。  
此航程五萬二千八百五十軒、全飛行時間五十五日餘、實際飛行時間は百九十四時間である。此機長は中尾純利操縦士は吉田氏、機關士は下川氏で他に四氏が乗込んで居た。

航 空 法

(大一一〇、法律五四)  
昭一一、法律三四

第一章 總 則

第一條 本法ニ於テ航空機トハ人ノ搭乘シ得ル飛行機、航空船、氣球、滑空機其ノ他航空ノ用ニ供スル機器ヲ謂フ  
本法ニ於テ航空ニハ陸上又ハ水上ノ滑走ヲ、離陸又ハ着陸ニハ離水又ハ著水ヲ包含ス

第二條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ノ所有スル航空機ハ之ヲ日本航空機トス  
一 日本國又ハ日本ノ公共團體  
二 日本臣民  
三 日本法令ニ依リ設立シタル會社  
ニシテ合名會社ニ在リテハ社員ノ全員、合資會社及株式合資會社ニ在リテハ無限責任社員ノ全員、株式會社ニ在リテハ取締役ノ全員ガ日本臣民タルモノ

四 前號ニ掲グル法人以外ノ法人ニシテ日本法令ニ依リ設立シ其ノ代表者ノ全員ガ日本臣民タルモノ  
第三條 本法ハ本章及第四十一條乃至第四十三條ノ規定ヲ除クノ外軍用航空機ニ之ヲ適用セズ  
國ノ使用ニ供スル航空機ニ付テハ第二十一條、第二十八條乃至第三十條第三十三條、第三十四條及第四十條ノ規定ニ關シ勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ爲スコトヲ得  
勅令ヲ以テ指定スル航空機ニ付テハ

第二章乃至第四章ニ規定スル事項ニ關シ勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ爲スコトヲ得  
第四條 航空ニ關シ條約又ハ之ニ準ズベキモノニ別段ノ規定アルトキハ其ノ規定ニ從フ

第二章 航空機ノ検査及登録

第五條 航空機ヲ製造スル者ハ其ノ設計、材料、部分品、技巧及製品ニ付行政官廳ノ検査ヲ受クベシ  
堪航證明書ヲキ航空機ノ所有者ハ其ノ航空機ニ付行政官廳ノ検査ヲ受クベシ前二項ノ検査ニ合格シタル航空機ニ對シテハ堪航證明書ヲ交付ス  
第一項及第二項ノ規定ハ命令ノ定ムル所ニ依リ行政官廳ノ許可ヲ受ケタル航空機ニ之ヲ適用セズ  
第六條 堪航證明書ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ其ノ效力ヲ失フ  
一 堪航證明書ニ記載シタル有効期間ヲ經過シタルトキ  
二 第十四條第一項ノ規定ニ依リ航



空機ノ使用ノ禁止ヲ命ジタルトキ  
前項第一號ノ有効期間ハ前條ノ檢  
査ニ合格シタル日ヨリ起算シ六月  
以内ニ於テ行政官廳之ヲ定ム有效  
期間ハ第十一條ノ検査ノ結果ニ依  
リ検査ノ日ヨリ起算シ六月以内ニ  
於テ行政官廳之ヲ延長スルコトヲ  
得

第七條 第五條ノ検査ニ合格シタル航  
空機ノ所有者ハ行政官廳ニ其ノ航空  
機ノ登録ヲ申請スルコトヲ得

航空機ノ登録事項ハ航空機ノ所有者  
ノ氏名、名稱、登録記號其ノ他命令  
ヲ以テ定ムル事項トス

登録シタル事項ニ變更アリタルトキ  
ハ航空機ノ所有者ハ其ノ日ヨリ起算  
シ十四日以内ニ行政官廳ニ變更ノ登  
録ヲ申請スベシ

登録シタル航空機ニ對シテハ命令ノ  
定ムル所ニ依リ航空機ノ所有者ノ氏  
名名稱、登録記號其ノ他ノ登録事項  
ヲ記載シタル登録證明書ヲ交付ス

第八條 航空機ガ左ノ各號ノ一ニ該當

スル場合ニ於テハ其ノ際ノ航空機ノ  
所有者ハ其ノ日ヨリ起算シ十四日以  
内ニ行政官廳ニ堪航證明書ヲ返付ス  
ベシ

一 滅失又ハ破壊シタルトキ  
二 解散セラレタルトキ  
三 其ノ堪航證明書ガ其ノ效力ヲ失  
ヒタルトキ

登録シタル航空機ガ左ノ各號ノ一ニ  
該當スル場合ニ於テハ其ノ際ノ航空  
機ノ所有者ハ其ノ日ヨリ起算シ十四  
日以内ニ行政官廳ニ登録證明書ヲ返  
付スベシ

一 滅失又ハ破壊シタルトキ  
二 解散セラレタルトキ  
三 日本國籍ヲ喪失シタルトキ  
四 其ノ堪航證明書ガ其ノ效力ヲ失  
ヒタルトキ

前項第一號乃至第三號ノ場合ニ於テ  
ハ同時ニ抹消登録ヲ申請スベシ

前項ノ場合ニ於テ抹消登録ノ申請ナ  
キトキ又ハ第二項第四號ノ場合ニ於  
テハ行政官廳ハ職權ヲ以テ抹消ノ登

録ヲ爲スコトヲ得

第九條 登録シタル航空機ニハ命令ノ  
定ムル所ニ依リ其ノ國籍記號、登録  
記號並ニ所有者ノ氏名名稱及住所ヲ  
表示スベシ

第十條 航空機ハ前條ノ規定ニ依ル表  
示ヲ爲シ且堪航證明書及登録證明書  
ヲ備附クルニ非ザレバ之ヲ航空ノ用  
ニ供スルコトヲ得ズ

第十一條 行政官廳ハ定期又ハ臨時ニ  
航空機ノ検査ヲ爲スコトヲ得

第十二條 第五條第一項第二項及第十  
條ノ規定ハ航空機ノ試験ノ爲飛行場  
又ハ命令ヲ以テ定ムル場所ニ於テ航  
空スル航空機ニ關シテハ之ヲ適用セ  
ズ

第十三條 第五條、第七條、第八條及  
第十一條ニ規定スルモノノ外航空機  
ノ検査又ハ登録ニ關スル事項ハ命令  
ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條 行政官廳ハ第十一條ノ検査  
ノ結果ニ基キ其ノ他航空機ノ現狀ニ  
因リ必要アルトキハ航空機ノ使用ノ



制限、停止又ハ禁止ヲ命ズルコトヲ得

行政官廳ハ前項ノ規定ニ依リ制限ヲ命ジタルトキハ堪航證明書ニ制限事項ヲ附記シ停止ヲ命ジタルトキハ停止中堪航證明書ヲ領置ス

第三章 乗員

第十五條 航空機ノ乗員ニ非ザレバ航空機ニ搭乘シテ其ノ運航ニ従事スルコトヲ得ズ

乗員ハ技術證明書及航空免狀ヲ有スルコトヲ要ス

第十六條 技術證明書ハ命令ノ定ムル所ニ依リ行政官廳ノ行フ考査ニ合格シタル者ニ之ヲ交付ス技術證明書ヲ有スル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ航空免狀ノ交付ヲ受クルコトヲ得

第十七條 乗員ハ航空免狀ヲ携帯スルニ非ザレバ運航ニ従事スルコトヲ得ズ

第十八條 行政官廳ハ乗員ニ對シ定期

又ハ臨時ニ検査ヲ爲スコトヲ得

第十九條 第十五條第一項ノ規定ハ飛

行場又ハ命令ヲ以テ定ムル場所ニ於テ航空機ニ搭乘シテ運航練習ヲ爲ス者及運航練習ノ爲乗員ト同乗シ共同シテ運航ニ従事スル者ニ之ヲ適用セズ

第二十條 行政官廳ハ乗員引續キ六月以上運航ニ従事セザルトキ、第十八條ノ検査ノ結果ニ基キ必要アルトキ、又ハ保安上必要アルトキハ就業ノ制限、停止又ハ禁止ヲ命ズルコトヲ得

行政官廳ハ前項ノ規定ニ依リ制限ヲ命ジタルトキハ航空免狀ニ制限事項ヲ附記シ停止ヲ命ジタルトキハ停止中航空免狀ヲ領置ス  
第一項ノ規定ニ依リ禁止ヲ命ゼラレタル乗員ハ其ノ日ヨリ起算シ十四日以内ニ行政官廳ニ航空免狀ヲ返付スベシ

第四章 飛行場及其ノ經營者

第二十一條 飛行場ヲ設置セムトスル者、其ノ區域ヲ變更セムトスル者又ハ公共ノ用ニ供スル飛行場ヲ廢止セ

ムトスル者ハ行政官廳ノ許可ヲ受クベシ公共ノ用ニ供スル飛行場ヲ公共ノ用ニ供セザル飛行場ニ變更シ又ハ公共ノ用ニ供セザル飛行場ヲ公共ノ用ニ供スル飛行場ニ變更セントスル者亦同ジ

第二十二條 公共ノ用ニ供スル飛行場ノ經營者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ航空ニ必要ナル設備ヲ爲スベシ

第二十三條 公共ノ用ニ供スル飛行場ノ經營者ハ行政官廳ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ其ノ飛行場ヲ他ノ目的ニ使用シ又ハ使用セシムルコトヲ得ズ

第二十三條ノ二 行政官廳ハ航空ノ安全保持ノ爲公共ノ用ニ供スル飛行場又ハ公示セラレタル豫定地ノ境界ヨリ外方千「メートル」ノ區域内ニ於テ特別地域ヲ指定スルコトヲ得

前項ノ特別區域内ニ於テ工作物、船舶、竹木其ノ他ノ物件ヲ設置、定置又ハ植栽セムトスル者ハ該物件ガ其ノ存スル地點ヨリ最短距離ニ在ル飛行場ノ境界地點ヲ基準トスル水平面



上左ノ各號ノ高サヲ超ユル場合ニ於テハ行政官廳ノ許可ヲ受ケベシ但シ「メートル」ヲ超エザル農作物ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

一、飛行場ノ境界ヨリ外方五百「メートル」ノ區域内ニ在リテハ物件ノ存スル地點ト其ノ地點ヨリ最短距離ニ在ル飛行場ノ境界地點トノ水平距離ノ三十分ノ一ノ高サ

二、前號ノ區域ノ外方ノ特別地域内ニ在リテハ物件ノ存スル地點ト其ノ地點ヨリ最短距離ニ在ル前號ノ區域ノ外方境界地點トノ水平距離ノ二十分ノ一ニ十七「メートル」ヲ加ヘタル高サ

第二十三條ノ三、行政官廳ハ前條ノ規定ニ違反シテ設置、定製又ハ植栽シタル工作物、船舶、竹木其ノ他ノ物件ニ付其ノ所有者又ハ之ニ代リ其ノ行為ヲ爲ス權限ヲ有スル者ニ對シ期限ヲ定メ前條第二項ニ規定スル高サヲ超ユル部分ノ除去其ノ他必要ナル措置ヲ命ズルコトヲ得竹木ニシテ前

條第二項ニ規定スル高サヲ超ユルニ至リタルモノニ付亦同ジ

前條第一項ノ規定ニ依ル特別地域指定ノ場合ニ於テ現ニ存スル物件ガ前條第二項ニ規定スル高サヲ超ユルトキハ行政官廳ハ其ノ所有者又ハ之ニ代リ其ノ行為ヲ爲ス權限ヲ有スル者ニ對シ期限ヲ定メ其ノ高サヲ超ユル部分ノ除去其ノ他必要ナル措置ヲ命ズルコトヲ得

第二十四條 行政官廳ハ飛行場ノ境界ヨリ外方五百「メートル」ノ區域内ニ於テ航空ノ障礙ト爲ルベキモノアルトキハ飛行場ノ經營者ニ對シ必要ナル航空標識ノ設置ヲ命ズルコトヲ得飛行場ノ經營者ハ前項ノ航空標識ノ設置又ハ維持ノ爲必要アルトキハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ日出後日没前ニ限り他人ノ土地ニ立入り若ハ障礙ト爲ルベキ物件ヲ除去シ又ハ必要ナル土地若ハ物件ヲ使用スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ經營者ハ豫メ其ノ土地又ハ物件ノ占有者ニ其ノ旨通知ス

ベシ

飛行場ノ經營者ハ第一項ノ航空標識ノ維持ノ爲緊急ノ必要アルトキハ前項ノ規定ニ拘ラズ他人ノ土地ニ立入り若ハ障礙ト爲ルベキ物件ヲ除去シ又ハ必要ナル土地若ハ物件ヲ使用スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ經營者ハ遲滞ナク其ノ旨行政官廳ニ届出デ且其ノ土地又ハ物件ノ占有者ニ通知スベシ

第二十五條 第二十三條ノ三第二項ノ規定ニ依ル行政官廳ノ命令ニ基ク措置又ハ前條ノ規定ニ依ル立入、除去若ハ使用ニ因リ生ジタル損害ハ飛行場ノ經營者之ヲ補償スベシ第二十三條ノ二第一項ノ規定ニ依ル特別地域ノ指定アリタルガ爲既ニ著手シタル工作物其ノ他ノ設備ヲ廢止シ又ハ變更スルノ止ムナキニ至リタルニ因リ生ジタル損害ニ付亦同ジ前項ノ規定ニ依ル補償ノ金額ニ關シ協議圖ハザルトキハ行政官廳ノ決定ヲ求ムルコトヲ得

前項ノ決定ニ不服アル者ハ其ノ決定ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ起算シ三月以内ニ通常裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十六條 第二十三條ノ二、第二十三條ノ三、前條及第五十九條第一號ノ規定ハ軍用ニ供スル飛行場又ハ公示セラレタル飛行場豫定地ニ付特別地域ヲ指定スル場合ニ之ヲ準用ス

第二十四條第二項第三項及前條ノ規定ハ許可又ハ届出ニ關スル規定ヲ除クノ外軍用ニ供スル飛行場ノ境界ヨリ外方五百「メートル」ノ區域内ニ於テ航空ノ障礙ト爲ルベキモノアルトキ必要ナル航空標識ヲ設置又ハ維持スル場合ニ之ヲ準用ス

第二十七條 公共ノ用ニ供スル飛行場ノ經營者ハ他人ノ運航スル航空船又ハ飛行機ニ對シ其ノ飛行場ニ於テ著陸又ハ離陸スルコトヲ拒ムコトヲ得ズ但シ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ前項ノ經營者其ノ飛行場ノ使用ニ對

シ使用料ヲ請求セムトスルトキハ豫メ其ノ額ヲ定メ行政官廳ノ許可ヲ受ケベシ

第二十八條 公共ノ用ニ供セザル飛行場ノ經營者ハ行政官廳ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ他人ノ運航スル他人ニ屬スル航空機ヲシテ其ノ飛行場ニ於テ著陸又ハ離陸セシムルコトヲ得ズ

第二十九條 航空船及飛行機ハ陸上ニ在リテハ飛行場ニ非ザル場所、水上ニ在リテハ命令ヲ以テ禁止スル場所ニ於テ離陸又ハ著陸スルコトヲ得ズ但シ故障若ハ避難ノ爲其ノ他止ムコトヲ得ザル事由アルトキ又ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第三十條 故ナク皇居、禁苑、離宮、行在所若ハ神宮ノ上空ニ於テ又ハ皇陵ノ上空「メートル」以下ニ於テ航空機ノ運航ヲ爲スコトヲ得ズ前項ニ掲グル場所ノ外航空ニ關スル制限又ハ禁止ヲ必要トスル場所ニ關

シテハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十一條 戰時又ハ事變ニ際シ必要アルトキハ行政官廳ハ航空機ノ航空ヲ禁止スルコトヲ得

第三十二條 日本航空機ニ非ザル航空機ハ行政官廳ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ之ヲ航空ノ用ニ供スルコトヲ得ズ

第三十三條 日本國外ヨリ發航シテ日本國內ニ至リ若ハ日本國內ヨリ發航シテ日本國外ニ至ル航空機又ハ日本國外ヨリ發航シ著陸スルコトヲクシテ日本國ヲ通過シ日本國外ニ至ル航空機ハ行政官廳ノ指定スル航空路ニ由リ航空スベシ

第三十四條 日本國外ヨリ發航シテ日本國內ニ至リ又ハ日本國內ヨリ發航シテ日本國外ニ至ル航空機ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケタル場合ヲ除クノ外行政官廳ノ指定スル飛行場ニ於テ著陸又ハ離陸スベシ

第三十五條 日本航空機ニ非ザル航空機ニ依リ有價ニテ日本各地ノ間又ハ